
un?happy life

三島 クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

un?happy life

【コード】

N7349I

【作者名】

三島 クロ

【あらすじ】

トンネルを抜けるとオレは猫少女になっていた・・・激変するオレの日常！迫りくる魔の手！どうなる！myライフ！・・・ごめんなさいすっごい頭の悪い小説です。初投稿なので生温かい目見てください。

ブローグ1人生最悪?の日(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

プロローグ1 人生最悪？の日

オレの名前は大島優斗おおしまゆうじ高校2年生だ。

身長・体重ともに平均的。勉強も中の上程度。帰宅部所属だが運動は嫌いじゃない。髪は黒でいつもぼさぼさとしている。友人関係は良好。両親は死別してしまったが姉が一人仲も悪くなく貧乏でもない。

いわゆる普通の高校生だった。そうだったのだ。なぜならいまのオレは……

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

現在午前8時まだまだまだ寝たりない俺は恐ろしく不機嫌だった。

「優斗〜おっはよう〜!」

「はいはい・・・おはようさん・・・」

「むう〜元気がないぞ〜もう一度!おはよう〜!」

「……………ぐう……………」

「ねるなあー!」

叫んでいるのは音無舞おとなじまい 幼稚園の頃からの俺の幼馴染だ。

身長がかなり低く凸凹もほとんどないそのうえ童顔ということも重なりたまに小学生と間違われるほどだ。髪型はいつもツインテールで今日も栗色の髪がびよこびよこ揺れている。

性格はとんでもなく元気でやたらと世話好き。しかしかなりのドジで何かと首を突っ込んで問題が発生させるトラブルメーカーである。

ちなみにトラブルの後始末はいつも俺にやってくる、なんでさ?

「あ・あの・・・」

「・・・ん？」

「お・・・おはよう・・・」ざいます・・・」

「ああ、おはよう」

今挨拶してきたのは姫神麻衣ひめがみまい 舞の友人だ。

髪がかなり長くいつも顔が隠れてしまっているが舞曰く「世界が嫉妬する顔」とのこと。いつも地味な服を着ているが以外にスタイルが良く何でも着こなしてしまう。

性格はとてもおとなしくあまり話すことが得意でないためいつも舞に振り回されている。

余談だが舞と友人になった理由は名前が同じだったからだという。

「ゆ〜う〜と〜」

「・・・気が進まんが・・・なんだ？」

「あなた！ 姫ちゃんにはちゃんと挨拶してわたしにはあれってどうゆうことよー！」

「お前にはあれで十分だろうに」

「ぬわにが十分よ！ こうなったら・・・！」

舞から恐ろしい殺気を感じ取りさすがにやりすぎたと思った時。

「はいはいストップストップ 相変わらず音無さんと優斗は仲がいいね〜」

「な！ ななななななな・・・！ なにいつてんのよー！」

「あはは〜 相変わらずわかりやすい反応するな〜」

「こ！ こ！ こ！ こ！ こ！ こ！・・・！ これは違うのよー！」

「なにが違うのかな〜」

そ、それは、ゴニョ・・・とあれだけ殺気だっていた舞を黙らせたの

は中村士郎なかむらじろう 俺の友人だ。

長身でやせ形、髪は長くしなやかで金色、顔のほつもかなりのイケメンで頭もよく金持ちであるため恐ろしくもてる。

性格は温厚でやさしいが他人をからかったりいたずらする趣味があり「他人の困った顔を見るのがたまらない」と言っていた気がするがきつと気のせいだ。うん。

「その辺にしといてやれ後でどうなってもしらんぞ」

「うん・・まっいつか楽しめたことだし」

「私は楽しくない！」

「あれ？そういえば健人のやつはどうした？」

田中健人たなかけんと 俺の友人その2だ。

身長が高く、ガツシリした体系で運動神経は抜群に良く運動部に助っ人をよく頼まれるほどだ。

「ああ健人ならさつき怪我をしていた子猫を治療するとか言うて先に行っちゃたよ」

「またか・・・」

健人は一言で表すなら「熱血バカ」であり困っている人などを見つけると助けに行ってしまう習性がある。

しかし手加減ができないうえ頭も回らないため問題をかえって大きくしてしまうことがほとんどで舞とならんで2大トラブルメーカーとして君臨している。

「さて、それじゃ行くとしますか。」

「だから・・ゴニョ・私は」

相変わらず何か言っている舞にチョップをくらわせる

「ッ！いったく！何すんのよ」

「いいからさっさと行くぞ遅れちまつ」

え？と言つて舞は時計を確認するとすでに8時30分になっていた。

「ああ〜！ホントだ！急がないと！」

「大丈夫！走れば何とか間に合いそうだよ」

「あの・・・それは結局急いでるん・・・じゃ・・・」

「無駄話は終わり！さっさとしないとほんとにおくれるぞ！」

そうして俺の人生がとんでもなくなってしまうた1日の朝は過ぎ去って行った・・・。

プロローグ2オレ・・・？(前書き)

プロローグはこれで終わりです

プロローグ2オレ・・・？

風由学園俺達ふうゆうがくえんの通う高校の名前。「風のように自由に」という意味からこんな名前になったらしい。

全寮制ですべての生徒たちが学園内で生活できるように日用品からファーストフード店までさまざまなものがあふれている学園。校風は「自由にのびのびと」

聞こえはいいが実態は生徒だけでなく先生まで無断で休んだり、学園の予算が校長の趣味に使われたりと自由すぎてとんでもないところだったりする。

しかし成績はみな優秀で「ダイヤの原石を生産している」と言われるほどでかなり人気のところだったりする。「遊んでいるのに成績が上がる」学園の七不思議に数えられているほどだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「よう！みんな」

「おはよう、健人」

あれから急いだ俺たちは何とか時間内に教室にたどり着くことができた。

「ニヤー」

「それが怪我したっていう猫か？」

「ああ、かわいいだろ？」

その猫は見た目はまっ白でまだ生まれたばかりだとわかるくらい小さく右手には包帯が巻かれていた。

「いやあん、かわいい〜」

「かわ・・・いい・・・」

たしかにかわいい。見ているだけでなごんできた・・・。

「あれ？この子首輪をつけてないかい？」

士郎の言うとうり首には赤い小さな首輪が付いていた。

「誰かが飼っていたのか？」

「わからない。けど誰かが飼っているにせよ道端で怪我した子猫を放っておくわけにはいかないからな。帰りに飼い主を探そうと思っている」

「そうね〜でもこんな子をほっぽっておくなんて飼い主の顔を見てもたいわ」

そんな会話をしているうちに1時間目のチャイムが鳴り俺たちは席に着こうとした。すると

「ピンポンパンポ〜ン 大島優斗君とそこ友御一行はすぐに科
学室まで来てください。橘先生がお呼びです」

俺にとって悪魔のコールが来てしまった。一部の生徒たちは俺に殺気をぶつけてきて、またある生徒たちは震えるほどおびえて、ある生徒は憐れむような目でこちらを見ている。こら、そこ、合掌しない

「優斗・・・君のことは忘れないよ」

「優斗・・・>ビシ！」

「ゆ・・・優斗ダイジヨブダヨネ・・・」

「・・・>ブルブル<・・・」

こいつらはそのことを知っているため俺のことを察じてくれた・
ああ・・時が見えそう・・・。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「失礼します」「ニヤ」

「遅いわよ」

あの後1割の勇氣と9割のあきらめをもって科学室まで来た。

そこで待っていたのは美人の皮をかぶった悪魔だった・・・。

たちはなひかり
橘光 風由学園科学担当

殺人的スタイルの持ち主で何人も男どもを狂わせてきた。いつも
白衣で全身を隠しているため中がどうなっているかは誰も知らない。
頭が恐ろしく良く世界一頭がいいとも言われている。え？どうして
そんな人がこんなところにいるかって？それは・・

「ほらさっさとする私は早くどうなるか見たいんだから！」

俺のことをモルモットにしているからだ・・・。
俺が何でこの人のモルモットになっているかという俺の姉と先生
は学生時代からの親友同士でその姉がオレの事をすきに使っていて
と勝手に約束してしまっただからだ。

どんなことをされたか思い出すだけで拒否反応が出てしまうくらい
恐ろしいことをされてきた・・両親が川の向こうで手を振っている
のはきつと疲れているせいだ。うん。

「で、なにすればいいんですか？」

そうやけくそ気味に聞くと。

「これに入ってもらおうわ」

そこには2本のカプセルがあった。よく見ると上の部分が折れ曲がった鉄の棒でつながっている。

「ええつと・・・これなんですか？」

「ふん、これはね簡単に言うとワープ装置なのよ」

「」「」「ワープ装置！」「」「」「ニャゴ？」

ワープってあのワープか別の所に移動するって言う！。・・・なぜか猫がすごい不機嫌な顔をしている。

「す・・・すごい・・・」

「すごい！すごい！」

「さすが先生ですね」

「ッ！感動しました先生！」

いやいや冗談抜きでほんとにすごいな・・・でも何だろうこのものすごいいやな感じは・・・

「わかつたらさっさとしなさい！・・・それともまたお仕置きされたいかしら・・・？」

「！わかりました！！」

恐れを振り払うように大声をあげて駆け足でカプセルの中に入っていく。

「・・・？先生扉が閉まらないんですけど・・・」

「ふん！そんなこと関係ないわ！今は一刻も早くこの実験の結果が見たいんだから！」

そんな無茶な！と言いつうになつたが先生の後ろに見えたオーラおんねんがそれをせき止めてしまった。

今となつてはなぜこんなにもいやな予感がしたのに何もしなかつたのだらうと後悔している。

10

カウントダウンが始まる

9

何か機械の動く音が聞こえ始める

8

どんどんと速度が上がっていく

7

周りが光始めた

6

その時なぜか舞が盛大にこけたのがみえた

5

とてもスローモーションにはっきりと見えた空を飛ぶバナナの皮と舞

づく。

「体が縮んでる・・・？」

制服の上も下かなりぶかぶかになってしまっていてかなり動きずらくなっていた。そうこうしているうちに霧が晴れていき出口が見えてきた。

「おい！優斗！だいじょ・・・ぶ・・・か？」

「ゆ・・・優斗さん・・・？」

「ゆ・・・う・・・と・・・？」

「ええと・・・優斗・・・だよね」

4人が俺のこと上から見ている。先生はその後ろで気まずそうに視線をそらしている。

「ああ、そうだが」

声は治っていないようだ。すると太郎が右手で左の方を指しているのでそちらをみるとそこには・・・

くりくりとしたかわいらしい目があった。

形の整った小さい鼻があった。

ふさふさとしたさわり心地のよさそうな白髪があった。

もちもちとしたまっ白い肌があった。

だぶだぶの制服を着た小学生くらいの妖精がそこにはいた。

頭の上にはぴこぴこ動く三角耳が二つあった。

ぴよこぴよこ動くしっぽがその後ろに見えた。

周りを見してみる。そんな美少女はどこにもいない。

他の人を見る。なんていったらいいかわからないような困った顔をする。

もう一度鏡をみて右手をあげる。すると鏡のネコ耳少女も右手をあげた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・オレ?・・・・・・・・」

健人と舞が抗議の声をあげた・・・しかし

「悪いけどそんな単純なことじゃないのよ」

そう言っつて先生はコーヒーの入ったカップを持って席を立ち。

「いい、このコーヒーはまず固体だと思っつてそしてその固体はさっきまでの優斗だと思っつて」

そして今度は空のカップとストローを用意して

「さっきの実験はこのコーヒーの固体を液体にしてそれをストローを通して空のカップに移動させてから固体に戻すことで移動させようとしたの。でもね・・・」

そう言っつと今度はミルクを取り出して

「液体になった時にミルクが混ざっつちゃたせいでミルクコーヒーができちゃっつたてわけ。固体のミルクコーヒーを液体に戻してもそれはミルクコーヒーにしかないでしょ？それにミルクとコーヒーは一度溶け合っつてしまえばもう分けることはできないの」

そんなことをあっさり言われてしまった。つまり・・・つまりオレはこれから一生このままだと・・・

「ちよっつ！ちよっつと！勘違ひしてもらっつちゃ困るわよ！誰が一生このままだっつて言っつた！」

「で・・・でもさっき溶けたらもう分離できないっつて・・・」

「それはコーヒーの話でしょ。それにさっきも言っつたでしょ今は無

理って」

「じゃ・・・じゃあ！」

「何時とは言えないけどいつか治してあげるわ、私が保証する。だから少しの間待ってなさい」

やった！希望はまだある！先生にかかればこんなのすぐに決まってる！そうだろ！み・・・ん・・・な・・・？

「「「「「「「「「「「」

あれ？みなさんどうしたんですか？

舞さんどうしてそんなに息が荒いんですか？

姫神さんなにをそんなにゴニョゴニョ言ってるんですか？

士郎さんなにをそんなにニヤニヤしているんですか？

健人さんどうしてそんなに顔が赤いんですか？

「「「「「「「「「「「」

「ええつと・・・皆さん・・・？」

「も・・・もう駄目・・・我慢できなあああああい！」

そう言っただけでいきなり舞がオレに飛びついてきた。

「あゝん かゝわゝいゝいゝ」

「まっ舞！やめ・・・あっ・・・ダメ・・・」

引きはがそうとしたが駄目だった。あれ？舞ってこんなに力強かったっけ？必至になって押し返そうとするが全くびくともしない。

（おかしい！？何かがおかしい！？）

「すりすりすりすりすりすり」

舞がすごい勢いで頬ずりしてきた。かなり痛い。そこでオレは気づいてしまった。そう今のオレは女の子なのだ、それも小学生くらいの。

身長は舞よりも小さくなり力の方も格段に衰えていた。これではたちうち出来るわけがないのだ。

「いや〜ん！部屋にかざりた〜い！」

「……………(う……………うらやましい……………)」

「あはは〜 — 《カシャ！》」

「…………………………」

舞はやたらと抱きついてくるし、姫神はなんかうらやましそうにこつちを見て助けたくないし、土郎のやつはいつの間にか持つていたカメラでオレをとってるし、健人は相変わらず顔赤いし。なにさ！なにさ！みんなでオレの……………オレのことおおおお！

「う……………う……………ニヤアー！」

「ぎにゃー！ 《がりがりがり》」

野生の本能に従いオレは新たな自分の腕についていた猫爪で舞を思いつきり引つ掻いた。

「いたいいたいいたいいたい！」

「フウウウウウウウウ！」

舞をひきはがすことに成功したものの気持ちは収まらない。

「やれやれ……………優斗〜こつちをみなさ〜い」

「フウウウウ……………ウ……………ウ……………」

それを見た瞬間今までMAXだった警戒心がいつきに0になってしまった。・せんせいもっているものはじぶんでもよく知っている。けどなんでだろう?・いまはそれからめをはなすことが・

「ほれ、ほれ」

「ふにゃ!ふ!ふにゃあ!」

「あたたたたたたた・」

「・・・かわいい・」

「ふんふん — 《カシャ!》」

「・・・・・」

先生にねごじやらしを使われ30分近く我を忘れて遊ばされてしまった・・・恥ずかしい・

第1話 状況を整理しよう！（後書き）

猫大好きなんです。猫に関する知識はほとんどゼロなのでできるだけけそっといったところはスルー＆鵜呑みにしないでください。

第2話 どうしてこうなった・・・

物事に順序というものがある。だからこそ小学校や中学校などいろいろ分かれている。小学生に数学を教えるてもまずできないように順序というものは必ず存在する。

え？何が言いたいかって？つまりオレが言いたいことは何でオレはこの姿で教室に戻っているのかということである・・・

.....

「ふふふ・・・落ち着いたかしら」

「ああ・・・せんせい・・・もう・・・やめてください・・・」

めのまえでねこじゃらしはゆらゆらゆれる　それだけでからだがつずきがまんできなくなる。

「ふふふ・・・ほら・・・ほら・・・」

「あ・・・あああ・・・」

ああ　だめだ　だめだ　がまんしないとだっておれは・・・おれは・・・

「先生！その辺にしないと優斗が本当に猫になってしまいますよ！」

しろつがなにかいっている　あれ？しろつってだれだっけ？

「ふむ・・・確かにこの反応は猫そのものだわ」

だれかがなにかをいっている・・・そんなことよりもそのねこじゃらしを・・・

ああ！ねこじゃらしが・・・ねこじゃらしがあ・・・ひどい・・・ひどい・・・どすぎるようう・・・わたしはなんにもしてないのに・・・ただそれがほしかっただけなのに・・・

「えぐつ・・・ひいつぐ・・・ひどい・・・ひどいようう・・・わたしなにもしてないのに・・・うっ・・・うわぁー！ー！ーん」

「あの・・・泣いちゃいましたけど・・・いいんですか・・・」

びえええええ、と科学室にネコ耳少女の泣き声がしばらくひびいた。

「はあ・・・少しは落ち着いた？」

「ひつく・・・ひつく・・・ごめんなさい・・・ぜんぜい・・・」

言葉がうまく紡げない。こんなに泣いたのはいつ以来だろう・・・

「でも今ので優斗のこと少しわかったかな」

「本当ですか！」

大声で叫ぶ健人。なぜかすごい複雑そうな顔で・・・どうした？

「ええ。どうやら優斗は猫と一体化する恐れがあるわ」

「・・・・・・へ？」

「ええと・・・それはどうゆう事なんですか？」

呆けているオレの代わりに舞が質問をした。

「さつき優斗が泣いたとき一人称が「わたし」になっていたでしょ？それにあの優斗らしからぬ反応、つまり猫と優斗の性格や記憶、本能などがごちゃごちゃになってひとつになる可能性があるってこと」

「それはつまりどうゆう事につながるんですか？」

「わからないわ・・・まだ仮説の段階だもの。でも意志の力って時にとんでもない力を発揮するときがあるから最悪、猫と同化して一生このままということもありえてくるかもしれないわ・・・」

そんな・・・一生このまま猫少女なんて・・・

「せ・・・先生！なんとかかないんですか！」

「落ち着きなさい。今対策を思いついたから。」

「ほ！本当ですか！」

さすが先生だ！こんなにも早く対策をおもいつくなんて！

「とりあえず目隠しをさせてもらおうわ。暴れないでよね」

「はい！」

暴れるわけがないこんなことで治るんなら安いもんだ。

その後、目隠しをされた俺はどこかに歩かされている。

「ゆ・・・優斗さん・・・本当に大丈夫なんでしょうか・・・」

「だ・・・大丈夫よ！姫ちゃんだって先生がいるんだから！」

「健人くどうしたくなんかさつきから顔が赤いぞ」

「なっ！なんでもない！ちょっと興奮しているだけだ！」

「ふんそうなんだ」

などと会話をしていたが。

「ついたわよ」

「えっと・・・先生こっつて・・・」

「ここは・・・」

身動きが取れない。すると・・

「はいはいそんなに質問されたら答えられるものも答えられないでしょう?」

ここで先生が助け舟を出してくれた。しかしこの状況を作った張本人でもあるのでここは感謝すべき所なのか疑問に思ってしまった。

「とにかくこの子は大島優斗だからそこん所忘れないですよ?」

「……………はい!」……………

などと小学生みたいな返事をするクラスメイト達。本当大丈夫かこの高校?

……………
……………
……………

先生にこのことの説明を求めると

「猫とあんたを一体化させないためにできるだけあんたを大島優斗だと自覚させるためにこれをしたの。それともなんか文句あんの?」

結局先生に押し切られオレの新しい学校生活がスタートしようとしていた。

その後も先生が釘をさしてくれたおかげかかなり落ち着いたものやっぱりひっきりなしに質問が飛び交ってきた。他愛のないものから変態クラスまでさまざまな質問があつた。ええありましたとも! そんなこんなしているうちにいつの間にか時間はお昼になっていた。やはりみんなオレ<昼食なのか今は誰もオレに質問してこない。ちなみに士郎や健人は学食派なので今は教室にいない。

「　　」

朝作った手作り弁当を食べようとすると。

「優斗と一緒に食べよう」

「・・・・・・・・」

舞と姫神の二人が誘ってきた。

「ああ、いいぞ」

「素直でよろしい！ふふん それじゃ・・・いったただつきまゝす」
「・・・いただきます・・・」

舞と姫神は大きなひとつの弁当を二人で食べている。中には色とりどりの食材がきちんと並んでおりとてもうまそうに見えた。

「これ全部姫神が作ったのか？」

「ん？そうだよ！すごいでしょ！」

とりあえずお前がいばるな・・・だが確かにすごい。そこらに売って
も恥ずかしくないレベルだ。

姫神はうれしいのか顔が赤くなっている。

「あゝああ私もこんな風に作ってみたいな」

いや・・・おまえはこのレベルじゃなくてなんとか食えるレベルにま
ずレベルアップさせる。こいつの料理といたら・・・・・・・・いかん！
いかん！これではせつかくの昼食が台無しだ。

とりあえず今の記憶を忘れるためにおかずを食べよう・・・

「！ だめです！！」

いきなり姫神が叫んだ

「ど！どうしたの姫ちゃん！」

「！？、どうしたんだ？」

いきなり、それもいつも静かな姫神が叫んだこともありかなりびっくりした。

「ね、猫は玉ねぎとかは食べさせちゃいけないんです・・他にもチヨコとか・・優斗さんの体は今猫ですから最悪死に至ることもありえます・・・」

た、玉ねぎだけで・・・おいおい冗談きついで・・

「とりあえず・・・玉ねぎはだめです！・・他にもダメなものがあるかもしれない・・・私がチェックします・・・！」

「姫ちゃんすごい！」

正直姫神が近くにいて助かった・・ここにいてくれなかったらもう少してお陀仏だった・・・せつかくの昼食なのにお預け状態・・・仕方ないのでジュースでも飲んで「だめです！！」

いきなりのごとで今度はバランスを崩してしまい椅子から転倒。その上放り投げてしまったジュースが見事に全身にかかってしまった。

「はあ・・・はあ・・・猫は紅茶やコーヒも・・・だめなんです・・

はあ・・・はあ・・・」

「忠告ありがとうございます。ただこのやるせない気持ちはどうすればいいでしょうか？」

「あゝあゝあゝ全身びちよぬれじゃない！」

舞の言うとおり今のオレは全身びしょぬれになってしまった。

「しかたない・・・着替えてくるか・・・」

「なにに？」

「そりゃもちろんジャージに」

「今のあるたじゃジャージなんて着れないでしょうに」

あ！たしかにそうだ今のオレは小さくなってしまったがベルトを限界までしめることで何とかしのいできた。しかしオレの持っているジャージはきつくすることができないタイプだった。

「どうしよう・・・」

「今の季節でその恰好じゃね・・・」

今は11月こんな濡れた服を着ていれば間違いなく風邪をひいてしまふ。

「なにか買ってくるか・・・」

「残念だけど今のあるたにそれは不可能だとおもっわよ」

！そうだった！！この学園内は買い物の際生徒手帳の身分証明が必要なのだ。

しかし今のオレを大島優斗だと言ってもまず信じられることはないだろう。

「ど、どうしよう・・・」

万事休すか！そう思ったとき・・・

「しょうがないわね」

「ま、舞？」

手が差し伸べられた。

「これから言う条件さえ飲めばある程度は援助してあげてもいいけどな」

「本当か！ぜひ！なんでも飲みます！」

このときオレは舞の本当の恐ろしさをまだ知らなかった。

「言ったわね・・・もうキャンセルはできないわよ！」

「ああ！なんでもいいから早く！」

このときはその時の状況に焦りまくっていたんだと思う。

「じゃあ言うわよ」

「・・・」

こんな時こういうのかな・・・

「私たちと一緒に風呂に入りなさい！」

「・・・は？」

急がばまわれ・・・と。

第4話 沈黙の銭湯

放課後になり士郎達と別れたオレ達は今ある建物の前にいる。

「さあやってきました！銭湯！」

ここ風由学園には様々なものが揃えられておりその中には銭湯もありなかなか人気の所だったりする。

「さあ〜行くわよ〜」

「あ・・・待って・・・」

そして今オレは今までくぐっていたところの逆、つまりは女湯に入ろうとしていた。

.....

中はまさしく銭湯で体重計、富士山、牛乳、おばさん、などなど完璧なオプションが付いていた。

「いらっしやい」

「女3人で〜」

「おや？その子はだれだい？」

案の上聞いてくる。

ちなみに今はパーカーにジーンズという格好でしっぽはジーンズに耳はパーカーのフードで隠している。

「この子、私ん家のいとこで遊びに来ちゃったんですよ〜」

「そうかい、そうかい、ゆっくりたのしんでおいき」

入れるか少し不安だったがこのおばさんはいろいろサービスしてくれると生徒からの評判がかなり高く今回もオレのためにサービスをしてくれた。おばさんにぺこりとお礼をしてさっさと奥に行くことにした。

「ふふふふ．．．それじゃあみせてもらおうよ．．．」
「．．．．．」

現在オレ達以外誰もいない貸し切り状態でおばさんからは見えな
いところに立っている。

「．．．やっぱり．．．やないとだめ．．．なのか．．．」
「そうよ！約束だもの！」

とてつもなくハイテンションだ。これを止めることはもうできない
だろう。

抵抗をあきらめ溜息をだしつつもオレは身につけているものをゆっ
くりと脱いでいく。

「おお．．．」
「うわあ．．．」
「．．．．．」

鏡に映る自分の姿

ぴこぴこ動くネコ耳

ふりふりと動くしっぽ

汚れないやわらかな肌

とてもしなやかな白髪

胸にはあるかないかわからないぐらいの小さなふくらみ
そしてなにより・・・

「ない・・・」

そう男の証であるあれがなくなっていたのだ。

だれがどう見ても美少女に見えてしまう。それも極上の。

これで完全に理解してしまった。自分が女になってしまったと。

「ちよつと・・・それマジ反則・・・」

「・・・」

舞が顔をおさえている。指の間から赤い液体が流れているのはきつ
と気のせいだ。うん。

姫神は顔が赤くなっておりなにやらもじもじとしている。

「と・・・とにかく私たちも入りましょう!」

「は・・・はい」

そう言つて二人は服を脱ごうと・・・

「ちよ・・・ちよつとまった!」

「ん?なによ?」

「なによ?じゃないだろ!何オレの前で服を脱ごうとしているんだ
よ!」

「別にいいじゃない。あんた自分の裸見て何とも思わなかったでし
よ?」

「な!・・・」

た・・・たしかに自分の裸をみて何とも思わなかった。けど!

「い・・いやそうゆう問題じゃない！」
「そうゆう問題なの」

そういつて二人ともあつという間に一糸まとわぬ姿になってしまった。

「ふっふっくんどうかしら」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一応見ないように努力はしている努力はしているがやっぱり好奇心には勝てないのかすぐに二人を見てしまった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人を見た。

舞はオレと似たような感じで凸凹の少ない体。ツインテールは解いており髪が肩まで伸びている。胸の方はオレより少し大きいくらいか？

姫神はすごかった。まさしくボン！キュ！ボン！パーフェクトスタイル。顔は相変わらず髪で隠れているがこれで顔もいいとなれば舞が嫉妬するのも無理はないと思った。

「・・・・・・・・あれ？なんでオレはこんなにも冷静でいられるんだ？」

「ほら、大丈夫じゃない」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おかしいのにおかしくない。おかしくないのにおかしい。いったいどうなっちまったんだオレの体は？

「ほらほら！さっさと行く行く！」
「・・・・・・・・行く・・・・・・・・」

そうこうしている内に二人に浴場まで連れてこられてしまった。

「よし入ろう！」

「・・・・・・・・入る・・・・・・・・」

二人が風呂に入っていく

「あれ？どうしたの？」

「？」

オレも入ろうとする・・・・がなぜか一歩が進まない。

「もしかして・・・・・・・・」

「姫ちゃん？」

ああなんでだろう目の前にあるのはお風呂安全なはずなのに・・・・はずなのに・・・・・・・・

「水が怖いのか・・・・・・・・」

とっつてもこわかった。

第5話 マナーはしっかり守りましょう

私は姫ちゃん、優斗と一緒に銭湯に来ている。

銭湯というのは、心と体、両方をいやしてくれるものだ。

しかし今私は銭湯に入っているのにものかかわらずすごい辛い状況でいる。なぜなら・・・

「まいい・・・はなさないでえ・・・」

美少女がしがみついているからだ。

.....

「水が怖いのか・・・」

「いや！そんなことはない！」

「でも今、耳がすごい勢いで動いたわよ？」

「しっぽも同じくらい・・・」

ち！ちがう！きっと慣れていないだけなんだ！だから・・・

「ちょ！ちょっと！なにしてんの！」

一気に飛び込めば！

・・・ザバーン・・・

「ゴボ・・・ゴボボ！・・・」（やばい！これはやばい！）

入ってしまえば慣れる・・・そう思っていたが、実際は恐怖心がさらに増幅され冷静な判断ができなくなり事態がさらに悪化してしま

った。

何とかしようと必死にもがくが問題の解決にはならなかった。

「誰か・・・助けて・・・たすけ・・・」

その時、何かに引き寄せられる感じがした。

「うう・・・げほ！げほ！」

「もう！何やってんのこのバカ！もうちょっとで・・・キヤッ！」

こわかった・・・すごいこわかった・・・だから・・・まいにおもいつきりだきついてしまった。

「うっ・・・うえええええん！」

「・・・はあ・・・これじゃあ怒るに怒れないじゃない・・・」

「・・・ごめん・・・ひつく・・・なさいい・・・うえええん！」

「でも何事もなくてよかったです・・・」

「・・・そうね」

その後すぐに泣きやんでくれたのはよかったんだけど・・・

「あ・・・抱きついてくれるのは嬉しいんだけどもう少し力緩めてくれない？」

「いやあ・・・こわいのお・・・」

その頭にあるネコ耳はぺたんと垂れ下り

そのかわいらしい目と眉はハの字型になっており

鼻は少し膨らんで

唇はへの字になっており、かたかたと全身がふるえていた。

このようにすっかり怯えきってしまったので痛いくらいに抱きつい

てきて、銭湯に入って幸せなのに疲れたという変わった体験をする
はめになってしまった。

第5話 マナーはしっかり守りましょう（後書き）

クロ「どーも、自分の作品を見直してあまりの文章力のなさに絶望したクロです」

舞「あとがきなんて月光蝶で粉碎したいくらいの糞さだからね」

クロ「そういうことで近くこれより前のやつを大幅に改行する予定です」

舞「改悪にならなきゃいいけどね」

クロ「善処します・・・」

舞「まあこんな作品ですけど少しでも見てくれたらとてもうれしいです」

クロ「感想・批判なども待っています。ではまた次回・・・」

改行終了しました。

第6話 諦めたらそこで人生終了ですよ？

・・・いきなりですがものすごい死にたい気分です・・・
オレはいつたい何をしていた？・・・

「まいい・・・はなさないでえ・・・」

「いやあ・・・こわいのぉ・・・」

ええ、すべて覚えていますもの。裸を見られて、見せられて・・・おもいつきり泣いたところを見られて・・・その上おもいつきり抱きついて・・・えへへ 死にてえ

「ほら〜何ぼ〜つとしてんの？」

そんな舞の声で現実に引き戻される。今のオレは姫神にドライヤーをかけられている。なんかすごいうれしそうだなあ・・・。

「い・・・いや・・・その・・・」

そう歯切れ悪く返事をした時、舞の後ろに悪魔が見えて・・・

「ええと、まいい・・・はな「うわあああああああああ！」

「ストップ！ストップ！やめてくださいお願いします！舞様！」

土下座をして懇願するオレ。いや、マジでカンベンしてください。

「ふ〜ん・・・それじゃあこれから言うお願いを聞いてくれるかな〜あっ、もちろん強制じゃないよ〜」

どう見てもお願いという名の命令です本当にありがとございまして。

「はいはい・・・それじゃそのお願いめいれいはなんですか・・・」

「あはは、大丈夫よ。このネタ使うのは今回だけだから」

「む？そうなのか？」

舞はこれで絶対に約束だけは破らないやつなのだ。

「うん！それじゃあ言うっね！」

相変わらず元気に舞はこんなことを言いやがった。

「今日は私たちの部屋に泊まりなさい！」

.....

オーケーとりあえず今の状況を整理しよう

周りには見渡す限りの女子。全員息が荒く目が血走っている。場所は女子たちが周りにいるのせいであまりよくわからない。

そして今のオレの格好・・・

黒を基調としたワンピース

白いレースのフリルをあしらったエプロンドレス。

ワンピース部分の丈は短く

同じく、白いフリルの付いたカチューシャ。確か、ホワイトプリムと呼ぶのだろうか。

真っ白なニーソックス。

その上首には首輪付きご丁寧ごていねいに鎖までついていて逃げられないようになってる。

相変わらず耳としっぽは元気にぴよぴよこと動いている。

そう、ようするに今のおれは……首輪付きネコ耳メイド少女
になってしまっていた……

……少し前……

「さあ！ついたわよ！」

オレは今学生寮の前にいる……女子の

この学園は全寮制で男女別々に分かれている。一応今のオレは入る
資格があるわけのだが……

「ほら！優斗ー！早くしないとおいてくわよー！」

いつの間にか二人は寮内に入っておりあわてて追いかけて行った。

……
……

「……ほとんど変わらないんだな……」

入口・食道・レクリエーションルーム・部屋など地図で確認したが
ほとんど男子寮と変わったところはなかった。

「たしか……もともと男子寮と女子寮は一つだったらしくそれを
半分に分けたのが今の寮だそうですね……」

そんなことがあったのか。知らなかった。

「ほらほら！そんなことどうでもいいからさっさと食堂へGO！GO
O！お腹すいた〜！」

いったいどこからこの元気が出てくるんだ？

「そろそろ……着きましたよ……」

食堂はかなりにぎやかだったがオレ達が到着した瞬間ピタツ！と静かになった。

「……………」

あれ？何だろうこのデジャブ？

そんなことを考えつつすり足で少しずつ後ろに下がっていく。

「……………」

「あ、あの……」

「……………」

姫神の声を合図に一気に押し寄せてくる女子軍団と逃げるオレ。祭りはまだまだ続きそうだ……

……………」

何度も捕まりそうになったものの施設構造がほとんど同じことと体がネコになり運動性能が向上したのが幸いしてなんとか今現在も捕まらずにすんでいる。

「はぁ……はぁ……くそ！この学校は変態の集まりなのか！」

ついそんなことを口走ってしまったが考えてみたらもともといろんな意味でとんでもない所なのだ。集まるのも当然か……

「ごういうのってなんて言っただっけ・・・えっと・・・」

そんなことを考えていたからか後ろから人が近づいてきたことに一瞬気づくのが遅れて口をハンカチのような物でふさがれてしまった。

「もが！もがが！・・・も・・・が・・・」

薄れゆく意識の中でオレはなぜかさっきの言葉を思い出した。
類は友をよぶ。

第6話 諦めたらそこで人生終了ですよ？（後書き）

クロ「どうも、すべてのあとがきを過去にする・・・やっちゃった
クロです」

士郎「見事にやっちゃたね」

健人「きれいさっぱりなくなったな」

クロ「いや、だって、書いた自分が言うのもなんだけどあれはない
わ、いや、マジで」

士郎「まあそんなことはどうでもいいんだけどさ」

クロ「なんですか？士郎さん」

士郎「僕たちの出番が少くない？」

クロ「・・・」

健人「た、たしかに！次回だって女子寮しか映りそうにないし！俺
達はどうなるんだよ！」

クロ「いや、野郎がユウトをいじってもおもしろくないじゃん」

士郎「あはは、相変わらずの変態っぷりだね」

健人「そんなことより出番！」

クロ「とりあえず落ち着け。お前らは主要人物の一人だから影が薄
くなることはないと思う（たぶん）」

健人「そ、そうだよな！」

クロ「それと、この作品をお気に入り登録してくださった方ありが
とうございました！」

士郎「まだまだ未熟ですが未熟なりにがんばっていきます」

健人「感想！評価！批判！なんでもかかってこい！」

クロ「とりあえずこれで終わりです。ではまた次回・・・」

「きゃああ！サイコー！」

「いいわね・・・ゴクリ・・・」

持っていた物は黒ぶちの大きなメガネで気がついたらオレはそれをつけられていた。いや、何されたかわからなかったぞ？。

一瞬メガネを取ろうかと思ったがやっぱりやめた。・・・なんでかっつて？それは目の前に一（鬼の形相をした）女の子がいたからだよ。

「ぐぬ・・・くそ・・・！」

はずすことをあきらめたオレはずれていたメガネを必死に直そうとしましたが大きすぎるのかどうしても斜めに傾いてしまう。

「はあ・・・はあ・・・」

そんな姿が興奮するのか目の前でものすごい危なげな息遣いが聞こえる。何か倒れたような音がさつきからひっきりなしに起こっているが気のせいということにした。

このままじゃ今のオレのモノが本当に取られるんじゃないか？そんな危険を感じていた・・・その時・・・

「おい！どうした！さつきすごい悲鳴と倒れる音がしたぞ！」

さらなる混乱がやってきてしまった。

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「ん！おい！どうしたんだ！？」

部屋に入ってきたのは数人の男子。不幸にも部活動の帰りかなんかでたまたまこの近くを通ってしまったのだろう。

そして一瞬の静寂の後に・

「もう！最低！」

「空気つてももの読めないの！」

「いいから！さっさとあっち行ってよ！」

女子達は怒り狂い男子達に突っかかっていった。男子達がとても哀れだ……。けど今は！

「今だ！」

男子に注意が向いた一瞬の隙をつき脱出を決行、全速力で出口まで走る。女子達が慌てて追いかけてきようとしてきているが呆けている男子が壁になってくれたおかげで部屋から出ることに成功。

「ネコが逃げたわよおお！」

「ああ！もう！邪魔！」

「待ってーーーーー！」

男子達のおかげで部屋の中は混乱の極みになりあっさり引き離すことができた……。のだが。

「くそ！何で閉まってるんだよ！」

出口には逃走を見越してなのか鍵がかかっており外に出ることができなかった。

「くそ……このままじゃ……」

後ろからは女子が走って追いかけてくるのがわかる。もっだいが近くまで来ている。

これからどうするか考えようとした時。

「はぁ……はぁ……こっちです!……」

いきなりドアの一つが開いて姫神が身を乗り出して叫んでいる。

女子達ももうすぐそこまで迫ってきていた。

「ええい!ままよ!」

運を天に任せオレは姫神のいる部屋に突っ込むとドアはすぐに閉められた。そして廊下には誰もいなくなった。

第7話 こんなことで喜ぶか、変態どもが！（後書き）

クロ「どーも。プランク、くそですね、なクロです」

姫神「あの・・・そのネタわかる人少ないと思いますよ・・・」

クロ「まあいいじゃんわかる人はわかるんだし」

姫神「それは読んでくれている人がもつと多い人が言うセリフですよ・・・？」

クロ「ぐ・・・痛いところをつくね君は・・・」

姫神「ご・・・ごめんなさい・・・」

クロ「別に謝る必要はないぞ」

姫神「はあ・・・」

クロ「それはともかく、この小説は今のところ1日2話ペースで書き進めていくつもりです」

姫神「更新は・・・平日が15〜24時くらい・・・休日は書き終わったらどんどん書きます・・・」

クロ「ただテストがもう近くなので来週あたりは少しペースダウンするかもしれません」

姫神「やめるつもりはないんですね・・・」

クロ「勉強？なにそれ？おいしいの？・・・それではまた次回・・・」

第8話 嵐のあとは・・・

「はあ・・・はあ・・・」

部屋に入りやつと一息つけた。

「どこ行つたの？」

「徹底的にさがすわよ！」

外はまだ騒がしいもののここにいればなんとか見つからずに済みそうだ。

「はあ・・・あ・・・ありがとう姫が・・・み・・・」

姫神という天使にお礼を言おうとしたがそこには天使だけでなく悪魔も一緒に住んでいたのだった・・・

「~~~~~」

オレが入った部屋は姫神が使っている部屋だった

「~~~~~」

しかし部屋に入ったはよかったがその部屋はなんと舞と共同で使われている部屋だった。そのためオレは一緒に部屋にいた舞にもこの数秒で捕まってしまった。

「大丈夫よ！別にとって食うわけじゃないから！」

そして今オレはドレッサーの前に座らされ髪をいじられている。

「しっかし・・・ほんとにきれいな髪ね・・・」

そんなことをつぶやきながら髪をいじっていく。

だが確かにきれいな髪だ。ぼさぼさだった黒い髪は今やさらさらに整っておりとても手触りがよさそうだ。色はまるで雪の様にまっ白くつやつやと光沢が出ている。

・・・いやそれだけじゃない・・・目の前に映る少女はとてもきれいだ・・・

目鼻立ちの整った容貌。特にくりくりとした大きな瞳がかわいらしい。

まるで人形のような小さな体。

汚れを知らないような透きとおった肌と真っ白な髪。

頭にはかわいらしいネコ耳がぴこぴこ動いており、その後ろではしっぽが元気に動き回っている。

さらにメイド服というアンバランスさが少女の魅力をさらに引き出している。

おそらく街に出れば数分おきに声をかけられてしまっだろう。

「ね・・・」さらにこの姿で「ちょ・・・と・・・」あんなことを・・・

「ちょっと！聞いているの！」

「！は、はい！なんですかにゃ！？・・・あ・・・」

つい言ってしまった。

「んふふ、気分はどうかにゃ、優斗にゃん！」

ちょっとした油断から再び弱みを握らせてしまった・・・

「聞・い・て・る・の・か・にゃ〜ん？」

つく！こうなったらもうやけくそだ！

オレは舞の方に向いて・・・

「許してください・・・ご主人さま・・・」

手を組み、ちよつとだけ涙目になり、できるだけ困ったような顔してそんなことを言った。

内心何度も死にたくなつたが必殺のウルウル攻撃を決めるため心を押し殺した。

「・・・・・・・・・・」

予想どおり、舞の顔はいつきに真っ赤になりその鼻からは赤い液体が流れていた。

その瞬間を見逃さず隠し持っていたケータイでそのアホ面を写真に撮った。

「・・・・・・・・ああ！な、なにとつてんのよ！」

「あくまで保険だよ。お前に対してのな。」

何とか作戦は成功。オレも手札を一枚手に入れることができた。

「ぐっ！卑怯な！」

「お前が言つな・・・」

とりあえずこれで当面のことは何とかなるかな・・・あれ？姫神さんさつきから何で背中を向けてそんなにふるえているんですか？

「いいからそれを早くけしなさい！」
「うわ！そんなことできるかー！」

その後も愉快的なキャットファイトがしばらく続いていたとかなんとか……

……

私の隣にはかわいらしい少女が眠っている。

「……すう……」

最初は一緒になるのをとても嫌がっていたが眠ってしまったえばかawaiiものだ。

「……」

隣にいるのは今は少女にしか見えない。……しかももとは少年で私の幼馴染なのだ。

「……ねえ……」

「……すう……」

相変わらず気持ちよさそうに眠っている……私の気持ちも知らないで……

「……ねえ……私どうしたらいいかな？……」

目の前にいるのはユウトであって優斗じゃない。大島優斗はまだ死

んではないが今はどこにもいないのだ、目の前にいるのにどこにもいない・・・それが私にとってとてもつらい、なぜなら・・・

・・・ねえ優斗・・・私ね・・・あなたのことが・・・

言葉を紡ごうとしたとき少女が寝返りをしてこっちを見てきた。

とても幸せそうな顔をしている。よっぽどいい夢を見ているのだから。

「・・・・・・・・ふ・・・・・・・・やっぱり駄目ね・・・」

このことは今言うべきではない。このまま言う機会は一生にないかもしれないが少なくとも今言うべきではない。・・・いやこの言葉を使っていいのは一回しかない。

「それまで私はゆっくり待ってるわ・・・けど帰ってきたら・・・覚悟しときなさい・・・」

とにかくもう寝よう、明日は待ってくれないんだから。・・・願わくば幸せの夢を私に・・・good night・・・

第8話 嵐のあとは・・・（後書き）

クロ「どーも、年齢〓彼女いない歴のクロです」

先生「そんなやつが恋愛描写なんて・・・」

クロ「自分なりに一生けん命書いたやつだからそこんところは許してください・・・」

先生「そんなものはどうでもいいけどさっさと続きを書きなさい。私主役の」

クロ「いや、むりだわ、もう眠くてしょうがない」

先生「だらしないわね・・・」

クロ「なんとでもいえ・・・それではまた次回・・・」

第9話 睡魔は人類の敵です……

「……私の気持ちも知らないで……」

そんな声が聞こえたような気がした・

「……うん・はあ……」

頭がぼおつとしている。そしてなぜかとても暑い。

今は確か11月のはずだ、なのになぜこんなに暑いんだ？

「あつ……うん!……」

だがあまりの暑さについて上着を破いてしまい上半身をはだけさせてしまった。

すべすべとした純白の肌がさらけだされる。

「……はあ……はあ……ん？」

だがちつとも涼しくはならない……そしてその時やっと気がつく、誰かがわたしを見下ろしていることに……。

「……あなたが悪いんだから……あなたが……」

そう言ってその顔がどんどん私の顔に近づいてきて……

「それより・・・それ・・・どうするんですか・・・」
「ああ・・・これね・・・」

何を言っているのかというと、今のオレの格好のことで今は昨日と同じ格好・・・つまりメイド服（首輪付き）のままなのである。

・・・ちよつと巻き戻し・・・

「さうて、寝るとしますか」

「そうね」

「・・・ん？・・・あれ！」

「？・・・どうしたの？」

「いや・・・あれ？・・・これ・・・脱げないんだよ」

「どれどれ？」

「・・・」

「あれ？どうしたんですかお二人？」

「え〜と・・・」

「これ・・・鍵がついて・・・外れない様になっています・・・」

「・・・」

校長先生・・・この学校は精神科医が絶対に必要なようです・・・

・・・巻き戻し終わり・・・

「とりあえず・・・朝にしましょう・・・」

今現在の時間は7時ジャストいつもより30分近く早く起きてしまった。

「ああ、手伝うよ」

「そうですねか？．．．ありがとうございます．．．」

ベッドにいる舞をまそのままにキッチンに向かった。

「それで？何するんだ？」

「昨日の残り物を使います．．．あと．．．冷蔵庫の中にお味噌汁が入っているのでまずそれを出してくれませんか？．．．」

「ん、わかった」

オレは今その冷蔵庫の前にたっている。しかし．．．

「．．．．．でかい」

背が縮んでしまった今のオレにとって目の前の冷蔵庫はまるで化け物のようだった。

「っと、そんなことより早く取らなくちゃ」

近くにあった椅子を使い、中にあった味噌汁を取ろうとした．．．が

「うー！うわっと！おっとっとっとっとっと！」

それがとてつもなく重く必死にバランスをとろうとする。しかし少女になってしまったオレの力ではどうすることもできず．．．

「~~~~~．．．も．．．もう．．．ダメ．．．」

限界に達しバランスを崩しそうになった時

「はあ．．．なにやってんのあんたは．．．」

グットタイミングで舞が助け舟を出してくれていた。

「はあ……はあ……助かったよ……ま……い……」

「それよりもあなたの電話がさつきから鳴ってうるさいんだけど……」

ただしその船は身の安全の方は保障してくれなかったようだ……

「あ……ああ、そうなのアリガトネ」

「……後で」

なにやら物騒なことが聞こえたような気がしたがきつと空耳だ。うん。

キッチンから逃げるように飛び出して電話にでた。

「はい。もしもし？」

「おそい……さつさと出なさい」

再び強烈ボイス……とりあえず誰か助けてください。

「すみません」

「まあいいわ……そんなことよりもさつさと科学室まで来なさい」

電話の相手は先生だった。この不機嫌さはきつと徹夜をしているな。

「あ……悪いんですけど今は「遅れたら死刑」《ブツ！ツ、ツ
ー、ツ》」

「……」

はははは、いけるわけないじゃないですか。だって……今のオレ
はめいどさんなんだもの。

第9話 睡魔は人類の敵です……（後書き）

クロ「どーも、本当にこの作品ダイジョブナンデスカ、と疑問に思いつつあるクロです」

優斗「まるで成長していない……」

クロ「もともと方向性なんて決めてなかったけど、あっちに行ったりこっちに行ったりと予想以上にとんでもない方向に」

優斗「まあもともとバカ作品にするつもりだったんだし別にいいだろ」

クロ「正直私ですらすでに予測不能の状態です」

優斗「そんなことはどうでもいいんだが。お気に入りに入れてくれた人、これを評価してくださった人本当にありがとうございます！」

クロ「無論それらの人だけでなくこの作品を見てくださっている全ての人たちにもお礼を言わせてもらいます。ありがとうございます！」

優斗「まあ……最終回みたいな感じになっているがまだまだ終わるつもりはないんだけどな……」

クロ「書きたいネタはまだまだ沢山！ではまた次回に！」

第10話 夢であるように……いや、あってください

「で？何してたのあんたは？」

「ぐず……だでのせいだど……ぐず……おもっているんです
が……」

「知らないわよそんなこと」

目の前にいる人は鬼だ！悪魔だ！オレがどんな目にあつたか間違
なくわかつていくせに……

「……………」
「……………」

オレは今玄関の前に立ち外に出ようとしている……メイド服の
ままで。

この姫神達の部屋あんぜんなおりから出てしまえば外にはクラスメイトせうじゅうたちが待っ
ているだろう。

……だがそれ以上にあの人を待たせるのは危険だ。あの不機嫌さ
を見ればそれこそ何をされるかわかったもんじゃない。

「はあ……行くしかないか……」

覚悟を（いやいやながら）決めたオレは学園とくがくえんに飛び込んでいった。

「……………」
「……………」
「……………」

……開始一秒、我、猛獣に遭遇

オレはあの後ネコになった身体能力をいかし木から木へと飛び移っていきなんとか廊下に侵入することに成功する。

「お？運が向いてきたかな？」

なんと目の前にはその科学室があった。さっそく入ろうと扉を開けると・・・

「にゃー！・・・にゃー！・・・あれ？」

気がつくとオレは廊下から外に移動していた。

周りには多くの生徒たちがオレを中心に集まっている。

そしてオレの手の中にはテカテカと光るネズミ型のおもちゃがあった。

「コッココ・・・コッココ・・・」

そう科学室に入ろうとした時、飛び出してきたネズミのおもちゃに心を奪われてしまい我を忘れてそれを追いかけてしまったのだ・・・そして今

みんなが・・・みんなが・・・オレの事を見ている。

「お・・・お願い・・・お願いだから・・・見ないで・・・見ないで
~~~~~」

目の前の人の壁をかき分けながら全速力で走った。その間なみだが止まらず、わんわん泣きながら科学室に逃げ込んだ・・・

第10話 夢であるように・・・いや、あってください(後書き)

クロ「どーも、修正！修正！修正！どこをとっても修正！なクロです」

ユウト「とりあえず自分が凡人だということ認めなさい」

クロ「すみません調子に乗りすぎました」

ユウト「まあ確かに書いてる内は気がつかなかったけどゆっくり読むと誤字脱字、変な表現などがたくさん見つかるんだよな」

クロ「そのためちよくちよくいろんな所を修正しています。」

ユウト「まあ人によつては改悪になってしまった所もあるかもしれないが・・・」

クロ「それを言ったらダメでしょうに・・・それではまた次回に・・・」

## 第11話 ヒロイン誕生？

「さて・・・ささつとその服を脱ぎなさい・・・」

あの後、しばらく泣きたい気分であったが目の前にいる先生が不機嫌オーラ（固体）をバシバシぶつけてくるので自然と涙が止まっていた。泣く子も黙るとはまさにこのことだろう。

そして泣きやんだオレに対して言った言葉は謝罪でも慰めでもなく命令だった・・・

「そうしたいのは山々なんです、これ鍵が付いていて・・・」

「・・・ちよつと見せなさい・・・」

どうするのか？と聞こうとしたが先生のオーラに押されさつさと背中についた鍵を見せると・・・

「ベギ！！バキバキバキ！！グシャ！！」

何やら人間だけではまず作れないような音が後ろから聞こえた。きつと工具がなんかを使っているんだ・・・うん。

「とれたわよ・・・」

そう言われたので背中に手をまわしてみると確かに鍵が無くなっていった。再び先生の方に向き直るとなぜか先生の手にはピンクのかわいらしい南京錠のような物がありそれをオレに手渡しした。

それは誰かに見せれば十人中十人が「これ何？」と言ってしまっほど原型を留めていなかった、何なのか知っているオレも一瞬何なのかまったくわからなかったほどだ。

「もう問題はないわね・・・」

目の前にいるのは本当に人間なのだろうか？オレは妙に冷静にそんなことを考えていた。

その後すぐに先生に別の部屋に連れさられあんなことやこんなことをされた。とりあえずとんでもないこと―（グロ的な意味で）をされたと言っておこう。

「うう・・・お嫁にいけない・・・」

ちなみにナニカサレタあとは最初からなにもなかったかのようにキレイさっぱりなくなっていた。いったいどんな魔法を使ったんだ？

今オレはさつき脱いだメイド服を再び着ているところだ。こんな服はもう見るのも二度とごめんだがあいにく今この場で着れるものはこれくらいしかないうえ、11月に素っ裸で外に出ようものならそれは風邪をひかせてくださいと言ってるようなものだろう。

「うわぁ・・・あつたかい・・・」

さつきまで裸であつたため服を着るとやはり温かさが違う。やばい・  
・眠くなってきた・

「バターーーーン!!!」

「!!!!!!なんだ!」

いきなりのことで眠気がいつきに吹き飛ぶ。聞こえた方向は先生がいたあたりだった。

「どうしたんですか！せん・・・せ・・・い・・・」

そこには先生がいた。しかし見えたのは足だけであとはテーブルに隠れてしっけていて見えなかった。

「先生！先生！」

急いで先生のそばに駆け寄った。先生はうつぶせに倒れており頭のあたりから赤い液体が流れている・・・血だ・・・ついパニックに陥ってしまい先生を抱きかかえて保健室に連れて行こうとした時・・・

「・・・・・・・・・・ぐう・・・・・・・・」

確かに聞こえた・・・・・・・・・・ぐう・・・・・という言葉が・・・  
顔をチエック・・・健康そうだ。

流れ出る血をしてみる・・・すでに止まりつつある。  
様子をみる・・・「ふふふふ・・・」怪しい笑みを浮かべた。

「・・・・・・・・・・」

先生を元の場所に戻しオレは静かに教室を出ることにした。

- - - - -  
時計を見るとすでに10時をまわっていた。侵入した時はちょうど生徒が登校している時間と重なってしまったが今はみんな授業を受けている時間だから校舎から出るのは簡単だろう。

「さて、どうしようかな・・・」



これから何をしようか考えようとしたその時・・・

「きゃああああああ！！！！」

いきなり女子の悲鳴が聞こえた。外からの悲鳴だったので廊下から外をのぞくと男が走っていたのが見えた。

だが、その男は全身真っ黒なうえ顔はスキー帽、サングラス、マスクを装備しており誰がどう見えても不審者にしか見えなかった。

「だれかぁ！捕まえてえ！」

そんな女子の助けの声を聞いた時、オレは無意識に体が動かしていた。

オレが今いるのは3階の廊下、そこからオレは一気に飛び降りた。着地点は整備されたコンクリートの上。やわらかな土の上ならともかくコンクリートでは3階から飛び降りればまず怪我をしてしまうだろう。

しかし今のオレはネコなのだ、危なげなく着地を終わる、体に異常はみられない。

追跡を開始する。ネコになり筋力などは格段に衰えてしまったが代わりに素早さが大幅に上がっているためあつと言つ間に犯人に追いつくことができ身柄の確保をしようとする。

「うわ！この放せ！」

捕まえようと体当たりをしたが案の定犯人は抵抗を始める。まともにやりあつて抑えつけるほどの力は今のオレには持っていない・・・だから！



## 第11話 ヒロイン誕生？（後書き）

クロ「どーも、三度の飯より遊びを取るクロです」

舞「遊びと言ってもゲーム、ネット、マンガとかじゃない」

クロ「でも遊びは遊びだろうに」

舞「とりあえずその腐った根性をたたきなおしなさい」

クロ「それができたらどんなに楽か・・・」

舞「それより最後のあれ何？」

クロ「みなさんもうおわかりでしょうが次回は新キャラ登場（予定）です！ではまた次回・・・」



「それにしてもすごい格好してるね」  
「な、ななななな!・・・み、見んな!」

自分が今メイド服一（首輪付き）であることに今更気づいたオレだったが、時すでに遅くおもいつきり目の前の男に見られてしまった。

「た、頼む!このことは内密に・・・」  
「うん・・・どうしようかな」

明らかに今の状況を楽しんでいる。いい性格してるよ・・・

「うん、いいよ」

「そうだよ・・・え!?!?・・・冗談とかじゃないよな?」

「あたりまえだよ」。このことは未来永劫きれいさっぱり忘れてあげる・・・でも」

「でも?」

「ひとつ、条件があるんだ」

やはりそうポンポンと事は進まず士郎はオレにある条件を出してきた。

「僕の先輩に会ってくれないかな?」

「先輩?」

「そう先輩に、で?回答は?」

この時オレは「この程度でこの事が無くなるなら安いもんだ」と思っていた・・・が、ここはあらゆる意味でとんでもないとところということをすっかり忘れていた・・・

「ああ、いいよ」

「そっか、先輩！OKです！」

士郎がそう言うとオレの後ろの茂みから何やら音が聞こえた。そこにはプロのカメラマンが持っているような大きなカメラを持った女の子がいた。

髪型はぼさぼさとしたショートヘア。

身長はやや小さいが出ているところはそれなりに出ている。

アクセサリーのような小さなメガネが鼻の上にちょこんと乗っかっていた。

「よくやったわ、中村！これで明日の一面は決まったも同然ね！」

「優斗、こちらが会わせたかった人の水橋詩織先輩。みずはししおり僕の所属している新聞部の部長さん」

「し・・・新聞部？」

なにやら最近、急成長をとげているオレのセンサーに何かが引っ掛かった。ネコ耳がびくびくと震え、しっぽが落着きをなくしている。

「あ、あの～何をしにきたんですか？・・・」

「ん？なにって、君のインタビューに決まってるじゃない。「メイド服を着た元少年のネコ少女、強盗を撃退！」・・・ん～いいネタだわ」

「い、いや・・・その・・・」

「ほらほら！時は金なり！さっさと終わらせるわよ！」

水橋さんがそう言うと士郎が突然オレの頸の付け根を掴んで持ち上げた。

「な！？士郎！？」

「ごめんね～部長命令だから」

必死の抵抗をしようかと思ったがなぜかやる気がでてこない・・・

「ネコは頸の付け根を噛まれるとおとなしくなっちゃうのよ、知ってた？」

そうですか・・・せつめいごころづさまです・・・

結局、抵抗らしい抵抗もしないままオレは二人に連れ去られてしまった・・・

## 第12話 敵か味方か？（後書き）

クロ「どーも、さすがにテスト前で忙しくなってきたクロです」

詩織「そのわりにはずいぶんと余裕そうね」

クロ「勉強などいらぬ！滅びるがいい！」

詩織「全国の受験生に謝りなさい！今すぐ！」

クロ「いや、ホントすんません」

詩織「それより、私の出番あれだけなの？」

クロ「今回はあれだけ、次回に期待しろ」

詩織「あんたに期待することなんて何も無いわよ」

クロ「……次回に続きます……」



第13話 もう・・・ゴールしたいです・・・

Q、なんでそんな姿になったの？

A、天才狂人科学者のせいでこうなった。

Q2、なぜメイド服をきているの？

A2、変態があまりにも多くそしてそいつらは強大だったから。

Q3、その姿になってどんな気分？

A3、早く元に戻りたい、ただそれだけ。

・ ・ ・ ・ ・  
普通だ・ ・ ・ 普通だ・ ・ ・

いや、だからといって文句があるわけではない。むしろこの姿になって初めての普通だ、いやなわけがない・ ・ ・ けど、何故だろうか？相変わらずネコ耳は小刻みに震え、しっぽも落ち着かない。

「ちよっと？聞いているの！」

・ ・ ・  
それにあの士郎が素直に従うほどの人物だ何かあるにきまっている・

「・ ・ ・ ・ ・ そう・ ・ ・ ・ ・ だったら・ ・ ・ ・ ・」

問題はそれがなんであるかだ・ ・ ・ とにかくこの人の情報を・ ・ ・

「!?ニヤ~~~~!いたい!いたい!いたい!」  
「話を聞かない悪い耳はこっちな〜、それともこっちな〜」

水橋先輩はいきなりオレのネコ耳を引つ張り始めた、かなりの痛さだ。

「ほらほら、まず言うことがあるんじゃない?」

「ご、ごめんなさい!ごめんなさい!だからはなしてください〜」  
「よくできました!・・・でもだめね、人の話を聞かない人にはしつかり!罰を与えないと」

「~~~~~!?!?」

「うわ〜いたそ〜」

声にならない悲鳴をだしているがまつたくゆるむ気配はなし。

士郎はあんなことを言っているが顔が笑っているうえに手にもったケータイをこちらに向けている。

・・・何度も言うようだがこいつはオレの友人である。

.....

あの後、引きちぎれそうな痛みに耐えつつも何とか水橋先輩の質問にすべて答えたオレは新聞部の部室を出ようとしている。

「ありがとね、ネコ君!これは久しぶりにウケがよさそうな新聞が書けそうだわ!」

「ああ、そうですか・・・それとオレの名前はネコじゃなくて大島優斗です」

「わかったわネコくん!それじゃね!さあ〜今夜は居残りよ〜!」

「そうゆうわけだから、僕もここに残るよ、じゃあね優斗」

そしてやっとのことで解放されたオレ

「……ふう……」

ちらと時計を見るとすでに5時を過ぎており辺りはすでに真っ暗になっ  
ていた。

「……とりあえず戻るか……」

いつもだったら帰宅部であるオレはすでに寮に戻っておりテレビを  
見るなり、勉強するなりと、いつもどりの生活をしていたはずだ  
ったのに……

「どうしてこうなったんだろうな……」

そんなつばやきが無意識の内にてしまっていた……そんな時  
に……

「優斗？」

「あ……健人か」

そこにはオレの友人がいた。

「どうしてお前こんな所にいるんだ？」

「いや、掃除をしていたら思いのほか汚い所が多くてな、今さっき  
やっと終わったところだよ」

掃除を今までずっとやってた！？たしか掃除は放課後……つまり  
3時ごろからずっとやってた計算になる。相変わらずというか何  
というか……

「それより……お前その格好……」

「!?!いや、これは違うんだ!」

慌ててこの事を説明しようとする

「いや、わかっている。お前がそんな服進んで着るわけがないからな……」

「?ああ、そのとうりだ……?」

なにやら様子がおかしい。さっきからオレに顔を合わせようとせずどこか上の空といった感じだ。

「……へくち!」

「!?!、大丈夫か!これを着ろ!」

そう言うと健人は制服の上着を脱いでそれをオレに羽織らせてくれた。

制服はとても大きくオレの全身をすっぽりと包んでくれた。

それはとても温かく、そしていいにおいがした……

「……あ、ありがとう……」

「あ、ああ」

あれ?今度はどんどん暑くなってきたぞ?それになぜかすごい恥ずかしい……

「……」

気まずい沈黙が流れる……目が合わせられない……

「そ、それじゃ！またあ、明日！」  
「あ、ああ・・・また明日！」

その空気に耐えきれずオレは上着を返して逃げるように部屋に戻った・・・

部屋に戻ると、心臓が破裂しそうなくらい激しく動き、体中が燃えるように暑く、とても興奮しているということにその時、初めて気がついた。

- - - - -  
- - - - -

次の日になりオレはそれを見つけてしまった・・・

「なんだこれ？・・・」

「おてがら！ネコ少女、連続ひったくり犯、逮捕！」

そんな新聞が部屋のポストに放り込んであり、他の部屋にも同様のものが並んでいた・・・

第13話 もう・・・ゴールしたいです・・・（後書き）

クロ「どーも、今現在、睡魔に屈しそうなクロです」

姫神「早く寝ましようよ・・・」

クロ「いや、途中で書き詰まっちゃってしまっただけ・・・」

姫神「保存するなり何かすればよかったじゃないですか・・・」

クロ「中途半端は好かん・・・」

姫神「・・・・・・・・・・」

クロ「とりあえずもう限界・・・次回に続く・・・」

## 第14話 パンツは男物なので恥ずかしくありません！

開いた口がふさがらない・・・まさに今のオレを表す言葉だ・・・いや、確かに新聞を書くとは言っていたさ。・・・けどこれは何だ？なんで右を見ても左を見ても各部屋のポストには同じものが入ってるんですか？

「うふふふ・・・死にたい・・・」

ゴッド・・・オレ、あんたに喧嘩売った記憶がないわけなんだが・・・  
・  
だがそんなオレの願いもむなしく神はさらなる試練を与えてきやがった・・・

「　　」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

携帯がなっている。いや、問題はそこじゃない。問題なのは・・・

「橘先生」

そこに書いてある名前だった。

「ハイ、モシモシ」

「遅いわよ、さっさと出なさい」

電話がなってから3秒くらいで出たのに・・・理不尽

「まあいいわ・・・それより科学室に来なさい。ちなみに拒否権は

なしね《ブツ！ツーツー》」

「・・・・・・・・・・」

最低限の事を言っただけに電話を切られる・・・・・・・・あれ？おかしいな？なんで部屋の中で雨がふってるんだらう？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おそい！」

「・・・・・・・・・・」

科学室につき、いきなり怒鳴られるオレ。

ちなみに前回と同じ方法で来たため他の人には気づかれていない。

「ほら、受け取りなさい」

そう言っただけ先生はオレに紙袋を投げつけてくる。そしてその中に入ったのは・・・・・・・・

「制服？」

オレにとっては既に見慣れた存在である学園の制服があった・・・・女子の

いや・・・・この際女子の制服であることは置いておこう。問題なのは・・・・

「・・・・・・・・先生、これどうやって用意したんですか？」

その制服はサイズがぴったりなのだ。

おそらくオーダーメイドで作ったのだろうが、あまりにも早すぎる。オレはこの姿になってまだ2日もたっていないのだ。



「がんばって作ってくれたんでしょ？なんか問題でもあんの？」

いや・・・問題がないことが問題なんですけど・・・

「まあいいや・・・それより問題といたらこの制服、女子のじゃないですか！」

「はあ・・・いちいちうるさいわね・・・今のあんた女でしょ？」

「確かにそうですがそういう問題じゃありません！」

「わかったわよ・・・ほら」

そしてまた先生は同じ紙袋を渡してきた。

その中に入っていたのは、男物の制服だった・・・今のオレのサイズにぴったりの

.....

「・・・これは・・・」

オレは今さつきもらった制服を着終わったところだ・・・もちろん男の方の

だがそれにはかなりの違和感があった。

サイズはぴったりで着心地はいい、そのうえご丁寧にしっぽを出す穴までついていた。けど問題は見た目の方だ。

その制服を着ているのは誰がどう見ても少女なのだ。その上冗談みたいなのネコ耳としっぽのついた。

男装の麗人・・・ではあるがその小さい体と幼い顔立ちがどうしても違和感を作ってしまう。

「ああ・・・早く人間になりたい・・・」

そんなことが溜息とともに出てしまうネコのオレであった。

第14話 パンツは男物なので恥ずかしくありません！（後書き）

クロ「どーも、勉強する気がいまだにないクロです」

健人「もっとやる気出せよ！」

クロ「やる気は出してるぞ・・・趣味に」

健人「現実逃避しても現実からは逃げられんぞ」

クロ「・・・明日から本気だす」

健人「それは、やんないフラグだろうが！」

クロ「まあ・・・なんとかなるさ・・・ではまた次回・・・」

## 第15話 人気者はつらいよ・・・

先生から制服をもらったオレは今ゲタ箱の前にいる。時間はわざと遅れてきたため生徒はいない。

・・・なに？遅刻はいけないうって？普通に行ったら命がいくつあっても足りんのですが？

「そんなこと考えてる場合じゃないよな」

事情が事情とはいえオレは遅刻をしまっているのだ。ここでゆっくりしている時間はない。

幸いなことにオレが使っていた靴箱は今のオレでも届くくらい下の方にあつたので問題なく開けることができた・・・のだが・・・

ドザーーー！

五分後・・・

「あれー？ネコ君どうしたのー？」

誰かの声が聞こえる。確か水橋先輩・・・だったかな？

「おーい、生きてるー？返事しろー」

いや、生きてはいるんだけど身動きがとれんですよ。見ればわかるでしょう。

仕方がないので現状なんとか動かせるしっぽをふりふりと動かす。

「おおー、生きてるかー、それで何で君はそんな所に埋まってるのかなー？」

そう・・・今のオレはゲタ箱から飛び出してきた手紙の山に飲み込まれ溺死寸前なのだ・・・

- - - - -

「へーこれ全部ネコ君へのラブレターかーよかったねー」

「これをよかったと言えるあなたは大物ですよ・・・」

「あつたり前じゃない！伊達に部長はやってないわよー」

あその後、先輩に引き上げてもらったオレは埋まっていた手紙の山の処理に追われていた。

とりあえずそのネコ君はやめてくれ。

「いや、それほめてませんから」

「照れない！照れない！」

「・・・・・・・・・・」

やっぱり前のオレの予感は的中。この人もどこか頭のネジがおかしいようだ。

「それより、ありがとねネコ君！久しぶりに面白い新聞をかけたわー！」

「こつちはいい迷惑ですよ・・・」

「はいはい！そんな顔をしない！せつかくのかわいい顔が台無しだぞ？」

満面の笑みを浮かべてそんなことを言う水橋先輩。  
そんな顔されちゃあ責めるに責められない為オレはため息を出しな  
がら手紙の処理を進めた。

.....

手紙の処理（ゴミ箱に突っ込んだだけだが）を終えたオレは今教室  
に向かっている最中だ。

「それにしても妙な格好してるねーネコ君」

あいかわらずオレについてくる水橋先輩。つーか授業はどうした。

「男装の麗人・・・だっけー？ネコ君そうゆう趣味があんのー？」

「オレはもともと男ですよ・・・」

「でもっやっぱり今のネコ君はスカートとかの方が似合うと思うよ  
ー？もちろんそうゆうのも人によっては人気があるけどー」

いや・・・人気とかそうゆうのは狙ってませんから・・・

「そーだネコ君！」

「は、はい!？」

いきなり水橋先輩が叫びだす。

「ネコ君のプライベートを取材させて！」

「はあ!？」

何をいきなり言い出すんだこの人は!？そんなこと・・・



階段を登り切り、その先にあつた曲がり角を曲がつたオレの目に映つたものは

「「「「「」」」」」」

人の塊だつた。言うまでもなくみんなオレのクラスの前に集まっている

「・・・もういや・・・」

そんなつぶやきもむなしく正面の集まりは戦闘態勢に移行していた・

第15話 人気者はつらいよ・・・（後書き）

クロ「どーも・・・テストがやぶあいクロです」

士郎「それなのに更新。やる気無さ過ぎだね」

クロ「ちよつとした息抜きだからノーカウントだ」

士郎「そう言っても現実が変わらないよ」

クロ「ああ・・・それにしても時間が欲しい・・・」

士郎「時間があってもやる気がないんじゃない」

クロ「俺はスロースターターなんだよ！・・・ではまた次回に・・・

┌



## 第16話 ばか騒ぎもほどほどに

クラスメイト×？が現れた！

コマンド

「アたたかう (どうしると・・・)」

まほう (現実をみましよう)

どうぐ (あ？ねえよそんなもん)

にげる (逃げるが勝ち)

ユウトは逃げようとする。

しかし周りは囲まれていた！

ユウト「なんでさー！」

いや、ホントなんでだよ。

いつの間にやら後ろの方にも女子の大群がおり袋のネズミ状態になっていた。

今夜の夕飯どうしようかな、などと現実逃避をしそうになった時

「・・・ん？」

なにやら様子がおかしい。

前方にいるクラスメイト達がいきなりおびえはじめ、後ろにいる女子軍団は殺気に近いものを放っている。

「げえ、副会長！？」

「ぶ、副会長だー逃げろー！」

その言葉がスイッチになったのか、前にいたクラスメイトたちは蜘蛛の子を散らすように自分のクラスに戻っていった。

「……………」

「君、大丈夫だった？」

「あ、はい。ありがとうございます」

その光景に啞然としてしていると女子軍団の一人が声をかけてきた。

その女子は身長がやや高く、スレンダーな体系の持ち主で

髪型はロング、髪の色は青で頭には大きなリボンが付いていた。

「私の名前は藤原愁ふじはらしゆこの学園の副会長をしているわ」

「……………あ！」

思い出した、さっきからどこかで見たことのある顔だと思っていたがまさか生徒会副会長だったとは……

藤原愁 風由学園生徒会副会長

性格はとても厳しく校則違反者には一切の容赦なく制裁を加えることで有名。

その上そこらの男子が束になっても歯が立たないほど強いため「学園の法」と呼ばれている。

しかしその凜とした姿と時折見せるやさしさから男女問わずかなり人気があり（本人非公認だが）親衛隊も存在するほどだ。

「?どうしたの?」

「い、いや何でもありません」

「……………まあいいわ、それよりもあなたみたいなのが何でこの学

園の制服を着ているのかしら？それも男子の

「それは……」

「……どうしよう……なんて言えばいいんだよ……。新聞を読んでいないのか、オレの事はまったく知らないようだ。」

「それにあなた女の子だからってそんなおもちゃを人前でつけちゃダメでしょ！」

「え！ちよ、ちよつと待った！」

「待つ理由はないわ」

そう言つて副会長はオレの……

「！？ギニヤ~~~~！ストップ！ストップ！」

「え！？ほ、本物！？」

ネコ耳をおもいっきり引つ張られたがそれはオレの体の一部なのだ。簡単にとれるわけがなく体の一部であるため激痛がオレに走った。副会長はおもちゃだと思つていたのが本物だとわかりひどく驚いている様子だ。無理もない。

「あつつつつ……」

「……あ！ご、ごめんなさい大丈夫！？」

「ええ……なんとか……」

かなりの痛さだったがとくに出血などもしておらず「痛かった」ということ以外とくに問題はなかった……んだが

「いや……これは私の責任だ……」

「えつと……副会長さん？」

「生徒会室まで一緒に来てくれない？そこで治療をするから」

「いや・・・ですから・・・」

「みんなはもう教室に戻って。今回ばかりはみんなの協力に感謝するわ」

「水くさいですよ副会長！」

「そうですね！私たち副会長のためなら火の中、水の中なんですから！」

「ははは・・・さすがにそこまではしなくていいわよ」

「ちよつと」「」「それでは！」「」「」

「さて・・・ん？どうしたの？」

なんとここでチャンスが巡ってきてくれた。これがラストチャンスだ！

「あ、あの、とくに怪我とかもないんでさっきのは断ろうかと・・・」

「・・・」

「・・・いや、やっぱり痛くなってきたから行こうかなー」

「そ、そうなの。じゃあついてきて」

だがそのチャンスを生かすことができなかった・・・

いや、だって断ろうとしたら捨てられた子犬みたいな目でこっちを見ってくるんだもの、しかも涙目で・・・断れないよ・・・

第16話 ばか騒ぎもほどほどに（後書き）

クロ 「どーも、リアルに回答ずらしをしかけたクロです」

副会長 「見直しをできなかったら10点は落としてたわね」

クロ 「そんなわけで現在テスト期間中ということもありましてもうしばらく更新はできないであろうと思います」

副会長 「金曜日の午後には暇ができるのでこの小説を見てくださっている人がおりましたら申し訳ありませんがその時まで待っていてください」

クロ 「フリーになったらどんどん更新していくので今回はこれがかんべんしてください。それではまた次回に・・・」

## 第17話 よくもこんなキチガイ学園を！

「さ、ついたわよ」

そんなわけでオレは今生徒会室の前にいる。  
ぶっちゃけ、すでに痛みも引いているのでここで治療を受ける必要  
はないわけなのだが・・・

「?どうしたの?」

そんなオレがここにいる理由はこの人にあるのだ。

「い、いえ・・・あの・・・やっぱり・・・」

「・・・」

「・・・なんでもないです・・・」

あの後も何度か断ろうと思ったのだがそのたびに泣きそつな顔を  
してしまうため、どうしても断れないでいた。  
優しすぎるといっても罪なんですね・・・

「・・・あ、ごめんなさい。それじゃ中に入って」

「・・・失礼します」

こうなってしまうてはもうどうにもならないだろう。  
結局オレは今日も（不幸な）運命にずるずると引きずられていくの  
だった。

.....

「あれ?」

そこはファイルがきれいに並べられた棚が左右に所狭しと並んでおり、真ん中には長方形のテーブルが四つ長方形の形に並べられている教室だった。

さすが生徒会室、と関心する一方でその奥に誰がいることに気づいた。

緑色の短く整った髪。

形の良い鼻と唇。

切れながの瞳にはメガネ。

体格はがっしりとは言えないもののそこまで悪くはない。

そんな人物がテーブルの奥の椅子にすわり何か読んでいた。

「え！？なんで大地がここにいるの？」

「……とりあえずその言葉をそのまま返しておこう」

読んでいた紙から目を離しこちらを向く奥の人物。はて？だいち、ダイチ……どこかで聞いたことのあるような？

「そんなことはどうでもいいわ。それよりも……」

「……！ちよつとまって！」

なにやらオレと目が合った瞬間叫びだす大地さん。ただ今までのやつらとは違い危ない感じはしない。

「一応聞いておくが、君は大島優斗君でまちがいないな？」

「あ……はい」

「え？あんたら知り合いなの？」

「いや、知り合いではないが俺が今ここにいる理由は彼に関することとでな……」

「ちょ、ちょっと待った！彼！？あんなに言ってるの！？」

「その様子だと、どうやら新聞は見えていないようだな」

「は、新聞？」

「ほら、これだ」

「なにになに？……！！」

新聞を受け取った副会長はピシリ！という音が聞こえそうなくらい見事な固まりをみせてくれた。

「……」

「この調子だとしばらくかかりそうだな」

「……そうですね」

――10分後

「さて、落ちついたかな？」

「ええ……まさかうちの生徒だったとはね……それも男子の」

「騙すつもりはなかったんですけどね……ごめんなさい」

「ああ、別にいいのよ。私も話も聞かずにこんなところまで連れてきちゃったわけだし」

「無駄話はそこまでだ。いろいろと時間を食ってしまったからそろそろ本題に入ろう」

副会長が固まっている間いろいろと話をしている思い出した。

なかしまだいち  
中島大地 風由学園生徒会会長

毎回しっかりと仕事をこなし成績の方も学園トップクラス、生徒からの信頼も厚く悪い噂も流れたためしがない。そのため副委員長ほど派手さはないものの生徒たちからの支持率が高い。



「えっと・・・本題ってなんですか？」  
「もちろん、君のことにきまってる」

会長はさっきからオレのことをずっと呼び止めていた。理由は副会長が起きたらまとめて話すといっって聞くことはできなかった。

「それで、その本題っていうのは大島さんのどんなことを話すの？」  
「ああ、それは・・・」

なにやらとても険しい顔をする会長。それほど重大な問題なのだろうか？

「今の君のかわいさがこの学園に与える影響についてだ！」  
「・・・はあああ!？」

いやいや、その真剣な表情と口から出てきた言葉が噛み合っていないよ会長さん？

「あんだね・・・私たちは授業潰してここにいるのよ・・・」

さすがの副会長もお怒りの・・・

「なんでそんな重要なことを私に話さなかったのよ！」  
「お前はその時、鎮圧作戦を実行に移していたところだったからな、話すに話せなかった」

・・・オレの脳内会議がもうどうにもならないという結論にいたったためオレは考えるのをやめた。

「む・・・それならしかたないか。そんなことよりさっさとこの問

題を片付けるわよ！」

「そうだな・・・ん？どうした大島君？」

「・・・へ？」

放心状態になってしまったオレであったが会長に声をかけられ目を覚まし（てしまった）た

「い、いや！ちょっとまってください！」

「どうした？」

「どうした？じゃありませんよ！オレのかわいさってどういうことですか！」

「どうやら君は先ほど起きた事件のことを忘れてるようだな」

「先ほどの事件？」

先ほどの事件といったら・・・あの集団オレ襲撃未遂事件の事であろう。

「それがどうしたんですか？」

「君一人のために授業中にも関わらずあれだけの生徒たちが集まったんだぞ？これを問題と呼ばずになんと呼ぶ」

「それは・・・」

会長の言ってることは確かに正しい・・・わけねえだろ！

「・・・いや、そういうのって先生がどうにかするんじゃないんですか？」

「その先生たちも集団の中にいたからこそここで話し合おうと思ってるのだが？」

「・・・」

オレの救いはいつですか・・・

第17話 よくもこんなキチガイ学園を！（後書き）

クロ「どーも 俺、実はテストが終わったんすよ。帰ったら投稿しようとなタも考えたりして なクロです。」

会長「そんなことより言うべきことがあるだろうに・・・」

クロ「いや、ホントすんません。金曜更新とか言ってたくせにこんなに遅くなってしまいました・・・」

会長「自分からの約束くらいはさすがに守れよ」

クロ「予想以上に疲れていて頭がまったく動かなくてここまで書くのにも一苦勞・・・ホント申し訳ない・・・」

会長「そんなわけでこれからはクロの言うことは信用しない方がいいと思いますよ」

クロ「今日中にはもう一話投稿するつもりなんで期待せずに待っていてください・・・それではまた次回に・・・」

## 第18話 結成！？第8独立特別クラス

「さて、君という存在が生み出す被害予想についてだが・・・」

開口一番にそんなことを言いやがる会長様。オレは危険物かなんかですか？

「まず生徒に与える影響は計り知れない。その愛くるしい瞳を見ただけでも数人は狂わせてしまうだろう・・・」

「それだけじゃないわ。先生方も何人かすでに虜になってしまっているわ」

狂わせてしまう。すでに狂っている、じゃないの？

「その結果は恐ろしいものだ・・・暴力・格差社会・抗争・血で血を洗う闘争の時代に・・・」

「・・・学園史上最悪の事態ね・・・」

なんか本当にありえてきそうだから困る。・・・救世主はまだですか？

「そこでこの問題をどうするかなんだが・・・」

「その心配はいらないわ」

バリバリ・・・ゲフンゲフン、ガラガラと勢いよく開いたドアの先にいたのは・・・

「橘先生！？」

「どうしてここに・・・いや、どういう意味ですか？」

「さすが会長ね、話が早くて助かるわ」

突如乱入してきた先生、期待していい……のか？

「とりあえずついてきなさい。詳しい話は後でまとめて話すわ」

.....

「ここは……」

先生に連れられて着いた場所はこの学園でもっとも偉い人のいる部屋……つまりは校長室だった。

「橘先生、いったい何をするつもりなんですか？」

「まあ……見てなさい」

なにやら怪しい笑みを浮かべる先生。何かよからぬ事を考えているのが簡単にわかった。

「……失礼します」「」

「はい、どうぞ……」

返事を聞き中に入ると、そこには高級そうな肘つきの黒いイスに座ったしわくちやのおじいさんがいた。

「それで……何の御用ですか橘先生？」

「ええ、実は今ある問題が発生しまして」

「問題？」

「はい、この子を見てくれませんか？」

そう言って先生はオレを前に押し出した

「ほお・・・かわいらしい娘子さんですな。それで、この子がどうしたのですか？」

「実はこの子はこの学園の生徒だったんです」

「はて・・・？私には見覚えがないのですが？」

「そこにはいろいろと深いわけがあります・・・」

どうやら先生にとってオレの人体実験は深いわけ程度らしい。

「わかりました。その話はまた後ほど・・・それであなたは何を言いたいのですか？」

「はい、実はクラスを新しくもうひとつ作ってほしいのです」

「「「え！？」」」

先生の口から出てきた言葉はオレの予想をはるかに超えたものだった。

しかし新しくクラスを作るだなんてそんなことできるはず・・・

「だめですね」

「そうですか・・・」

「あなたは自分が何を言っているのかわかってますか？」

「申し訳ありません」

・・・やっぱり無理だよなー

「あなたたちは戻りなさい。私はもう少し話をするから」

怒られている先生をそのままに帰るのはちょっと気が引けたがオレに出来ることは何もなかったので部屋から出ることにした。

「それにしても・先生はいったい何をしたかったんだろうか？」  
「さっきのにしてもやけにあっさりと引いてしまったものね？」

確かにおかしい。何か仕掛けているかと思っていたが結局何一つ成功していない。もしかして本命はここではないのだろうか？

「まあ、先生には先生なりの考えがあつたんだろう。とにかく俺たちも何か行動しなければな」

「そうね・・それじゃあね大島君。私たちは生徒会室に戻るから」  
「またな」

「ああ、二人もがんばって」

二人に別れの挨拶をすると二人は足早に生徒会室に戻っていった。

「・・・さて、オレも教室に戻る」あぶうううううううううううん?!」

「・・・・・」

「・・・聞こえない、校長室からしわくぢやなおっさんの喘ぎ声なんて聞こえない・聞こえてはならない・」

「うふふふふ・・・どうしてほしいかしら・」

「あ、ああ・・・ピーーーーー」

「へえ・・・そんなこととして欲しいんだ・」

「ピーーーーー」

「うふふ・・最低ね・・あなたって・」



「プーーーーー」

誠に勝手ながらあまりにも気持ち悪いので編集をさせてもらいました。

・・・そんな幻聴が聞こえた気がしたがきつと、いや気のせいなきまっている。

しばらくすると校長室から先生が出てきて・・・

「話し合いの結果OKが出たわ、喜びなさい」

いやー、さすがせんせいだなー。いったいどんなはなしあいをしたんだろっねー

・・・どんな話し合い・・・したんだろっね・・・

第18話 結成！？第8独立特別クラス（後書き）

クロ「どーも、テスト終わったのにストレスがマッハなクロです」  
先生「いつも買ってるマンガ雑誌買う お気に入り連載終了。ゲ  
ームで憂さ晴らしだ！ コントローラー破損。こうなったら外に出  
かけよう！ 雨。・・・見事にコンボが重なったわね」  
クロ「なんで俺がこんな目に・・・」  
先生「日頃の行いが悪いからでしょ？」  
クロ「ですよね・・・次回に続きます・・・」

## 第19話 初めての日常 前編

「ん……」

カーテンとカーテンの間から降り注ぐ陽光の眩しさに目を覚ます。視界に入るのは見慣れた白い天井。

「……起きるか……」

まだ重く閉じようとする瞼を無視して広々としたベットからはいずるように抜け出し洗面台に向かう。

背が縮み洗面台が高くなってしまったのでイスを使うことでちょうど良い高さに合わせてる。

「……やっぱり慣れないな……」

溜息混じりにそんな言葉が漏れてしまう。

鏡に映るのは見慣れた自分の顔ではなくネコ耳のついた白髪のかわいらしい少女の顔と後ろでふりふりと動くしっぽ。

それに加え服装の方もだぶだぶのジャージの上だけしか着てないのだ。

元とはいえオレは男なのだ、そんな格好をした美少女が目の前に現れれば下が反応しなくなったとはいえ少しはドギマギしてしまう。

今現在、縮んでしまった体に合う服は制服しかない。

銭湯の時に使ったのは舞から借りた物だ。

そのため、今オレが持っているズボンをはこうとしても全てずり落

ちてしまうので寝る時は下に何もはけないのだ。

しかし上の方も今のオレの全身を包んでしまつくらい大きくなってしまったので問題はいろいろあるがなんとか生活ができています。

だが洗面台から水を出し顔を洗おうとした時に新たな問題に直面する。

「つく・・・袖が・・・長い・・・」

全身を包んでくれた上ジャージであつたが袖の方もかなり余つてしまつくらいに大きくなつてしまいそこから手を出そうと袖をまくるがなかなか姿を現さない。

「やっぱ不便だ・・・」

あの後なんとか顔を洗つたオレは朝食を食べるためにキッチンに移動した。

時計を見るとちょうど8時を示していた。

いつもならすでに学校に到着している時間であるが今は緊急のクラス変更により三日間、臨時休校（課題付き）してしまっている。

そのためか今日はいつもよりのんびりと朝をすごしてしまつたようだ。

「さて・・・なにがあるかな・・・？」

洗面台の時と同様にイスを使い冷蔵庫をあさり始める。

冷蔵庫の中には新鮮な肉、色とりどりの野菜、さまざまな飲み物などがたくさん詰まっております。何か作るのに不自由はなさそうだ。

そこから何を作ろうか考えているとあることを思い出してしまった。

（ね、猫は玉ねぎとかは食べさせちゃいけないんです・・他にモトヨコとか・・優斗さんの体は今猫ですから最悪死に至ることもありえます・・・）

「・・・そうだった・・・」

そう、今の自分の体は半分ネコなのだ。人間の時食べられたものが今食べれるとは限らない。

下手になにか食べて死んでしまった、なんてことになったら笑い話にもならない。

しかしそうなってくると一つの疑問が浮かんでくる。

「・・・どれなら食べていいんだ？」

自分はネコのことを飼ったことなんてないので、なにを食べさせてよく、なにを食べさせてはいけないか、なんてわかるはずがない。どれも安全そうに見えるし危険そうにも見えてくる。

いろいろ悩んだがこのままでは埒が明かないので姫神に連絡することにした。

「あ、姫神か？」

「はい・・優斗さんですか？」

「ああ、実はネコに食べさせちゃいけない食べ物について教えて欲しいんだが？」

「ええと・・・種類はいろいろあって・・・言葉で説明しきれないんですけど・・・」

「うーん・・・だったら今からこっちに来れないか？」

「えー!?!?!?でででで、でもお邪魔になっちゃうんじゃない?」

なにやら、ものすごい動揺し始めた姫神。オレ別に変な事言っただけだよな?

「別に変な事させようってんじゃない。たださっきのことを教えてもらったために来てほしいだけだ」

「えっと・・・でも・・・いや、わかりました。できるだけ早く行きます・・・」

「そうか、ありがとう。じゃ」

電話を切って一安心のオレ。姫神が来るまでの間部屋の片付けでもするか・・・

- - 10分後

ピンポン

「はいはい」

返事をしつつも辺りを見渡す。

・・・うん、特におかしなところはない。誰に見せても恥ずかしくない部屋だ。

部屋の最終チェックでOKを出したオレは玄関にむかいチェーンを外しドアを開ける。

「お待たせ、姫・・・が・・・み・・・?」

・・・あれ?おかしいな?何で姫神の後ろに人影が見えるんだろう。

それも・・・

「まだまだ読みが甘いわね、優斗」

「相変わらず、面白みのない部屋ね」

部屋に入った第一声がこれだ・・・親しき仲にも礼儀ありって言葉知ってます？

「ごめんなさい・・・優斗さん・・・」

「ああ、別にいいよ。あいつの言うとおりオレが悪いわけだし」

実際そのとおりだ。こんな朝早くに同居人が外に行こうとしたんだ、舞だって理由ぐらいいは聞くだろう。

「それより、あんた！その格好は何なの！」

「ちょうど良いサイズの服がないんだよ」

部屋の次はオレですか。とりあえず飯を食い終わるまで黙ってほしいところだがそれはまずあり得ないだろう。

「それにしたってこれはひどいでしょ」

「・・・う。確かにそのとおりだが、代わりの服がないし・・・」  
「買いに行けばいいじゃない」

「この格好で外に出歩きたくないし・・・」

「あのね、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。それにどのみちいつか外に行かなきゃならない時が来るんだから」

「・・・」

「そついうわけだからさっさとご飯食べちゃいなさい。その後買い物に行くわよ。服も私の貸してあげるから」

「……わかった」

今回ばかりは舞の方が正しいため素直に従うことにした。

別にただ買い物に行くだけ……そう自分に言い聞かせて安心させようとした……が。

やはり今回もリーダーに何か引っかけたらしく耳と肩が落ち着きをなくしてしまっている。

こうなってしまうてはもう回避不能だとわかってしまったため、できるだけ不幸を軽くしてくださいと（無駄だと思いつつ）神様に願った。



第19話 初めての日常 前編（後書き）

クロ「どーも、今日はmyチャリ参考で疾走しまくっていたクロです」

優斗「テストで買いに行けなかったマンガを買いまくってたな」

クロ「イエス！昨日の憂さをやっとならせたぜ・・・」

優斗「相変わらずコントローラーは壊れたままだがな」

クロ「まあマンガがあるし何とかなるだろ」

優斗「テストはもうどうにもならんがな」

クロ「・・・もう少しだけ夢をみさせてください・・・次回に続く」

第20話 初めての日常 中編その1

「やはり良い・・・」

テレビを見ながらそんなことをつぶやいてしまった・・・

今日は学校がいきなり休校になってしまったので時間はまだたっぷりある。

次を見ようとテレビに近づこうとした時に携帯から軽快な電子音が鳴り響いた。

「はい」

「あ、健人〜」

「なんだ、士郎か・・・」

「なんだとは失礼だね〜」

電話の主は士郎だった。こんな時間に何の用だろうか？

「ところで、今ひま〜」

「残念ながら今の俺は暇ではないな」

「五面ダイバーを見てるんでしょ〜」

「な！？なぜわかった!」

「健人の行動パターンぐらいは簡単にわかるよ〜」

さすが士郎・・・俺が認めただけのことはある・・・

「まあ、そういうわけだから今の俺はこれから劇場版五面ダイバー

V7、俺たちに明日はあるのか!？を見るので忙しいんだ」

「そうなんだ〜。でもね〜」

「お前人の話を・・・」

「そつちこそ話を聞いてよ。実は優斗たちが買い物に出かけるんだよ。」

「優斗たちが？」

優斗たちということだからおそらくあの二人も一緒だろう。

「それがどうかしたのか？」

「実は僕も一緒に行こうと思ってるんだ。」

「そうか」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「ああ、わかった、わかったよ！行けばいいんだろ行けば！」

「さすが健人話がわかる。」

ちなみに士郎がどこで優斗たちの買い物を知ったかは本人し  
か知らない。

・・・・・・

支度を終え士郎と合流した俺は今優斗の部屋の前にいる。

「ところでその袋に入ってるのは何なんだ？」

「後のお楽しみみてやつだよ。」

士郎は合流した時から紙袋を持っている。

やや大きい袋ではあるが重そうな感じはしない。

「そんなことより早く会おうよ。」

「わかったからそう急かすな。」





アアアアアアアア!!」

「ちょ、ちよつと・・・タンマ・・・ミギヤアアアアアアアアアアアアア!!」

「ってわけなのよ」

・・・なるほど、だったら仕方ないな。それにしても優斗も人の恩義を仇で返すとは・・・

「あの・・・その考えはちよつと・・・」

とそんな時・・・

ガチャ・・・

後ろの脱衣所から扉が開く音が聞こえた。  
しかし扉は閉まることなく優斗が扉の裏に隠れながらこちらを見ている。

「やっと終わったのね。遅いわよ」

「・・・」  
「優斗君は完全に包囲されている。大人しく出てきなさい」  
「・・・」

観念したのか、扉の裏に隠れていた優斗がゆっくりとその姿を現してきた。

上着はボーダーラインのセーターに厚手のパーカー。どちらも女の子用の物だ。

下はスカートに加えタイツまでついている。

そして顔は真っ赤に染まっておりちらちらとこちらを見て・・・。

「あ・・・あんまりこつちを見ないでくれ・・・」

恥ずかしそうにそんなことを言ってきた

第20話 初めての日常 中編その1（後書き）

クロ「どーも、中編その1ってなんだよ・・・なクロです」

五面ダイバー「よい子のみんな！ちゃんと計画を立てないところな  
ってしまっただよ！気をつけよう！」

クロ「テストの方は何とか平均点越えたんで一安心です・・・心  
臓に悪いよ・・・」

五面ダイバー「みんなはこんな無気力人間になっちゃいけないよ！  
クロ「実際そのとおりだと思います。次回に続く」



## 第21話 初めての日常 中編その2

「よし、すべての準備は整ったわ！張り切っていくわよー！！」

「「おおー！！」「・・・おー」

舞ちゃんが元気よくそう宣言すると健人さん達も元気よくそれに返した・・・

私もそれに何とか返すことができた。そんな中・・・

「・・・」

優斗さんはとても小さくなっていた。

顔はいまだに真っ赤で口はへんの字に、そして視線をそらし誰とも目を合わせようとしない。

正座で座ってはいるけどモジモジとしていて落ち着きがない。

そんなことを観察していると優斗さんと目が合ってしまった。

「！！！！！」

目が合った瞬間小さかった優斗さんはピン！と背筋が伸びて耳と鼻がびく！と動いたのが見えた。

「・・・ア・・・ツ・・・」

何か言いたそうに口を開こうとしているがそのたびに顔がさらに赤くなってしまうまた小さくなってしまった。

「ほら、あんた達何してんの？」  
「「へ？」」

優斗さんと私の声が重なる。

気がつけば周りの人はみんな持つてきた荷物を持つて立っており座つていたのは私と優斗さんだけだった。

「あ……ごめんなさい……」

慌てて立ち上がる私だったが優斗さんはいつこつに立ち上がるつとしなかった。

「何やってんのあんたは？」

「いや……その……」

両手を腰に当て不機嫌な顔をして優斗さんを叱るように質問する舞ちゃん。

そして怒られている子供のように小さくなり視線をそらす優斗さん。

「くす……」

その光景はまるで悪いことをして姉に怒られている妹のような感じで少し可笑しかった。

「む、姫ちゃん人の説教を笑うなんて少し失礼じゃない？」

「ごめんなさい……くすくす」

舞ちゃんに怒られてしまったがどうしても笑いが漏れてしまう。

「そんなことしてないでさ〜早く行こうよ〜」

と、ここで今まで黙っていた士郎さんが不満を漏らしてきた。しかし・・・

「そうしたいのは山々なんだけど・・・」  
「・・・・・・・・」

そう言いながら舞ちゃんは優斗さんを睨むように見ているが優斗さんはそんなことお構いなし、と言わんばかりに明後日の方向を向いている。

「この調子じゃね」

困ったようにそんなことを言う舞ちゃん。確かにこの調子じゃても動きそうにない。

「これはまた今度に・・・」  
「・・・なんだ、そんなことだったらこうすればいいんだよ」

士郎さんはそう言うと優斗さんの後ろに回り込んで・・・

「!?!は、離せ士郎!?!」  
「どつしよつかなく?」

そこから一気に持ち上げて優斗さんを胸に抱く。その姿は俗に言うお姫様だっこだった。

持ち上げられた優斗さんは顔を真っ赤にして暴れているが士郎さんはニコニコと笑いながら優斗さんを見ているだけでそこから何もしなかった。

暴れていた優斗さんだったが全く効果がなく、そのうち抵抗も薄れてきて・・・

「た・・頼む・・降ろしてくれ・・なんでもするから・・・」

「ホントにいゝ」

「ああ・・・」

その言葉を聞くと嬉しそうな顔をしながら土郎さんは優斗さんを地面に降ろした。

よく見ると優斗さんは若干涙目になっていたがなんとか泣かないようにこらえていた。

そんな時舞ちゃんが土郎さんに一緒に外に行くようにジェスチャーを送った。

.....

「あんだ、ちょっとあれはやりすぎじゃない？」

外に出て舞ちゃんが抗議の声を上げる。とても真剣な顔だ。

舞ちゃんの言うようにさすがにあれは私もやりすぎだと思った・・・

それに対して土郎さんは・・・

「確かにあれは少し強引だけれども、だからと言ってこのまま何もしなかったら優斗は部屋を出ることはないよ？」

「だからって強引にやらなくても・・・!」

「じゃあ、音無さん達はそのまま優斗が外に出れなくなってもいいの？」

「そんなこと・・・！」

「忘れていたかもしれないけど今の優斗の体の状態は全く予想できない状況なんだよ？」

「！ それは・・・」

「いつどこで何が起こるか誰にも分からない。それこそ・・・」

「だから・・・僕は今何もせずに後で後悔するなんていやなんだよ！たとえ優斗に嫌われても！」

士郎さんはいつになく真剣な表情をして私たちに叫ぶようにそんなことを言った。

「・・・ごめん、少し熱くなりすぎたよ・・・」

「いえ、私こそごめんなさい・・・そこまで考えてなかったわ・・・」

ふたりは互いに謝罪の言葉を述べる。

「・・・私もそこまで考えていなかった・・・何もしないまま優斗さんがそのうち・・・」

「・・・そんなの嫌だ！私はそんなの嫌だし舞ちゃんだって悲しむ！  
そんな・・・なの・・・」

「おいおい、みんなそんな時化した面してるなよ」

今まで黙っていた健人さんが苦笑しながら私たちに向かって言う。

「そんな顔をしてると俺達の大好きなやつが悲しむぜ？」

健人さんを見ると親指で後ろを指している。その先には……

「……あ、あの……みんな……」

優斗さんがいた。

顔をまだ少し赤いがしっかりとこっちを見て何かを言おうとしている。唇が震えており息も粗くとても緊張しているようだった。

そんな時……

ドス！

「~~~~~!?!?」

舞ちゃんが優斗さんの脳天にチョップをした。

「~~~~!何すんだ……」

「もう！行動がおそいのよ！」

「だって……」

「だって何も無いわよ！申し訳ないと思うならさっさと行動する  
！」

「え……?」

「そっだよ、優斗、さっさと行こうよ」

「ああ、こっちは待ちくたびれて困っていたところだからな」

「本当に……オレなんかでいいのか……?」

「何をいまさら・・・」

「オレのせいでケンカにもなったし・・・」

「もう仲直りしたよ」

「まためいわくかけるかもしれないし・・・」

「もう迷惑かけてるだろ・・・」

話している内に優斗さんはボロボロと涙を流していた・・・。

「優斗さん・・・」

気がつけば私は口を開いていた。そして・・・

「行きましょう!」

自然にそんな言葉が口からあふれていた。

その言葉を聞いてくれた優斗さんは

「ああ・・・行こう!」

ボロボロと涙を流しながらも笑ってそう答えてくれた。

第21話 初めての日常 中編その2（後書き）

クロ「どーも、・・・あれ？なんで俺シリアスなんて書いてんだ？  
と  
思っているクロです」

ユウト「シリアスなんてこの小説では終盤の終盤くらいしか書かな  
いと思つていたんだが・・・」

クロ「いや、これはマジで予想外。無理して姫神視点で書いた結果  
がこれだよ！」

ユウト「今回は文章書くのにやたら苦戦していたからな」

クロ「妄想力はあつても表現力はありません」

ユウト「一応小説家もどきではあるんだからそこんところはしっか  
りしろよ・・・」

クロ「小説とか読んできるとじれったくなつて途中で最期を見ちゃう  
タイプだから無理。次回に続きます・・・」



## 第22話 初めての日常 中編その3

いきなりですがピンチです。

普通だったらあの後、みんなで騒いで遊んで・・・とイイ話につながるわけなんです・・・

現在の状況

ワレ スカートニヨリ コウドウセイゲン ダレカ ヘルプミー

この信号の返信

「優斗・・・あなた、カメとも合体してたっけ・・・？」

「優斗、ゆっくりしていると余計目立つよ」

「優斗・・・ピンチの時こそチャンスありだ！」

「ええと・・・その・・・」

気持ちいいくらいの笑みを浮かべながらもしつかりと青筋を立ててお怒りの様子がばればれな舞さん。

さっきまでのかっこいい姿はどこへやら、カメラを片手に今日も二

コニコ士郎さん。

確かに今はピンチですがこの状況をどうチャンスに変えろと・・・  
？かっこいいポーズはしなくていいからさっさと助けてください健  
人さん。

助けてくれようとしてくれるのはうれしいですが「力なき正義に意  
味はない」って言葉を知ってますか姫神さん？

## 要約

ンナコトハドウドモイイ サツサトシロ ボケ

## 結論

あんなことがありましたがやっぱりみんなはみんなでした。

.....  
「やっとなついたわね.....」

心底疲れたような声でそんな事を言う舞さん。・・・わかったからそ  
のいやそうな面をこっちに向けるな。

俺達は今学園内唯一のデパートの中にいる。

小さいながらもデパートと言うだけあり大抵の物はここでだいたい  
買えてしまう。・・・いくらなんでも限度ってもんがあるだろ・・・

今回は服やら道具やら・・・といろいろ買う物が多かったため俺達は

デパートにまで足を運んでいた。

「おゝい何してんのゝおいてくよゝ」

おつと、いけない。

これ以上待たせたら何をされるかわかったもんじゃないな。

そんな思考をカットして俺はみんなの後を追いかけていった。

- - - - -

「はあ！？服がないですつて！」

場面変わってここは洋服店。

いきなり舞の叫びがこだまする。

「申し訳ありませんがここは高校生の男女を基準とした服しか取り扱っておりませんので・・・」

そう申し訳なさそうに店員は言いながらオレの事をちらと見た。

考えてみたら当たり前のことだ。

ここは学園内、買い物客のほとんどが学生ということになる。

対して今のオレは小学校低学年くらいの大きさしかない。

つまり学生用の服しか売れない所に今のオレに合う服があるわけがないのだ。

「仕方ない・・・他をあたろう・・・」

「ああー!!もうなんで何処にも売ってないのよー!」

今日何度目かの絶叫。とりあえず他の人迷惑になるから店を出るたびに叫ぶのはやめなさい。

あの後デパートの中だけでなく知っている洋服屋を全て当たったが結局オレに合うサイズの服は見つからなかった。

「でも・・・本当にどうしましょう・・・」

姫神の言うことも、もっともだ。

全ての洋服屋がオレに合う服を持っていない!!すぐにはオレの服が手に入らないということになる。

そこまで大した問題ではないものの、すぐに服の代えを用意することができないという状況はやはり好ましくない。

それにできればあのジャージとはさっさとおさらばしたい身なのだ。できればこの問題は今解決しておきたい。

そんな時・・・

「あはは〜ここにはないなら「外」に行けばいいじゃないか〜」  
「「外」？」

士郎が当たり前前のようにそう言った。こいつは何を言ってるんだ？

オレ達の言う「外」とは学園の外のことを表す。

確かに「外」に行けばオレに合う服を買うことはできる。

しかし「外」に行くにはそれなりの理由が必要で夏・冬休みでもないので「服を買いに行きたいです」と言って「はいそうですか」と許可を与えてくれるわけがないのだ。

「あんだそんなことできるわけが・・・」

「いい考えがあるんだよ〜」

舞の否定的な言葉も華麗にスルーして士郎が自信満々に答えた。

こいつのいい考えというのは確かに効果が絶大だが違法すれすれのものが半分、違法なものが半分という困った考えが多い。

・・・この顔は違法な考えを使おうとしているな・・・

「ほらほら〜善は急げだよ〜」

とりあえずお前が善を語るな。

いやな予感がさつきからぶんぶん臭ってくるが誰もこの流れを止めてくれるわけがなく、相変わらず流され続ける休日のオレであった・・・。

第22話 初めての日常 中編その3（後書き）

クロ「どーも、教えてくれ舞・・・俺はあと何回中編を書けばいい・  
・PCは俺に何も答えてくれない・・・なクロです」

舞「計画性もなく勢いで書いたあんたが悪いでしょ」

クロ「いや、だってさー前中後ぐらいで書けると思ってたんだもん」

舞「このあたりでやっと前々あたりの予定だったくせに何言ってるの？」

クロ「まあ、そこは予想外ってことで」

舞「そんなんだからリアルでも失敗するのよ・・・」

クロ「そこは笑って許してくださいよ！次回に続きます・・・」

## 第23話 初めての日常 中編その4

・ 士郎に連れられて俺達は黙々と歩いて・・・歩いて・・・歩いて・・・

「さ、ついたよ」

着いたところは科学室でした。・・・なんで？

「ちよつと、「外」に出るんじゃないの？」

「まあまあ、すぐにわかるからさ」

舞の問いには相変わらずスルー。持っていた紙袋から何かを取り出す。

・・・ガチャ・・・ガラガラ・・・

科学室のカギを開けた。

・・・ん？なんでこいつが科学室のカギなんて持ってるんだ？

「おい、何でカギを・・・」士郎さつさと行こうぜ！

「わかったからそう急かさないでよ」健人」

健人により行動がキャンセルされるオレ。・・・もういいや・・・こいつのこと気にしだしたらきりがなし・・・

科学室の様子は相変わらずで資料やらあやしい液体の入ったフラスコやら生物とはおもえない形をしているレントゲン写真とかがそこから中に散らかっており、「よくこんな中で実験なんて出来るもんだ」と感心してしまった。

「さ〜あ〜て〜・・・確かこのあたりに・・・」

そんな中、何やら壁を調べ始める土郎。すると・・・

パカ！

「ん？」

カチャカチャ・・・

「あなた・・・何を・・・」

ウーン・・・

「・・・」

ピンポーン　ガチャ！

状況確認

土郎壁調べる　壁の一部がひっくり返りキーボード現れる　土郎パ  
スワード入力　機械音が聞こえてくる　後ろにあった掃除用具入れ  
ておくロッカーが開く　中に掃除用具はなく奥に小さな部屋があり  
ましたとき。



状況確認終了

「えっと・・・これ何？」

「何って・・・隠しエレベーターにきまつてるじゃないか？」

舞の質問に対してそんなぶっ飛んだ発言を当たり前のようにつつ士朗。

なんかもついろんな意味で頭痛くなってきたんですけど・・・

舞や姫神は口をあんどりと開けてぼかんとしている。

健人の奴は・・・だめだな、目が輝いている。こいつのことはもう手遅れだとあきらめることにした。

「ほらっさっさと乗ってよ」

今すぐにも帰りたい気分だったが拒否権は自分で放り投げてしまったので仕方なく、本当に仕方なくロッカーの中に入っていった。

.....

「はい、とつちやっく」

エレベーターに乗って約1分。右に左に上に下に、とさまざまな方向に引っ張られる感じがしていたがそれが不意に止まり目の前にあった扉が開くとそこに映った光景は・・・

「森？」

周りを見渡せば視界には木しか映らない。すでに12月に入っているため葉っぱが付いているものはほとんどない。今度は地面に目を向けると枯れ落ちた葉っぱが地面を埋め尽くすほど大量に落ちていた。

誰がどう見ても、森、としか言いようのない場所にオレ達は今立っている。

「ここ……どこですか……?」

「学校から少し離れたところの森の中、街への道はわかってるから安心してよ〜」

姫神が士郎を除いたオレ達全員の疑問を口にするると士郎はその質問を予想していたかの様に即座に答えてくれた。こいつ慣れてやがるな……

「あ、そうそう優斗〜」

「ん、何だ?」

「これあげるよ〜」

士郎は持っていた紙袋から白い何かの塊を取り出した。それは……

「カツラ?」

「ウィッグって言ってほしいな〜」

カツラ……もとい、ウィッグをオレに渡す士郎。

しかしそんなものを何故オレに渡すのだろうか……?

「それ使えば頭のネコ耳を隠すことができるでしょ〜」

あ、なるほど。

今はパーカーについているフードで頭を隠しているが、それで頭の耳を絶対に隠しきれるとは言えない。こんな姿を街にいる多くの人に見られればどうなるか分かったもんじやない。

「サンキュー士朗、これで心配ごとが一つ減るよ」

「あはは〜どういたしまして〜」

これでちょっとは楽になれる・・・そう思っていたんだが・・・

「!?!?・・・あ・・・ん!?!?」

「あれ〜?どうしたの〜?」

異変はウィッグをつけてすぐに起こった。

ウィッグを頭につけてネコ耳を隠すことはできたものの、ウィッグの毛がネコ耳の中に入ってきたのだ。

「毛が・・・ん!?!?耳に入って・・・あ・・・くすぐりたい・・・うひやあ!?!?」

その間士朗を除いた三人はオレに背中を向けぶるぶると震えており、士朗はやっぱりカメラを（ry もういいや。

「ずあああああああああ!?!?こんなもんつけてられっかあああああああああ!?!?」

いろいろとぶち切れたオレは頭のカツラをはぎ取り地面におもいきりたたきつける。《ビターン!

「あゝあ、せっかく面白い写真が撮れると思ったのに・・・」

どうやら士朗に撮られる前になんとかできたみたいだ。こっちとしてはいい迷惑なんすけど？

「ほ、ほらさっさと行きましょ！」

そんなとき何かを振り切るように必死な舞が声をあげた。・・・口の周りが赤くなってますよー

「そ・・・そうですね！」

「あ、ああ・・・そっだな・・・」

口は赤くないが顔が真っ赤なお二人。とりあえず落ち着け。

「そっだな〜じゃあ、行くっか〜」

そんなわけでオレ達は街に向かう・・・すでにオレの体力はゼロに近い状態だが・・・

第23話 初めての日常 中編その4（後書き）

クロ「どーも、最近ちょっとPCの調子がおかしいクロです」

姫神「そうゆうことなので少し投稿が遅れました・・・ごめんなさい・・・」

クロ「今のところそこまでひどくはないものの、もしかしたらいきなり壊れるなんてこともありえてきました」

姫神「そのためいきなり更新が一時途切れることがあるかもしれませんが・・・」

クロ「その時は少しの間待っていてください。申し訳ない・・・次回に続きます」

第24話 初めての日常 後編

森から歩いて10分ほど、やっとのことでオレ達は街に着くことができた。

しかし、やっぱりといつかなんといつか・・・

街到着10秒後

「こ、これは五面ダイバーの！」ry

健人離脱

街到着30秒後

「あれは確か・・・」ry

士朗離脱

街到着50秒後

「あ、あれって」ry

舞離脱

街到着 1分後

・・・気がつけば残っていたのはオレと姫神だけでした。

「あの・・・どうしましょう・・・」

「どうしようもないだろ・・・」

.....

「あ・・・あの、優斗さん・・・？」

「・・・・・・・・・・」

舞ちゃん達と離れ離れになってしまった私たち。

しかし優斗さんは「全員ケータイは持つてるから別行動していてもなんとか大丈夫だろ。・・・うん、大丈夫だよ・・・っ」か別行動させてくださいお願いします、いやマジで。もうオレいろいろ限界なんです・・・」と最終的に土下座までやって私に懇願してきたさすがにそこまでやられてしまえば断るわけにもいかず私たちも独自に動くことにした。

そして今、私たちは優斗さんに合う服を売っているお店を探しているんですけど・・・

「少し離れてくれませんか・・・？」

「ごめん姫神それ無理」

右手は私の腕に、左手は自分のスカートにまわっていて痛いくらい

力を入れてきている。

まったく余裕のない感じの返事が返ってきて、体もカタカタと震えて顔も下を向いている。

「ごめん・・・少しの間このままではいさせてくれえ・・・」

.....

「ごめん・・・少しの間このままではいさせてくれえ・・・」

きつい、今までで一番きついかもしれない。

ここは街である。

街にたくさん人がいるのは当たり前だ。

しかし今のオレにはあまりにも多すぎるように感じる。

さっきまではあいつらということでは何とかなったが今は違う。

みんながオレのことを見ているように感じて怖かった。

みんながオレのことを見て変に思っていないか、実はすでに気づいており見て見ぬふりをしているのではないか・・・どうしてもそんな考えに陥り押しつぶされそうになる。

「大丈夫ですよ」

そんな時

「私が守りますから」



声が聞こえる

「だから前を見てください」

・・そうだ、こんな体にはなってしまったがオレにはみんながいるんだ。

あんな情けない姿を二度も見せるわけにはいかない。

ありがとう姫神、オレはもう大丈夫・・・だ・・・か・・・ら？

「・・・・・・・・」

あれ、おかしいな？

なんで姫神さんがオレの目の前まへにいるんだろうか？

何か言いたそうな感じの顔をしているが何を言えばいいかわからないような感じの姫神さん。

いや、そんなことよりも・・・

今オレが抱きついているのが姫神でなかったならいい・・・

ぎぎぎ、と油の切れた機械みたいに抱きついている人物がいる方向に首を回す。

そこには金色の髪を持った悪魔がニツコリと笑っていました。

- - - - -

-

「いや、さすがにここでならなんとかあったね。」

買うべきものは何とか全部買った。

・・・え、あの後何があったかって？

あれだよあれ、あれがあったんだよ。

・・・とりあえず言えることは「そろそろ天使が来てもいい頃なんじゃない」これが限界です。

「あの・・・大丈夫ですか・・・」

「いや、もう駄目です」

心配してくれるのは嬉しいんですがこの状況では何の意味もありませんよー

「健人や舞達はまだなのか・・・」

「待ってね、たぶんそろそろ・・・」

「んだところああああああ!!」

いきなり目の前で怒号が聞こえる。

声の聞こえた方向のその先にいたのは・・・

「うつるさわね、もう少し静かにしなさいよ!!」

「そつだぞ、悪いのはどう考えてもお前らだ!！」

我らがトラブルメーカーズでした。

「いいからさっさと謝れや!！」

「先にぶつかってきたのはお前らだろ!！」

「あん、ごちゃごちゃうるせえんだよ!！」

「だからうるさいのはあんた達でしょ!！」

どんどんとヒートアップしていく目の前の空間。そんな時・

「うるせえ、ガキはさっさと家に帰りやがれ!！」

「・・・あんた・・・今なんてった・・・」

言ってしまった・・・禁断の言葉を・・・

「あん？ガキはさっさと・・・」

「私は子供じゃないっつーの!！」

瞬間、舞が飛んだ。文字どおり。

30センチくらい身長差があったがそんなこと関係ないといわんばかりの跳躍をして相手のあごに飛び膝蹴りをクリーンヒットさせた。

「ぎゃああああああああ!！」

「っ!?!このガキ!！」

「お、おい音無!落ち着け!」

「うるさああああああい!!--てめえら全員かかってこいやあああああああああ!!--」

健人の静止の言葉も聞かずに突撃していく舞。

ここが舞の困ったところ、舞は子供扱いされるとぶち切れてしまうのだ。

それだけならまだいいんだが・・・

「うわああああああああああ！！」

「ぎゃああああああああああ！！」

なぜかその時だけ超人的な強さを発揮してしまうのだ。

そのため舞のことを知っている人の間では舞を子供扱いすることは自殺行為といわれている。

一人減り、二人減り・・・いつの間にやら立っているのは舞さん一人だけでした。

・・・うん、頑張った方なんじゃないかな？さようならー名もなき不良さん達！。

しかしここは街の中心、そんなことをしていれば・・・

ファンファンファンファン！

「あはは〜これはさすがにまずいかもね〜」

「んなこと言ってる場合か！」

いくらなんでもこれはまずい。

こんなことしただけでもまずいのにオレ達は無断で「外」まで来てるのだ、そんなことがばれてしまえば退学は確実だろう。

「・・・あれ？私は何を・・・？」

「馬鹿野郎！さっさと逃げるぞ！」

「へ？」

「も、もうすぐそこまで来てます・・・！」

「う、うわあああ！逃げろおおおおお・・・！！！」

そんなわけで最後の最後まで災難だらけでネコのオレの初めての休日  
日で終わった。

悪くはない・・・悪くはないんだがこんなことが「日常」になってしま  
うのはさすがに勘弁してほしいところである・・・

第24話 初めての日常 後編（後書き）

クロ「どーも、いきなり知らないおっさんに切れられてm yチャリ  
参号を破壊される夢を見たクロです」

健人「それにしてもやっと終わったな・・・」

クロ「長かった・・・」

健人「本当だったら前中後で終わるつもりがその倍でやっと終わり  
だからな・・・」

クロ「みなさんも計画はしっかり立てましょう。次回に続く」

## 第25話 ネコのアルバイト！ その1

陽はすでにだいぶ高い。もう少しすれば昇りきってしまっただろう。

天気は雲ひとつ無い快晴で、12月だというのにぽかぽかとしていてとても温かい。

そんな中それはいた。

場所は男子寮のある部屋のベッドの上。隣にある窓からも温かな日差しが差しまさに至高と言ってもよい場所。

その中央に小さく丸まった何かがいた。

体は小さく、まっすぐ立つても小学生程度の身長しかないだろう。

頭にはふさふさとした柔らかそうな白髪。

そして、ぴん、とした三角形の耳があるが今は力なくふにやりとしている。

上には小さなパーカー、下はサイズの合ったジーンズ。その継ぎ目からは白いしっぽが飛び出ておりふりふりと揺れている。

「……すー……えへへー……」

胸は規則正しく上下して、瞼はしっかりと閉じている。口は半開き

で笑っており、白いよだれの痕がある。

まちがいなくそれは寝ていた。それも気持ち良さそうに。

時間はどんどんと過ぎていくが目覚める気配はまったくなかった・  
。

ピンポーン

チャイムが鳴る。しかし起きようとしなない。

ピンポーン、ピンポーン

やっぱり起きない。

「……うーん……」

いや、起きない、のではなく、起きようとしなない、のだ。

今の状況に加え、昨日のあまりにも非常識な休日があったことも重なり、少年？の気力はほとんど残っておらず、「外にいる人には悪いが今回は居留守を使わせてもらおう……」と思っていた。

ピンポーン、ピンポーン、ピン……ベコーン！！

……

……

・



ドカーン！！

何やらいやな音が聞こえたと思った次の瞬間、吹き飛ぶドア（鉄製、ロックあり）

さすがにそんなことがあれば・・・

「・・・くー・・・」

起きませんでした。

そんな中、そこに近づく人物が一人・・・いや、それは人と言っていいのだろうか？

「あなた・・・私の前で居留守を使うなんていい度胸じゃない・・・」

そこにいるのは近づいただけで無数の拳が見えるようなオーラをまとった人の形をした鬼だった。

「・・・あれ・・・せんせいどうしたんですか・・・」

ここでやっと目を覚ますネコ。しかしまだ目が完全に覚めておらず、今の状況が理解できていない。

「うふふ・・・目が覚めたと思ったら第一声がそれとは・・・覚

悟はできてるってことよね」「

「えー・・・なにいつてるんですか・・・?」

「お仕置きの時間よ・・・」

「ミギヤアアアアアアアアアアアア!?!」

.....

「目は覚めたかしら?」

ええ、目は覚めましたとも、それもばつちりと。ただピー（規制）  
をやるのは少しやりすぎじゃありません?

「あの・・・ドアの方は？」

「ああ、あれ？あんなの明日になればすっかり元どつりになるから安心しなさい」

「・・・いや、どつやつたら明日で元どつりになるんですか？」

「世の中には言葉で言い表せない物や、知らない方がいいものがあるもんなのよ？」

不吉な笑みを浮かべながらそう言う先生。・・・いろいろと気になるところだがこれを聞いたら後戻りができなくなりそうだからやめておくことにした。

「えーと・・・それでオレに何の用ですか？」

「これを渡しにきたのよ」

そう言つて一枚の紙をオレに渡してくる。なにになに・・・？

・・・請求書・・・

請求書？一体何の？

そんな疑問を浮かべつつ紙の下に書いてあつた請求額と思われる数字を見る。

いち、じゅう、ひゃく、せん、まん、じゅうまん、ひゃく・・・まん・・・？

「えーと・・・先生？」

「何よ？」

「これは何の冗談ですか？」

「私がいちいち冗談言うためにここまで来ると思っているの？」

「それもそうですね……いや、そうじゃなくて！」

「いちいち、うるさいわね、次は何！」

「なんですかこの数字は！」

「これ？これはこの前のあなたの制服代＋昨日の不良達の治療代＋昨日の騒ぎの口止め料とかの合計金額よ」

「えーと……つまり……これを払えと？」

「そういうこと」

もう一度紙を見る……まちがいはない……

「こ、こんな金額払えませんか！」

「払える払えないとかじゃなくて、あなたは払わなきゃいけないの」  
「そ……そんな……」

目の前が真っ暗になる。

いきなり百万近く払えと言われても払えるわけがない……  
こんな……こんなことって……

「う……ぐうう……」

自然と涙が溢れてくる。

この問題が明るみに出してしまえば、最低でも退学は確定だろう。  
こんな姿のまま「外」に放り出されてしまえばどうなるか分かったもんじゃない。

「ちなみに期限は1週間ね。それ以上は伸ばせなかったわ」

先生の無情の言葉が聞こえる。

「わかった？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

もうどうにもならないだろう・・・・・・・・このまま「外」に放り出されてみんなの笑い者にされる人生が待っているんだ・・・

「・・・・・・・・」

「はあ・・・・・・・・しょうがないわね・・・・・・・・私が肩代わりしてあげるわ」「えっ?」

「聞こえなかったの、私が肩代わりしてあげるって言ったの」

「ほ、本当ですか・・・?」

「しっこい」

よかった・・・・・・・・本当によかった・・・・・・・・ありがとう先生・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・

「あ・・・・・・・・ありがとうございます・・・・・・・・」

「いいから鼻をかみなさい、みっともない。それとあくまで肩代わりするだけだからね、そこんところ忘れないように」

「は・・・・・・・・はい!」

なにはともあれこれで何とかかなりそうだ。

「ところであんた金はどうするつもりなの?」

「どうするってアルバイトをして・・・・・・・・」

「そんな体で雇ってくれるところなんてあるかしら?」

「あっ」

そういえばそうだった。こんな体で雇ってくれる所は普通はない。生活を切り詰めて少しずつ姉からの仕送りを貯めていけば払えなくはないがいつになるかわかったもんじゃなし。

「うーん・・・」

「悩んでいるようだったらいいとこがあるわよ」

これからどうするか悩んでいると先生が声をかけてきた。・・・夕  
イミング良く。

「えっと・・・」

「ここに行きなさい、そうすればきつと雇ってくれるわ」

絶対に何か隠しているのがわかるくらいの笑顔をみせながら一枚の  
紙をオレに渡す。

さすがといふかなんというか・・・利用できる状況は最大限に利用  
する、そんな先生のやり方を身をもって味わうオレであった。

第25話 ネコのアルバイト！ その1（後書き）

クロ「どーも、早くに寝ると次の日眠くなるクロです」

士朗「眠くなくても授業は聞いてないけどね」

クロ「テストの時とかそういう時以外はほとんど頭に入ってます」

士朗「頭の中は8割が妄想で出来ているからね」

クロ「これの主なネタは授業中に出来ています・・・次回に続く」

## 第26話 ネコのアルバイト！ その2

ここは風由学園にある商店街の路地裏のある一角。

そこにはさまざまな変わった悩みを持つ人たちが集まるといっちょと変わったお店があります。

おやおや。今日もまた一人このお店に惹かれた人が現れたようです。

.....

「ここか・・・」

オレは今先生からもらった紙に書かれた場所まで来ている。

ここに来る前に「いい？あんだ絶対に行きなさいよ？絶対だからね？行かなかつたらあんたつぶすわよ？」つとやたら念入りにオスメ（先生流）をしてくるのでここに来てしまった。

それにこの体で雇ってくれるような所なんて普通はない。

・・・逆に考えるとオレを雇ってくれるここは普通ではないということになるのだが・・・まあ、どのみち他に道はありそうなのでオレに選択肢はあつてないようなもんだったが。

そしてそこにあつたものは・・・

-----  
bar IKIZAMA-----



いや、バーで・・・一応ここ学園内だよな？

到着早々にツッコミどころを三つくらい見つけてしまい内心激しく不安になってくるオレ。

「本当に大丈夫なのかな・・・」

どこか他人事のような独り言をもらしながらも入口に向かって歩いていく・・・

「こんにちはー・・・」

「いらっしやい」

木で出来た頑丈そうなドアを開けて中を見る・・・なるほど、確かにバーだ。

中はそこまで広くはないもののカウンター、丸い回転する椅子、所狭しと並ぶ数々のお酒、など一目でバーだとわかるものがそこら中に置いてあった。

そして、カウンターの奥にはこの店のマスターと思われる男が立っていた。

年齢は30才くらいだろうか？顔に大きな引っかけ傷、ぼさぼさの髪、無駄の無い体つき、絵に書いたようなオッサンだった。

「お前さんがあいつの言っていたここで働きたいってやつか？」

「あ、はい」

「……」

「……あの……なんですか……？」

「顔」

「は？」

「だから顔だよ。そんなんじゃ何も見えない」

そういえばそうだった。今、オレは他の人にこの姿を見られないようにパーカーのフードで顔を隠しているのだ。

「あの……はずさなきゃいけませんか？」

「ああ、駄目だな。人に顔をみせられないような奴を雇うわけにはいかないからな」

確かにそのとおりだ。あまりみせたくないのが本音だが今はそんなこと言ってる場合ではないのでフードをはずしていく。

「ほお……子猫ちゃんだとは思っていたがまさか本物とはな……」

「いや、子猫ちゃんて……」

露になったネコ耳を見て少し驚いた様子だったが、次の瞬間にはツッコミどころがずれまくりんぐなツッコミをしてくれたこのおっさん。

やっぱり新たに搭載されたこのセンサーは優秀だなー。

一方、マスターの方はフードをとったオレの顔をじっとみている。

「なるほど、奴が進めるだけのことはあるな……」

「あの一・・・それで・・・」

「ああ、いいぞ。採用だ。これからよろしくな」

「ありがとうございます！」

「こちらこそよろしくな子猫ちゃん」

相変わらずオレのことを子猫ちゃんと呼ぶマスター。

いつもならここで諦めてしまうのがいつものオレだった。

がしかし、オレも今までのことを学習してないわけではないのだ。

「あの、実はオレこんな体してますが男なんですよ」

「・・・何？」

男力ミングアウト

相手に強力なストレートを食らわす。

これだけはつきりと言ったんだこれなら・・・

「そついうわけなんで・・・」

「だからどうした」

「・・・はい？」

「ふ・・・男だろうがなんだろうが関係ない、今のお前は子猫ちゃん・・・それで十分じゃねえか・・・」

この男はモロに右ストレート（男力ミングアウト）を食らわせたに  
もかかわらず何事もなかったかのようにカウンター（スルー）をし  
てきやがった。

とりあえず何が十分なのか簡潔にまとめなさい（配点10）

「俺のことを呼ぶ時はマスターと言ってくれ。・・・さて、おしゃべりはここまでだな。さっそくだがこれから着替えて今から働いてもらうぜ。覚悟を決めるよ子猫ちゃん？」

「・・・あいよ」

第一波の時点ですでに戦局不利になっているオレははたして第二、第三波に耐えきれぬだろうか？・・・うん、無理だ。

第26話 ネコのアルバイト！ その2（後書き）

クロ「どーも、ほんつつつつつとうに申し訳ない！！クロです」

先生「本当に申し訳ないという気持ちで・・・胸がいつぱいなら・・・！（ry）」

クロ「いや、それはカンベン。・・・とにかく待っていた人（いるなら）待たせてしまつて本当にすみません」

先生「そう思つてんならこんなところで油売つてないでさっさと次を書きなさいよ」

クロ「いや、おっしゃるとおりで・・・」

先生「休んだわけなんだから最低でもちゃんとしたのを早く書きなさい。それぐらいいしないと誠意が伝わらないわ」

クロ「何とか頑張つてみます・・・」

先生「ふう・・・なんでこんな作者の作品がユニーク数が5000を超えたのかしら・・・」

クロ「そんなわけでありがとうございます、そしてこれからもがんばっていきますので楽しんでくれれば幸いです。感想などもどんどん受け付けますので・・・それではまた次回に・・・」

## 第27話 ネコのアルバイト！ その3

「制服」とは学校や会社そのほかの団体などで、所属する人着るように定められている服装。ユニホームのことである。

つまり「制服」とはその人が何をしているか表すための特徴ともいえるものである。

だがそう考えると今のオレの服装はバーの店員にふさわしいものなのだろうか？

「さすが子猫ちゃん。よく似合ってるぜ。」

「褒められても悲しくなるだけなんでやめてください」

さようならパーカーさん、ジーンズさん。こんにちはメイド服さん。

.....

「あの、ここの制服ってどんなもんなんですか？」

マスターに連れられてスタッフルーム・更衣室まで来たオレはマスターに質問をした。

「俺がデザインした制服だ・・・と言いたいところだがあいにくお前さんに合ったサイズのものは今はない」

まあ、当たり前だろう。

こんな身長の人に合った制服なんて用意してるわけがない。

「そこで・・・」

そう言つてマスターはオレに紙袋を投げつけてきた。

投げつけられた袋の中には白と黒を基調とした服が入っていた。・

・あれ、どこかでこれを見たような？それも最近。

「これはあいつが送つてきたもんだ。なかなか気がきくじゃないか」

中に入っていた物を取り出す。

それを見て思い出す・・・

(狂つた女子達とのいやな) 激闘の日々

犠牲になつた人達(哀れな男子生徒 生死不明)

その時、オレと一緒に駆けぬけ(させられ)た服・・・それはメイド服だった。

なんでだよ。

「・・・・・・・・」

それはまちががなくあの時と同じ服だった。

あれ？これ確か押入れの奥に封印していたはずなんだけどなー？

「?どうした子猫ちゃん。着ないのか？」

「あの・・・これ着なくちゃいけませんか？」

「これを着たくないのか？」

「当たり前です」

「子猫ちゃんとの相性は最高だと思っが？」

「体はよくても心が駄目です」

「ふむ……」

何やら眉間にしわを寄せて真剣に考え込むマスター。・・・なんでそんなに着てほしいんだよ？

ただ今までの経験からおそらくは……

「しかたない、今日はその服のままでもらう。ただし顔はしつかり出してもらうぞ？」

「……きからどうした？　え？　……あれ？」

「……さっきからどうした？」

「あ……いや……その……なんでもないです」

「……？　まあいい、とにかくこれからやってもらうことを教える」

まさかまさかの大番狂わせ。

神様もやっとなこと飽きてくれたのだろうか？

「……出来ました」

「ほお……なかなか筋はいいみたいだな」



更衣室を後にしたオレはマスターから仕事の説明を受けている。

仕事といってもオレがバーテンダーなんて出来るわけがないのでレジの打ち方や掃除のやり方などの雑用が主な仕事になりそうだ。

「まあ・・・今教えることはこんな所か・・・」

「わかりました。ありがとうございます」

「それじゃ今から開店の準備を・・・」

カランカラン・・・

マスターが開店準備を言おうとした時、店のドアが開いた。

「こんにちは、調子はどうかしら?」

「お前さんか・・・」

「あ、先生!？」

そこに立っていたのはここを紹介してくれた恩人、先生だった。

「悪いがまだ開店前だ」

「いいじゃない別に。そんなこと大した問題じゃないわ、問題なのは・・・」

そう言うと先生は怒りに染まった瞳をこちらに向けてくる。・・・え、なんで?

「あんだ、私がせっかく送った服を着ないなんてどういいうことかしら?」

「それは・・・!」

「いくら私でも居留守を使われたつえに厚意まで無視されたとあつちや我慢の限界つてもんよ？」

駄目です！目標に効果（聞く耳）がありません！．．あと小さな親切大きなお世話って言葉知ってます？

その間にも先生はオレに近づいてくる．．総員退避！繰り返す、総員．．

「とりあえずその腐った脳みそにしつかりと教えこまないとね．．

」  
「．．あの．．！なんか．．！さつきから．．っ！ミシミシ言ってるんですが．．？」

右腕一本でオレの頭をつかみアイアンクロー状態に移行。

逃げようかと思ったがそれは出来ない。だってもう地面に足がついていないんだもん。

「ちょ．．ま．．スト．．」

なんかさつきからミシミシからバキバキという音に変わりつつあるのは気のせいでしょうか？

「マスター．．更衣室はどこかしら？」

「この奥だ」

「ありがとう」

だれか．．．ヘルプー．．．

しかしそんな言葉を聞いてくれる人などいるはずがなくバキバキと  
いうミュージックを聞きながら更衣室まで連行された。

第27話 ネコのアルバイト！ その3（後書き）

クロ「どーも、メイド服は俺のジャステイス！なクロです」

詩織「そんな情報聞いたって誰も喜ぶわけないじゃない」

クロ「だったら何か面白い情報くれよ。新聞部なんだろう？」

詩織「だったらもっと出番を増やさないよ！活躍出来ないじゃない！」

クロ「このアルバイト編はもう少し続くから無理」

詩織「てゆうかあんたちよっとキャラ多すぎ！すでに名前ありがとう10人ってどういうことよ！」

クロ「別にいいじゃん。いろいろ書きまっくたらこうなった反省はしていない」

詩織「もう少し絞ってから書きなさい！ただでさえ失敗も多いんだから！」

クロ「実はさらにもう一人くらい追加予定なのは内緒。次回に続きます・・・」

詩織「いい加減にしない！」

## 第28話 ネコのアルバイト！ その4

あの後何をされたかは知らない。・・・記憶が飛んでるのだ。

気がつけば更衣室で倒れており服もメイド服に変わっていた。

頭もかなり痛い。いくら小さくなったからってアイアンクローで持ち上げるのはどうかと思いますよ。

ご丁寧に鍵と首輪（鎖付き）まで追加装備されていた。嬉しくって涙が出ちゃうわ！

・・・そんな愚痴を言ったところで現実は変わらないんだけどね。

鍵が付いているから脱ぐことはできないし、脱いだら脱いだで次の瞬間にはオレの存在は消滅している可能性もあるのであきらめてマスター達の所まで戻ることにした。とほほ・・・

「ああ、あいつならもう帰ったぞ？」

「・・・え？」

「いい飲みっぷりだったぞ。あれだけの・・・」

「いや、そうじゃなくて・・・先生は何か言ったり置いていった物はありませんか？」

「置いていった物は特に無かったが伝言はある」

「・・・なんですか？」

「「あんたのことはいつも見守っているから安心なさい」・・・だそ  
うだ。よかつたな」

「・・・ええ、そうですね・・・」

なんか先生が言つと別の意味で捉えてしまつんですが・・・あと鍵を  
どうすればいいか教えてください。

そして今・・・

「マスター」

「なんだ？」

「何か仕事ありませんか？」  
「ないな」

「そうですか」

「・・・」

「・・・」

「マスター」

「なんだ？」

「いつもこんな感じなんですか？」  
「その時によって違う」

「そうですか」

「・・・」

「・・・」

無い、何も無いのだ。やることが

開店からすでに2時間。店の中はオレとマスター以外動いている物はない。

マスターと会話をしようにも先ほどのように会話がつかないうえ

「子猫ちゃん・・・男つてのはな秘密が多い方がかつこいいってもんなんだぜ？」

とか言つて本名すら話してくれない始末。とりあえず寝言は寝て言え。

「くあつ・・・」

この姿を他の人に見られないのは嬉しいがやはり暇はつまらないものでいやなものだ。

あまりに暇なためついつい大あくびをしてしまった。

「客がないからと言ってあまり油断はするな・・・」

「すみません・・・ふあつ・・・」

注意をされてしまったが、そんなこといわれてもなー、と言わんばかりに再び大あくびが出てしまう。

「なんか仕事ないかなー」

そんな独り言すら出てしまう。

そんな時

カランカラン・・・

「いらっしやい」

「あ、いらっしやいま・・・せ？」

噂をすればなんとやら・・・と言ったところなのか最初のお客さんが来てくれた。

しかしその姿には見覚えがあった。

「健人？」

「優斗か・・・」

そこにいたのは健人・・・のだがあまりにも元気がない。

いろいろ疑問に思ったことがあったが、いつものギャップに戸惑ってしまい言葉が出てこない。

そうこうしている内にマスターの正面にあつた椅子に座る健人。

「マスター・・・俺もう駄目かもしれない・・・」

「・・・」

いきなり始まる独白。何があつた？

「夢の中でな・・・五面ダイバーに「君の正義はそんなものなのか！？」とか言われてさ・・・」

「・・・」

・・・お前帰れ



「そうか・・・」

そう言っつて店の奥に消えるマスター。何を理解したんだよ？

少しすると帰ってきて、その手には大きなカップがあった。

「これを飲め・・・俺の奢りだ・・・」

そう言っつて健人にそのカップを渡す。

「こ、これは・・・!？」

中身を見てなにやら驚いている健人。気になってその中身をのぞく。

そこにあっしたのは

ほかほかと湯気を出していて

とてもうまそうな匂いでした

味噌汁だった

なんでだよ

(約一秒)

「う……ぐっ……マスター……」

「人間つらい時には泣けばいいんだよ……泣いちまいな……」

いきなり泣き始める健人とそれを諭すマスター。

・すんませんオレもうついていけないんですけど。

……これだから男は……

・ ・ ・ん、今何かノイズのような物が？  
・ ・ ・うん、きつと疲れてるから幻聴が聞こえたただけだ。気のせいに  
きまつてる。

「ありがとう・・・マスター・・・」

「いいから飲んじまいな・・・熱いうちが一番うまいからな・・・」

そう言われて味噌汁を泣きながら飲み始める健人。 ・ ・ シュールす  
きるだろ。

・ ・ ・つーかここバー・・・なんですよね？と心の中で思う働くオレで  
あった。

第28話 ネコのアルバイト！ その4（後書き）

クロ「どーも、酒のことはまったく知らないクロです」

会長「両親がともにお酒に弱い体質らしいな」

クロ「そのため家に酒は存在しません」

会長「それでバーのアルバイトなんてさせて大丈夫なのか？」

クロ「マスターがいれば何とかなる」

会長「マスターなら仕方ないか・・・」

クロ「ぶっ飛んだ人はこれで何とかなるから便利。次回に続きます・

」

## 第29話 ネコのアルバイト！ その5

bar IKIZAMA

風由学園の商店街エリアのどっかの路地裏に存在する酒場。

学園内ということもあり利用客はあまり多いとは言えない。

しかし、一部の人達からは評判が良くそのおかげで商売が成り立っているとか何とか。

.....

「マスター・・・その子を僕にください！」

「俺の屍を越えて行け・・・」

とか言つて始まる殴り合い。・・・オレはいつマスターの物になったんですか？

優斗争奪戦

男子学生B VS マスター

結果 引き分け

決め手 クロスカウンター

「マスター・・・」

「・・・」

「・・・もうかりまっか？」

「ぼちぼちでんな・・・」

何をしたいんだあんたら。

「ふう・・・」

少しずつだがあれからお客は来てくれるようになった。

しかし、どこかずれていたお客の相手をしなくちゃいけなかったことと初めてのバイトということもあってだいぶ疲れがたまってきた。

ちらと時計を見るが、まだ閉店時間まで1時間近くあり、ついため息が出てしまう。

「子猫ちゃん・・・もうお疲れかい？」

「あ、いえ、まだまだ大丈夫ですよ！」

「・・・耳としっぽがへたれているか？」

「う・・・」

表面上うまくいったと思ったが、おもわぬ所でぼろが出てしまった。

「あまり無理はよくないぞ?」

「いえ、ですけどあと1時間くらいですし・・・」

「まだ初仕事なんだ、無理をして何かあった方が困る。今日はこれで閉店にしよう」

「けど・・・」

「子猫ちゃん・・・このマスターはいつたい誰だったかな?」

「・・・わかりました」

マスターの命令じゃ仕方がない・・・か。ここは素直に従うとしよう。

「・・・ああ、ちょっと待ってくれ」

「なんですか?」

「初仕事が終わったんだ、ご褒美ってやつだよ」

そう言ってマスターは何処からか小さな小瓶を取り出した。

「これは?」

「これはなんでも外国産のハーブ酒らしい。ある客からもらったもんだが俺には合わない代物だ」

「あの、一応オレ未成年なんですけど・・・」

「安心しろ、この度数はかなり低い。言ってみればジュースみたいなもんだ」

「へえ、そうなんですか」

それなら安心だな。

そう思ってしまったオレはコップに注がれた琥珀色の液体を何のためらいもなく一気に飲みほしてしまった。

「ふう・・・これはなかなか・・・あの、もう一杯くれませんか？」  
「・・・それにしても疲れた顔をしてるな子猫ちゃん」  
「あの人と関わっていれば年がら年中疲れた顔にもなりますよ」  
「それもそうだな・・・」  
「んぐ・・・まあこれでも大分ましにはなっただんですけどねー」  
「そうなのか？」  
「にゃふん・・・ええ、ここに来る前はあの人以外にもあのほかあねがいましたからね」

ああ、なんだかきぶんがいい。  
こんなにきぶんがいいのはなんねんぶりだろうか？

「・・・子猫ちゃん酔ってないか？」  
「あつはつはつは、まさか〜これでよわないうっていったのマスターじゃないですか〜」  
「・・・お前さん少し・・・」  
「おまえ〜？わたっしのなまえはおまえなんてなまえじゃありません！」

ニヤハハ！としょうじょのわらうこえがきこえる。  
こえからしてきつとかわいらしいおんなのこだろつ。

「・・・もう止めておけ」  
「え〜なんでですか〜」

コップを傾けようとした時マスターがそれを止める。

そんな時

カランカラン・・・



「悪いが今日は・・・なんだお前か・・・」  
「なんだとは失礼ね。それにしても・・・これはどういう状況かしらっ？」

そこにあつたのは顔が真っ赤でぐでんぐでんになっている幼い少女がグラスを傾けようとしているがマスターがそれを止めているという何とも言えない状況だった。

「せんせくますたーがいじわるするんですよ」

「はあ・・・あんたこいつに何飲ませたの？」

「こら〜むしをするな〜」

「この前お前からもらったハーブ酒なんだが・・・これはいったい？」

「どつりで・・・実はこれには・・・」

「む・し・を・す・る・にや〜〜!!」

「うるさい」

「げふ！」

見事な一撃が炸裂。

直撃を食らった優斗はカウンターにへばりつくように倒れた。

「やっと静かになったわね・・・」

「やれやれ・・・だな。さていったいあれは何なんだ？」

「あれは普通のハーブ酒よ・・・人間にとってはね」

「人間？」

「そう、あれにはまたたびが入っていたのよ」

「・・・なるほどな。猫であるこいつはそのせいでああなったってわけか」

「そういうこと。・・・さて、こいつは持って帰らせてもらっけど問題はないわよね」

「ああ、どうせもう店じまいだ」

「・・・ああ、そうそう一応言っておくけど今度あいつがここに来る  
ことになったから」

「あいつと言つと・・・か？」

「そ、・・・よ」

「・・・」

「・・・ま、何とかなるでしょ、それじゃね」

「他人事だと思つて・・・」

ボタン！カランカラン・・・

第29話 ネコのアルバイト！ その5（後書き）

クロ「どーも、．．どーにもうまくいかないクロです」

副会長「どーもしなくてもうまくいかないでしょあんなにか」

クロ「まあそうなんですけどね。しかしやっぱりうまくやりたい所である」

副会長「そう思うならもっとがんばりなさい。一応見てくれている人も．．．いると思うわ」

クロ「そこは言いきってほしかったぜ．．冬休みに入ったのでいる頑張っていきます。次回に続く．．」

### 第30話 波乱の幕開け？ その1

「よしー！」

アルバイトが終わり、休日が終わわり今日はひさびさの登校日だ。

今の時間は8時ちょうど

いつものように目を覚まして、いつものようにご飯を食べて、いつものように準備を始める。

シャツを着て、ネクタイを締めて、ズボンをはいて、ズボンの穴からしっぽを出して、最後に学生服を着る。

・・・一部変な所があったが気にしないでくれ。

「んー今日もいい天気だー」

天気は今日も快晴、ついそんな言葉が漏れてしまう。

耳(ネコ耳)すませば聞こえてくる小鳥のさえずり、そよそよと吹くやさしい風の音、そして・・・

(ひそひそ・・・)おい・・・まだなのか？

(ひそひそ・・・)ちょっと待て・・・いつもならそろそろ出てくるはずだ

(ひそひそ・・・)は、はやくしてくれ・・・禁断症状が・・・

(ひそひそ・・・)優斗ー俺だー(ry

「何やってんだよ・・・」

ドアがある方角から聞こえてくるそんな会話。  
おそらく・・・じゃなくてもオレを待ち伏せているのは明らかだ。

・・・まあ、わかっていて相手をしてやるほどオレはお人よしではないんだけどね。

ガチャ・・・

「とっ」

玄関から出ることはできなくなったので窓を開けてそこから一気に飛び降りる。

こういう時ネコの体は便利なもんだ。結構な高さからだったが怪我ひとつ無く着地、外の連中に気づかれる脱出に成功する。

「悪いけど、自業自得ってことで」

家の前に多くの奴らを残してオレは学校へと向かう。

・・・ええ、まあわかっていましたとも、世の中（オレ限定で特に）甘くはないってことぐらい。

「はあ・・・はあ・・・！」

「見つけたぞー！場所はポイントA3地点！」

「こちらブラボー1、可能な限り援護する！」

「オメガ1、2はポイントB2で待機、待ち伏せしろ！」

「了解!!」

「ちくしょおお!!どうしてこうなった!!」

学園を全力疾走しながら今日も木魂するオレの絶叫

- - 10分前 - -

クラスメイトの男子発見

「おはよう」

「・・・ピ!」

「ん、どうしたんだ?」

「ポイントD2にて目標発見!至急応援求む!」

「・・・なんでだ!」

以上、報告終了。

「ああー疲れたー」

んで現在、何とかまくことに成功したオレは路地裏で少し休憩をとっている。

「時間は・・・まずいよな・・・」

携帯で確認したが今の時間は8時30分。

まだまだ余裕があるように見えるがああの包囲網をぬけ出して学校まで行くのは至難の業だ。

「見つけたぞー！」

「やべ!?!」

いつの間にやら見つかったようだ。

逃げようと反対側を向くと・・・

「おいおいおいおい・・・」

気がつけば前後ともに男子たちで埋め尽くされており、左右は壁しかない。

逃げ場無し。その言葉で頭が埋め尽くされる。

「全員・・・」

リーダーと思われる人物から攻撃命令が下されようとしていた。

・・・ああ、せめてまともな人間に会いたかったな・・・最後に思うようなことじゃないよな、これ

「かかれ！」

瞬間

吹っ飛ぶ男子生徒たち

「は？」

あまりにありえん光景に間抜けな声が出てしまう。

いや、だって一人二人ならまだしもダース単位で吹っ飛んだんだぜ？

「な、なんであんたがここに・・・!?」

「あんた達の動きをこつちが把握できていないとでも思ってたの？」

男子生徒たちの屍の山の上で仁王立ちしていたのは我らが学園の最強の存在にして生徒会副会長、藤原愁さんだった。

「さて・・・何をしていたかじっくりと話してもらおうかしら・・・？」

「く・・・相手はたかが一人だ！かかれー！」

「うおおおおおおおおおお！！！」

・・・5分後・・・

そこには傷ひとつ無くピンピンとしている副会長の姿が！

・・・とりあえず二段ジャンプとか空中三回転回し蹴りとかどうやったら出来るようになるんですか？ 匿名希望の白ネコさん。

「ありがとうございます、副会長」



「別に礼を言われるほど大したことはやってないわ。それにしても・・・懲りない連中ね・・・」

なんか踏まれている奴が痛みを堪えながら笑みを浮かべている。・・・この記憶はすぐに消そう、うん。

「どうやら片付いたみたいだな」

新しく現れたのは会長、つまり中島大地さんでした。

「ピ！・・・こちらコマンド1、ポイントB2にて大量の違反者を確保。近くにいる者は「処理」の手伝いを求む。以上だ」

えーと・・・言い間違い・・・ですよ？

「どうやら二人とも無事なようだな」

「当たり前でしょ。こんなのが100、200いたところであいつに比べれば・・・」

HAHAHA！聞きました？副会長にとって100や200の男子生徒なんてどうってこともないらしいですよ奥さん。

「大島優斗」

「え、はい！」

いきなりオレの名前を呼ぶ会長。いったい何なんだろう？

「君は今の自分がどういう存在かわかっていないようだな」

「・・・は？」

「そうよ、あなたを狙っている連中なんてそこら中にごろごろいる

んだからもっと・・・」

「あ、あの・・・」

「くどくどくどくど・・・」

「くどくどくどくど・・・」

「・・・」

いきなり始まる生徒会ズの説教タイム、もちろん二人の説教によってオレが遅刻をしたのは言うまでもない。

それに対して二人は先ほどの「処理」によって遅刻を免除されたとか・・・理不尽

第30話 波乱の幕開け？ その1（後書き）

クロ「どーも、逆さ爪いてえ！なクロです」

優斗「クロにとって冬は静電気<逆さ爪だとか」

クロ「今年は特にひどい。切っても切ってもすぐになる」

優斗「まあ確かにつらいわな」

クロ「それはともかく、31日から帰省することになりましたしばらく更新出来なくなってしまう」

優斗「早ければ5日ぐらいから更新をする予定ですが・・・クロの言うことなんであまり信用しないでください」

クロ「そんなこんなで1年もそろそろ終わり、みなさんも油断せず元気に年を越せるよう気をつけてください。・・・次回に続く」

### 第31話 波乱の幕開け？ その2

突然だが学校の校門と聞いて皆は何を思うだろうか？

これから学校だと思い浮かばせるいやな場所？

先生が立っているいろいろ注意してくるめんどくさい場所？

とにかく大多数の人はあまり良いイメージを持っていないのではないのだろうか。

ちなみにオレもその一人だ。

そして今オレはその校門の前にいる。

しかし

なんとということでしょう・・・

冬となりすでに何も身につけなくなった木々には、枝に何人もの学生をひっかけることにより新しい姿に生まれ変わっております。

ひっかかっている生徒は飾りになりきっているのか動く気配どころか生きている気配すらないほど力を抜いております。

なんということでしょう・・・

あのどこか淋しかった花壇からは人間の両足がまっすぐ伸びております。

その足は時々ビク！と動き我々を飽きさせることはありません。

そして何も無かった地面には多くの学生が横になったり、集まって山を作ったりしてとまったく新しい人間モニュメントを作っております。

あのつまらないと思われていた校門がこんなにも・・・

うん、すまん、やっぱり無理だわ、自分で言っというてなんだが・・・  
何これ？

生徒会ズのお説教がやっと終わって学校に来てみればすでにこうなっていた。

まさかリアル犬神家をこの目で見ることになるとは思わなかったぜ。あまりにも奇妙すぎる状況だったため思考が一時的にフリーズしてしまいなんか変なナレーションが脳内を駆け巡ってしまった。

今の状況を一言で言い表すなら死屍累々、さっきの男子生徒たちの被害を数倍にしたものと言えば伝わるだろうか？そんな感じである。

この状況から見てこれをやった人も検討がつく。．．．ほんとに100や200問題じゃなかったんですね．．．

「．．．いや、しかし、これはひどい」

．．．ガシ！

「いひ！？」

そんなことを考えていたからか倒れて虫の息だった男子生徒にしっぱをつかまれてしまった。

「うう．．．」

「うわー！？は、離せー！」

しっぱをそれもいきなりつかまれたこともあり驚いて必死に振り払おうとしたがびくともしない。

「た・・頼む・・お・・俺の・・最後の願いを・・」  
「わかった！わかったから力を緩めてくれ！」

そういつとそいつは力を緩めて何かゴニョゴニョとしゃべり始めた。  
何を言ってるのか聞かため耳を近づけていき聞こえたのは・・・

「俺を・・踏んでくれ・・」

「・・・・・」

グシヤ

どこを踏んだかはご想像にお任せします。

第31話 波乱の幕開け？ その2（後書き）

クロ「どーも、休みなのに疲れるとはこれいかに？なクロです」

ユウト「別にお前さんが疲れようが疲れまいが困ることは何ひとつとしてないがな」

クロ「うおー地球のみんなーおらにカオスを分けてくれー」

ユウト「クロの原動力はゲームとかマンガとかカオスとからしい、駄目人間のいい例だな」

クロ「ちよつくらカオス補給してくる。次回に続く」



### 第32話 波乱の幕開け？ その3

「最優先事項 来たら最初に666号室に行け」

前回のこともあり、注意して靴箱を開けてみれば、そんなことが書いてある手紙が一つ入っていただけだった。

名前は何処にも書いてなかったがこの簡潔すぎる文章と見覚えのある文字から誰が書いたかはすぐにわかる。

「……とりあえずもつと書くことがあるだろ」

そんなわけで今オレはその666号室の前まで来ている。

666号室……この教室どころか、ここにくるまでに通ってきた道ですら今日初めて知った所も多くあった。

相変わらずこの学園はまだまだ謎が多いな……これも七不思議のひとつだったりするのだろうか？

はたしてここに何があるのだろうか？

中を覗こうにも身長が足りず覗けないため中の様子はわからない。

いろいろと疑問はあるが、とにかく中に入って見よう、そうすればわかることだ。





みたいな冷めた目でこっちを見るのはやめてくれませんか？  
・・そこ、しつぽを触らない！

「あの・・・本当に心当たりがないんですか・・・？」  
「あれ？姫神？」

まさか姫神までこんな所にいるとは・・  
あいつといつも一緒に行動してるわけだからこんな所にいてもさほど違和感を感じないが、やはりまさか・・・と思ってしまう。

・・・ん？この流れで行くともしかして・・・

「いやはや、相変わらずだね〜優斗は」

「やれやれ・・だな」

やっぱり出てきた男コンビのお二人さん。  
とりあえず健人てめーが言うな。

「とにかく！誰でもいいからさっさとこの状況の説明をしろ、うが  
ー！」

「はあまったく・・ここに集まった人は皆あんたのために集まった  
ようなもんなのに」

「は、オレ？」

「完全に忘れてるわね・・橘先生があんたのために新しくクラスを  
作ったってこと覚えてないの？」

「・・・・・あ！？」

しまった！今の今まですつかり頭から抜け落ちていた。

主役であるオレが遅刻してみなさんご立腹・・そんな所か。



「……………」

「どうしたの？」

「あ、いや、なんでもないわ」

まあ・・・いいわ。最後に決めるって決めたんだもの、今はしっかりと楽しませてもらうとしましょう！。

「くらー！優斗ー！」

「うるせー！いちいち叫ばんでもわかるわい！」

この時間がいつまで続くかわからないけど…………

……………

自分で言うのもなんですがオレは自分が普通の人だと思っています。

周囲は普通じゃない人が多いですがオレは自分が普通の人だと思っています。

でも…………

「紹介するわ。ここの担任になった・・・」

「はじめまして〜大島由美子です〜ちなみに私はそこにいるゆうちやんの…………」

「どうしてmy sister が teacher になってる  
じじい？」

この瞬間だけは頭のネジがぶっ飛んだと思っている。

第32話 波乱の幕開け？ その3（後書き）

クロ「どーも、いつの間にやら今年も終わり！なクロです」

舞「課題・・・勉強・・・」

クロ「アーアーキコエナイ」

舞「遊びもいいけどあんたほどほどにしないとそろそろ泣きを見るわよ？」

クロ「今だけは忘れさせてくれ・・・頼む」

舞「まあ・・・私が困るわけではないからいいんだけどね」

クロ「こんなg d g d会話をしちゃってますがこれで今年の更新は最後になっちゃいそうです」

舞「次回の更新は1月の5日・・・予定？もっとはっきり言いなさいよ！」

クロ「すでに何回もミスしてんだからそう簡単に断言なんて出来るか！」

舞「ああもう！めんどくさいやつね！」

クロ「ぬわぁー暴力反対！みなさん良いお年をー！次回に・・・グベ！」

舞「・・・次回に続きます・・・」

### 第33話 波乱の幕開け？ その4

オーケー、オーケー、頭を冷やして状況を再確認しよう。

目の前の教壇には誰か立っている。

見事な黒髪を背に流し、白を基調とした服を身に包んだ女性・  
いや、絶世の美女が微笑みながら立っている。

その見た目、声、雰囲気などには見覚えがあるのでそれらを脳内検索にかける。

検索中・・・・・・・・

215

#### 検索結果

「ゆうちゃくん、お風呂洗おうとしたらー!!」

「姉さん・・・なんで風呂洗いに掃除機使ってるの？」

「ゆうちゃくん、ストーブがー!!」

「姉さん！灯油とガソリンはまったく違う物だって言ったでしょう



に!」

「ゆうちゃ〜ん、食器のお皿全部割っちゃったの〜どうしょ〜」  
「……………」

駄目だ・・思っただけでも頭が痛くなってきた。

・・はい、これらの結果から目の前の人物は我が愛しくない姉、大島由美子であることがわかりましたとき、めでたし〜、めでたし〜。

んなわけないだろ

「Hey! 姉さんどうしているのhere?」  
「日本語話してください」

む、しまった、まだ混乱しているようだ。

「いるのどこにどうして姉さん? ねえ!」  
「日本語ってわかりますか」

いけない、おっと落ち着かないと、いけない・・

「あんたはいつたいたいなんだあー!」  
「姉です」



しかし、そんな中それに近づいていく人物が一人・

「あらあら、大丈夫よ、そう怖がることはないわ」

「先生！危険です！」

「だから大丈夫ですよ、だって私の弟なんだもの！」

「先生……」

「それに世の中には一人ぐらい頭から煙を出したり、口から何かがあふれ出たり、光ったりする人間はいるでしょ？」

「……いるわけねーだろ！！！！」

クラスから総ツッコミをくらう由紀子、しかしニコニコと笑みを浮かべてそれにまったく動じる様子がない。

「そんなボケはせんでいいからさっさと次に進みなさいよ、これじやいつまでたつても終わらないじゃない」

「あばばばばばばば……！！！！」

「え〜でも〜」

「えべべべべべべべ……！！！！」

「でも〜じゃないわよ、私は……あががががが……！！！！」

「……ちよつと待ってね」

そう言うと光は何やら危ない空気を放っている優斗の襟首をつかみ体勢を整えて……

「くらああああ！！うるせえんだよおおおお！！！！」

渾身の力を込めて優斗を窓の外にぶん投げる。《そおい！

そのぶん投げられた優斗は重力に逆らいつつすぐと青空に向かって飛んで行き、やがて見えなくなってしまった。

「ふう・・・やっと静かになったわね」

「は!?!?.....夢か.....」

「んなわけないでしょ」

「ですよー」

みぎやー

第33話 波乱の幕開け？ その4（後書き）

クロ「どーも、帰ってきた・・・と言ってもまったたくパワーアップしていないクロです」

姫神「もう少し・・・頑張った方がいいですよ・・・？」

クロ「頑張りたいけどやる気が出ないぜ」

姫神「でもこのままじゃ・・・」

クロ「俺は直前に本気だすタイプだから大丈夫だぜ」

姫神「本気を出したのは本当に危ない時限定でしたよね・・・？」

クロ「結果良ければすべてよし！勝てばよかるうなのだー！次回に続きます」

### 第34話 波乱の幕開け? その5

緊急特番!!! 666組の真実!?

666組 Tさんの証言

「大島君を投げた時の橘先生の顔・・・あれは・・・ああ・・・あああああああああああ!!」

「ど、どうしたんですか!? 落ち着いてください!!」

「ああああああああああ!!・・・」>ばた!

「お、おい!?!」

「CM!! CMに差し替えるー!!」

「きゃああああああああ!!」

「誰かー救急車呼べー!!」

なにこれ?

続かない

.....

ごぼごぼ、と隣で緑色の液体がピーカーの中であぶくを立てている。ごぼごぼ、ではなく、ごぼごぼ、かなりどろっとしている。

緑色っただけならまだよかつたんだが、その上にこのどろっとした感じである、少し見るだけでも結構つらい。

・・・いや、それだけではない。

何とも言えないような異臭、天井から垂れさがっているピンク色の細長い物体、生物とは思えないようなレントゲン写真・・などなど、人を不快な思いにさせる物がここにはそこら中にころがっている。

## 科学室

何度も連行されてある程度耐性がついているオレですらこれなのだ、普通の人がここに来ればおそらく一分ともたずに気分が悪くなるだろう。

そんな状況のはずなのに・・

「ゆふちゃんふえんひそうでg b h n m k」

「姉さん、とりあえず口の中の物をさっさと飲み込んでくれ、何言ってるのかわからない」

目の前にいる人はこの状況で飯を食っているのだ。それもつまそうに

「・・・んぐ！d c f t v g y ぶ h n j m?」

「ちゃんと食え、話はそれからだ」

先ほどの問題もあり、オレは昼休みになると科学室まで強制連行、精密検査をつけるはめになった。

そして今はその検査の結果待ち・・なんだが、思ったよりも時間がかかっているようでかれこれ15分はここにいる。

その間、舞たちが訪れてくれたものの、みな三分もすると気分を悪くして教室から出ていってしまった。

気分が悪く食欲をなくしたオレには今、目の前にいる姉と話す以外にやることがないのだ。

「それにしても見事なネコちゃんになっちゃったわね」

「うわ、この人言っただけほしくないことをズバツと言っただけきやがったよ」

「え？言っただけほしくなかったの？」

きよとんとした表情でこちらの問いに答える我が姉。

はぁ・・・とため息を出しつつ壁に掛けられた鏡をちらと見る。

そこに写るのはかわいらしい少女。

しかし、お尻からはしっぽ、白髪の上にはネコ耳という冗談のような姿をしている。

そして、そのすべてが本物であり今のオレの体なのである。

「姉さんだっけいきなりこんな姿にされたらたまったもんじゃないでしょ？」

「ん〜・・・案外悪くないと思うんだけどな〜」

「聞いたオレが馬鹿でした・・・」

相変わらずの能天気っぷりというかなんというか・・・

ガチャ・・・

「あ、先生」

「あら、終わったの？」

「ええ・・・」



奥の部屋から出てきたのは先生。しかし何やら難しい顔をしている。

「えっと・・・どうしたんですか？」

「わからないのよ・・・」

「は？」

「だから、わからないのよ。さっぱり、原因不明」

「先生・・・それって・・・」

自分の顔が青ざめていくのを感じる。つまり今のオレの体は・・・

「ああ、言い忘れてたけど体の方に異常は見られなかったわ」

「・・・へ？」

「私かわからないのは何であんなことが起きたかについてよ」

「あらあら、光にもわからないことなんてあるのね」

「私にだってわからないことは・・・ん？どうした優斗？」

「・・・先生、そんなことはもっと早くに言ってくれよ・・・心臓に悪い・・・」

「いちいち細かいやつね・・・そんなことよりも・・・」

そう言うと先生の顔がみるみる危ない顔に変貌していく。

「あんたしばらくそのままの姿でいない？興味がわいてきたわ」

「断固拒否させていただきます」

「優斗・・・知ってるかしら？「科学に犠牲はつきもの」って言葉」

「すでに私は十分に犠牲になっているんですけど？」

「別に一度や二度程度の違いじゃない、気にする必要なんてないわ」

なんかすごい勢いで無茶苦茶なことを言いつつ迫ってくる先生。  
このままではまずい！

「ちよ！姉さ……」

「ふえ？」

「……」

……いや、何でまた飯食ってんのさ

「ひよつと f v g y b k j n」

わかんないからしゃべんな、それと汚い。

「優斗……大丈夫よ、悪いようにはしないわ……悪いようには……」

「……」

そんなお預けをくらっている空腹の猛獣のような顔をしながらそんなこと言われても説得力がないんですか？

この後、すぐに昼休み終了のチャイムが鳴ってくれたおかげで何とか命拾いしたものの先行きが今まで以上に不安になってきた今日のオレであった。

第34話 波乱の幕開け？ その5（後書き）

クロ「どーも、なぜか最近妙な夢ばかり見るクロです」

健人「どんなやつなんだ？」

クロ「知らないおっさんにいきなり切れられてマイチャリ参号を破壊される夢とか、飛行機の中が自分の家の中だとか・・・」

健人「ずいぶんと変な夢ばかりだな・・・」

クロ「他にもいろいろあったがもうほとんど覚えていない」

健人「夢と聞けばやはりいい夢を見たいもんだな」

クロ「確かにそうなんだがあまり見たことがない・・・次回に続きます」

### 第35話 美女と野獣と獣と変人と その1

「優斗、あんたこの後ヒマ？」

退屈な授業から解放され、帰宅部であるオレはこれから何をするか考えながら帰る準備をしていた時、舞にそんなことを言われた。

「え・・・どうしたんだいきなりそんなこと？」

「あ、いや・・・と、とにかく！ヒマなの！ヒマじゃないの！」

「そうだな・・・」

この後は特に用事と言えるようなことはないが夕食の準備をしたり、姉を聞いただしたり、姉を聞いただしたり、姉を聞いただしたりしたいと思っているが、別に急ぐようなことでもないし・・・。

「んー・・・まあいいか。それで、何をするんだ？」

「実はね、私の行き付けの美容院の人が今カットモデルを探しているのよ」

「カットモデル？」

「そ、簡単に言っちゃえばそこに行つて髪を切つてほしいのよ・・・お金はとらないって言ってるんだけど、ダメかしら？」

「そうだな・・・」

無料で髪を切ってくれる。

借金をしていてもあまり余裕のない今のオレにとっては魅力的な話ではあるんだけど・・・

「でもこの頭じゃな・・・」

そう言いながら自分の頭の上に手を乗せる。  
頭と言っても問題なのは髪の方ではなく同じく頭から生えている新しい耳の方だ。

それに髪を切るということはその人に後ろを見せなくてはいけないということだ、その美容院の人がどんな人かは知らないが、だからこそ油断はできない。

「あー・・・つまりダメってこと？」

「いや、ただ、また今度にしてくれないか？行った瞬間「ミギヤー！？」は勘弁だから」

「で、でも！大丈夫よ！その人いい人だし！それに今行けば運気が上がったたり、運命を切り開いたり、つーか行かなきゃ死ぬわよ！」

「・・・何いつとんだお前は？」

「それに、それに・・・」

「・・・舞」

「!?!?・・・ナ、ナニカナニューウトクーン？」

「棒読みになんな、目をそらすな、いいからこっち向け」

「・・・」

「・・・舞！」

「ごめん！優斗！その人に今日モデル連れてくるって約束しちゃったのよ！だから一緒に来て！」

両手を合わせてお願いのポーズをとる舞。

人助けをすることは悪いとは言わないけどもう少し後先を考えるってことをしてほしいもんだ。

「はぁ・・・まったく、そういうのはもう少し考えてからにしろよ・・・」

「そ、そこは私も悪いと思っているわよ・・・」

「やれやれ・・・行けばいいんだろ、行けば」

「ごめん！こんどなんか奢るからそれで許して！」

「はいはい・・・」

「・・・てなわけなんで、士郎、健人すまんが今日は先に帰っていてくれ」

そんなわけで今オレは士郎と健人にさっきのことを説明しているところだ。

「あゝ別にいいよ、僕たちも今日は部活で一緒に帰れないから」

「部活？それに僕たちってどついうことだ？」

士郎はともかく健人のやつは部活なんて入っていないはずだが・・・？

「実は部長に「今度の取材は特別だから気合を入れていろいろ用意するから手伝いを連れてきて！」と言われてね」

「そこで俺が呼ばれたってわけだ」

「なるほどね・・・それじゃ頑張れよ」

「そっちなもね」

「おう！また明日！」

「すまん、待たせたな・・・ってあれ？何で姫神までいるんだ？」

「誘ったら来てくれるって言うってね、ありがとう姫ちゃん」

「いえ別に私はそんな・・・」

「姫神、嫌なら嫌と言っていいんだぞ？」

「私は別に・・・」

「ちよつと何よ優斗、あんた私が無理やり姫ちゃんを誘ったとでもいうの？」

「あの・・・」

「お前のことだからな、やりかねん」

「あ・・・何をー！！」

「がみがみがみがみ・・・」

「がみがみがみがみ・・・」

「・・・あの・・・まだ続くんですか？」

第35話 美女と野獣と獣と変人と その1（後書き）

クロ「どーも、少し忙しかったクロです。遅れて申し訳ない」

士郎「とか言っても忙しかったのは自分のせいなんだけどね」

クロ「まあ、結果よければすべて良しって言うじゃん」

士郎「その結果もあまりよくはないんだけどね」

クロ「う・・・次回から・・・」

士郎「それも何回も聞いている言葉なんだけどね」

クロ「・・・」

士郎「それにもうそろそろ次回すらない状況になってくるけどどうするのかな」

クロ「・・・うおおおおお！ちくしょおおおおお

！！次回は絶対にちゃんとやってやるからな！いいか絶対だぞ！覚えてるよちくしょおおお！」

士郎「・・・クロが帰っちゃったので今回は僕が言います。次回に続く」



### 第36話 美女と野獣と獣と変人と その2

学校を終えた夕暮れ時。

先ほどまで多くの生徒たちでにぎわっていた玄関は現在静寂に包まれている。

すでに多くの生徒たちは場所を移動しており、聞こえてくる音と言えは遠くで部活動をいそしむ生徒たちの声や自販機の無機質な機械音ぐらいだろう。

どこにでもあるような風景の一つ・・・のように見えるがそこにはひとつだけおかしな点があった。

耳だ。壁から耳としか言いようのない物が生えているのだ。

その耳は白い毛でおおわれているピンとたった三角耳で時折ピコピコと動いている。

しばらくすると、今度は同じ場所から頭が生えてきた。

その頭には耳と同じく雪のような真っ白できれいな髪。

そして、小さく可愛らしい口と鼻、大きな瞳と幼いながらも整った顔をしている。

その頭・・・少女はキョロキョロと辺りを見渡し誰もいないことを確認すると一気に靴箱のある場所まで走りぬけていった。

「うだー・・・」

大きくなった靴箱に寄っ掛かりその場へたりこむ。

「まったくなんでこんな目に・・・」

十分前

「はあ、はあ・・・ああーもう馬鹿らし。もうやめにしましょ」

「はあ、はあ・・・そ、そうだな・・・」

言い争いを始めて数分、さすがに時間の無駄だと悟りここで終わらせることにした。

「ふー・・・あなたのせいで無駄に時間くつたじゃない」

「お前がいちいち突っかったからここまで時間かかったんだと思うが？」

「なにをー!!」

「・・・あの・・・これじゃあさっきと同じ流れに・・・」

「・・・」

「・・・この話はまた今度ってことで・・・」

「まだやんのかよ・・・」

「はい！話は終わり！優斗、姫ちゃん行くわよー！」

「・・・はい」

「へいへい・・・」

歩きながらそんなたわいのない会話をして教室を出ようとするオレ達。

そして舞が教室のドアを開けると目に飛び込んできたのは……

「うおおおおおおお！！超螺旋剣<sup>ビニール傘</sup>！！」

「馬鹿め！！この俺に同じ技は二度と通用しない！！」

「なんで……なんであんたがそっちにいるんだ！！」

「ごめんなさい……でも、私も彼がほしいの！！」

「く！？」

「ねえ……」

「ん、なんだ？」

「この戦いが終わったら……いや、なんでもないわ」

「じつは俺も……」

教室をぬけるとそこは戦場でした……

廊下で飛び交うのは怒号と悲鳴、轟音、爆音なんでもござれのオンパレード。

「……」

「……ねえ優斗？」

「……あまり聞きたくないが、なんだ」

「この状況なんとかしなさいよ」

「無理」

「無理じゃないでしょ！これあんたが原因なんだから何とかしなさいよー」

「無理なもんは無理だ！それにこれは・・・」

その時、オレは気づいた。周りから音が消えていることに。そして、周りで騒いでいた奴らが皆こっちを向いていることにも。

「「「「「「「「「「「「「「「「」

「・・・えっと・・・」

「「「「見つけたあああああ！」「」「」

「「「「目標確認んんんんん！！！」「」「」

一瞬の静寂の後、こちらに突撃してくるみなさん。

「ちよ、ちよっと！どうすんのよ！」

「ゆ、優斗さん・・・！?!?!?」

「どうするたって・・・！」

さすがにこの状況では二人もあせっているようだ。この状況どうにかできないのか・・・？

右を見る、突撃する生徒。アウト

左を見る、突撃する生徒。アウト

後ろを見る、教室。一時的な時間稼ぎ。

前を見る・・・

「これだ！」

「「え!?!?」「」

この状況で生き残るにはこれしかない！

「ちよっと何してんの!?!」

「まあ見てろって」

目の前にある窓を開けてそこから・

「ダイブ！」

「……ってそれはあんた限定の方法でしょうがばかああああ！  
！」

窓から勢いよく飛び出したオレであったが後ろで舞にそんなことを叫ばれた。

空中で静止しながらそこで一言

「……そうだったぜ……」

で今に至ると、舞達には悪いと思っているが気づいた時にはすでに飛び降りてしまったのでどうすることも出来ず、ここまで逃げる以外にオレが出来ることはなかった。

んまあちょっとしたミスなわけだしこれぐらいなら許してくれるよな。

そんなことを考えていると

コツ……コツ……

静寂に包まれていた玄関に足音が響きわたる。

その音を聞いて後ろを振り返るとそこには見慣れた二人が立っ

た。

「おお、二人とも無事だったか。さっきはすまなかつたな」

謝りながら二人に近づくオレ。だけど何か様子が・

「・・・何がすまなかつたよ、この大馬鹿ああ!!」

「!?!?!。いはい!いはい!やめてふれ!」

不用意に近づいてしまったオレは舞に両頬をつねられてしまった。

「あれぬけ出すのにどれだけ苦労したと思ってるのよ〜!」

「わはつた!わはつたから!ひっはんはいでくれ〜!」

何とかぬけ出そうと必死の抵抗を試みるがこの体では舞に勝てないことはすでに実証済であるため結局されるがままだった。

「あの・・・もう許してあげても・・・」

一方的な状況になっている中、姫神が助けをだしてくれた。姫神・  
やっぱりお前だけが・

「駄目よ。まだ姫ちゃんの分が残ってるわ。・・・それに今の優斗は  
いじりがいがあるし」

「ほまえ、ほっちがほんねだろ!」

「細かいことは気にしない!ほれほれ〜」

「いはい!いはい!ひゃめろ〜!」

相変わらず邪悪な笑みを浮かべている舞。これはまだまだかかりそ  
うだな・・・

第36話 美女と野獣と獣と変人と その2（後書き）

クロ「どーも、1万ユニーク・・・だと・・・？、なクロです」

先生「・・・今世紀最大の驚きだわ・・・」

クロ「せめて今年度にしてください」

先生「だってこんな小説ともいえないような奴がここまでいってるんだもの」

クロ「それだけこの小説も見てくれている人がいるってことなんですよ？」

先生「・・・信じられないけどそういうことね。これも七不思議のひとつなのかしら？」

クロ「うわ、ひでー言いよう。・・・とにかく、1万ユニークありがとうございます」

先生「これからがんばっていくのでよろしくお願いします！・・・これで終わり？私は帰るわよ」

クロ「せめてその言葉は終わってからいってください。次回に続きます」

### 第37話 美女と野獣と獣と変人と その3

履いていた上履きを靴箱に入れて新しく買った小さなスニーカーに履き替える。

履き終えてちらと外を見ると先ほどまでさんさんと輝いていた太陽が夕日に変わっていることに気づく。

真っ赤な夕日は教室、校庭、学園、すべてを赤く染め上げているだろう。

・・・まるで今のオレのほっぺたのように。

「いつつー・・・」

舞のやつにさんざんいじられた結果、頬は真っ赤になり今もヒリヒリと痛む。

そのためできればもう少し休みたいと思っているんだが・・・

「ちよつと優斗遅いわよ」

「あの・・・大丈夫ですか?・・・」

目の前に立っている人物がそれを許してくれないのだ。

「誰のせいで動けなかったかと思っっているんだ誰のせいで」

「あら、本はと言えばか弱い乙女を二人置き去りにして逃げたどっかの誰かさんが悪いと思うんだけど?」

「う・・・で、でもいくらなんでもこれはやりすぎだと思っただが」

「は?むしろここはこの程度で済んだと感謝するべき場所でしょ?」

「あんた何言ってるの?」的な見下した目でこっちを見ながらそん



なことを言われた。

だからと言ってしばらく行動不能になるくらいやるのはどうかと思うがそれを口に出せばまた面倒なことになるのは目に見えているためここは素直に従うことにした。

「はいはいありがとございました舞様」

「あんたそれ絶対馬鹿にしてるでしょ・・・ま、いいわ。今は私がお姉さんだからこれくらいは許してあげなきゃね」

「お姉さんね・・・」

両手を腰にあて胸をはる舞を見る。

確かにこの姿になって身長は逆転されてしまったがそこまで差があるわけでもない。

それに出ている所も実はオレの方が・・・

「?・・・なんで泣いてんのよ?」

「いや、ちよつと・・・世の中不公平なんだなって思って・・・」

「よく・・・わからないんですけど・・・?」

「わからなくていいんだよ・・・わからなくて・・・」

「・・・いろいろと気になるけどきりがないからそろそろ行くわよ」

「・・・そうですね」

「あ、副会長」

「あら、大島君今帰りかしら?」

舞にいじられ姫神にそれを見られながら、泣き、叫び、心に傷を負

いながらも成長して目的地に向かって歩いてしていると副会長に遭遇した。

「はい。．．．ところで副会長はこんな所で何してんですか？」

副会長の後ろを見ると親衛隊のみなさんが白い布のような物で包まれた何かをトラックに積み込んでいるのが見える。

「ああ、別にあれはただの「ゴミ処理」よ「ゴミ処理」  
「ゴミ処理」．．．？」

もう一度副会長の後ろを見ている。

よく見てみると白い布の間から何か肌色の細長いものが．．．

「あの．．．あれって人間の腕「ストップ!!」」

「．．．どうしたんですか？」

「姫神．．．いちいちあんな物を気にしていたらここではこの先生  
き残れないぜ？」

「えつと．．．」

「そう、あれはただのマネキンで肉人形で偶然人の形をしている肉  
片で断じて人間などではないんだよ」

「あ、あの．．．」

「あれは違う．．．あれは違う．．．あれは違う．．．あれは．．．」

そう、あれは人間などではないのだ。そう思いこむんだ！

「ねえ．．．大島君何かブツブツ言ってるけど大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫ですよ。時々優斗は変なことやる奴ですから」

「あれは違う．．．あれは違う．．．そう！あれは！」

「キヤー!!!」

「一人逃げたぞー!!!」  
「……台無しだよ!!!」

せつかくの暗示もその一言ですべて粉碎されてしまったオレはもう開きなおって声のした方に向くことにした。声のした方を見ると男子生徒が全力疾走しておりどんどん小さくなっていくのが見えたが誰一人としてそれを追いかけていなかった。

「あの、追いかけていいんですか？」

「ええ、彼には発信機を付けさせてもらったからね」

「発信機？」

「そう、発信機を使って相手のアジトを特定していつきにせん滅する作戦なの」

「なるほど……」

アジトと聞いて一瞬どれだけの人がオレを狙っているのか考えようとしたが脳がそれに拒否反応をおこしてしまったので仕方なく視線を男子生徒に戻すことにした。

「さっさと逃げなさいよこの負け犬！」

「う、うるさい！」

「は、悔しかったら何かしてみなさいよ！」

「く……く……」

「しょせんあなたなんてその程度なのよ！」

容赦のない親衛隊からの罵声。ちょっぴりだが男子生徒がかわいそうに思えた。

「う、うっせ!!!バーカバーカ!おめえらのかあちゃんデーベーそー!!!」

「おい高校生」

いくらなんでも高校生のいうことじゃないだろ・  
あの舞ですら呆れた表情で見ている。さすがにこんなことでキレる  
奴なんて・

「ウヴおあああああ!!」

いた。男子生徒が宙を飛ぶ。

なんとという空中横回転・これは4回転半は堅い。

そして男子生徒が飛ぶ前に立っていたあたりには・

「・・・・・・・・」

副会長が立っていた。

しかし息は荒く目はマジになっておりキレていることは明らかだった。一応言っておくが副会長でそれも大勢の人がいる中での行動である。

「・・・・・・・・は!?私は何を・・・?」

その上記記憶喪失である。皆が静まり返っている中、本当に大丈夫なのだろうかこの学園と思う傷心のオレであった。

第37話 美女と野獣と獣と変人と その3（後書き）

クロ「どーも、油断してたら風引いたクロです」

副会長「まったく・夜遅くまでパソコンなんて使ってるからそうなるのよ」

クロ「だって面白いんだもん」

副会長「だもん、じゃないでしょ！いいからさっさと寝て完全に治しなさい！」

クロ「でもな〜・・・」

副会長「あ、あんたのことを心配してくれる人だっているかも知れないじゃない！」

クロ「うっそだ〜こんなことで心配してくれる人なんて・・・」

副会長「・・・」

クロ「・・・わかりましたよ。次回に続きます」

### 第38話 美女と野獣と獣と変人と その4

てくてく・・・と軽い足音が狭い路地裏に響き渡る。

空を見ると陽はすでに水平線の向こう側に沈みかけその代わりに空を覆い尽くす無数の星星と大きな月が光り輝くのを待っている。

冬の夕暮れ

まだそこまで遅い時間ではないものすであたりはだいぶ暗くなつており特にこんな狭い路地裏ではほとんど真っ暗闇と言つてもいくらいの暗さになっていた。

だがそんな中そこを歩く人影が三つ。

一番前を歩いている人影はどこか楽しげに踊るように歩いている。

その後ろを歩く人影は落ち着いた様子でゆっくりと歩いている。

そして一番後ろにいる人影はよたよたと頼りない足取りで必死に前を歩く二人についていつてる。

少女たちは暗闇の中を歩いていく。てくてく・・・とそれぞれの足音を出しながら。

「さ、着いたわよ」

「や・・・やっとか・・・」

到着と同時に限界を迎えたオレはその場にへたり込んでしまった。

「何よ、情けないわね」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・う・・・うるせー・・・」

舞の悪態にこたえようと口を開くが疲れ切った体のせいでうまく言葉が出てこない。

言われたい放題なのは悔しいがこの調子ではどうすることもできないので息を整えることに専念する。

それにしてもこの体は不便だ。そこまで歩いたわけでもないのにこの始末。

それに今までは片手で楽々と持ち上げることのできた鞆も今では両手で持つても重くてうまくバランスが取れない状況になってしまっていた。

おかげでここに着いた時にはすでに辺りが真っ暗になっていた。

「ほらほら！さっさと立って！」

「わーたからそう耳元で怒鳴るな！今立つ」

舞の文句に促され服に付いたゴミを掃いながら腰を上げる。

目の前には何かのお店のような建物がありこれが舞の言っていた奴なのだろう。

「これがそうなのか？」

「ええそうよ、ささ入った入った！」

舞に後ろから押されて強引に店の中に入れられてしまった。

そして開かれた扉の先でオレ達を待ち受けていたモノは・・・

無駄な脂肪が一切ない（太くたくましい）腕  
とてつもなく大きな胸（筋）

（太ましい）足には一切無駄な毛がない

そんな感じの黒いゴスロリの服を装備したハゲおや・・・もとい乙女がオレ達を目の前で待っていた。

「あんら〜ん いらっしやい舞ちゃん」

「遅くなつてごめん！」

「あら〜いいのよこうして来てくれたわけだし」

駄目だ・・・目の前光景を直視できない。つーか前を見たら何かが終わるような感じがする。

目の前にあるのは人型の生体兵器かなんかなんじゃないんだらうか？と感じるほどだ。

「それで・・・今日私の相手をしてくれるのはどっちなのかしら？」

「ひいっ!？」

目の前の奴がこちらを向く。その小さな悲鳴はオレと姫神はたしてどちら口から漏れたものだらうか？

だがそんなことお構いなしと言わんばかりに目の前の人型生体兵器はオレと姫神に近づいてくる。

足を動かそうとしたがまるで体が石になったかのように動いてくれない。

わかりやすく言えば蛇に睨まれた蛙と言ったところだらうか？

「あ、今日はそっちのちっこいのだから」

空気の読めない舞にそう言うとおレをロックオンする生体兵器。

何か言おうにも例のあの人のせいであまくしゃべれない。

どうすることもできないオレは何とか首を動かし姫神に救援を求めようとしたが・・・



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

姫神は顔が青ざめてがたがたと震えていた。  
つまりオレを助けてくるやつは誰もいない、そういうことだ。

「ほら・・・こっちを向いて・・・」

がっしりと顔をつかまれ視界いっぱい広がる何か。

「あら・・・これはなかなか・・・」

鋭い目つきでオレを見つめる何か。うつとりとしながらオレを見る何か。

ア嗚呼これはやばい矢場い屋バイヤ買！逃げるニゲ露似下呂にゲロ！！

「ミギヤアアアアア・・・！！」

走った。とにかく走った。恥とそういうのは一切考えずに叫びながらもとにかくここから逃げ出すことだけを考えて走った。走って走って走って走って・・・

「んもっ！そこまで怖がることはないじゃない！」

「・・・あ、あのどっかに行っちゃいましたけど・・・」

「あら、それなら大丈夫よ」

そう言つと何かは姫神の肩をガシ！つとつかむ。

「・・・・・・・・・・へ？」

第38話 美女と野獣と獣と変人と その4（後書き）

クロ「どーも、完成直前でデータを吹っ飛ばして死にそうになった  
クロです」

会長「無様だな」

クロ「うるさい」

会長「まったく・・・ちょっとはそういうところをしっかりさせたら  
どうなんだ？」

クロ「今の俺はこれが限界なんだよ」

会長「そう言ってるうちは成長は期待できないな・・・」

クロ「これでも努力はしてるんだよ！・・・次回に続きます」

第39話 美女と野獣と獣と変人と その5

「ぜ・・・っは・ぜ・・・はっ、は」

体が暑い。

酸素が足りない。

今すぐ新鮮な酸素を、冷え切った空気を加熱した体に取り込まなければ、この心臓が爆発してしまいそうだ。それくらい心臓がバクバクと音をたてて動いている。

立ってられない。

そう思ってしまうと足だけでは身体を支えきれなくなり両手を地面につける。

しかしその両の手を使っても体を支えきることができずオレは冷えきった地面に寝転がるように倒れた。

「はっ・・・はっ・・・うっゲホゲホ！！」

地面で大の字になり荒い呼吸のまま焦って空気を吸い込んだ結果逆にうまく呼吸ができなくなり盛大に咳き込んでしまった。

「はっ・・・はっ・・・」

だがそんな状態でありながらも身体を起き上がらせる・・・起き上がらせざるをえない。

なぜなら・・・

オレはそこから逃げてきたー

そう逃げてきたのだ。

逃げてきたということは当然追う者がいるということになる。

そして追う者がいるということはたとえどんなにそこから逃げようが今がどんな状態であろうがそれに捕まってしまうはずだが終わってしまうということだ。

だから今身体が疲れきっていようと起き上がらなくてはならない・

・

「う……はっ……はっ……」

無理に身体を起き上がらせたため全身が悲鳴を上げる。

ついさつき疲れ切った身体に鞭をうち全力疾走をさせたのだから無理もないことだろう。だがそうしなければオレは今頃……

・  
・  
・  
・

はい死んだ。

今のでまちがもなく死んだ。最低でも三回は殺されたな、うん。

こんな時人間の想像力というのは恐ろしいものである。もしも逃げ遅れていたら……そんなことが容易に想像が出来るしまうのだから。

「……いやいやいやそんな無駄なこと考えてる場合じゃないだろオレ！」

そう現在絶賛逃走中なオレは捕まってしまうばさつき想像したあんなことやこんなことが現実になってしまいかもしれないのだ。むし

るそれよりひどいことだって……。だからもつとあの場所から遠くに……!

「……ってあれ?」

ここから離れるため立ち上がろうとしたオレはここであることに気づく。

後ろを見ても誰もいないのだ。

アレがどんな奴かはよく知らないが感じからして今のオレを放っておく奴ではないと思っていた。

しかし実際は後ろには人っ子一人おらず店の方にも動きがない。

今だに体力が回復していないので好都合ではあるがそれが逆に不気味である。

「さてどうしたもんか……ん?」

状況が見えないためもう少しここに留まるかそれとも逃げるか、などを考えているとお店の方で変化があった。

扉が開き誰かが出できたのだ。

周りが真っ暗であったが今のオレの眼はネコと同じものであるためその人のことがここからでもよく見えた。

そしてオレはそれに目を奪われた。

薄いピンク色の柔らかそうな唇。

さらりと流れそうな清らかな黒く長い髪。

吸い込まれそうなくらい澄んだきれいな瞳。

ほんのりと紅く染まった頬と白く整った顔はそれだけでひとつの芸術品と言えるくらい美しかった。

そしてそれに合わせた白いゴシッククロリータの服が従者となりその

美しい身体を飾り立てている。

「ああ・・・」

それはあまりにも・・・あまりにも美しかった。

正直に告白しようオレはその瞬間まぢがいなくそれに心を奪われたと。

さっきまで考えていたことなどすべてどっかに吹き飛び、ただうつとりとそれを眺めた。

一歩・・・また一歩・・・とそれに引き寄せられるように足が動いてしまっ。

まだまだ遠い。

ゆっくりとゆっくりと近づいていく。

ちよつと近くなってきた。

少しずつ少しずつ。

足がまるで自分のものじゃないように動く。

相手がよく見える距離まできた。

近くで見るとより美しい・・・

「・・・！！」

むごつもごつち気づいたようだ。

「ちょ……きい……!!」

よくよく見ると顔が真っ赤だ。

「だか……ゆう……!!」

いったいなになが……?

……ズビシ!!

「ッが!! イッテ……!!」

急に後頭部から衝撃、そして激痛。

「あんた……ま……たろくでもない考えてたわね……」

後頭部をさすりながら後ろを向くとそこには「またか……」といった具合にあきれた顔をした舞が立っていた。

「まったく……ほんとあんたは何かに夢中になると周りが見えなくなるわね」

「だ、だって仕方ないだろ! こんなきれいな人が……」

「あ……あの……」

「目の前に……って……え?」

「……」

目の前のゴスロリの人が口を開くとそこからは聞きなれた声が。あれ?もしかして……

「ああ、そう言えばまだ言っていなかったわね。この子姫ちゃんなの」

顔を真っ赤にして眼をそらす舞曰く姫神さんの人。

「・・・ああ、なるほど。確かにわかりづらいが姫神らしい特徴を持っている。」

「しかしこりやすごいな・・・」

まさか目の前に人物が姫神だったとは・・・思わずそう呟いてしまつくりの变化に驚いてしまつ。

「あの・・・あんまり見ないください・・・」

もじもじとどこか落ち着かない様子でそんなことを言う姫神。あの姫神がいきなりこんな派手な格好をさせられれば無理もないか。

「・・・あら？あれだけ真っ赤だった姫神の顔がいつきに真っ青に・・・？」

何か嫌な予感がしたオレはとりあえずこの場から離れようと足を動かした・・・が前に進まない。

どんなに足を動かしても周りの風景が変わらないが決して振り返ってはいけない気がする肩に何かが乗ったが決して振り返ってはいけない気がする少しづつ姫神達が遠ざかっていつても振り返ってはいけない気がするスルキガスルキガスルキガスルキガスル・・・

「やっと捕まえた・・・」

「う・・・うわあああああああ！！」

必死に振り切ろうと無茶苦茶に暴れるが時すでに遅し、がっちりとかまれた肩はまったく離す気配がない。



「ま、舞！助けてくれ！！」

「あー・・・ごめん優斗今度なんか奢るからそれでゆるして」

「ふっざけんな！そんなことで・・・いや！わかった！それでもいいからからだから・・・ちょ・・・ま！タス・・・みぎゃああ（ボタン！！）」

しんと店の周りが静まりかえる。どうやらこのお店は防音対策がばつちりのようだ。・・・それがどうしたって？このお店の人にも聞いてくれ・・・

第39話 美女と野獣と獣と変人と その5（後書き）

クロ「どーも、やはり冬にこたつとミカンは最高！なクロです」  
部長「……………」

クロ「おろ？どうした部長さん？」

部長「私の出番はいつなのよ〜！！」

クロ「ちよ…スト…首が…！！！！」

部長「前回の登場からもう一か月以上経ってるのに出番なしって…  
・あれ？」

クロ「……………」

部長「返事がないただの屍のようだ…………し〜らないっど。あ、  
次回に続きますから」

第40話 人生楽なし苦だらけだ その1

「うわああああ!! やめて、やめてくれえ!!」

「うふふ・・・大丈夫よ・・・」

頭が痛い

「ひゃああ・・・い・・・いやだよ・・・」

「安心してここには私たちしかいないから・・・」

身体が軽い

「うああ・・・も・・・もう・・・ゆるし・・・」

「あら? まだまだこれからよ?」

なんで? どうして? そんな疑問がぐるぐると頭の中を満たすがその答えが返ってくることはなかった。

「ええと・・・優斗・・・さん?」

さも困惑した表情でこちらを見る姫神さん。ああ、あなたが何を言いたいのか、痛いほどわかりますよ。

「・・・!!・・・!!」

対して姫神の隣にいる奴はプルプルと震えながらお腹を抱え地面にうずくまっている。そろそろ帰ってください。

「あは！あははははは！！ゆ・優斗・そんな・そんな恰好で・そんな死んだ魚のような眼をして・・あははははははは！！」

涙を浮かべながらバンバン！！と地面をたたいて大爆笑している舞さん。笑いすぎだコンチクショウ。

・・・オレって確かここに髪を切りに来たはずなんだよな・・・どうしてこんなことになってるんだ？

改めて今の自分の姿を見る。

目に飛び込んできたのは飾り気のない見慣れた男物の学生服・・・ではなくきらきらと光るフリフリの付いたこの上なく派手な黒色のゴスロリ服であった。

・・・ええ、もうこれを最初に見た時はピシリ！と何か嫌な音がしてその後これを舞達に見られた時には何か大事な物が砕け散る音が聞こえましたとも。

だからもう大丈夫、姫神にいくら見られようと舞にどんなに笑われようと何とも思わないし何も感じない。だから大丈夫さ、うふふ・・あれ？目から塩水が・・・

「あの・・・本当に大丈夫ですか・・？」

「ああ・・心配かけてすまん」

あれから少ししてオレ達は寮に戻るために月明かりの夜道を歩いているところだ。例のごとくオレと姫神は白と黒のゴスロリのままであるが。ちなみに舞の奴は戦闘不能になってたので置いてった。もう知らん。

「姫神の方こそ変なことは・・・されたよな・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・すまん」

ああ、思い出すだけでも嫌な汗が出てきた。

あのいやらしくも洗礼された動きをした腕。

あれだけ派手に暴れて服にも身体にも傷ひとつ付けることなくこれに着替えさせるのだから恐ろしい。

・・・それでいてオレ達がされたあんなことやこんなことは誰かに知られれば間違いなくgotto 刑務所行きになるくらい恐ろしいものでもあるんだけどね・・・

「優斗さん・・・それで・・・衣服はどうしましょうか・・・？」

「ホントどうしようかね・・・」

オレ達のもともと着ていた服と荷物はあれに没収されている。

それについてあれ曰く「あなた達みたいなかわいい子にこんな服を着せるなんて私が許さないわ!」と言って返してくれなかった。刑法235条って知ってますか？

一応明日は休日であるため特に困るようなことはないものの言い方を変えればもう一度あそこに行かなくてはいけないということである。

「舞ちゃんに取って来てもらうというのは・・・」

「ああ、ダメダメ。あーゆうのは飽きるか満足させないとまず諦めんタイプだからな。いくら舞でもたぶん無理だろ」

「それじゃあ・・・また行かなくちゃいけないんですね・・・」

「姫神・・・こういう時は開き直って明るく考えるといいんだよ」

「優斗さん・・・・・・・・・・」

「……………」  
「そんな涙を流しながら笑ってそんなこと言っても説得力がありません……………」

ナミダジャナイヨココロノアセダヨ。

……ええと、新手のイジメですかこれは？

「ネコくーんおーそーいーぞー」

「あら？ずいぶんと派手な格好で来たわね」

「優斗〜ずいぶん気合入ってるね〜」

「あら〜優ちゃん大胆ね〜」

「……………」

自分の部屋に戻ってみれば4人がこたつでくつろいでおり一人が黒こげで部屋の隅に放り捨てられてました。あれ？オレの部屋は一人用だったはずんだけどな……？

今日はこの後部屋でゆっくりする予定だったんだけど……これはなんだ？あれか？オメーの休む時間ねーから！！っていう新手の嫌がらせかなんかなのか？

だがやはりそんな疑問に答えしてくれる奴などいるはずがなくただ時間だけが無情に過ぎていった。

第40話 人生楽なし苦だらけだ その1（後書き）

クロ「どーも、10万PV!?!というバレンタインプレゼントを貰ったクロです」

優斗（男）「まさに奇跡としか言いようがないな・・・こんな小説以下と言える小説がここまで伸びるなんて・・・」

クロ「いや、これはマジで驚いたぜ・・・みなさん本当にありがとうございます」

優斗（男）「つつてもバレンタインはこれ以外何も貰ってないけどな」

クロ「ふ・・・これだけで俺は十分さ・・・あれ？目から汗が・・・次回に続きます」

第41話 人生楽なし苦だらけだ その2

「中村これの最終調整よろしくね」

あれ？なんだろうこれ？

「はい、わかりました」

オレの中に何かがどんどん溜まっていくぞ。

「あ、由美子ちょっとリモコン取ってくれないかしら？」

止めようとしても止まらない、どんどん溜まっていく。

「はーいどーぞ」

何だかわからないけど嫌な予感がするぞ。ああ、まずいまずいまずいまずい……

ープツンー

あ、

オレは

その瞬間

何かが



キレル

音を

聞いた

「っふ」

その瞬間笑いなのか、ため息なのかよくわからない微妙な音が、自分の口元から発せられた。

だがそんなことはどうでもいい。

今すべきことは押しとどめていた物を全て吐き出す・・・いや爆発させることだ。

いまだに周りにはうるさいがそんなことは関係ない、自分の中の物を爆発させるために肺の中に空気を溜めて溜めて溜めて溜めて・・・

「お前ら・・・いい加減にしろぉー！！！！」

今まで溜めこんでいた物も含めて一気に爆発。夜中の男子寮に少女の絶叫が木魂した。

「えー・・・これから今回の件についての事情聴取を始めたいと思います。聴取中、他の人々は私語を慎むように」

「・・・(ばりばり)」

「・・・(もぐもぐ)」

「……(むしゃむしゃ)」  
「……(うきゅうきゅ)」

先ほどの絶叫からしばらくして落ち着いたオレはここにいる全員から今回の事情を聞くことしてるのだが……はい、誰も聞いてませんねこれは。とりあえずコタツから出る貴様ら。

「……まあいいや……まず部長さん！どうしてここにいるのか事情を説明してもらいますよ！！」

「……(もぐもぐ……)」

人ん家のコタツに勝手に入りながら三色団子を食っている部長さん。いや、なんでそんなきよとんとした顔してはるんですか。

「部長さん……話聞いてましたよね……？」

「あはは、大丈夫よネコ君！だからそんなジト目にならないならない！えつとねー私たちは……」

「ぶ……部長さん……すべての機材……運び終わりましたよ……」

「ん……ありがとねー。ごめんねーいろいろ無茶言っつて」

「い……いえ……何のこれしき……」

「そんな息があがった状態でそんなこと言っても信じられないよ健康人」

「それで……」

「いやいやいや・・・ちょっと待ってくださいませんか？」

「え、何？私変なこと言ったかしら？」

「変なこと言いまくりですがな。オレは今日取材をするだとかそういうのは一切聞いてませんよ？」

「だってー先に言っちゃったならネコ君にいろいろ準備されちゃうじやない。それじゃあ本当の取材にならないわ。嘘偽りのない真の情報を私は欲しいの・・・そう、つまりこれは必要な事だったことなのよ!」

なにやらポーズを決めながらとんでも理論を展開し始める部長さん。どう考えても必要ないことです。

「・・・あんのー舞い上がってポーズ決めてる所で悪いんですけど、オレの記憶が正しければ事前に話し合いをしてから取材をすることになっているのですが？」

「フッフッフッフ・・・甘いわよネコ君・・・今の世の中嘘を嘘と見抜けなければその先にあるのは真つ暗闇な人生だけなのよ!」

「・・・・・・・・」

なんつー部長理論・・・言ってることは間違っちゃあいないんだがいくらなんでも無茶苦茶・・・いや、そんなこといまさらだな・・・結論　オレは部長さんを過小評価しすぎてみたい（悪い意味で）。

「はあ・・・もういいです・・・大体の事情はわかりましたから」

とりあえず部長さんの事情についてはよく分かった・・・問題についてもよく分かったけど・・・

「ええーこれから面白くなるのにー」

「いや、面白さとか求めてねーですから」

「ネコくーんたまには遊び心とかも必要なんだよー」

「・・・それで次の質問なんですけど・・・」

「おーいネコくーんスルーはよくないぞー」

「ここに入った方法と・・・」

「うわーん！無視だけはやめてよー！！」

泣きながらオレにすがりついてくる部長さん。泣きたいのはこっちなんですけど。

「無視だけはー！！」

「ああもつー！！後でいくらでも相手をしてあげますから今は素直にこっちの質問に答えてください！！」

「・・・ホント！ホントね！！わかったわお姉さんになんでも聞いて！あることないことなんでも喋っちゃう！！」

その一言であっさり復活する部長さん。しかも余計テンションあがってるし・・・

「いや、あることだけで十分なんですけど・・・それじゃあ、ここに入った方法となぜ健人のやつが黒焦げになっているのか・・・この二つについて答えてもらいますよ」

「ああ、それはね・・・」

そして明かされる衝撃の事実とは！？

「・・・あれ？次回に続くの！？」

第41話 人生楽なし苦だらけだ その2（後書き）

クロ「どーも、再び風を引きそうになったクロです」

ユウト（女）「油断しすぎだこの馬鹿」

クロ「昔はこの程度で風引かなかったんだけどな・・・遅れて申し訳ない・・・」

ユウト（女）「そんなこと言ってますがその間地球防衛してたり傭兵やってたりしていました」

クロ「それを言うな！それにうまく文章を書けなくて苦労してたんだよ！」

ユウト（女）「あれだけ時間をかけておきながらこの文章・・・もはや哀れだな・・・」

クロ「・・・精進します・・・次回に続く」

## 第42話 人生楽なし苦だらけだ その3

「健人君が黒焦げになっちゃった理由はいきなり小さな女の子が電撃をあびせてきてさー・・・」

「部長さんいきなりで悪いんですがちよつとストップ。・・・よく聞こえなかったのもう一度言ってくれませんか？」

「えつとねー女の子が電撃を・・・」

「えーと・・・もういいです・・・なるほど、オーケーわかりました部長さん。まったく意味がわかりません」

「ネコ君わかつたのかわからないのかどつちなー？」

べたりと溶けたアイスのように机にへばりついた部長さんが心底どうでもいような表情でそんな質問をしてきたがあまりにも意味不明な状況に頭を痛めるオレにはそれに返すだけの気力も今はない。小さな女の子が電撃をあびせてきたってなんだよ・・・SFやファンタジーじゃあるまいし、そんなこと・・・そんなこと・・・ありえるだろう。

だって、目の前にはそんなSFやファンタジーに出てくるようなネコ少女（元男）を作った（変態）天才科学者がいるのだから。

「はぁ・・・」

思わずため息が出る。

ただでさえ先ほどの聴取で頭を痛めているのにお次はさらに上のレベルときた。

できればこの問題はそのまま触れずに闇に葬り去りたいところではあるが、ここで釘をさしておかないと「暇だったから量産型作ったわー」とかいう話を後で聞くはめになるかもしれないので無視をするわけにはいかないのだ。



なんですがこれは先生と何か関係があるんですか？」

「電撃少女・・・ああ、迎撃システムのことを言ってるのね」

「迎撃システム？」

「そ、ドアの修復の時に私が付けたものよ。あんた目当ての不埒な輩がドアに近づいた時に発動する仕組みで少女型防衛システムで油断させた所で電撃で無力化して連行。×××（音声化できません）で

（音声化できません）して解放するわ」

「先生、それは・・・さすがに・・・」

「・・・さすがにそれは・・・ねー？（バキューン！）して（バキューン！）するなんて・・・ちよつと・・・エグ過ぎだぜ・・・とりあえず文章化はどうやってもすることができないので男の純潔を失うとだけここに記しておく。」

「あれ？別に大丈夫よ。ちよつとしたトラウマになるだけだし何人かはむしろのめり込んでいったもの」

「いや、それ全然大丈夫じゃねーですから」

「っーか（ヒヤア！）して（ヒヤア！）なんてされれば軽いトラウマどころじゃないと思うのだが。」

「でも、それぐらいしないとあんた何度もつけ狙われるわよ？」

「だからと言って、さすがにそれはやりすぎだと思っんですが・・・」

「そう・・・それじゃあ、設定を変えて連行先を私の研究室ラボに変更して・・・」

「やめてください、死人が出ます」

「別に大丈夫よ。ちよつと強制労働させるだけだから」

「いや、それが危ないんですよ」

「h b u j d a s p f o a j o d !（もぐもぐ・・・）」

「宇宙人は黙ってる。っーかいつまで食ってたんだよ」



「うーだー！ネ〜コ〜くん〜！」

「あーもー！後で相手するって言ったじゃないですか！もう少し待ってください！」

「あはは〜大変そうだね〜優斗」

「いいからお前も手伝え！もしくはシャラップ！」

だが、そんなことを言って静まる連中ではないため、再びこの世の終わりになるオレの部屋。

その数十秒後に再び男子寮に少女の叫びが木魂したのは言うまでもない。

第42話 人生楽なし苦だらけだ その3（後書き）

クロ「どーも、脳内保存は出来てもそれを文章化出来ないクロです」  
舞「あんたねーこれぐらいはもうちよつと早く更新しなさいよ」

クロ「こつちとしてもどうにかしたいんだけどね・・・」

舞「はあ・・・少しずつだけ見てくれる人は・・・一応・・・たぶん・・・増えてるんだからがんばりなさいよ」

クロ「うん・・・一応・・・たぶん・・・見てくれる人はいる・・・はずだから俺頑張るよ！」

舞「よーし！よく言った！この調子で・・・！」

クロ「あ、今度テストあるから次回の更新は少し伸びますんではないですか」

舞「・・・この馬鹿ー！」

クロ「・・・えー、更新は今後も遅くなる可能性はありますが完結だけは絶対にさせるつもりなんでそこまでつきあってくだされば幸いです。次回に続きます」

### 第43話 人生楽なし苦だらけだ その4

春、一言にそう言ってもそこにはいろいろな意味があるだろう。

長い冬の終わりと暖かな春の始まり。

眠っていた動物や植物達の目覚め。

始まりと終わり、出会いと別れ。

そして今、ここでも新たな春が始まるうとしていた……。

チュンチュン

チュンチュン

そんな鳴き声に誘われて空に目を向けると、そこには雲一つ無い抜けるように青い空とスズメ達。柔らかな日差しの中を優雅に舞っていた。

その暖かな日差しは地上にも降り注ぎ、起きてきた動物達がまた眠ってしまうのではないのだろうか？、と想着ってしまうほどの心地好さを与えてくれる。

だがそんなゆったりとした風景に交わらない物が一つあった。

それは白衣に身を包んだ女性がその光景の中で全力疾走しているのだ。

その女性を通つた後にすでに穏やかな空気など存在せず、驚いたスズメ達が一斉に逃げ出した後だった。

「・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ」

しかし、女性はそんなことお構いなしと言わんばかりに走り続ける。何か遅れそうなのかと女性に問えばきつと否と答えるだろう。なぜなら女性は走りながら笑っているからだ。まるでこれから遠足に向かう小学生のような楽しげな笑みを浮かべながら走り続けている。

ふと、女性の足が止まる。

そこにあつたのは雨のように桜の花びらを降らす大きな木。そしてその雨に濡れる一人の女性。

「やっと会えた・・・」

先ほど走っていた女性がおもむろに口を開く

「あなたが・・・私を呼んだの？」

桜の木の女性が温和な笑みを浮かべてそれに答える。

「ええ・・・あなたに一つ頼みたいことがあつてね・・・」

そこで一度言葉を区切る。そして・・・

「あなたの頭を解剖させて！」

「・・・それが私たちの最初の出会いだったわね・・・」

「そういえばそうだったわね」

「へーそうなんですかー」

「いや、へーとかそんなレベルじゃないでしょそれ」

他にもいろいろツツコミたいところはあったが、まず、なんか納得をしちゃってる部長さんにツツコミを入れる。

「なんだってこんなことになっちゃってるかなー・・・」

そんな愚痴がつい、口からこぼれてしまったが、結局その言葉は誰の耳にも入ることはなかった。

あの後、オレは心を鬼にして全員を正座させて説教。

さすがに正座は堪えたのかしばらくの間は静かになっていた。これでやっと静かになる、そう思っていたのもつかの間。

「ああ、そういえば酒を持って来てるのを忘れてたわ」

その一言で一気に状況が一変してしまう。

その後はあれよあれよと流れ流され今にいたるといっわけだ。

いつの間にか停止していた皆さんは今アクセル全開・・・どこからリミッター解除している状態になってしまっている。

こうなってしまうては、もうどうしようもない。

要は自然災害と同じなのだ。終わるのを待つしかない。

とりあえずお茶でも飲んでいったん落ち着くのを・・・。

ずずず・・・

・・・ん？

「あつっつちやいいい！ー！」

し、舌が、やける！やける！

「何やってんのさ優斗」。はい、水」

「ふ、ふまん、ひろー・・・」

士郎から差し出された水に舌を差しこんで冷やす。  
じんじんとした舌が緩やかに冷えていくのを感じる。

「まったく、今の優斗は猫舌なんだからもっと気をつけてよね」

士郎の言うとおりだ。

確かにさっきのは少し注意が足りなかったな。

しかし、猫舌の人はいつもこんな感じなのだろうか？

もしそうなら、かなり不便だし、かわいそうに思えてしょうがない  
のだが。

「ところで・・・どうして、橘先生はネコ君のお姉さまに興味を持た  
れたんですか？」

舌を水で冷やしているとそんな言葉がオレの耳に入った。

声の主は部長さん、どうやらさっきの先生の話に興味を持ったらし  
くメモを取りながら熱心に話を聞こうとしている。

「ああ、私が由美子に興味を持った理由？それはね、こいつが私を  
抑えて大学の試験でトップを取ったからよ」

「トップ・・・ってことは橘先生が勉強で負けたってことですか！？」

部長さんの顔が驚きで染まる。確かに事情を知らずに先生が学で負けたと聞けばこんな反応をしてしまうのも無理はない。事情を知らなければ・・・ね・・・

「んー・・・結果的にはそうだったんだけどちょっと違うのよね」「・・・？」

「そのことを由美子に聞いたらね、なんて答えたと思う？」勘で答えを選んだら全部正解してました」とか言うのよ。正直最初は信じられなかったわよ」

そう、我が姉、大島由美子は学校の試験などといった重要な局面においては何故かとんでもない強運を發揮してしまう体質なのだ。マークシート方式であれば満点は確定。そうでなくても7割以上はほぼ確実に取ってしまうというほどの強運っぷりである。

しかしながら、それに対して同じ血が身体に流れているはずのオレはそれに反比例しているかの如く不幸が現在進行形で増え続けている。

今日のこと然り、この姿になったこと然り・・・正直、家の姉はオレから運を吸い取ってるんじゃないんだろうかと思えてならない時がある。

「ほえ〜それはすごいですね〜。他にはどんな伝説があるんですか？」

「ああ、ちょっと待っててくれない」

子供のように目を輝かせる部長さんを制してこちらを向く先生。こ

の流れで行くところくなことがないのは経験上わかっている。

「優斗、お酒のつまみが欲しいわ、大至急用意して」

「はい、予想どおりですね。相変わらずこの人の辞書に礼儀という言葉は無いらしい。」

「あの、先生、ご期待のところ悪いんですが、今の家にはつまみになるような食材が無いんですけど」

こればかりはどうしようもない。つーか酒だけ持ってきてつまみをその家主に作らせるってそこんところどうなのよ。

まあ、結局その目論見は崩れ去ったわけなんだが・・・

「あら〜それなら大丈夫よ〜」

・・・とか思っていたけどそんなことはなかったぜ！

お願いだから空気読んでください。

「あら由美子、何か良い案があるの？」

「良い案かどうかはわからないけど、確か光のラボにマグロがあったはずよね」「ああ、なるほど。・・・もしもし、あたしあたし、大至急用意してほしいのが・・・」

「ヘイ、待てティーチャーズ」

なんかあまりにも自然な流れにスルーしてしまいそうになったが、先ほどの会話で意味不明な単語が紛れ混んでいたのをオレは聞きのがさなかった。

「マグロってどうゆう意味ですかマグロって」



「別に、ただ実験用に水槽で飼っていたマグロを今ここで食べようと思っただけよ」

「いや、十分大事ですからそれ」

「別に大丈夫よ、あくまで実験用にする予定だった奴だからまだ何にも手を加えていないわ」

「そうゆう問題じゃないでしょ。．．．それに姉さん達はどうやってマグロを食べるつもりなんですか？」

「それはもう、そのままガブっと．．．」

「どうなったらその発想にたどり着くんだよ」

二人合わさることで常識さも2倍どころか2乗になってしまっている。ただこの二人なら実際にやりかねんと思えてしまうのが怖い。

．．．つーかこの流れだと実際にやっちまうぞ、これ

「あーと．．．先生、今からオレ買ってきますんでそれキャンセルしといてください」

さすがに家をスプラッターハウスにさせるわけにはいかないためにもここは動くしかない。

「買ってくる．．．たつて、あんたマグロ売ってる店なんて知ってるの？」

「とりあえずマグロから離れてください。リクエストはなんかありますか？」

「マグ．．．」

「もちろんマグロを除いてですが」

「．．．お任せするわ．．．」

「私も．．．」

「．．．今のは10:0で安易なオチを言ったそっちが悪いですよ」

ものすごく残念そうな顔をしている教師組。そうまでして食いたかったのか。

「・・・あ、そだ、土郎悪いんだけど荷物運びとして一緒に来てくれないか？この身体じゃ少し大変でさ・・・」

「あー・・・ごめん。僕は先輩のサポートをしなくちゃいけないから手が離せないんだ・・・」

「そうか・・・」

「その代わり、その後の料理の手伝いはさせてもらおうよ。悪いけど荷物運びは健人をお願いしてくれないかな」

「事情が事情なんだ気にすんな。・・・さてと、それじゃあ健人を叩き起こすとすつか・・・」

ゆっくりとその場から立ち上がり健人に近づいていく。

今まで部屋の隅にほったらかしにしておいて、用があるからと叩き起こすのは少し気が引けたがそこは緊急事態だと割りきることにした。

「健人ー、起きてくれー、頼むー」

せめてもの、とゆうことで出来る限りやさしく揺り動かして起こそうとする。

「・・・う・・・」

しばらく揺り動かしていると声が聞こえてきた。意志の籠もったはつきりとした声。

閉じていた健人の瞼はゆっくりと持ちあがっていき、やがて目と目が合う。

「よ、起きたか」

「……………」

まだ寝ぼけているのか返事が返ってこない。

よく見ると呆けている瞳が少しずつ焦点を作っていくのがわかる。

そして……

「……おわあああああああ！！！」

何を驚いたのか叫びながら高速で後ずさりをする健人。ずいぶんと器用なマネすんな。

「お、おおおおおお前なんて格好してんだよ！！！」

なんて格好とはこのゴスロリ服のことを言ってるのだろう。いろいろと忙しかったためそのままにしてしまっていた。

「あーと……これは、ほにゃらららら」とゆう訳でこんな格好になってる。とりあえず落ち着け」

「な、なるほど……しかしお前そんな格好して大丈夫なのか？そゆうゆの苦手なんだろ？」

「……うふ、うふふ……慣れれば案外平気なもんナンデスヨ？」

「優斗く目が死んでるよ」

もはや心は砕かれた身、この程度のこととはもうナレマシタトモ。エエ

「……えっと、それで何か用があるのか？俺をわざわざ起こしたわけだし」

「……あ、そうそう、実は買い物に行くんで健人にその荷物運び

を手伝ってほしいんだよ」

「なるほどね・・・よし、任せられた！俺に任せろ！」

「サンキュー健人。すまん」

「別に礼を言われるほどじゃねえよ。・・・ただその格好はいろいろとまずいからちゃん到着替えてくれよ？」

「んなこと、当たり前だ。今から洗面所で着替えてくるから少し待っててくれ。・・・覗くなよ」

「の！？バ、バカ！いいからさっさと着替えてこい！」

ちよつとした冗談で言ったつもりなんだがどうにも本気で捉えてしまったようだ。

いくら健人は単純とはいえ、いつもならそこまで過敏に反応することはないんだがな・・・先ほどといい、何かあったんだろうか？

「ありがとうございます！」

威勢のいい声で挨拶を受けながらお店を出る。

空を見るとどうやら曇っているらしく、いつもなら見ることできるきれいな星空も今は真っ暗闇だ。

あのきれいな空を見るのはわりかし好きであるため少し残念だ。

「ゆ・・・優斗・・・」

そんなことを考えていると後ろから声をかけられる。

先ほどの店員と対称的につらそうな声だ。

「どうした、健人？」

「お、お前・・・本当に・・・これだけの量を使うのか・・・？」

健人の両手を見ると買い物袋が左右合わせて六つ。その全てがほとんどパンパンに詰まっている状態である。

「そうだな・・・今回は部長さん達も含めて6人もいる大人数だから、多すぎるってことはないと思うぞ?」

「ま、マジかよ・・・」

その答えに疲れた表情を見せる健人。

今回はさらに運悪く、家に食材が無いという事態も重なってしまったため、これだけの量を買わざるを得ない事態に陥ってしまったのだ。

「すまん・・・実は少し予測が甘かったところもある・・・まさかここまで量が増えるとは思ってなくて・・・」

実際にお店を見て回っていると、アレが必要、これが必要・・・といろいろ買う物が増えてしまい、気がつけばこれだけの量になっていたのだ。

「とにかく、これはオレのミスだ。全部は無理だけど何個かはオレが持つよ」

「・・・!?!?」

「・・・?どうした?健人」

買い物袋を持ってやろうと腕を伸ばすが、なぜかそれを渡そうとしてくれない。

不思議に思い健人を見ると何だか妙な表情をしている。今まで見たことない表情だ。

「い、いや！やっぱり大丈夫だ！この程度！」

「大丈夫って・・・さつき・・・」

「そ、そうだ！そういえば、皆を待たせてんだから急ごうぜ！」

「な！？お、おい、いったいどうしたんだよー！？」

オレの必死の叫びもむなしく、健人はすでに彼方に消えてしまっていた。

この姿になってから、どうにも健人の様子がおかしいことが多い・・・  
・何があったのだろうか・・・？心配だ。

とにかく、健人の言ったことには一理ある。先生達をこれ以上待たせるわけにはいかないので、オレは急いで健人の後を追いかけることにした。

第43話 人生楽なし苦だらけだ その4（後書き）

クロ「どーも、お久しぶりクロです」

姫神「お待たせしてしまってますし申し訳ありませんでした・・・！」

クロ「なんだかんだでいろいろピンチですがそれは忘れてレッツエ  
ンジョイ！」

姫神「それはいろいろとまずいと思いますよ・・・」

クロ「もはややばいのは決まってるんだから、これはこれからのた  
めの休息だからいいんだよ」

姫神「でも、今やっておけば後で役に立つと思いますけど・・・？」

クロ「う・・・ま、まあ・・・今回だけってことで・・・次回に続き  
ます」

#### 第44話 嗚呼、騒がしき日々よ その1

「ぬ……むぁ……」

沈んでいた意識がゆっくりと覚醒していく。

いまだに閉じようとする重たい瞼に抗い、何とかそれを開いていく

「……あれ？」

最初に視界に飛び込んできたのは、すでに見慣れたの自分の部屋の白い天井……のはずなのだが、なにか違和感を感じる。

状況確認のために首を廻らすと、どうやらここは洗面所のようなようだ。

「何だつてこんな所に……？」

だが、何故自分はこんなところで寝ていたのか？そのあたりの記憶がひどく曖昧でうまく思い出せない。

「……とりあえず起きるか」

眠気で回らない頭では考えても仕方ないという結論に至り、部屋に戻ってからゆっくりとそのことを思い出すことにした。

……が、どうやらその必要はなかったようだった。

「……どこだここは？」

洗面所の扉を開けた瞬間ふと、そんな言葉が口から漏れてしまう。

どこ？と言ってもそんなこと自分が一番よく知っている。もちろん



自分の部屋だ。

ではいったい何故そんな言葉が出てきたのか？

答えは簡単、いつもの自分の部屋ではありえない光景が目の前に広がっているからだ。

軽く辺りを見渡しただけでもそこに広がっているのは、ゴミ、ごみ、GOMI、ゴミ山ならぬゴミ平原が目の前には広がっていた。もはや、あるべき床はどこを探しても見当たらず、代わりに見えるのは空の酒瓶とゴミの塊だけだった。

その光景だけで今のオレの眠気を吹き飛ばすには十分、そのおかげで先ほどまで不鮮明だった記憶も一気に浮上させられた。

あの買い物の後、オレは休む暇も無くすぐに料理を作れと命令された。

できればここで文句の一つでも言いたいところであったが、ここでヘタに好感度を下げてしまうと即 go to マグロルートにご案内されてしまう恐れがあった為、渋々ながらもそれに応じるしかなかった。

だが、これでもこの程度のことは昔から何度もこなしてきた身、それに今回は土郎というサポーターまでついているのだ、余程のことが無い限り問題は……。

「ネコくん。おかわりまだー？」

出来上がった料理のできればえを確認しているとキッチンにそんな声が響き渡る。

作業を一旦中断し意識をそちらの方に集中する。

「・・・えっと部長さん？オレの記憶が正しければ確か数分前にそれなりの量の料理を運んだはずなんですけど・・・？」

「え？あれならもうみんな食べちゃったんだけど？」

ジト目になりながら質問をするが、きよとんとした表情であっさり返された。

あれだけの量を数分で食べ切ったのかよ・・・

「・・・もう少しで出来るんで、あつちで座って待っててください」「わかったけど・・・できるだけ早くねー」

そう言つて部長さんはキッチンから居間に戻っていく。

部長さんが完全にいなくなったのを確認すると小さいながらも大きなため息が口から出てしまう。

「ゴツド・・・確かにオレはトラブルには慣れっこ、とは言いませんが・・・けどさ、だからといって試練を望んでいるわけではないんですよー！」

とりあえず状況を説明しよう。

今現在問題となっているのはなんと三点もある。すごい！まったく嬉しくない！

一つ目は部長さん。

すでにお気づきの人もいるかも知れないがこの人の問題は大吃いであることだ。

あのあまり大きくない身体、それにそれなりのオプションを装備しておきながら食べる、食べる・・・

しかし先生といい、姉さんといいなんでオレの周りの人達は消費が激しいのにスタイルが良いのがあるだろうか？ 実に不公平である。心は男の子でもオプション装備というのは欲しいものナンデスヨ？

・・・話を戻そう。

部長さんの食べる能力についてだが、食べる量、食べるスピード、などすべてにおいて先生達とほぼ同じであった・・・つまり、単純計算してオレの負担は二倍から三倍に増えたことになったのを意味していたのだ。

それにより、このオレは地獄を見るはめになった・・・

二つ目の問題は健人だ。

健人の奴は買い物から戻ってから何か様子がおかしかった。

やたらとそわそわしており、その上挙動不審・・・話を聞くこうとしても大丈夫の一点張りでもまったく教えてくれない。

おかげで、どーにも気になってしまい、調理に集中できない時があった。・・・ホント何があったんだらうか？

三つ目は士郎・・・ではなくオレである。

もう少し正確に言えば問題はオレの身体にあったのだ。

「士郎、悪いけど火止めてくれ。今手が離せないんだ。」

「了解」

てく・・・てく・・・てく・・・むぎゅー！

「ぶつつつつつつ・・・！！ぎゃあああああああああ！！！！」

「うわあー！ご、ごめん優斗！」

・・・と、このように狭いキッチンではオレのしっぽを踏んでしまう事故が多発してしまうことが判明。

それにより、オレが戦闘不能に陥る恐れが出てきてしまった為、土郎は早々に戦線離脱させてオレ一人ですべての作業をせざるを得なかった。

今言った三つの問題により、この後オレは皆が帰るまで休む暇なく働き続けることになり、あまりの疲れにこの惨状のまま眠りに・・・

「・・・ってあれ？」

これですべてのことを思い出したはずなのだが、まだ疑問が残っている。

なぜオレは洗面所なんかで寝ていたのか？

寝る直前の記憶は疲れのせいであいまいではあるものの、いくらなんでも洗面所で寝るなんて間抜けなことするはずがない。

「うっ・・・む？」

寝る直前の記憶を必死に思いだそうとしているとあるものが目に入った・・・いや、入ってしまった。

「・・・（もぞもぞ）」

「・・・」

視線の先にあるのはベッド・・・とその中で丸まった何か。

・・・もう一度言うておくがここは自分の部屋である。他の誰かの部屋でもなければ、誰かと一緒に住んでいるわけでもない。

つまりだ何が言いたいかというと、いい加減勘弁してください、ということだ。

「とか言っても無視するわけにもいかないしな・・・」

盛大にため息を出しつつも丸まった物に近づいていく。

途中何度かゴミ山に足を引っかけそうになったものの何とかたどり着くことができた。

「さくて・・・そろそろご退場願いまししょうかお客さ・・・ん!？」

はぎ取るように布団をめくりあげて、その下にあったものを確認するとオレは驚愕してしまった。

実に柔らかな布団に身体を預け、気持ち良さそうに眠っている部長さんだった。

部長さんが寝ている、その程度のことでは驚いたのではない。問題なのは今、部長さんは下着とYシャツ以外身につけていないことが問題なのだ。

「な・・・な・・・な・・・なー!!」

「あれ・・・ネコ君どうひたの・・・ふああ・・・」

こちらに気がついたのか、大きな欠伸をして、眠そうに目をこすりながらこちらに話かけてきた。

しかし体勢を崩した結果、先ほどまで見えそうで見えなかった部分完全に露になってしまい実に危険な状態に陥ってしまったている。

「ぶつぶぶ部長さん!! いいから身体を隠してください!早く!!」

「ん・・・ちよつと待って・・・今メガネかけるから・・・」

そう言つて部長さんはあのアクセサリーのようなメガネを探しているが見つからないようだ。

つかアレ必要な物なのか・・・？

「ネコくーん私のメガネ知らない・・・」

「そ、それよりもオレの質問に答えてください！そうしたら探すの手伝いますから！」

とりあえず、部長さんから目をそらすことで何とか会話をできる状態に持つていく。

メガネなんていいから早く身体を隠してくれ！

「うー・・・できるだけ早くしてよ・・・」

やや不満げな表情を浮かべながらもこちらの話を聞いてくれるようだ。

そんなにメガネが大事なのだろうか？

「時間をかけるつもりはありません。こちらの質問はただひとつ、どうして部長さんはこんな所にいたんですか？」

「私があここにいた理由・・・えつとまず私は部屋に戻る途中で忘れ物があつた事に気がついたのよ」

「ふんふん」

「それでネコ君家に戻ってチャイムを鳴らしたんだけど返事がなくて・・・」

「なるほどなるほど」

「そこでドアノブに手をかけると鍵がかかって無かつたのよ・・・ほら、テレビとかでもよくあるじゃない、そういうの？」

「・・・」

確かに昨日オレは鍵をかけ忘れていたけど、だからと言って了承も無しに部屋に入るのはいかがでしょうかと思いますよ？

「そして、家に入らせてもらった私は忘れ物を見つけることが出来ただけけど、そこで限界をむかえちゃってね・ネコ君のベッドにお邪魔をさせてもらったの」

「・・・あんたって人は・・・もう!!、あと!もしかしてオレを洗面所まで運んだのも部長さんなんですか!!」

「うん、だってネコ君一緒に寝てると何度もベッドから転げ落ちそうなるから危なっかしくて・・・」

「・・・はぁ・・・」

すでに何度目になるか、ため息をつく。

しかし、部長さんはこちらの苦悩にも気づいておらず、眠そうに欠伸を繰り返している。

・・・さて、どうすりゃいいかねこれは・・・

第44話 嗚呼、騒がしき日々よ その1（後書き）

クロ「どーも、毎日がスランプ、クロです」

健人「そんなことより先に言うことがあるだろ」

クロ「いや、ホントすいません・・・遅い+超低クオリティ・・・  
どうしようもありませんね・・・」

健人「だからと言って勝手にいなくなるのだけはやめろよ。それが  
一番迷惑なんだからな」

クロ「そこところはわかってますよ」

健人「よし、それじゃあ、さっさと次の話を書く作業に戻るんだ！」

クロ「・・・」

健人「そんなやる気のない目をしてどうする！気合を入れる気合を  
！」

クロ「・・・できるだけがんばります・・・次回に続く・・・」



## 第45話 嗚呼、騒がしき日々よ その2

「ん〜さっすがネコ君が作ったご飯！早くて、安くて、安心だわ〜。あ、おかわりお願い」

頬を緩ませてとても幸せそうな表情で朝食を口に入れていく部長さん。

やはりどんな理由があれ自分の作ったもので人が笑顔になってくれればとてもうれしいものだと感じる。

だが、そのことは口にせず。

「部長さんそれだとお店違います。あと、褒めたって何も出やしません、よ、っと・・・はいどーぞ」

いつもの口調でツツコミを入れながら、差し出された茶碗にごはんをよそって部長さんに渡す。

「ん、ありがと。・・・でもさネコ君褒められてうれしいんなら素直に喜んだ方がいいと私は思うよ？」

「へ？な、なんでわかつたんすか!？」

「いや、だってさ、なんとなく嬉しそうだったし、そんなうれしそうに耳とっぽが動いてれば・・・ねえ」

その言葉を聞いて慌てて耳をさわる・・・が動いている感じはしない。・・・いや、でも部長さんが見ている時は動いて・・・だけど今は・・・いや、もしかしたら・・・

「おーいネコくん戻ってこーい」

「え？あ、はい！何ですか？」

「まったくもー。人の話ぐらいはちゃんと聞いてほしいよー」

「す、すいません・・・」

「まあいいわ。話を戻すけどさネコ君って実際にすごいことをやってんだからさ、褒められたんなら喜んでもいいと思うよ？」

「いえ、でも別に褒められるほどのことをやったつもりはありませんよ。いつもやってることですし」

実際そう思っている。料理ができる奴なんてそう珍しくもないし、オレよりうまい奴だってそこら中にゴロゴロいそうなものである。それにさっき言ったように料理なんて昔からやってきていることだ。今さら褒められるようなものでもない。しかし・・・

「そんなことないわよ。だってネコ君さっき『いつもやってること』って言ったでしょ？つまりそう言えるだけネコ君はそれを続けてきているってことなんだから、うまい下手を抜きにしても十分褒めるに値するわ」

箸をこちらに向けいつものような笑みではなく真面目な表情でそんなことを部長さんに言われる。

「・・・」

「・・・？どしたのネコ君？」

「あ、いえ、部長さんからそんなこと言われるなんて思ってたんですけど・・・」

「ネコ君顔に似合わずさうときついこと言っわね」

「あはは・・・すいません。ですけどごうまで言われちゃあ受け取らないわけにはいきませんね。ありがとうございます」

「そうそう、人間素直が一番いいのよ」

そう言っつて部長さんはオレの頭をくしゃくしゃと撫でてくる。

やっぱりものすごく恥ずかしいがたまにはこういつのも悪くはない  
と思っっているオレもいる。

「・・・さすがに部長を名乗っているだけのことはありますね。正直  
少し見くびっているところがありましたよ」

「あはは、そう言われると照れるな。でもネコ君、見くびってたっ  
てのはちょっとひどいんじゃない？」

「ははは、すいません。実はさっきのだってご飯を多く貰う為に褒  
めているんじゃないかと思っっていた時がありました、あははは」

「・・・あははは、そんなわけじゃないじゃない」

「・・・今なんか妙な間がありませんでしたか？ねえ」

今日も平和？な一日です。

「やれやれ・・・多い多いとは思っていたが、やっぱり実際に取り  
かかるるとすごい量だな」

洗剤のついた皿に水を流して汚れを洗い流していく。

現在、昨日そして今日の朝食で使われたゴミや食器類の処理に追わ  
れているところだ。

「ネコくん、これはどうすればいいのー？」

「えっと・・・それはこっちに、そっちはあっちに持ってってくだ  
さい」

「りょうか〜い」

そしてさすがにこれだけの量を一人で全て片付けるには骨が折れる  
ため部長さんには朝食を報酬に手伝ってもらうことを約束してもら

っていた。  
が、しかし・・・

「・・・部長さんちよつと待ってください」

「ん？何ネコ君」

「あのですね・・・何で部長さんは生ごみを何も包まずに素手でゴミ箱にぶち込もうとしてんですか？」

「え？何かまずかった？」

「まずいとかそういうレベルじゃないですね。はい」

「やつぱ家事つて難しいなー」と生ごみ片手に困った表情でぼやき始める部長さん。実にシニールな光景である。

まさかここまでひどいとは正直思ってもみなかった。こんなんで一体どうやって生活してるのか気になる。

「あの部長さん？あとはもう自分でなんとか出来そうなんで部長さんはもう帰ってもいいですよ」

さすがにこの調子では何をやらかすかわかったものではないため脳内会議で部長さんの即時停止を決定、行動に移す。

「いやいや、約束は約束だし最後までやらせてもらつよ」

結果、失敗。むしろやる気にさせてしまったようだ。さてどうした・・・

ピンポン

この先を考えようとした矢先まるでタイミングをはかったかのよう

に家のチャイムが鳴る。

正直言ってもものすごく出たくないところである。

「あ、ネコ君はそのまま作業続けてて、私が出るわ」

「・・・っではあ!？」

いきなりのことに驚きの声をあげてしまう。

いくらなんでも部長さんが出るのはいろいろまずい!こんなことで変な噂を立てられでもしたらたまったものではない。

「はいはい今出ますよ」

「部長さん!ちよつとま・・・!」

部長さんを止めようと声を出す時すでに遅く扉が開いてしまった。

ガチャ・・・

「・・・え？」

「あら」

「あ」

そして玄関に立っていたのは見覚えのある女の子・・・姫神の姿が

「あれ・・・え・・・あれ・・・？」

姫神は表札と部長さんを困惑した表情で交互に見比べている。まあ知人の家から知らん人が出てくればそうなるわな。

「えっと・・・その・・・あなたはいつたい・・・？」

「え?私?私はね・・・」

そこまで言うとは突然部長さんが黙り込む。  
そして見てしまった部長さんがニヤリと擬音が聞こえてきそうな笑  
みを浮かべるのを・

「私は・・・優斗の・・・いえ、なんでもないわ」

瞬間、空気、凍る。

イマコノヒトハナンテイイマシタカ？プリーズリピートワンスモア。

「別に私は優斗とはなんでもないのよ。いや、ほんとに」

頬を赤くしながら手を当て姫神から目をそらす。そりゃもう迫真の  
演技でしたとも、ええ。

その光景を見せつけられた姫神は・・・

「・・・ありえません」

「・・・どうして？」

「だって・・・だって・・・」

「・・・」

「だって今の優斗さんは女の子じゃないですか！」

「姫神ツツコムとこ違う」

この後しっかりと誤解を解いて片づけを手伝ってもらいました。

第45話 嗚呼、騒がしき日々よ その2（後書き）

クロ「どーも、．．誰かにぶん殴ってもらいたい気分のクロです」

士郎「えーい」

クロ「ウボアー．．つてお前からじゃねえ！」

士郎「でもいいじゃん殴ってもらいたくても殴ってもらえないんだし」

クロ「まあ確かにそうではあるんだが．．とにかくホントすいませんでした。言い訳にかなりませんがリアルで色々（春、パソご臨終、新学期）忙しかったこととこんな駄文ですら書くのに手間取ってしまったことが遅れた原因です」

士郎「文句がある人は感想のところじゃんじゃん言うてください」

クロ「次回こそは．．！といきたいところです．．次回に続きます」

## 第46話 嗚呼、騒がしき日々よ その3

「ぶえつくしよなれい!!」

「!?!?!ど、どうしたんですか?」

「ああ、ゴメンちょっとくしゃみが出ちゃって・・・」

「どことなくしゃみですか」

あ後の掃除は（主に部長さんのせいで）熾烈を極めたものの姫神の助けもあつて何とか全てを片付けることに成功。

そして今はあるべき姿を取り戻した居間にて休憩を入れているところである。

「あ、そついやなんで姫神はオレン家に来たんだ?」

時間がたち心身ともに落ち着いてくると忙しさのあまりすっかり忘れていた姫神がここに来た目的についてをふと思い出しそれを姫神に聞いてみた。

「.....」

その質問に対して姫神はどこか苦い表情をしながら無言でオレに持っていた紙袋を渡してきた。

「こ...これは...!」

渡された紙袋の中身を確認すると絶句する。視界に入ってきたもの、それはフリフリの付いた白い布の塊であった。・・・もはや語るまい。

「あー...そのー...すまん姫神」



「いえ・・・」

はあ、と盛大な溜息が二人の口から巻き起こる。

「あのさー落ち込んでいるところ悪いんだけどネコ君達はいったい何の話をしてんの？」

そんな時、今まで黙って話を聞いているだけだった部長さんがいきなり説明を求めてきた。

あのことについてはあまり話したくないが聞かれたのであれば無視するわけにもいかず細かいところを抜きにして簡単な説明だけを部長さんにした。

「なるほどねー・・・つまりあなた達は制服を取り戻すためにもう一度そこに行かなくちゃいけない、ってことだからさっき落ち込んだのね」

「・・・」

「・・・ネコ君」

「はい？」

「面白そう」

「帰ってください」

しかしそんなオレの言葉もむなしく、結局オレと姫神は部長さん（部活動仕様フル装備）と一緒に再びあの店に向かうことに・・・

「~~~~」

「・・・ずいぶんと嬉しそうですね」

「そりゃね、面白そうなネタを取材できるんだから」

そう言つてカメラを片手に実に嬉しそうな笑顔をこちらに向ける。先ほどからそんな感じで絶好調である。

「ほらほら、時間は限られたものなんだから急いだ急いだ!!」

「わ、わかりましたからそう押さないでくださいよ!」

そして絶好調であるが故に誰も止めることができないのだ。

「ほら〜姫神ちゃんも早く〜」

「あ、はい……つてあれ……?」

オレ達の後ろを歩いてきた姫神の足がいきなり止まり明後日の方向を向く。

いぶかしんでその視線の先を追いかけるとそこには見知った顔が二つ……

「優斗さんあの人達つて……」

「ああ、ありゃあそつだな……。おい!副会長さーん!会長さーん!」

「……?あら!大島……げえ!?!」

こちらの呼ぶ声に気付き振り向いた直後副会長はすごい勢いで顔をしかめる。

何事かと思つていると副会長さんがずんずんと聞こえてきそうな勢いでこちらに向かつてきて部長さんの前に立ち止まると……。

「ちょ、ちょっと何であんたがこんなところにいんのよ!?!」

「ん?何でつて……もち取材」

「しゅ、取材!?!そんなこと生徒会は一言も聞いてないわよ!」

「だって〜いちいち報告したりすんのめんどくさい〜」

「めんどくさい〜、じゃないわよ!」

「おお、その声そっくり」

「うるさい! だいたいあんたは・・・!」

「」「」「」

オレ達を置いてけぼりにしていきなり漫才のような掛け合いを始めるお二方。

「またか・・・」

会長さんその様を見てあきれた表情をしながら溜め息とともにそんなことを口から漏らす。

「あの・・・中島会長は何かご存じなんですか?」

「ん? ああ、あいつらとは昔っからの付き合いでな・・・言うなれば腐れ縁というやつか?」

「えっと・・・それってつまり・・・」

「あいつらと俺は知り合い・・・ただそれだけだよ」

軽く苦笑しながらもどこか嬉しそうにそう言ってきた。その様子を見ればこの人達がどれだけ仲が良いかなんてのはすぐに分かった。

「会長さん達って仲がー」だからあんたはいつもそうなのよ!」

「・・・まったく変わった様子はないがな」

・・・最後にこめかみに青筋が立ってながら怒気のコもった声でそう小さくつぶやいてしまったが。

「あの・・・優斗さん・・・そろそろ・・・」

「え？ああ、そうだな」

「つかぬことを聞くがいつたどこに行こうとしてるのかね？君たちのことを信用していないわけではないのだが一応聞かせてもらおうと思うのだが」

「あー・・・えーと・・・」

「？どうしたんだ？」

「いや、そのお店の名前がわからなくて・・・行くところは美容院なんです」

「美容院！？」

今まで部長さんの相手しかしていなかった副会長さんがいきなり叫びだす。

「うわ！？いきなりどうしたんですか！？」

「え？・・・アー・・・ナンデモナイデスヨ、ハイ」

「・・・そんな調子で何でもないもくそもないと思うが」

実際会長さんの言うとうりだ。副会長さんは今冷や汗を流しながら明後日の方向を向いており目を見れば本気と書いてマジの状態になっている。うーん実にわかりやすい。

「いやいやいや！本当に大丈夫よ！ええ！！」

「どう見ても大丈夫そうには見えないんですが」

「というよりお前はなんでそんな過剰反応しているんだ？その美容院にはいったい何があるというんだ？」

「そ・・・それは・・・あ」

先程まで宙を泳いでいた副会長の視線がある一点・・・オレ達の後方に固定される。それに従い全員が後ろを向くと・・・

「あら～みんなが集まって何をしてるのかしら？」

ソコニハアクマガイタ。

その姿は昨日の格好に金髪のカツラという（いろんな意味でありえない）アップグレードバージョンであり、それを見た瞬間、まるで体の中に液体窒素を流しこまれたかの如き寒気を感じ取り体が震え始めてしまった。

他の人を見ると会長さんは「なっ！？・・・」と驚いた後少しずつ後退りをはじめており、女神にいたってはうつむいて「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」と壊れた機械の様にうわごとを繰り返すしまつである。

「あら」

そんなこんなをしている内にこちらにも気づいてしまったようだ。そしてこの瞬間オレは確信してしまった、「間違いない・・・これは誰か必ず死ぬ・・・っ！！」と。自分でもいろいろとおかしいことを言っているとは思っているのだが、実際やりかねないのだから性質が悪い。

そして今回その犠牲になってしまったのは・・・

「あらあらあら、駄目じゃないそんな格好をしてちゃ！！」

「え？いや、別におかしくはないと思いますが？」

・・・さようなら部長さん。あなたの犠牲は無駄にはしません・・・

「いいからこつちにいらっしやい！私がちゃんとした格好にしてあげるから！」

「いえ、ですから……ってちょ、ま！誰かーへールー……！！」  
「……あ、そうそうあなた達のこれは返しておくわね。今日はこの子で忙しそうだから……」

そう言っただけでオレ達に制服を渡すと狂喜の笑みを浮かべながら部長さんを連れ去ってしまった。

・あの顔はしばらく夢に出てきそうだ・

すべては終わった……部長さんという尊い犠牲を払って・

「……ってあら？副会長さんはどこに行ったんだ？」

「……あいつなら既にどっかに逃げたぞ」

「逃げた？」

「おそらくさっきのことを聞かれると思って消えたんだろう」

・まあいいが無事に制服を取り戻せたことだし……え？部長さん？知らんがな。

第46話 嗚呼、騒がしき日々よ その3（後書き）

クロ「どーも、何とか早く？更新できたクロです」

先生「相変わらずつまらないけどね。それに早いと言ってもこの前に比べれば・・・だけど」

クロ「うーん・・・そこは勘弁してください。今の俺ではこれが限界・・・」

先生「ホント駄目ね。もうちょい何とかしなさいよ」

クロ「ウグ・・・！しょ・・・精進します・・・次回に続く・・・」

## 第47話 人は見かけによらず・・・と思いたい

別にどうってことのない話。

いつもどおり朝を起きて、いつもどおりご飯を食べて、いつもどおり姫ちゃんと学校に行って、いつもどおりの日常が始まる、そうなるはずだった・・・。

その事件の始まり・・・それは学校の教室からだった。

「あら？」

どうやら私たちはいつもより早くついてしまったらしく教室の中は、しん、と静まり返っていた。ほかのクラスのみんなはおそらく部活で忙しかったり、学校に来ている途中なのだろうと勝手に頭の中で想像する。

だがそんなことを考えていた時だ。その中で異様な光景を作り出している一匹・・・もとい一人が私たちの視界に入ったのは。

「・・・」

そこにいたのは私の友人と思われる人物、優斗・・・なのだが、何があつたのか、ただでさえ白くなってしまった優斗が今日はいつも以上に真っ白になっておりその様子はまさしく、燃え尽きた、といった感じであつた。

そして、燃え尽き真っ白になった優斗とは対照的にその周りは真っ



黒なオーラで覆われており、ずんという音が聞こえてきそうなくらい重苦しかった。

「・・・なにあれ？」

「ええと・・・」

目の前で起きていることについて姫ちゃんに尋ねてみるがそれには答えることはなく困った表情を浮かべるばかりだった。ともかく、優斗が今おかしいわけで。

「ちょっと優斗あんた何があったわけ？」

私たちは机で屍になっている優斗に近づいて何があったのかを尋ねる。

「・・・」

「・・・？優斗さん・・・？」

しかしそれに対して優斗はピクリとも反応を見せず、相変わらずうつむいた姿勢のままだ。

「・・・」

「ちょっと、優斗・・・」

「・・・うふ、うふふふふ・・・」

「ゆ、優斗さん・・・？」

さすがに何の反応もなしというのには少し腹が立ち文句の一つでも言ってみようとした時、それを遮るように優斗が怪しげな笑い声を上げる。

そのままの状態でこちらを向いた優斗の眼には既に光はなくどこか

壊れた様子であった。

「姫神に舞か・・・終わったよオレ終わったよ・・・」

「ど、どうしたんですか？」

「終わったんだよ・・・ふふ・・・」

「はいはいはい、何があつたかはわからないけどとにかく話してみなさい。力になってあげられるかもしれないから」

「・・・」

私がつめ息混じりにそういうと少しは落ち着いてくれたのか優斗はポツリポツリとだが何があつたのか話をしていった・・・。

「はい、終わり。もう消えてもいいわよ」

「先生もう少しマシな言い方ってないんですか」

すでに何度目になるか、もはや習慣になりつつある朝の診察も終わり、後はその結果を聞くだけで終わりである。

だが、習慣になりつつあると言っても変な機械に放り込まれたり、裸にひんむかれたり、検査中に四六時中先生の言葉責m・・・説教を聞かなくてはいけない、などかなり面倒なことが多く今だに慣れないものである。

「・・・あれ？」

診察も終わったため教室に戻る準備をしていた時今日の診察結果の紙を見ていた先生が声を上げる。

「ねえ優斗。」



「……ってわけさ……」

……なんとというか話を聞き終えた瞬間、今までに体験したことがない程の脱力感が私の身に降りかかってきた。  
姫ちゃんの方も見ると実に困った顔をしている。

「ふ……ふふ……どうせもうオレは終わりなんだ……どうせ……」

そうさせた本人に文句を言おうにもこの調子では……

「どうせ……どうせ……」

「……あーもー!! いい加減ウジウジするのはやめなさい!!」

「ま、舞ちゃん……?」

「どんな姿形だろうとあなたはあなた! それでいいじゃない! それともなんかそれに不満でもあんの! ええ!」

さすがにいい加減面倒になってきたため私は優斗に怒鳴るように叫んだ。

「……」

「な……なによ……」

すると突然優斗は顔を上げて私の方を見る。

「えーと……その……あ、ありがとう」

「……え?」

「い、いちおうオレのことを心配してくれたようだしなそのお礼だ・

・・・か、勘違いすんなよこれはただのお礼なんだからな・・・うん  
私たちから目をそらして恥ずかしそうに言ってきた。こいつ意外と  
かわいいところもあるわね。

「・・・ま、そういうことにしといてあげましょ。一応今は私がお  
姉さんなんだからね。今後も胸を借りるつもりで・・・」

ス力・・・

「胸を・・・」

ス力・・・

「・・・」

「？、どうしたんだ？」

「優斗ちよつといいかしら・・・」

「ちよつとつて・・・うわ!？」

舞は優斗に何かを聞いてきたが、その了承を得ぬままに優斗の胸を  
わし掴みした。

ふにゆ・・・

「あ・・・」

「・・・」

ス力・・・

「・・・」

「ま、舞？」

ふにゆ・・・

「ん・・・」

ス力・・・

「あ、あのー舞さん？さっきから胸を触って何してんですか？後これでも結構くすぐったかったりするんでやめてほしかったり・・・」

「・・・じゃないわよ・・・」

「・・・え？」

「ふっざけんじゃないわよー！！」

「なんでだー！！」

見事な右ストレートが炸裂し、それをもろにくらった優斗はまるで投げ飛ばされたかのように宙を舞う。

「男のくせに・・・男のくせに・・・ちくしょおおおおおおお  
お・・・！！」

舞は叫びながら涙を流して教室を出て行ってしまった。

「あ・・・えつと・・・大丈夫・・・ですか・・・？」

「・・・なんだ・・・」

優斗、推定Aカップ。

舞、推定AAAカップ。

第47話 人は見かけによらず・・・と思いたい（後書き）

クロ「どーも、かけた時間と内容が比例しないことに定評のあるクロです」

副会長「そんなことより・・・どうしてこんなに遅くなったのか説明する先でしょ」

クロ「いやー・・・すみません。ここの仮面ライターの小説見てたらなんかまた原作を見てみたくなってしましまして・・・おのれデイケイ〇!」

副会長「どう考えてもあなたが悪いでしょ。こういう時は素直に謝罪しなさい」

クロ「ごめんなさい・・・後ついなんですがこの小説のユニークがなんと2万を超えました！これもみなさんのおかげです！ありがとうございました」

副会長「まあこんなさくさ・・・んん！作者ですが今後とも楽しんでいただければ幸いです。次回に続きます」

クロ「大事な所がかまないでください。後俺のセリフを（ry）」

## 第48話 かつこいいと厨式病は紙一重 その1

一人の少年が夜の街を歩いていた。

その少年は部活動をして帰りが遅くなったわけではなく、学校をさぼったりする不良というわけでもない。

勉強や運動の方も人並みで友人関係も悪くないごくごく普通の少年である。

だが……

「……つまらない」

少年は誰にも聞こえない音量でぼつりと呟いた。

たしかに今の生活も別段悪くはないと思っている。友達と話をしたりどっかに遊びに行ったり……と面白いこともいくつかはある。

だが、あくまで悪くはないと思っているだけであって満足はできないでいる。

ようするに少年は退屈しているのだ。

学園を救うヒーローになるだとか、運命的な出会いがあるだとか、そこまでのことを高望みするわけではないがやはり何か刺激的なものが欲しいと思ってしまう。

そんなことを考えていたからなのか、気がつけばこの夜の街を彷徨い歩いていた。



しかしそんな都合の良いことがタイミング良く起きるはずもなく……  
結果、ただただ無駄に時間と体力を浪費しただけであった。

「……………はあ」

思わず溜め息が出てくる。

何をやってるんだ俺は

自分の間抜けさに呆れかえってしまっ。

もういい……………部屋に戻ろう……………。

そう思い止まっていた足を再び動かそうとした時にあるものが目に入る。

「これは……………」

目に入ったものは自分はよく知らない……………だが、それを見た瞬間朝に起きた出来事を少年は思い出した……………。

・あるクラスメイトの会話・

「……………なあおい知ってるかあのねここのこと……………（ひそひそ）」

「……………ねここ……………あのネコ子のことか！！（ひそひそ）」

「馬鹿！ 声大きい……………（ひそひそ）」

「わ、悪い……………んでいったいどうしたんだ？（ひそひそ）」

「実はな……………あのネコ子のバイト先を発見したんだよ（ひそひそ）」

「マジかよ！ それでいったいそれは……！（ひそひそ）」

「ああ、その店の名前は……って名前だ（ひそひそ）」

「……か、それで場所……（ひそひそ）」

「ずいぶんと面白そうな話をしているな」

「か、会長！！ いつからそこに……！」

「そんなことはどうでもいい。それよりも話の続きを聞かせてくれないか？ 出来るだけ詳しく……」

「う、うわあああ……！」

「……違反者を発見、C小隊は目標を校舎内B-5エリアに誘導の後確保せよ」

その後そのクラスメイトがどうなったかは知らないが今問題なのはその会話の中に出てきた名前と同じ店が目の前にあることだ。

「……………」

正直こんなうまい話なんてあるだろうか？

・あまりにも出来すぎている・そう思いつつも少年の足はなぜか引き寄せられるかの様に店にどんどん近付いていき……店の中へ入って行ってしまった。

そして少年の入って行ったドアにはそのお店の名前が書いてあった

……

「bar IKIZAMA」という……

「いらっしやい」

「いらっしやい…… bar OTOKOGIへ……」

中に入ったと少年を迎えてくれたのはその店のマスターと思われる  
中年の男と小学生くらいのかわいらしい女の子であった。

「……マスター店の名前が違います」

「……いいか子猫ちゃん。確かに名前というのは大切なものだ……  
だがな時に名前より大事なものだってあるんだぜ……？」

「いや、そういう問題じゃないでしょこれは」

だが、その直後お客が目の前にいるにもかかわらず、なにやら漫才  
の様な掛け合いが繰り広げられる。

「……えーと……」

当然少年は目の前で起きていることに対応などできるわけもなく、  
ただそこに突っ立っていることしか出来なかった。

「……ん、どうしたんだ少年。そんなところに突っ立ってないでさ  
っさとこっちに来て座ってくれ」

「あ、はい」

言われるがままとりあえず椅子に座る。

と、二つにきてあることに気が付く。

「あの……すいません」

「こんどはなんだ？」

「その……メニューがどこにも見当たらないんですけど……」

そう、どこを探してもメニューらしきものがどこにも見当たらないのだ。

元々どんな店かも知らずに興味本意で入ってしまったとはいえ注文をしないわけにはいかないのでこれには困った。

どんなものがあるかはわからないがとりあえず聞いてみると……

「少年……この店にメニューなんてものはない……」

「……は？」

「しいて言うなら……お前の心の中にある……今望んでいる物がメニューだ」

「……」

少年は後にこう語った「あの店に入って自分は良い意味でも悪い意味でも変わってしまった……」と

第48話 かつこいいと厨式病は紙一重 その1（後書き）

クロ「どーも、まずは遅れてすみませんクロです」

会長「やれやれ……またもや記録更新だな。今度は一か月後か？それに内容もペラペラで軽いつきた」

クロ「ぐお……心の傷をえぐらんでくれ……」

会長「それがいやなら最低限のことぐらいしたらどうなんだ？せめて自分が満足できるくらいのもを」

クロ「いや、でもこれ以上遅らせるわけにもいかないし……」

会長「はあ……こんな作者のそれも電波小説が総合ポイント200超えをするなんて今でも信じられんぞ」

クロ「いや、まっただ」

会長「……お前が言うな」

クロ「まあそんなわけです。みなさん本当にありがとうございます。ありがとうございました。あと感想とかも待っています。次回は……うん、次回に続きます」

## 第49話 かつこいと厨式病は紙一重 その2

少年は困惑していた。

目の前にあるものは別に珍しくもなんともない良く知っているものだ。

だが、目の前にあるものは普通目の前にはないものである。

「……………あのー」

「ん？ どうした少年」

「えっと……………これはなんなんですか？」

「これか？ これはな初めて会ったやつらに贈る俺の気持ち……………言うなればプレゼントみたいなものだ……………そういえば、こうやって俺の気持ちを配るきっかけになった夜もお前さんみたいな客がいたな……………あれは確か……………」

「マスターその話八回目です」

そんな隣にいる少女の冷静なツツコミもむなしくマスターが何かを語り始めているがそれはスルーをして先ほど出されたものに再び視線を戻す。

そこにあるものは……………味噌汁。

そう味噌汁だ。目の前にあるものはどこからどう見ても出来たてホヤホヤのうまそうな味噌汁なのである。

「……………」

念のためもう一度だけ言っておこう、ここはバーである。どっかの隠れた定食屋でもなければ居酒屋でもない、バーである……………は

ずである。ちょっとだけ少年は自信を失くしつつある。

「ちょっといいかいお客さん」

目の前の事に気を取られそんなことを考えていると突然声をかけられる。

声のする方に顔を向けるとそこにいたのは先ほどからマスターにツッコミを入れ続けていた少女だった。

「え……あつ、どうしたのかな？」

なぜだか良く分からないが少女は不機嫌そうな顔をしているため出来るだけ刺激をしないように優しく言った。

「いきなりで悪いんだが目の前にあるそれをさっさと飲んでくれな  
いか。そうしないとマスターが後でうるさいからな。……あとそう  
いうしゃべり方は好きじゃない。普通に喋ってくれ」

少女は言いたい事をすべて言ったのか相変わらず不機嫌そうな顔をしながら再び少年から視線をそらした。

改めて考えてみるとこの少女もいろいろとおかしなところが多い。

まずはその容姿と性格。

容姿の方はなぜか頭にネコ耳やしっぽ、メイド服を身に付けていることを除けば、まだ幼いながらも形の整った顔のつくりをしており全身からどこか妖しげな雰囲気醸し出している少女で正直とてもかわいい、それもその姿を同年代の男の子たちが見れば一目で恋に落ちてしまうのではないかと思えてしまうほど極上だ。

だが、性格の方はそれと全くと言っていい程不釣り合いになっており、一人称が「オレ」ということを始め、元気という欠片も見られない程疲れ切った様子、マスターという年上相手でも関係ないと言わんばかりのため口ツツコミ…などなど同年代の少女が持つていそうな無邪気さやかわいらしさといったものはまったく持ち合わせていなかった。

そしてマスターとの関係。

最初の方はマスターの娘か何かかと思いきやあまり気にならなかったが、今までの会話や態度などから考えてその可能性は薄いだらう。もし仮にそうだとしたらきつと彼女は突然変異のミュータントか何かなのだらう。そうでなくては説明がつかない。

「……………」

謎のお店、変人としか言いようのないマスター、そして謎のネコ耳美少女……冷静になって今までの情報を整理するとわからないことだらけである。

はたしてこれは本当に現実なのだらうか？ 実は自分は今夢を見ているだけではないのだらうか？ そんな馬鹿げた想像すら頭を過ぎり始めた時、店のドアが大きな音を立てながら勢いよく開いた。

そこにいたのはおそらく少年と同じ男子高校生と思われる少年でそれは店のマスターを指さし宣言するように叫んだ。

「マスター！！今日こそはその子は俺がもらうぜ！！」

「……………」

いきなり現れた少年の「その子は俺がもらう」発言。

それを見た少女はいつもの三割増しで疲れた表情をしながら頭を抱



え、その中で唯一の部外者である少年はあまりの事に思考が追いついておらず、指名されたマスターは不敵な笑みを浮かべていた。

「ふっ…青二才が…その言葉は俺を屍にしてから…言え！」

「上等だ！！あんに勝ってみせる！今日！ここで！！」

バキバキ！と拳を鳴らしながらカウンターを後にするマスターとフアイティングポーズをとりながらそれを待ち受ける少年。

もはやそれを止められる人間はもともと…もといどこにもいなかった。

第49話 かつこいと厨式病は紙一重 その2（後書き）

クロ「どーも、書いては消して書いては消して……を繰り返してた  
クロです」

部長「結局あまり変わり映えはしなかったけどね」

クロ「うるせえ！ちよつと変わったからいいんだよ！！」

部長「まああんたがいつてんなら別に私はどうでもいいけどね」  
クロ「そうそうそれで……」

部長「困るのはあんたなわけだし」

クロ「……………」

部長「ま、ともかくこれから頑張っていくことね」

クロ「やっぱ…そう…だよな……感想、批評、指摘、アドバイス、  
などなどを書いてもらえるとかなり嬉しいです。…いや、そんなこ  
とと言える立場でないのはわかってるんですが……」

部長「ぶは！ちよつと誰よごみを投げつけてきたのは！私は関係な  
いわよ！！」

クロ「もしかしたら俺以外の誰かが相手をしてくれるかもしれませ  
んよ？次回に続きます」

第50話 かつこいと厨式病は紙一重 その3

「はっ！うらあ！」

真っ直ぐに力強く走りだした少年はマスターに向かっておもいつきり拳を前に突き出す！

「フツ…甘いな！」

そう叫ぶとマスターは自分の前方に構えた左の腕でそれを軽々と受け止め、それに驚いて動きを止めてしまった少年に右腕で反撃のパンチを喰らわそうとした！

「うわっ!?!」

それを見た少年はとっさにマスター同様もう片方の腕でそれを受け止めることに成功したが、勢いまでは止めることができずに軽く吹っ飛ばされてしまった！

「くっくっくっくっくっく………」

「…どうした？ まさかこの程度……だとは言わないよな？」

「くそ！ まだまだだあ!!」

ファイティングポーズをとりまだまだ余裕を見せて待ち受けるマスターに少年は諦めることなく雄叫びをあげて再び向かって行く…！

「…おい、これはいつからこんな暑苦しいバトルものになったんだ

「？」

「え？」

「……すまんこつちの話だ。忘れてくれ」

一方こちらは優斗と少年。

優斗の方は目の前の事にあきれ返っており冷めた目でそれを見ていた。

少年の方は目の前の事に困惑しながらも先ほど言われたとおり出された味噌汁を飲みながらそれを見ていた。

カラン…コロソ…

そんな時、来客を告げるベルの鳴る音が店内に響きわたった。「こんな時になんて来るんだよ……」と優斗は内心今来た客に文句を言いつつながらもせっつかく来てくれた客を逃さないためにしっかりとあいさつをする。

「いらつしや…ん？……げえ！？」

「はあ…はあ…え？……はあ！？」

優斗は今来た客の姿を確認すると驚きのあまりすつとんきよんな声をあげてしまい、何があつたのか肩で息をしていたお客も声をあげた優斗の姿を確認すると似たような反応をした。

「ま、舞！？」

「ゆ、優斗！？」

そこにいたお客の正体…それは優斗の友人の一人、音無舞だった。

「な、なんでお前がこんなところに来てんだよ！？」

「それはこつちのセリフよ！……それにその格好、あんたいつたい何やってんの？」

「……そこは触れないでくれ」

「ふ〜ん、なるほどね。あんたここでバイトなんてしてたんだ」

優斗から説明を聞くと、やや不満げな表情で優斗を見る。完全に余談になるが後ろではマスターと少年は未だ激闘を繰り広げている。

「…なんだよ」

「あんたここでバイトするなんて私たちに一言も言ってくれなかつたじゃない！」

「だってしょうがないだろ！こんな格好されれば誰にだって教えたくはねーよ！！」

「バン！」とカウンターを叩いてそこから身を乗り出す。その姿は首輪付きネコメイドというすさまじい格好でその様子を見た舞はクスクスと笑う。

「そお〜私はなかなかお似合いだと思っけどなあ〜」

「んなわけあるか！！だあ〜もお〜！だからいやだったんだよ！！」

…それに…これ…胸だつて…ちよつと…き…いし…」

「何か言ったかしら？」

それを聞いたとたん舞は地の底から響くような低く暗い声でゆつくりとした口調で口を開く。優斗は慌てて口を両手でふさぐが既に遅く先ほどまでニヤニヤと笑っていた舞の笑みは目は笑っていないのに口の方が裂けてしまうのではないかと思えてしまっくらい笑って

いる笑みに変わっていた。

「え……？ い、いや、いやいやいや！ なにも言っていない、いいい言っていないぞ！ ななな、なあー！！」

「え！？ そ、その……！！？ は、はははいいいい！！」

あまりのプレッシャーにその後ろには悪鬼が……いや、魔王の影が見えてきてしまい優斗と少年、二人していい感じにパニくり事態をさらに悪化させていつてしまった。

「そ、そそそうだ！ それよりなんでお前はこんなところに来てんだ？」

優斗は命の危険から自らの生存のためとにかく話題の転換を試みた。少しの沈黙の後、後ろのオーラが少しずつ収まっていき舞は口を開いた。

「……だって私ここの常連だし」

「……常連？」

「そ、なんか文句でもあんの？」

「いや、別に文句があるわけじゃないんだけど……なんでこう……お前ってここといい、あそこといい、こういう店ばかりを選ぶのかな？」

「こういう店ってどうゆうことよ？」

「わからないならいいんだけどさ……」

「はあ……」と優斗は軽く溜め息をつきながらせめてこれから一緒に行動することの多い姫神になにもないことを内心ひそかに願った。

「さて……それじゃあ優斗いつものお願い」

「…は？」

「だ・か・ら、いつもの」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら優斗に無理難題を吹っ掛けて意地悪をする舞。もちろん優斗が舞のいつものなんてわかるわけもなく…。

「いつものなんてオレがわかるわけないだろ」

「いつものと言ったらいつもの。さっさと出しなさい」

「だからそんなのわかるわけが…」

「い・つ・も・の」

「お前なあ！！人の話を…！！」

「おろ？ お客の前でそんな怖い顔をしていいのかしら、て・ん・

い・ん・さん」

「ウシシシ…」とイタズラっぽく笑う舞とそれを聞いてカウンターを乗り越えそうな勢이었다った優斗はウルトラCクラスの笑顔を浮かべながらゆつくりと席に戻った。

それを見ていた少年は偶然舞と目が合ってしまった。

「あ、ごめんなさい！ いきなり目の前でうるさくされて迷惑だったわよね…」

「い、いや大丈夫だよ！ …それよりもあの子っていったい何者なのかな？ その…良かったら教えてくれると助かるんだけど…」

優斗に聞こえないようにひそひそ声で舞に尋ねる。もともとこのことは気になっていたもののだが優斗がいつも不機嫌オーラを身にまとっていたため聞くに聞き出せなかったのである。そこで先ほどから親しげにしている舞に尋ねることにしたのだ。

「む…そのしゃべり方やめてくれないかしら？ 私あなたと同じ高校生なんだから」

「え！？ だ、だって君どう見ても小が…「おい！？ 待て！！」

少年が実は舞が自分と同じ高校生であることに驚いた瞬間、優斗が待ったをかける。

待ったをかけた優斗の顔はとにかく必死だった。

「なによ優斗？ いきなり叫びだし…「ちよつと来い！」

「え？ ちよ、ちよつと服を引つ張らないでくれ！」

「ちよ、ちよつとまだ話は…」と舞が叫んでいるがそれらを見殺して優斗たちは舞から離れていった。

「…いいか？ あいつには「小さいー」とか「小学生みたいー」だとかそうゆう言葉は絶対にNGだ。死にたいのなら別だけどな…」

「そ、そんなに…？」

「そりやもう恐ろしいのなので…一度言ったら最後、ボコボコ誰が小さいよおおおおお！！！」

「ぬおおおおおおお！！！」

次の瞬間野獣のような叫び声とともに大柄な男であるはずのマスターが宙に舞う姿が二人の視界に映る。

それを見た二人は口をあんどりと開けることしかできなかった。

「ふざけんじやないわよおおお！！！」

「うぐわあああああ！！！」

だが、そんな二人も関係なしに小さな女の子が大の男や高校生男子相手にフランケンシュタイナーやブレンバスターを喰らわせた



とシュールな光景がしばらく目の前で繰り広げられた。

第50話 かつこいいと厨式病は紙一重 その3（後書き）

クロ「どーも、反省はしてもそれを生かすことがないことに定評のあるクロです」

優斗（男）「それ全然だめじゃねーか」

クロ「いやもう疲れたってゆうか、どうでもいいぜヒヤッハー！！  
ってゆうか、そうゆう感じになっちゃまってな」

優斗（男）「言っておくがそんなこと言っても現実が変わるわけじゃないぞ」

クロ「……………ヒヤッハー！！」

優斗（男）「おい!?!」

クロ「感想、指摘、批評、アドバイス、待っているぜ！！次回に続く!?!」

優斗（男）「とりあえず現実見よう?な?」

第51話 かつこいと厨武病は紙一重 その4

「さて…注文を聞こうか…」  
「マスターとりあえずその流血づらで何事もないように進めないでください」

優斗はマスターに向かってツツコム。

今マスターの頭からはまるで噴水のように血が噴き出しており顔が真っ赤に染まってしまっているが何事もないような表情で舞達の相手をしていた。

「フツ……この程度の事、俺にとっては気にすることでもないのさ……」  
「いや、こつちが気になんですけど」

相変わらずドバドバと血が流れ続けているのにそんなことを言うマスターに優斗はツツコミを入れるが「気にするな」と一蹴されてしまった。

いくら本人が気にすんなど言っても目の前に血まみれの人間が立っているのだ。そんなこと明らかに無理がある。そう考えると思わず溜め息が出てきてしまう。

「やれやれ……おい、どうすんだよこれ」

そういつて優斗は視線をこの問題の原因となった人物……舞に向けて質問を投げかける。

「どうするたって……私にもどうすればいいかわからないわよ。それにマスター一度やるって言ったことは絶対にやめない人だし……」

それに対して舞はそう答えた。だがその返事からは何時もの明るさはどこにも見えずただでさえ小さい体がさらに小さくなっていった。どうやら自分がしでかしたことはしつかりと理解しているらしくそれを反省をしているようだ。

「知るかそんなこと。自分でまいた種なんだから責任を持って自分で何とかしろ」

もともとはこいつの暴走が原因でこうなってしまったのだ。どのような理由があれこまでやってしまったのならどうにかする責任がある。そう思いながら優斗は舞を反論する。

「うっ……そ、そりや確かにこれは私が悪いけど……でもそこは少しくらい知恵を貸してくれてもいいんじゃないの？」

「偉い人は言いました。『ねだるな勝ち取れさすれば与えられん……』と」

「えーと……『お前のものは俺のもの』……ってこと？」

「ちげーよ」

「……あ、あの一」

その時、突如として二人の会話に入り込むひとつの声。その声に氣付いた優斗と舞はほとんど同時に声のした方に振り向く。そこにいたのは、チラチラとどこかを見ながらやはり何かに困惑している少年だった。

「ん？ どうしたんだ？」

「あつと……あそこにいるやつはあのまままで大丈夫なのか？」

少年はさっきからチラチラ見ていた方に指をさす。

その先には先ほどまでマスターと激闘を繰り広げていた少年が仰向けに横たわっていた。ただ、店が暗くてよくは見えないが仰向けで寝ているはずの少年の顔が後頭部に見えるのは気のせい……だと思いたかった。

「……………」

「ああ……あれはもうどうでもいいや」

「そうね。そんなことよりマスターよ」

それを見て優斗は何かあきらめたような表情をして、舞の方はマスターの方を第一に考えており話すらまともに聞いていなかった。少年がそれを見て再び困惑し始めたのは言うまでもない。

「…………話がそれだな。舞、とりあえず怪我の手当てぐらいはやらせてもらえ」

「ああと、そうよね。ええと……ガムテープ、ガムテープ……」

「舞、ポケノーサンキュー」

「…………でだ。いったい何をしたらこうなるんだ？」

優斗は目の前で起こっていることが理解できなかった……否、したくなかった。

右を見れば先ほどまできれいに並んでいたはずの椅子が派手に散乱しており、左を見ればマスターが頭を抱えた状態で気絶していた。なぜこんなことになっているのか？ 自分はただ近くの薬局で包帯を買いに行つて……買った際に子供扱いされて少しいじめてしまったが……それでもほんの数分だけ店を空けただけだ。だが、戻つて来てみればすでにこのありさま……とりあえず状況がわからないため舞

から話を聞く。

「べ、別に今回は私おかしなこと何もしてないわよ！！　ただ消毒液を頭につけただけで……」

「はぁ？　消毒液？」

優斗は訝しげな視線を舞に向ける。

消毒液。確かにあれは傷口に塗るとかなり痛い。だが、だからといってこんな惨状になるほど痛いものでもない。こんな風になるにはよほどのこと……そう、例えば消毒液を、どばー！！　と多めにかけるとかをしない限りはあり得ない……

「そうよ。それもできるだけ効果があるように、どばー！！　と多めにかけてただけで……」

「死ぬわ」

「嘘！？　だってお母さんがいつもこうやってたんだもん！！」

「嘘つけ！！」

「本当よ！！　お兄ちゃんがお母さんにいろいろやらかして、その制裁を受けて、それで出来た傷にお母さんが毎回……」

「あーもういいや、だいたいわかった」

大体の事情はわかった優斗は一方的に話を終了する。舞が「だから本当なんだって！！」とかわめくが、それも無視をした。

それにしても、さすがは舞の母親というべきだろうか。故意にしろ天然にしろ、なんとも恐ろしいことをするものである。

たぶん、状況から見て前者の方だろう。…娘は後者の方であったが。

「ううむ……」

「さて……どうしたものか」と優斗はこの状況を何とかするために

考え込む。

とりあえずマスターがこの調子では今日はもう店じまいだろう。そこはそれでいい。

だが、問題なのはマスター自身の方だ。

このまま店に置いていくわけにはいかないが今の自分ではマスターを運ぶのは難しいし、かと言って舞に任せるには不安が大きすぎる。では、他に頼れるやつは誰がいるか？

姫神……この状況ではろくに動けないだろうし、こんなことでいち頼るわけにもいかない 没

健人……マスターとの関係と性格から見て暑苦しい展開になる パス

士郎……あははゝ 却下

姉さん……うふふゝ アウト

先生……論外

おわり

「……………」

内心もう少しまともな友人を作ろうとひそかに決心する優斗であった。

「けど……ホントにどうすっかね……………」

優斗は再び考え込んでしまう。

実際困った。このままにするわけにはいかないがこれをどうにかしてくれるまともな奴がない。

この際友人だとかそういうことはどうでもいい、まともな奴でさえあれば……………」

「……ん？ こつちみてどうしたんだ？」

まともな奴であれば……

「お、おい……そんな目でこつちみんな……」

「はあ……はあ……」

一人の少年が夜の街を歩いていた。

「くそ！！なんだってこんなことになつちまつてんだよ！！」

一人だとわかっていてもついつい愚痴を言ってしまう。そうしなければやっていけないのだ。

なぜ俺はこんな今日知り合ったばかりのおっさんを運ばなくてはいけないのか？ それもこんな血まみれの状態のを……

そもそもなんでこんなことになっている？ 自分はただお客として店に入っただけである。

だが、気がつけばあれよあれよとおかしな方向に流れていってしまった、拳句には店員の少女からマスターを家にまで送ってくれと言われる始末である。

もちろん最初は断った。が、『これも何かの縁だと思って……』とか『あんたにしかできないことなんだ！』とか猛烈な誘いを受け、さらにはしゅん、とうなだれて悲しそうな顔をされてしまったのだ。そんなことを小さな子供にされてしまえば断れるはずもなく……



「はあ……」

御覧のあり様である。自分で言うのもなんだがお人よしすぎである。  
…まあ幸いなことにマスターの家は店から近いためそこまでの苦勞  
はない。

あとはこの人を家の前で降ろして自分の家に戻るだけ……そう思っ  
た時、

「……ん？」

ふとカーブミラーに自分の姿が写っていることに気がついた。

「い!？」

それを見た少年は驚愕する。

その姿は薄暗い路地裏で血まみれの男を運んでいる自分という不審  
者に間違われてもおかしくない姿だった。

このままではまずい! そう思い急いでここから離れようとした時

……

「……………」

見知らぬ女性がこちらを見ていた。…それもおびえた表情で。

「あは…あははは…いや、これにはちょっとしたわけが…」きゃあ  
あああああああ!…」

少年の説得もむなしく、女性の叫び声が響きわたってしまふ。

「おい!!どうした!!」

「あつちから叫び声が聞こえたぞ!!」

「こつちだ!こつち!!」

続々と集まってくる商店街の人たち。それを見て真夜中の商店街に少年の叫びが木霊した

「だから、俺のせいじゃねえええええええ!!!!」

第51話 かつこいと厨式病は紙一重 その4（後書き）

クロ「どーも、まさかのリアルでネコを飼うことになったクロです」  
優斗（女）「正直これにはオレも驚いたぞ」

クロ「いや、まさか飯食ってる時に突然、『明日からネコ飼うことになったから』とか言われるとか思いませんでしたよ……」

優斗（女）「しっかしこいつホントかわいいな……ってあれ？ なんかデジャブが……」

クロ「まあ実際白くはありませんが最初に出てきた子猫のような感じでかなり小さい奴です」

優斗（女）「かわいいやつなんだが飯の時にやたらとくっついてきてなかなか飯を食わせてくれないのが悩みなんだとか」

クロ「家の家族全員がネコ好きなのでものすごいかわいがられようです。やっぱみんなネコ好きだな……次回に続きます」

## 第52話 やっぱりこんな日々

さて…突然であるがこの状況を見てみなさんはどう思うだろうか？

場所は男子学生寮、優斗の部屋の台所。

そこに三人の人物がいる。

一人は姫神。なにがあつたのかその両頬には大粒の涙が流れていた。もう二人は優斗と舞。舞は鬼のような形相を浮かべ、優斗にシャイニングウィザードをきれいに決めており、優斗はそれを顔面にもろにくらつて、のけぞっている最中だ。

なぜこんなことになってしまったのか？ 少し時間をさかのぼらせてみよう。

- 数十分前 -

「姫神、こんな感じでいいか？」

「あ…はい、それはそんな感じでいいです…」

「姫神、ここはどうすればいいんだ？」

「えっと…ここはこうすればいいんです…次は…」

「姫神、それとつてくれないか？」

「あ、はい…これでいいんですよね？」

「ああ、サンキュ」

バイトを終えた次の日の昼は大体こんな感じであった。

「その……食べ物少し多く買いすぎちゃいまして……作ると……食べるのを手伝ってくれませんか……？」

すべての始まりは朝にかかってきたそんな電話から。

確かに最近湿度・気温ともに急上昇を始めており食べ物に優しい時期になっている。

早め早めに食べないとなが起きるかわかったものでもないのこの判断は間違いじゃないだろう。

もちろん断るところか、実質おごってもらうのと同じようなものだ。優斗は喜んで誘いに乗らせてもらい……今に至っている。

「あの優斗さん……他の器ってどこにありますか……？ これじゃちよっと大きすぎて……」

猫舌に苦戦しながらも料理の味を確かめようとしていると姫神がそんなことを聞いてきた。

「ああ、それだったら下の方を見てくれ。たぶんちよつどいいのがその辺りにあるはずだから」

「はい……」

姫神は言われたとおり食器棚の下の方にある他の器を取るために屈みこむ。

「……」

「……………」

その瞬間、ある意味絶対に聞いてはいけない…ある意味この世で最も恐ろしい音がキツチンに響きわたってしまった。

「……………」

痛い沈黙が台所を支配する。

「あーと……あは、あはははは。い、いやー最近服がきついと思っ  
てたんだよなー。これはまた新しいの買わないといけないかなー。  
あはははー」

ついに耐えきれなくなった優斗はかなりわざとらしく大声を上げる  
がそれは明らかに逆効果でしかなかった。

「あ、あのー優斗さ……」

・ビリビリ……

「……………」

慌てて動いた姫神の方から先ほどのものよりも大きな何かのやぶれ  
る音が台所に響きわたった。

「う、うう……」

「う、うわわあー！！待て姫神！こんなところで泣くな！頼む！！  
なー！！」

それに耐えきれなくなった姫神は、崩れ落ちるようにその場で泣き

出してしまい、優斗はそれを必死に止めようとする。

「う、うう……ごめんなさい……ほんのちょっとだけ……ほんのちよっとだけですから……」

しかし、姫神は目の前に突き付けられた現実から立ち直ることができずに泣き続けていた。

「いや！そ、そういう問題じゃないんだ！！……ああ、もう！どうしたらいいんだよ……」

優斗はあまりの事態に頭を抱えてしまう。

今は自分達の他にだれもいないが他の誰かから見れば、どう見たって悪者は自分の方である。

それに、自分のせいではないとはいえ目の前で女の子が泣いているのだ。放っておくわけにはいかないが、この状況をどうにかする策があるわけでもない。

それでも優斗はどうにかしようと思死に考えようとした。

だが、神様はそんな哀れで優しい子羊にさらなる試練を与えようとしていた。

- ガチャ -

「優斗ー勝手に入らせてもらっわよー。答えは聞かないけど」

その時、実にタイミング悪く、舞がそれも無断で家にあがりこんできたのだ。

「う、嘘！！待て！舞！こっちに来んじゃねえ！！」

もちろん優斗は状況が状況であるため必死になってそれを阻止とする。

「うるっさいわね…いいからそろそろ姫ちゃんを解放してあげな…」

だが、舞はそんな優斗の警告も無視してズカズカと家に入り込んで来て…見てしまった。

「優斗…あんた…」

「ま、待て！舞！！これにはわけが…！！」

「問答無用おお！！！！」

「ミギヤアアアアアアアア！！？」

「…とそんな感じで愉快的な悲鳴が聞こえてここに来てみたら案の定愉快的展開になっていたわけだね」  
「…うるさい黙れさっさと消えろお前ら」

場所は変わって優斗の部屋のリビング。そこにはいつもの五人組がそろっていた。

士郎は相変わらずとても楽しそうな笑みを浮かべており。

健人は優斗を心配そうな表情で見えており。

姫神は顔をうつむかせてものすごい落ち込んでおり。

舞は未だに不服そうな表情で優斗を見ている。

そして優斗は顔中青あざだらけになっており、ものすごい不機嫌な



表情をしている。

「うゝんひどいなゝ。これでも僕たちは命の恩人なだけどなゝ」  
「くっ……」

確かに士郎の言うつおりである。

もし騒ぎを聞きつけずにここに来て舞を止めてくれなければ、優斗はさらにひどい目にあっていただろう。

「まさか優斗がここまで冷たい奴だなんて思いもよらなつたよ。いや残念だなゝ、でも……」

「ああもう！！わかつた！わかつたよ！！オレの負けだ。好きにしろ！！」

いい加減イヤミつたらしく言ってくる士郎に嫌気がさしてきた優斗は折れてしまった。

「ああもう！こんなことになつたのも全部お前のせいじゃねえかよ！！」

「なによ！！だいたいあんたが姫ちゃんを連れていかなかつたからこんなことになつたんじゃない！！」

いらいらして舞に八つ当たりに近いことする優斗と先ほどのことに未だ不服だつた舞の二人がギャーギャーと騒ぎだす。

「うるせえな！だいたいお前少しづらい料理できるようになればいいんだよ！そんなんだからお前は舞雷<sup>マイン</sup>ちゃんなんて言われてんだよ！！」

「んなこと言つてんのはあんただけよ！ねえ姫ちゃん！！」  
「……………」

「えーと……あれ？ どうしてみなさん私から目をそらすのかしら？」

同意を求めようと視線を右に左にと動かす舞であったが誰一人として目が逢わない……否、逢わせてくれる人がいなかった。

「い……いやいやいや……いくらなんでもそんなことないわよね……ね姫ちゃん！」

「ソウデスヨウトサンソンナコトナイデスヨマイチャンダツテスコシハデキマスヨ」

「姫神……お前が良い子だってことはよくわかった……だがな、嘘は良くないぞ」

だんだんと声が尻すぼみになっていきながらも姫神に同意を求めようとしたが姫神はその期待にこたえることはできなかった。

「そんなことよりさ優斗……いったい何があつたのかそろそろ話してくれないかな？」

「え？ あー……えーと……そのー……」

突如として今回起こったことの説明を求められる優斗。

だが、それは答えることはできない。当然だ、まさか姫神が太っ〇なんて本人が目の前にいて言えるわけがない。

「ん？ どうしたんだ優斗。早く説明してくれよ」

「いやその……説明が難しくてな。……姫神に変化があつたってゆうか……布が勝手に避け始めたとゆうか……」

「ああ、なるほどね。つまりShe gained weight  
ってことだね」

「士郎それフォーしているようでフォーになってない」

遠まわしながらストレートに〇った宣言をする士郎に対して姫神の方も意味がわかったらしくひどく落ち込んでいるところだ。ちなみに舞と健人の二人は意味がわからずに首をかしげていた。

「お前なあ……もうちょっと空気ってものを読めよな……」

「いやいや、僕はただ現実を直視させたただだよ」

「それが悪いって言うてんだよ。まったくお前は……」

「ああ！なるほど！つまり姫神がふと……やめてください！！」

「うぎゃああああああ！！」

空気を読まない士郎に説教をしている時にこれまた空気を読まずに先ほどの意味を理解してしまった健人が姫神にぶん殴られるシーンが展開される。

「なあ……士郎……」

「なにかな優斗……」

「今の一撃……オレには見えなかったような気がしたんだが……気のせいだよな……」

「スピードメーターでも測定不能の文字が出てるよ」

「……もうどうでもいいや」

色々ツツコミたい所はあったがすでに頭が限界を迎えつつある優斗は思考を放棄してしまった。

「優斗（優ちゃん）飯食わせなさい（食べさせて〜）」

「だから！なんでこんな糞面倒な時にタイミング良く来るんだよこの馬鹿コンビは……！！」

だが今日一日、そんな優斗に安息の時間は存在しないのであった。

## 第52話 やっぱりこんな日々（後書き）

クロ「どーも、ここ最近買っている漫画雑誌のお気に入り連載が次々と終了して結構落ち込んでいるクロです」

舞「長い。あとその前に言うことがあるでしょ」

クロ「いや、えらい遅れてすみません…試験があったのもあるんですが、やっぱうまく書けないのが一番の理由で……」

舞「遅いうえに文章が下手…どうにかならないものかしらね。私達が一番迷惑なんだけど？」

クロ「迷惑なのはお前らじゃなくてこれ読んでくれてる人達だろうが」

舞「それはそうだけど結局あなたのせいで迷惑してるのには変わらないでしょうに。ホントなんであなたみたいやつが見捨てられないのかしらね…不思議でしょうがないわ」

クロ「それについては同意だな。こんな私ですがほんの少しでもお付き合いいただければ幸いです」

舞「無理だと思つのならあっさり切り捨ててもいいですよ」

クロ「あまりそういうことは言つな！次回に続きます」

### 第53話 疲れたっていいじゃないネコなんだもん

「懐かしき日々よ〜 タララタッタ〜」

なにやら謎の鼻歌をノリノリで歌いながら朝の学校の廊下を踊るように歩いている優斗。

傍から見れば変人にしか見えない行動であるが今の優斗はそんなこと気にならないくらい気分がハイになっていた。

そんな感じでテンション最高潮のまま、廊下を歩いていると…

「お！ おはよう、姫神！舞の奴はどうしたんだ？」

「…え？ お、おはようございます…優斗さん…舞ちゃんは朝ごはんをゆつくり食べるから先に行つててくれつて…えつと…何か機嫌がよさそうですけど…何かあつたんですか？」

いつもの優斗とのギャップに少し戸惑いながらも姫神はあいさつを返す。

もちろん、なぜそんなに機嫌が良いのか理由を聞くのも忘れてはいない。

「いんや。なにもなかったぞ」

だが、それに対して優斗が答えたことはよくわからないことだった。普通、人間の機嫌が良くなるのは何かいいことがあつた時である。しかし、なにもないというのに機嫌が良くなるとはいったいどういうことなのだろうか。

「？ でしたら、なんでそんなに機嫌が…いいんですか？」

「いやいや、なにもないかつたからこそ機嫌がいいんだよ！」

それを聞いた姫神はますます混乱していった。

そう、確かに先ほどから繰り返しているとおり、優斗は今日何か特別なことがあったわけではない。そして、なにもなかったからこそ機嫌が良いのだ。

今日は料理を熱くしすぎて食べにくくなってしまったり、ドアに間違つて尻尾をはさませてしまったり、生徒達の待ち伏せに会つて学校に着くのが遅れたり、などそういったことが一つもなかったのだ。

…他の人から見れば何かおかしい感じもするが優斗にとっては機嫌が良くなるには十分な出来事なのである。

「なあ姫神」

「な、なんですか？」

教室向かって二人でしばらく歩いていると突如として優斗が質問をしてきた。

その声には先ほどのようなふざけた感じは一切なくいつもどりの声に戻っていた。

「いや、なんかさ、お前さんさっきから少し様子がおかしいような感じがしてな…気のせいならいいんだけど…何かあったか？」

「えっと……その……」

「ん？もしかして言いにくいことなのか？」

「あ、いえ、そういうわけではなくて……これを見てくれませんか

「？」

そう言っただけ姫神は自分のカバンからあるものを取り出す。それは、ピンク色の紙で出来た平べったい長方形の物体で、真ん中にはハートのシールが付いていた。それを見た優斗は驚き、目を見開いてしまう。

「ままま、まさか姫神…これってもしかしてラブ…ラヴ…ラブ…」  
「ああ、いえ、その、それは、なんていうか…」

あまりの事にかみかみになってしまふ優斗であったが、一方で何やら良く分からないことをよこによくと呟いて口ごもる姫神。その表情の方もいきなりラブレターをもらって戸惑っている、というよりも毎回毎回起きる面倒事の時のような、どうすればいいかわからなくて困っている、そんな顔をしていた。そんな妙な反応をする姫神に優斗は首をかしげてしまう。

「？ さつきからいったいどうしたんだ？ いったいこの手紙になんがあるんだ？」

「ええと…その…この手紙の裏の方を見てくださいませんか？」  
「裏？」

言われたとおりその手紙の裏の方を見ると…

『果たし状』

「……………」

そんなことが書いてあった。それも太筆で力強く。

「…で、これがその問題の手紙ってわけね」

「ああ、そうだ」

「いいねえ…今どき果たし状なんて珍しいことをしてくる奴がいるなんて…いったいどんな奴なんだろう…！」

「この字…一片の迷いもなく、自信に満ち溢れている…！これはたぶん強敵だぞ！」

「ちよつと黙ってるお前ら。話が進まん」

ところ変わって、ここは優斗達の教室。

今は授業と授業の合間の休みで、いつもの五人組が姫神の机を取り囲むように集まっている。

そこでは色々と面倒な状況であるにも関わらず、みんな相変わらずの調子であった。

「しっかし、いったいどこの馬鹿よ。姫ちゃんにこんなもの送りつけてくる　野郎は！」

「お前な…言いたいことはわかるが、もうチョイ言い方ってもんがあるだろ」

まるで自分の事のように激昂をしている舞に対してその口の悪さにあきれ優斗。

ある意味彼女らしいことと見えるが、一応彼女は女の子をしているのだ、昔っからの付き合いとしてどうにかしてほしいと思っている。

「ところでさ、聞いておきたいんだけど。これどうすんの？」

そんなことを考えていると、突然土郎が姫神に質問をしてくる。



「え？ えつと……」

「お前何聞いてんだ？ どうするってこんなの無視するに決まってるじゃん」

いきなりの質問に戸惑っている姫神に代わって優斗がわかりきった答えを言う。

当たり前だ。こんな心当たりのないことにいちいち行く馬鹿などいるわけがない。

しかし、それを聞いた士郎は少し困ったような表情をする。

「うーん…それはまずいかもしれないかな」

「は？ さっきからどうゆうことだよ士郎？」

「いやいや、相手はこんな果たし状を送ってきた相手だよ？ もし無視なんてしたら後で何かされる恐れがあるんじゃないかと思ってるね」

「…んーさすがそれは考えすぎじゃないか？」

確かに士郎の言うことには一理あるものの、優斗には少し考えすぎのように見えた。  
だが、しかし…

「優斗、ここはいつたいどんな所なのかもう一度思い出してもらん」

その一言で優斗は、はっ！、とする。

そう、そんな考えが通用するのは『普通』の奴が相手だった時だけである。

だが、ここは変人の巣窟……何が起きてもおかしくはないところである。

「……………そうだったな。ええ、そうですね。ここはそういつと

ころでしたね。ええ、そうでしたね。…でも、今度からはオレの方が正しいようになって欲しいよ…」

心底疲れ切った表情でしぼりとするように声を発する優斗であった。

「けど士郎よ、だからと言ってどうすんだよ？ この問題はお前や優斗がいるにしても少し荷が重そうだぞ？」

「そんなことわかってるよ。だから……」

時間は流れお昼時、優斗達は廊下を歩いていた。

「なるほどね。確かに考えてみたらこういう問題は生徒会にまかせるような奴だったわな」

そう、優斗の言うように今生徒会室に向かって歩いていているところなのである。

自分達ではうまく対処できない……ならばそのスペシャリストに任せればいい。

それがいきついた結論であった。

「困った時の生徒会…てね。やっぱり利用できるものは全部利用しなくっちゃね」

「…そういうところは相変わらずだな、お前って」

「ほらほら、そんなことしてないでさっさと行きなさいよ…」

「わかったわかった。そう急かすなって」

そうして優斗達は生徒会室の前まで到着した。

「失礼しまーす」

生徒会の扉を開け、優斗達を待っていたのは…

「あなたね！ いいからこの縄をほどきなさいよ！！ いい加減にしないとこのことも記事に書くわよ！！」

「黙らっしやい！ 今日という今日は副会長の名にかけてあなたの暴拳を食い止めてみせるわ！！」

そこにいたのは縄で全身をふん縛られてギヤーギヤーと騒いでいる部長さんとそれをさらにきつく締めつけようと縄のあまりを部長さんを抑えつけながら引っ張っている副会長であった。

それを見た優斗達のとった行動は…？

「失礼しましたー」

逃げた

「え？ ちょ…？ ま、待って！ これは違っのよおおお！！」

### 第53話 疲れたっていいじゃないネコなんだもん（後書き）

クロ「どーも、後書きの有効活用のなさに定評のあるクロです」

姫神「えっと…色々と定評が多すぎるような気がするんですけど…」  
クロ「そこは気にすんな。そこで…今回からあまりにも説明が不十分な人物紹介を書いていこうと思います」

姫神「…すでに53話にまで到達しているんですけど…」

クロ「…気にすんな！！　まずは我が主人公、優斗（男）から！！」

名前 大島優斗 年齢17歳 高校二年生 風由学園所属 帰宅部

身長 170cm 体重60kg

髪の毛の色と瞳の色は黒で髪はいつもぼさぼさとしている。一人称は俺

・十歳のころに両親を亡くしており、高校に入学するまでは親戚の人に姉と共に預けられていた。

・親戚の人は優斗達を実の子供のように接してくれたためまっすぐな青年に育っている。ちなみにその親戚の家で手伝いを続けた結果今のように家事全般が得意になっていったという話もある。

・性格は先ほど書いたことの影響でしつかりとしており、自然と物事を中心になって動いていることが多い。

だが、ところどころ抜けており、肝心なところで大ポ力をやらかすこともしばしば。

・優斗自身は気が付いていないが容姿の方はなかなかでクラス内で  
の女子の評価は結構高い方である。

・知能、体力共に平均的であるが、数々の実験の影響で耐久力と治  
癒力については常人をはるかに超えている（らしい）。

・趣味は特にこれといってなしで毎日、その時にやりたいことをや  
っている。

・そして代名詞である不幸の方は年々上昇しており優斗曰く「ここ  
最近の不幸は普通の人の一か月分の不幸に値する」とのこと。

・そげぶはできません。

クロ「出来ればもう少し書きたいと思っているんですがこれ以上書  
くとややこしくなりそうなのでこのぐらいにしておきます」

姫神「もう少しわかりやすく書きましょうよ……」

クロ「そうですね」。次回は優斗（女）の紹介です。次回に続きま  
す」

## 第54話 使いまわしだっというじゃないネコなんだもん

昼休み。いつもならみんなで 必要以上に騒がしく 昼食を取っている時刻。太陽がその頂きにまで到達した時分に、優斗達は昼食をそこそこにして、生徒会室を訪ねていた。

そこでは、先ほどまで多少（この学園基準で）問題は起きていたが、すでにそれは沈静化しており、現在、優斗達は副会長今朝起きた問題について相談しようとしているところだ。

「んん！！ …えーと、まずは見苦しいところを見せちゃったわね。ごめんなさい」

咳払いをしながら、開口一番にはつの悪い顔で謝罪を口にする副会長。

見苦しいところ…とは先ほどの部長とのことだろう。ちなみにその部長さんは今、亀甲縛りと猿轡をされた拳句、副会長におもいつきりぶん殴られて生徒会室の隅に吹っ飛ばされて、その後、ピクリともうごいていない。

「まったくだ…お前らがケンカをするのは勝手だが、生徒会を巻き込む真似だけはやめてほしいものだな」

盛大に溜め息をつきながらそう言ったのは同じく部屋にいた会長さん。

あの時…逃走を選んだはずの優斗達がここにいるのも、ちょうど生徒会室に戻ってきていた会長はその場で優斗達と遭遇し、説得をして連れ戻したからだ。

「だ、だってしょうがないじゃない！ あいつつたらまたこんなる

くでもないことを考えてたんだから!!」

そういつて、怒り冷めやらぬ様子の副会長は会長に一枚の紙を渡す。会長は渡された紙を読み進めていくにつれてどんどんと表情が渋くなっていく、読み終わると同時に目頭を押さえて再び盛大な溜め息をついた。いったいどのようなことが書いてあったのだろうか？

「なるほどな…だいたいのわけはわかった…」

「でしょ!! だから………」

「だが、今はそんなことより目の前の彼らの話を聞く方が先決じゃないのか？」

その言葉を聞いた副会長さんは思いだしたかのように慌てて優斗達の方に体を向ける。

「あ…あああああああ!?!」  
「ごめんなさい!!」

「い、いえ、別に気にしてませんから…とにかく頭を上げてくれませんか?これじゃまともな話もできませんし…」

「そ、そうね…ほんとごめんなさい………」

優斗に促されて頭を上げる副会長さんだったが、自分の失態を未だに許せないのか悔しそうな表情をしていた。

「……………さて、それで今回はどんな用件でここに来たのかしら？」

だが、一度大きく深呼吸をすると雰囲気は一変、そこにはいつもの凜とした『学園の法』としての顔があった。

「あ…あの…その…」

「あ、ごめんなさい。わかつてはいるんだけど、つい、いつもの癖で怖い顔をしちゃうのよね」

「い、いえ…その…ここ、これなんですけども……」

その突然の変化に少し戸惑いを見せる姫神であったが、表情の柔らかくなくなった副会長さんに促されて例のものを渡した……。

「もおおおおらったあああああああ!!」

その瞬間、副会長と姫神の間に何か黒く大きなものが叫び声をあげながら通り過ぎた。

いきなりの事にその場にいた全員が唾然としていてとその黒い影が再び動き出した。

「ふふふふ……たひかにもらったわよ」

そこにいたのは先ほどまで教室の隅に転がっていたはずの部長さん……だったのだが、その姿は哀れとしか言いようのないくらいひどかった。

どうやって解いたのかはわからないが猿轡が外れていることを除けば先ほどまでと同じで全身を縛られており、今も芋虫のように地面をはいずりまわって動いている。

「あんた性懲りもなくまた……ってああー!!」

いきなり部長さんに指をさして叫びだす副会長。その先にはあったのは例の手紙を口にくわえ不敵な笑みを浮かべている部長さんの顔があった。たぶん先ほどのダイブの時に奪ったのだろう。



「あああんだそれを返しなさい！！ それは私が預かったものよ！！」  
「いやよ。だってこれにはスクープのにおいがふんふんするんだもの！！」

部長さんは手紙を口にくわえながら体を左右に動かすことで手紙を奪い返そうとする副会長をほんろうしている。

「だあもう！！ あんたはなんでいつもこうなのよ！！」

「ふふふふ…あたひの記者魂を甘く見ているからこうなるのよ！！」

「パパラッチ精神の間違いだろ」

副会長相手に得意げになっていた部長に会長が冷静なツツコミを言い放つ。

「なっ！！？ わ、私をあんな奴らと同格に扱わないで頂戴！！」

「こちらから見ればお前もその手の輩もほとんど同じなのだがな」

「それはあんたの見る目がないだけよ！！」

「これが見る目がないというのなら俺はそれで十分だ」

「ぐっ…！ 攻めきれない…！！」

まさに鉄壁。

部長さんの執拗な攻めに対してまったくこたえていない。

「なあ…」

「ん？ なんだい優斗」

「お前の部長さんがピンチみたいだが…いいのかわ？」

「んん…まあこのままの方がおもしろそうだし。それに部長は『目の前にスクープがあったら私でも迷わず見捨てなさい！！』とか言ってたし」

「…さいですか」

部長も部長なら部員も部員であった。

## 第54話 使いまわしだっというじゃないネコなんだもん（後書き）

クロ「どーも、今回クロスをさせてもらったクロです」

士郎「クロスの相手は白夜さんの『猫パニック！』という作品です。興味のある人はぜひ見に行ってくださいね」

クロ「白夜さんありがとうございます！ さて、では人物紹介といきましょう。今回は優斗（女）」

名前 大島 優斗 以下前回と同じ

身長 130cm 体重 25kg

髪の毛の色 白 髪型 ロングヘア 瞳の色 銅 一人称はオレ

・基本的なことは男の時と同様であるが、ネコの特徴を受け継いでしまっている。

・頭とお尻からはしっぱと耳が飛び出しており、当然感覚もある。

・容姿の方は幼いながらもかなりのレベルになっており、それがもとでトラブルは絶えないものとなってしまった。

・筋力、体力は大幅に落ちてしまったものの、瞬発力、反射神経、第六感などは大幅に上昇している。

・不幸の方も相変わらずで本人曰く『神様いるならぶん殴りたい』とのこと

クロ「こんなところでしょうか？」

士郎「相変わらずの投げやりっぷりだね」

クロ「はいはい、わるーござんしたね。…それで次回なんですけど先ほど書いた『猫パニック』に今度は私がクロスしてみようと思います」

士郎「期待せずに待っていてくださいね」

クロ「出来るだけ頑張ってみます…次回に続きます」

第特別話 その1 また会った日に（前書き）

今回は白夜様の猫パニックという作品とのクロスを書かせてもらいました。白夜様ありがとうございます。

この話は白夜様の書いた私とのクロス作品の後のお話ですので見ていない人は猫パニックを見てから見た方が良いでしょう。

## 第特別話 その1 また会った日に

「ふあああああ……」

退屈だ。実に退屈である。あまりに退屈で眠くもないのに欠伸が出てしまった。

何かやることがないか考えてみたが、結局は何も浮かばず再び意味もなくベッドの上でごろごろする。

それもそのはずだ。なぜなら今は学校は夏季休養中……つまりは夏休みなわけだから、授業などといったやらなければならぬことがいつもより圧倒的に少なくなっている。

「うー……あー……」

やはり、退屈で意味もなくうめき声をあげてみるが、それも何の意味もなくただ無駄に時間を消費するだけだった。

とにかく本当にやることがないのだ。

昼食はついさつき食べ終わったばかりだし、今日やるべき家事についても全て終わっている。

最初は舞達や士郎達と何かしようかと思っていたが、今日に限ってみんな用事があるらしく断念。

部活などではないし、この体ではろくなことはできない。勉強などやる気の欠片も出てこない。

とにかく退屈だった。

外に出ればこの退屈も解消できるかもしれないが、この前の一件の事もするため今回は自重を……

「あ……そうだ」

「ねえ、今日のお昼何にしたい？」

ところ変わってここはとある場所のとある一軒家。そこには三人の人がいた。

その内の一人、真つ白な髪をポニーテールにしたエプロンをつけている左目が真紅、右目が蒼の少女。天野由宇が一緒にいた二人に問いかける。

「俺は何でもいいぞ」

そう答えたのは彼女と同じ瞳の色をしているが、髪の色・性別共に対称である天野神威。

「私も何でもいいよ」

同じく答えたのは、由宇と同じポニーテールだが、黒髪で瞳の色も黒であるここにいる他の二人の妹である天野由香。

「そう言われると困るんだけどな……」

二人の返答に対して少し困った表情をする由宇。だが、二人も、そう言われても……と困った表情をしてみよう。

ピンポーン

「あー、はいはい。すぐにいきまーす」

突然の訪問者に会話を一時中断して玄関に向かう。  
靴に足をかけてドアを開くとそこにいたのは

「…昴？」

見事な黒髪を腰の辺りまで伸ばし、左目が蒼で右目が真紅の美少女にして、由宇達の友人 黒神昴くろがみすはるが立っていた。

「いったいどうしたの？ もしかして遊びに来てくれたとか？」

「ああ、いや……私はここを偶然通りかかっただけなのだが……」

少し顔を赤くしながら、そこでなぜか言葉を区切る昴。なんだろうか？ と由宇は首をかしげていると昴は突然後ろ指さして

「こいつが由宇の家の前で倒れていてな」

そこには大きな麦わら帽と大きなリュックを背負って、男の子ものの格好をした白髪の女の子が玄関の前で倒れていた。

「それで優斗君？ いったい何であんなところに倒れていたのかしら？」

現在リビングには5人の人物が集まっている。その中の一人、由宇が優斗を除いた他の人物と同様の疑問を口にする。



「ええまあ……オレとしてもそこを話したいのは山々なんですけど……」

と、ここで一旦言葉を区切りだす優斗。だが、この場にいる全員はわかっていた。優斗がなぜ言葉を区切ったのかを。

「その……まずは由香ちゃんを何とかしてくれませんか？」

苦笑いをしながら答える優斗であったが、その姿は到着当初とはまったく違っていた。

ラフな男物であったはずの服装は、どこで手に入れたのかどこかで見たことのある真っ黒なゴスロリに変わっており（由香ちゃん曰く『この前意気投合した不思議なおじさんにもらったとかなんとか』）髪型のほうも今現在座っているソファの後ろに立っている由香ちゃんにイジクリまわされており、見事なツインテールが出来上がりつつある。

「ゆ、由香……！ 優斗君が嫌がってたんだからやめなさい……！」

「ええ……だって優斗さんってかわいいからもって着せたいよ……」

由宇さんのお叱りに対して頬を膨らまして拒絶の意思を示す由香ちゃん。

「由宇」

「……わかったよ」

だが、そこに神威さんのお叱りが加わったことで由香ちゃんはしぶしぶ席に戻って行った。

「なあ由宇。またも話を途切れさせるようで悪いのだが、いったい彼女……というべきだろうか？ 何者なんだ？」

いきなり先ほどまで黙って一部始終を見ていた黒髪の美人さんがいきなり由宇さんに質問をする。気のせいかその人は雰囲気はどこか由宇さんに似ている感じがした。

「ええと、彼は……なんていうべきかしらね……」

「彼？ だが、こいつはどう見ても……」

「いえ、由宇の言うとおりよ昴！」

「うお！？ なんか出てきた!？」

突如として昴さん？ の横にいつぞやの神様のように黒猫が現れた為、驚いてしまう。

「あはは!! 驚かしてごめんなさい。私は月ゆえっていうの！ よろしくね!!」

「は、はあ……よろしく」

その場でくるくると回ったり、自分の周りを飛びながら楽しげに視線を向けてきたりと、どうやらかなりおてんばな子のようだ。

「それより月。いったいどういふことなの？」

そこで声をあげたのは昴さん。どうやら優斗の正体がよほど気になっているようだ。

「ええとね。彼、今はこんな姿をしてるけど、れっきとした男性なのよ」

「……は？」

リビングには、昴さんの間の抜けた声だけが響きわたった。

第特別話 その1 また会った日に(後書き)

クロ「どーも、正直口調とか一人称とかもんのすごい不安なクロです」

健人「白夜さんありがとうございました!」

クロ「それも俺が言ったぞ」

健人「何を言う!」 礼はしっかりと述べなくてはいけないだろう!」

クロ「まあ……確かにそうなんだが……」

健人「それでだ……もしかして今回俺達は出番なしなのか?」

クロ「さ〜てどうでしょう? 優斗sideの方は他にも出演予定がいるけど……」

健人「いるけど……?」

クロ「そこは後のお楽しみってことで」

健人「お、おい!! 俺と土郎はレギュラーなのに向こうですらはぶられたんだぞ!! さすがに出してもらわないと……!」

クロ「ちよつと黙ってなさい。……あ、あと人物紹介は特別話ではお休みさせてもらいます。申し訳ない。次回に続きます」

健人「おい! まだ話は……」

## 第特別話 その2 ネコの恩返し？

「……なるほどね。つまりあなたは猫と交わった結果こんな姿になっちゃったってわけなのね」

「ええ、あなた達とは状況が違いますがそんな感じですよ」

とりあえず自分の紹介を話せる範囲ですべてした。だが、優斗は紹介を終わった後も昴さんがなぜか自分のことをまじまじと見つめていることに気がついた。

「どうかしたんですか昴さん？」

「い、いえなんでもないわ」

「……？ それならいいんですけど……（オレなんか変なことしちゃったかな？）」

それでもこちらをちらちらと見つめてくる昴に不安がる優斗であったが、昴は全く別の事を考えていた。

「（……由宇といい、この子といい、なんでこう……元は男なのにこんなにかわいいんだらう？）」

軽い嫉妬心を憶えてしまう。

自分よりもかわいい姿をしておきながら、元は男であるというのだからちょっと不公平に感じてしまう。

そんなことを考えていると今度は月が会話に入ってきた。

「それにしてもあなたって本当に変わった感じのする人ね」

「そ、そうなんですかい？」

「ええ、そうね、男のようでも女のようでもあり……人間のようで

も猫のようでもある！ そんな感じね！  
「……………さいですか」

月のその容赦ない言葉に若干へこんでしまう優斗。悪意があって言  
ったわけではないのだろうが、それが逆につらい。

「ね、ねえ優斗君。ところでそろそろ話してくれないかしら？ い  
つたいなんでああなたはなんであんなところに倒れていたのかを」  
「……………あ。す、すみません！ 実は……………」

由宇のその言葉にそういえば、と最初に言わなければならぬこと  
を今の今まで忘れていたのを思い出した。  
とにかくさっさと話すべく口を開こうとした時、

「優斗さん！」  
「ひゃうい！？」

背後からの突然の強襲。  
いきなりのごとでまったく反応出来ずに由香ちゃんに捕まっ  
てしま  
う。

「えへへ〜」  
「いや……………ちよつと……………やめ……………んあ……………」

何とか抜け出そうと必死に抵抗をするものの、がっしりと胸をつか  
まれてそこから抜け出すどころか、変な声を出してしまう始末であ  
る。

「あれ？ もしかして優斗さんまた胸が大きくなった？」  
「そ、そんなわけ！……………って、ん？」



鍋のふたの音をBGMにして目の前にあるネギを鼻歌交じりにまな板の上で切り刻んでいく。

「へ、優斗さんってお料理上手だったんですね」

「ゆ、由香ちゃん！？ いつの間に……」

「え？ さつきからいたんだけど……あ、これ味見してもいい？」

「うーん。悪いんだけど、もう少しで出来るから向こうで待っていてくれないかな？」

「うん！ いいよ。でも出来るだけ速くねー！」

「りょーかい」

由香ちゃんが居間に戻っていくのを確認すると優斗は再び作業を再開する。

なぜ優斗はこんなことをしているのか？ 時間を少し戻して説明しよう。

「それで優斗くん。あなたはなぜここまで来たのかしら？」

「はい。この前泊めてもらったお礼にと思いましたが、今日はオレがご馳走をしようかと……」

「ご馳走？」

「ええ、食材とかも、ほら、このとおり」

そういって、持ってきた大型のリュックの中をみんなに見せると、そこには色とりどりのさまざまな食材がたくさん詰まっていた。

「いろいろ買ってきましたから食べたいものがあつたら何でも言うてくださいね」

満面の笑みでそう答える優斗にみんなはさまざまな表情で反応する。



ちなみにそのちよつと前まで舞とケータイで第二部に当たるメールによる汚文激闘編が繰り広げられていたが、そこんところは割合させてもらおう。(第三部は激！暴力決着編(仮)になります)

そして現在……

「お待たせしました！ 次の料理です！」

「来た来た」

「速く〜！！」

「あはは、そんなに慌てないで。量は十分あるから」

出来上がった料理を皿に盛りつけた物を次々と運び出していく優斗よく見ると先ほど料理を盛りつけた大皿がいくつか空になっており、また料理を作らないといけないことを予感させた。

「……おいしい」

「優斗君…すごいおいしいわ！」

「それは良かった。実は口に合うか少し心配でした…」

「これはうまいな。いったいどんな料理なんだ？」

「ああ、これは……という料理でして……」

「なるほどな。参考になったよ」

「いえいえ、どういたしまして」

味の評判も上々で、その後も次々と料理を作っていたが結局持ってきた食材はみんな腹の中に収まってしまった。

第特別話 その2 ネコの恩返し？（後書き）

クロ「どーも、忘れ去られた男クロです」

先生「もともとあんたのこと憶えている奴なんかいるの？」

クロ「……うんスル。とにかくマジですんませんでした！ 忘れ去られても文句もいえませんが。特に白夜様……」

先生「人様に迷惑をかけるなどあれほど言っただけでしょうに」

クロ「待て言い訳を聞いてくれ。忙しかったんだ！！……はい、すいません。もう煮るなり焼くなり好きにしてかまいません」

先生「それが出来たらどれだけいいかしらね……これを終わらせるまでは手出できないのが悔しいわ」

クロ「なんかもう『お前もろくろ書くんじゃねえ！！』とか言う声も聞こえてきそうな感じです……内容と時間が釣り合わない！！」

先生「それはあんたの実力がカス以下だからでしょう」

クロ「言い返せないのが悔しいです！！ 正直誰かに罵ってほしい気分なクロでした。次回に続く」

### 第特別話 その3 心と思い

「「ご馳走様でした!!」」

「いえいえ、おそまつさまでした」

ご馳走様、その当たり前で心のこもった感謝の言葉に思わず笑みをこぼしてしまう優斗。

テーブルの上に視線を移すと大小様々な大きさのお皿が大量に積み重ねられており、それとセットで存在していた大量の料理はきれいさっぱりすべてお腹の中に収まってしまった。

食事中に「ブロッコリー爆発しろ!!」とか「ピーマンはこの世から消滅しろ!!」みたいなことが聞こえたような気がしたが、そこはさっさと忘れることにした。

「あゝおいしかった! すっごい良かったよ! ……ブロッコリーが爆発さえしてくれれば……」

「さりげなく怖いことを混ぜるな。あと、ブロッコリーはどうやっても爆発しないぞ。うまかったのは確かだけどな」

「……………」

「昂々やっぱり食べ過ぎたからお腹周りが気になるのね〜!」

「な!?! ベ、別に私は……」

食事も終わりその場で談笑をし始める面々に対して優斗と由宇はそこから少し離れた位置にあるソファーに隣り合うように座っていた。

「今日は本当にありがとうね優斗君。とても楽しかったわ」

「いえ、こちらも今日は久しぶりにのんびりと楽しく食事をすることができたので礼には及びませんよ」

「そうなんだ! ……って、え? 久しぶり?」

「ええ……ほんと久しぶりですよ……」

その言葉に驚く由宇を横目に優斗は思い出せる範囲でここ最近の出来事を思い出していく。

ある時は食事中に突如として理不尽な理由で殴られ、ある時は突然わけのわからん理由で泣き出す友人を慰め、またある時は友人にはめられ罰ゲームで食べるようなゲデモノを食べさせられたり……とここ最近の食事時には平穩の二文字は存在しなかった。

「あー……そういえばあんなこともあったなー……」

「え、えーと……と、ところで優斗君っていつたいてどこで料理を覚えたのかな！ お母さんに教えてもらったとか？」

なんだか話していく内にどんどんと瞳から光が失っていく優斗を見て、慌てて話題を変える由宇。

それを聞いた優斗は一瞬、ほんの一瞬だけ驚いたような表情をするが、すぐにいつもの顔にもどる。

「そうですね……だいたいおばさんの手伝いをしている時に教えてもらっていたことが多くて……」

「おばさん？ お母さんではなくて？」

「ええ……その……」

「……？ まさか！？」

「……」

目をつぶり、無言でうなづく優斗。何を伝えようとしているのかはすぐにわかった。

「……その……ごめんなさい……無神経なこと言って……」

「いえいえ、気にしないでください。大分前のことだし、もうそん

なに気になりませんか。それにいつまでもへこたれてるわけにもいきませんしね！……さて、そろそろ後片づけでもしますか！」

明るい笑みを浮かべながら元気よくキッチンに消えていく優斗。

だが、由宇は気づいてしまった。優斗は話をしている時、顔は笑っていたが、その眼はどこかさびしそうな眼をしていたことに。

他の人にも同様の笑みを振りまく、その後ろ姿を見て由宇は何とも言えない気持ちになってしまった。

「よし……これで終わり……っと」

洗剤の付いた皿の汚れを洗い流して、蛇口から流れ出る水を止める。先ほどまで山のように積み上げられていた食器の数々は全て棚に戻されて、これが最後となっていた。

洗い流したものは水をよくきってから、隣に立っていた由宇に手渡す。

出来ることなら棚に戻すところまで自分でやっておきたかったのだが、食器を棚のどのあたりに戻せばいいのかわからない上に、第一身長のせいで高いところに戻すことができないなどの理由で由宇には手伝ってもらっていた。

「……はい、お疲れ様優斗君。ごめんなさいね、こんなことまでやらせちゃって……」

「いえいえ、オレがやりたいって言って、勝手にやったことですから気にしないでください」

全ての作業が終わり、リビングに戻るとそこにはもう真っ暗で誰も

おらず、時計を見てみるとすでに針は逆「字をさしているところだった。

「由宇さん。ところでみなさんは？」

「ああ、この時間ならみんなはたぶんそれぞれの部屋に戻っていったんだと思うわ」

「そうなんですか。それじゃオレもそろそろ……」

「ねえ……優斗君？」

「はい、なんで……」

優斗は何事かと質問しようとしたが、その先の言葉は続かなかった。なぜなら、突然、由宇が優斗を抱き寄せてきたからだ。

「な……ななななな……！？ ちょ、ちょ、ちょつと由宇さん！？」

突然の事にさすがに焦る優斗であったが、由宇はどこか悲しげに、そして包み込むように優しく言った。

「優斗君……こんなことをしても私は何の役に立てないと思う……」

けど……それでも、私はあなたに何か出来ないかな……？」

「由宇……さん……？」

「こんなの私の我がままなのかもしれないけど……お願いだからもう少しだけ……このままにして」

「……………」

優しく、ぎゅう、と抱きしめられる。布越しからでもしっかりと感じることができる柔らかく、そして暖かなぬくもり。

それはまるで、とっくの昔に忘却したはずの 母のぬくもりのようだった……。

「由宇……まだ寝ないのか……っていつたいたいどうしたんだ？」  
「うん、ちよっとね」

なかなか部屋に戻ってこない由宇たちを心配した神威はリビングにまで行ってみると、そこで待っていたのは由宇の膝の上ですやすやと眠る優斗と柔らかい微笑を浮かべながら、その頭を優しく撫でている由宇の姿であった。  
窓の外から降り注ぐ月の光に彩られたその二人の姿はどこか幻想的な雰囲気醸し出していた。

「……そうか。もう遅いからな、さっさと寝ろよ」

家族である少女の様子を見て何かを察したのか、神威は言葉少なめに注意をして部屋に戻っていくと、その場には二人の少女だけが残された。

めがさめるとめのまえにゆうさんのかおがありましたまる おわり

「うおわあああああああああああああ！?!?!?!」

「ん……ん……」

「ゆゆゆゆゆゆゆ由宇さん!?!?!」

その叫び声で目を覚ましたのか、眠そうに眼をこすりながら、のそりと起き上がる由宇。  
そんな中、優斗はいきなりの突然の出来事に頭が追いつかず、ただただ混乱をしていた。

「あ、いや、その、これは……その！」

「くす！ ゆ、優斗君、とにかく落ち着いて……くすくす」

わたわたと慌てながら必死に弁明をしようとするその優斗の姿が可笑しかったのか由宇は笑いを抑えきれないでいた。

「驚かせてごめんなさい。あなたがここにいるのは私が連れてきたからなの」

「ゆ、由宇さんが？」

「ええ、昨日の優斗君、寝ている時でもなんだか寂そうな顔をしていてね……つい連れてきちゃったのよ」

「……あ」

その言葉を聞いて、やっと昨日のことを思い出す。

由宇に抱き寄せられたこと、ほんのちょっとした油断と疲れでそのまま身をゆだねてしまったこと、そしてそのまま何も考えずに眠ってしまったこと。

その全てを思い出し、優斗は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしてしまう。

「ああああああのののの……そのののの……」

「……やっぱり余計なことしちゃったかな……」

「……え？」

「ごめんなさい……迷惑……だったわよね」



「そ、そんな迷惑だなんて!!」

なぜ自分が謝られているのか？　むしろ迷惑をかけて謝らなければいけないのは自分の方なのに。

「由宇さん。オレは迷惑だなんてこれっぽっちも思っていないですよ!!」

「そ、そうなの？」

「そうですね!!　それに……その……う、嬉しかったです……し……」

やはり恥ずかしいのか最後の方では蚊の鳴くような声になってしまったがこれはまぎれもない優斗の本心であった。

「……つぶ！　くすくすくす……」

「ど、どうしたんですか？　何かオレ変なことでも……?」

「いえ、なんだか優斗君って意外とかわいいんだなーって思っちゃって……」

なぜ由宇は笑っているのかわからずに頭に疑問符を浮かべながら首をかしげてしまう優斗。

その姿もツボに入っただのか由宇は遂に涙まで浮かべて笑い出してしまう。

「ゆ、由宇さん？」

「ご、ごめんなさい。なんだか可笑しくって……」

「……なんだかよくわかりませんが、昨日のことで嬉しかったのは本当ですよ!」

「うふふ、ありがと。そういってもらえると私も嬉しいわ」

そういつて由宇は優斗の頭を優しく撫で始める。  
最初は驚いた様子の優斗であったが、すぐにどこか嬉しそうな顔を  
して、しばらくの間そのままだった。

そんな優しい時間の中を過ごしていると……

ピンポーン

「あら？ 誰だろうこんな時間に」

突然のチャイムに不審げな顔をする由宇。

確かに今は平日のそれも早朝と言える時間だ。郵便だとかそういつ  
たものはまずあり得ないだろう。

だが、そうなつてくるといったい誰だろうかという問題になつてく  
る。

ピンポーンピンポーン

「……………ん？」

なんとなくだがとてつもなくいやな予感がしてきた……

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン

「……………」

予感というより的中だな、という言葉が頭をよぎるが今はそれど  
ろではなかった。

ピンピンピンピン、ベキー！

「優斗ーあんたがいることはすでにわかってんのよーさっさと出てこないと抹消させるわよー」

「ゆうちゃーん早くしないと本当に消滅させられちゃっわよー」

「……頼むから日本語でしゃべってくれ……」

先ほどまで気持ちよくなっていた頭が嘘のように痛くなってきた優斗であった。

第特別話 その3 心と思い（後書き）

クロ「どーも、私は亀になりたい……なクロです」

副会長「本人曰く『今の私は地を這う虫』なんだとか。私から言えばそれよりも遅いと思うけどね」

クロ「文章がうまく書けない！ 他の所から参考＋ネタになるようなものを探そう！ 色々あって忘れて時間がたつ やっぱり書けん（ry 無限ループって怖くね？」

副会長「まったく……後書きだからってここであなたの愚痴を言っても誰も得なんてしないでしょくに」

クロ「わかっちゃいるけどやめられねーって言葉があるんだぜ？」

副会長「そんなものはただの言い訳でしょうに。そんなことを書いている暇があつたら勉強をするなりこれの続きを書くなりしなさい  
！！」

クロ「おっしゃるとおりで……一応次回で終了……の予定です。白夜様本当にすいません……次回に続きます」

第特別話 その4 やっぱり浪漫は大事ですよね 前編

「……んで、まずあんたらなにもんなわけ？」

「先生、お願いですから常識を忘れたんなら今すぐ取りに戻ってください」

「これが私の常識なんだけど？」

「どんな常識ですか！……そして！ 姉さんも目の前にお菓子を  
出されたからってそんなに遠慮なくバクバク食べないでくれ！！」

「え〜だつて〜出されたのならちゃんと食べないと失礼じゃない？」

「……あ、これおいしい〜」

「人の話聞けよ……」

まったく知らないはずの他人の家で……それも家主達が目の前にいるにもかかわらず、尊大にソファーに腰掛けるどこまでも俺様な先生と周りをまったく気にせず目の前にお菓子をお菓子をニコニコとした笑顔で次々と口の中に放りこんでいく姉というどこまでも、そしてどこでも相変わらずな二人に思わず溜め息をついてしまう。

わかっていて、このような事態になることは容易に想像できたことだ。

だが、それと同時にこの二人は例え目の前でいきなり弾丸が飛び交おうともこのペースを絶対に崩さないということもどこか確信しているのです、今考えるべきはこの二人を止めることではなく、この二人が起こすであろう問題をどこまで抑えることができるかである。

……正直、立場上これ考えるのは逆ではないのか？ とひそかに心の中で思ったが、すぐに今更だ、と諦めた。

「え、えーと優斗君？ この人たちは……？」

さすがの由宇達もこの二人には呆気にとられたのか、ただ啞然としている者、興味深そうに二人を見ている者、そして今の由宇のように者と反応はさまざまであった。

「本当にすいません由宇さん……こっちのテーブルの上に足をかけて、ふんぞりかえっている方はこの前お話をしたオレの先生で……こっちで遠慮なくお菓子を食べているのはオレの……姉……です」「えーと……と、とっても個人的なお姉さん達ね」「由宇さんばつさり言ってくださって結構ですよ……色々とおかしいって……」

ははは……と力なく笑いながら言う。

むしろその方が救われるかもしれない。心の中は由宇達には申し訳ない気持ちでいっぱいなのだから。

しかし、一度そう思うと姉さん達だからくなどと言い訳をして二人を野放しにしている場合ではないように思えてきた。

「先生。せめて、皆さんの前なんで、その偉そうな態度でいるのはだけは止めてくださいよ」

駄目はもともとと意を決して先生を注意してみた。いくら先生達とは言えどしっかりと話をすればきつとわかってくれるはず……そう信じて。しかし……

「悪いけどこれは必要なことなのよ」

「何ですか？ 理由は？」

その答えは否。なぜかと問い詰めてみると、先生はかなり真剣な表情をしながらこう言った。

「威嚇よ」

「やらんでいいです」

「もしくは牽制かしら？」

「そつちも必要ない」

「そんなことよりも、私はあなた達の周りをふわふわ浮いているネ  
「おちゃんたちが気になるんだけど、いったいなんなのかな？」

「あ、あなた、私達が見えてるの！？」

「あれれ、みんなは見えないのかしら？」

「姉さんも……頼むからこれ以上この場を混乱させないでくれ……」

優斗のそんな懇願するような呟きもむなしく、結局この場はいつものごとく混沌に包まれてしまった。

「……それで私たちには“神力”という力がありましたー……」

「なんなのそれ？ 超力？ 変身なんかもできるの？」

「姉さん。そのネタは最近の子にはわからんよ。あと邪魔だからしばらく黙っててくれ」

あれからしばらくというもの実に大変だった。

実体化をしてなくて見えないはずの神子と月を姉が見てしまったせいで「あんたらいったい何者なの？」と先生が興味を持ってしまいその欲望がいつ爆発するのか、と優斗は話をしている間とにかく気が気ではなかった。

「……なるほどね。だいたい分かったわ」

「……ほんとにわかってるんですか？」

「当たり前じゃない。その力によく似たことが書かれたレポートを

どっかで見たことがあるわ。ただ、あまりにも突拍子のないことが書かれたやつでほとんど相手にはされてなかったけど……ま、私もその一人だったんだけどね」

だが、そんな言葉とは裏腹にその顔は獲物を前にして舌舐めずりをしているような表情をしていた。

……まずい。これはひじょーにまずい。

今の状況を例えるならば飢えた肉食獣の前にか弱いエサがなにも知らずに遊んでいるようなものだ。とにかく由宇達が危ない状況なのであるため、優斗はまず先生の注意をそらそうと話しかける。

「そういえば先生。どうしてこんな朝早くにここに来たんですか？ オレを迎えに来た……というには早すぎますし……」

「はあ？ 何であたしがあんたのために迎えに行かなくちゃいけないわけ。ここに来たのは別の目的、あんたはただそこに偶然いたからついでに拾ってやっただけよ」

せつかくの楽しみを邪魔されて機嫌を損ねたのか、ジロリ、と不機嫌を包み隠さずにおもいつきり睨まれてしまったが、そんなことをいちいち先生相手に気にしてはきりがないので無視をした。

しかしここで気になることが一つ。自分を迎えに来たのが目的ではないとしたらいったい何をしにここに来たのだろうか？ 姉と由宇達、双方とも反応からして顔見知りということはまずあり得ないだろうし。

「じゃあなんでここに来たんですか？」

「それは……来たわね」

「は？ いったい何……」

優斗がなんなのかと質問しようとしたが、それは叶わなかった。な



ぜならばその場にいた全員が突如として消え去ってしまったからだ。

きがつけばめのまえにビルほどのおおきさがあるねこがいましたまる

「な、な、なんじゃこりゃあああああー!!」

あまりの事に某刑事のような叫び声をあげてしまう。それに気がつけば自分の周りは由宇達の部屋ではなく、なにもないただ真っ白な世界が広がっているだけの場所になっていた。

「せ、先生!? これはいったいどういうことなんですか!? それにここってどこですか!？」

先ほど話そうとしていた“ここに来た目的”とはおそらくこれのことだろうと思っ た優斗は先生を問い詰める。すると先生は……

「説明面倒」

まさかの説明放棄をしたのであった。

「さすが光ね、これは私でも想像できなかつたわ」

「いや、これは想像できる方がおかしいでしょ……じゃなくて! 先生! どういうことかちゃんと説明を……!」

「あ、あの一……」

優斗がもう一度先生を問い詰めようとした時、今まで黙っていた由宇が声をかけてきた。

「あの子なんだかさつきからこつちを見てませんか……？」

そう言つて由宇が指さした先にいたのはおそらく自分達よりも前からここに居座つていた小さなビル程の大きさがある猫であつた。

「先生。色々あつて忘れそうになってましたけど、あれつて大丈夫なんですか？」

「そうね……あの図体だから、もし遊ばれでもされたら間違ひなくタダではすまないと思われるわ」

「ちよつと！？ それつて……！！」

「だから優斗！」

「は、はい！？」

「これを使いなさい」

そういつて先生は懐からある物を優斗に手渡してきた。

それはピンク色をした円柱状の棒でその柄の先には一目で安物とわかるような大きな紅いルビーがくつついている物体であつた。……そう、言うなればそれはレストランの入り口とかで売つていそうな安物の魔法少女の杖を想像させる物であつた。

「……先生」

「何よ？」

「これは何ですか？」

「わからないの？ 変身ステッキよ。魔法少女の」

「これをオレにどうしろと？」

「変身してあいつを倒しなさい」

「な、何言つてんですかあなたは！！ つか！ 先生がその手に持

っている何ですか!!」

おそらく変身ステッキを出した時に一緒に出てきてしまったのだろう、その手には普通の形をしてないどこかのRPGやシューティンゲームに出てきそうなとても強そうな拳銃が握られていたのだ。

「ああ、これ？ これは……」

つまらなそうにそれに視線を移したに先生は次の瞬間、バキバキと硬い物をつぶした時にしか出ないような音を出しながら片手でそれをいとも簡単に握りつぶしてしまった。

ゆっくりとその手を開いていくとそこあった物はもうすでに原型を留めていなかった。

「今なくなつたわ」

「……………」

正直「もうあなた一人でこれなんとかできるんじゃないか？」というツッコミを入れたい気持ちになったが、「そんなことをしてもこの状況は変わらないだろう」という心の声に従い口には出さなかった。無駄な労力は無いにこしたことはないのだ。

非常に不本意ではあるが、もはや覚悟を決めるしかなかった。

「ゆ、優斗君？」

「みなさん下がってください。オレが何とかしてみます……たぶん」

変身ステッキを握りしめながらみんなの先頭に立つ。

正直不安でいっぱいだ。なにが不安なのかと問われると色々あります。ぎて何を言えいいのかわからないくらい多い。先生がサポートを

してくれるらしいがそれも不安要素の一つであるためどうしようもない。

だが、この状況（たぶんおそらく……だと思いが）自分しかどうにか出来ないのだ。やるしかない。

「それじゃあ先生お願いしますよ」

「わかったわ。……ああそうそう、言い忘れてたけど変身した後しっかりと名乗りを上げないと変身が強制解除されちゃうから忘れないように」

「はあ！？ なに言ってる……！！」

「はい、変身」

文句を言いかけてる優斗を無視して手元にあるパソコンのボタンを押す。

次の瞬間、手に持ったステッキから思わず目を覆ってしまうほどの光が放たれた。

その光も次第に収まっていき視界が確保されていくと優斗は自分の身の回りは一変していることに気づいた。

まず自分の着ている服。それが白い……どこまでも白い衣装に変わっており、胸には大きな宝石のような紅い球体が付いており、あとはただひたすらに全身にフリルとレースの付いている服になっていた。

他にも下は短いスカートに白いストッキング。さらにはしっぽも二つに増えていたのだ。

ネコ耳としっぽのオプションが付いているが、その姿はまさしく魔法少女……だが、その心の方はいたって普通（？）の男子高校生で

あることを考えると哀れで仕方がない。

「ほらー早く名乗りを上げないと変身が強制解除されちゃうわよー。頭にもうデータが入ってるから忘れてるなんてこともないでしょー」  
「あーとりあえず死にたい……」

そんな優斗の心情も無視して物語は加速していく……のか？

第特別話 その4 やっぱり浪漫は大事ですよね 前編（後書き）

クロ「どーも、やっぱり約束は守れなかったぜ！ なクロです」

会長「いい加減そろそろ終わらせないとまずいんじゃないか？ もう始めてから2カ月くらいたつぞ？」

クロ「いやー……うん……うん……」

会長「ちゃんと喋れ」

クロ「なかなかうまく書けねんだよおおおおおー！！」

会長「やけになるな。それよりもちゃんと行動で示せ。見てくれる人はいるわけだから」

クロ「……………」

会長「多くはないかな」

クロ「……やっぱりかー。次回に続きます」

第特別話 その4 やっぱり浪漫は大事ですよ 後編

前回のあらすじ

夏休みを利用して由宇の家に遊びに来ていた優斗の目の前になんか色々あつて突如、怪人ビックキャットが現れたのである！！  
友を……家族を……夢を希望を守るために優斗は魔法少女に変身したのであつた！！

「……大体あつてるけど、大体間違つてるぞ」  
「ほらー早く名乗りを上げないと変身が強制解除されちゃうよー。頭にもうデータが入ってるから忘れてるなんてこともないでしょー」

406

誰にも聞こえない声でツツコミを入れたはずの優斗に後ろで忙しくノートパソコンを動かしている先生は何事もないかのように言った。確かに言うとおりでではあつた。どういう技術が使われたのかはわからないが、今優斗の頭の中に変身した後の決め台詞、そして決めポーズが細かいところまで全て叩きこまれていた。

しかし、その内容はひどいの一言。あまりにもひどい。どのくらいひどいかと言うと、もし羞恥心で人が死ぬのだとしたら間違いなく死んでしまうだろうと思えるくらいひどいものであつた。

「あーとりあえず死にたい……」

全国の少女たちが一度は憧れるであろう格好をしながら優斗はそんな言葉を漏らしてしまう。

あくまで、憧れるのは少女なのである、長くとも小学低学年くらい。今の外見はそれでも中身の方はまったくと言っていいほどに合っていないのだ。優斗には苦痛でしかなかった。

だが、どうあがこうがこの状況、逃げ場も無ければ代わりもない。それにそれ以前からあの人から逃げ切れた憶えがない。

この調子ではおそらく今回もその一つになるだろうとも薄々感じている。

「はあ、やるしかない……か」

「やっとなる気になったのねー」

「誰が好き好んでやりますかー!」

「ほらー御託もういいわねー。そんなじゃいくわよー。はい、3・2・1・キュー」

先生は優斗のそんな悲痛な叫びに対してもそんなこと知るか、と言わんばかりに優斗を見向きもせずパソコンのキーボードを高速で叩いていた。

それを見て優斗はふと思った。すでに退路などないのだ、それに恥などというものがなんだというのだ。そんなもの今持っていたところで自分を苦しめるだけだ。全てを捨てる。恥も誇りも已すらも! ……なんて出来ればどれだけ楽だろうかと。

一度大きく深呼吸する。そして……

「やってきましたみんなのアイドル! 天が呼ぶ、地が呼ぶ、誰が呼ぶ?」



祈るように両手を合わせながらその場でくるくると回る。その表情や動きは演技とは思えないようなとても自然な感じをしていて、本物の魔法少女が目の前にいた。

「どんな事件も鉄拳制裁、拳一発即解決!!」

「魔法……少女……?」

そんな由宇達のツッコミも全無視し、回転を停止して片目をウィンクしながらポーズをとり……

「魔法少女マジカルユウト!! 只今、参 上!!」

その瞬間、空気が死んだ。優斗と由宇達の周り限定であったが間違いない空気が死んだ。

「せんせー」

「なに?」

「オレもう新でもいいデスカー」

「命は投げ捨てるものじゃないわよ」

「あなたが言わないでくださいー」

優斗は先生の受け答えに、やけくそ気味に笑いながらも瞳から止める術を忘れたかのように涙が滝のように流し続けて話している。

そこら中から痛い視線を感じる。それもそうだろう、姿形は違えど中身は男の高校生、そのことを考えると痛い、痛すぎる。しかし、この場に舞や士郎達がいなかったのは不幸中の幸いと言っべきだろうか。

「ふ……ふふ……もういいですよ……どうせオレなんか……」

「ゆ、優斗君。私たちは気にしないから……ね? とにかく落ち着

いて……そうよね、神子？」

ズーンという効果音が聞こえてきそうな雰囲気身をまといながら、その場で膝を抱えながら床に何か文字のようなものを書き出す優斗の姿を見て由宇は必死に励まそうとする。

だが、優斗のそのネガティブな空気に当てられて不安になってしまったのか、つい神子に話を振ってしまった。

「ええ！？ いや、そ、そうよね……そうだよ、神威？」

もちろんいきなり話を振られた神子はそれに対応などできるはずもなく、心中悪い、と思いながらも神威にパスをした。

「へ？ あ、ああ……そうだな……そうだよな由宇？」

まさか自分にまで話が来るとは思わなかった神威はいきなりのこと動揺をしまい、あろうことか由宇に話を振ってしまった。

「ええ！？ な、なんで私に話が……」

「なんで由宇に話が返ってくるのかしら？」

「そうだよお兄ちゃん！ もっと空気を読もうよ！」

「ここは妹に振るべきところよね」

「……確かに」

なぜか家族友人一同からフルボッコにあう神威。確かに由宇にもう一度話を戻してしまったのは自分に非があるが、もとはと言えば由宇が話を振ってきたからこのような事態に陥っているのではないのかという気がしないでもないのだが、この空気では言うに言うことができなかった。

「んん〜今のは頂けないかしらね〜」  
「さすがに今のは無いわね」

その上に今度は優斗の関係者である二人からも渋い顔をしながら批判をされてしまった。

さすがに赤の他人にまでここまで徹底的に言われてしまうと多少なれど凹んでしまう。

だが、そんな神威など眼中にないかのようにそこいる人達は容赦なく罵詈雑言を浴びせ続けている。

「……………」

なぜ自分はここまでボロクソに言われなくてはいけないのか？ 空気が読めなかったことがこんなにもいけないことだったのか？ あまりの言われようにそう思わずにはいられなかった。そんな中、神威に近づく小さな影が……

「神威さん……………」

「ゆ、優斗君？」

それは先ほどまで落ち込んでいたはずの優斗であった。

「大丈夫です。オレはあなたの味方ですよ……………」

優斗はそんな神威の肩にその小さな手を置いて憐れみとは違つどこか悲しげな視線を送っていた。

そんな優斗に何かを感じとったのか神威は少し心が軽くなったような気がして軽く笑い返した。

「こうやってみるとあの男の子が変態ロリコンにしか見えないわね」  
「あなた何気にひどいこと言うわね……」

優斗達から少し離れた位置、由美子と昴と先生の三人は集まって二人を見ながら話をしていた。幸運にもこの会話は離れている神威には聞こえていなかった。

「それにしても……あなた本当にあの子の姉なの？ 血が繋がってないとかそういつのとかじゃないの？」

昴はここで疑問を由美子に質問する。

優斗と由美子は姉妹？ であることは先ほど本人の口から直接聞いているものの、それでもここまで性格が違ってくるかどうかどうしても色々なことを想像をしてしまう。

こんなことを質問するのは失礼極まりないというのは頭ではわかっているが、我慢することができず、ついやってしまった。その時、相変わらずパソコンに何かを打ち込んでいる先生が言った。

「由美子は正真正銘あいつの姉よ。DNAから血液型まで完全にシロ。それによくみると共通点もいろいろあるしね」

「そう……」

さすがに第三者からそこまで言われてしまっただけはおそらく本当なのだろう、と昴はこれ以上話を続けることはなかった。

「つーか、さっきからあいつは何やってんのよ、まったく……優斗！ 早くしなさい！ それエネルギー馬鹿食いするから5分後にはエネルギーが切れて変身が強制解除になっちゃうんだから！ あと

胸の球体が点滅しだしたら1分前のサインだから注意すること、わかった？」

いい加減先ほどからいちいち落ち込んだりして一向に動こうとしない優斗に先生は呼びかける。結構重要な情報のおまけ付きで、

「これまた、どストレートなことをやらかしましたね……じゃなくて！ どうしてそんな重要なことを言い忘れてるんですか！」

「重要なこと？ そんなことあれを5分以内に片づけなければいだけなんだから重要でもなんでもないじゃない」

「ああもう！ わかりましたよ！ やればいいんですよ！ それでどうやって戦えばいいんですか!？」

「そうね……相手の力量がまだよくわかっていないわけだからまずはミドルレンジからガトリングで攻撃してみてください」

「……………は？」

たつぷり5秒あまりの事に優斗は口をぽかん、と開けながら間拔けな声をあげてしまう。

自分の耳がイカレていなければ先生はさっきとんでもないことを言ったことになる。

「聞こえなかったの？ だから……」

「いやいや、ちよつと待つてください。なんでそこで漢のロマン兵器の一つが出てくるんですか？ 自分が言うのもなんですけど、魔法少女って言ったら普通、カラフルなビームとかを使って戦ったりするもんじゃないんですか？」

「いちいちうるさいやつね……だってしょうがないじゃない。それに搭載する予定だったルビー型の粒子兵器用超小型高出力ジェネレーターはこの前あいつに譲っちゃって、代わりになりそうなやつなんて今あんたの胸に搭載してる超小型物質転送装置しかなかったんだ

もの」

「なに作ってはるんですかあんたは。つか、何でそんな危険物、他の人に渡してるんですか！」

「くれって言われたから」

「あんたって人はー！！」

優斗の必死のツッコミにもまったく動じることはなく、あーはいはい、とまともに相手をする事のない先生。

できればもつと言ってやりたいことはあるが、これ以上時間をかければ変身が強制解除になつてしまふかもしれないという先生の言葉で話はここで終わらされてしまった。そして、先生は割と真剣な表情をして優斗に言った。

「こつちの準備はすべて整つたわ。後はあんた次第つてことね」

「先生……」

「今回のあんたの写真もしっかり撮れたわけだしね。ハイ、行つてらっしゃい」

「……わかりました、わかりましたよ……ええもうわかりましたよ！ やればいいんでしょこんちくしょおおおおおお！！」

先生のその言葉に優斗は雄叫びをあげながら、やけくそ気味にビツクキヤットに向けて突っ込んでいく。

「戦闘モード起動。モード……ミドルレンジ！」

それを見た先生は素早く何かをキーボードを打ち込んでいく。すると優斗の胸の宝石が突然光りだし、いつの間にかその右腕にはガトリングが握られていた。

「うお！？ ホントに出てきたよ……」

まるで本当に魔法でも使ったように目の前に現れたそれに驚いてしまふ優斗。

正直言っただけでこうやって目の前に現れるまでは半信半疑であったが、こうやっていきなり目の前に現れるとなると改めて先生は頭はアレでも中身は本物だということを感じ知らされる。

手を軽く何度も閉じたり開いたりして感触を確かめる。

大の男でも抱えられるのかどうかというような大型のガトリングを变身（別名、光印の特性強化スーツ）のおかげで軽々と片手で構えて頭に叩き込まれた射撃照準プログラムに従いながら……猫に向けて引き鉄を引いた。

思わず耳をふさいでしまうほどの轟音と共に次々と吐き出されていく弾丸であるが、中身の方は催眠ガス入りの特殊ゴム弾で殺傷能力は無い。

どのくらいの間撃ち続けていたのか、気付いた時にはそばには空の薬きょうが山のように積み上げられており、相手が催眠ガスに包まれて見えなくなってしまうていた。

「き、効いてるのか……？」

「動きを止めない！！ 反撃くるわよ！！」

「え？ ……うわあ！？」

次の瞬間、煙の中から反撃と言わんばかりに巨大な前足が優斗に襲いかかるうとした。

優斗はいきなりすることに驚きながらも、それをすんでのところバツクステップで避けることに成功した。

そのバツクステップであるが、スーツによって強化された脚力によって生み出されたそれは尋常ではなく、それだけで猫と優斗の間には10メートルほどの距離が生まれていた。

「うわ……すげえ……」

「優斗！ 呆けてないで一旦距離を離しなさい！！」

「わ、わかりました！」

先生の叫び声に我を取り戻した優斗は言われたとおり、相手から距離を離そうと走り出す。

普通であれば身体能力などの差で距離を離すどころかすぐに捕まってしまうところであるが、そこは魔法少女服（強化スーツ）のおかげで直線距離では若干優斗の方が早いくらいになっており、後ろから追いかけて来ている猫との距離は徐々にだが開きつつあった。

「システム、ミドルレンジモードからロングレンジモードに変更…

…！」

その間に先生は目にも止まらぬ速さでキーボードを叩き続ける。すると再び優斗の胸の宝石が光りだし、握れていたガトリングはなくなって、代わりに右腕には大型のミサイルランチャーが握られていた。

「くそっ……！！ こんのお！！」

握っていたそれと猫との距離を確認するとその場で両足を使って勢いをそのままに滑るようにブレーキをかけて一気に反転、猫に向かってトリガを引く。

発射した瞬間、無理な体勢で撃ったことと、その時の反動が予想より大きかったことが重なり優斗の小柄な体はその場から吹っ飛ばされてしまう。

それでも何とか発射された4発の大型ミサイルは白い尾を引きながら相手に向かって飛んでいって来てくれた。



だが、それは飛んでいる最中、突然ボロボロと外側の装甲が崩れ始めたのである。

それには誰もが故障か？　と思っただが、それは違った。なんと装甲が崩れたミサイルの内側にはびっしりと大量に小型ミサイルが張り付いていたのだ。

驚くのもつかの間、次の瞬間、張り付いていたミサイルに一齐に火が灯り、四方八方からビックキヤットに殺到していった。

「いてて……でも、これなら……！」

吹き飛ばされた影響でうまく受け身を取れなかった優斗はぶつけた部分をさすりながら、ミサイルの直撃を受けて白い煙で覆われたところを再び凝視する。いくらなんであれだけの攻撃を受けたのだ、無事であるはずが……そう思っていた。

「いえ……まだよ」

先生のその言葉と共にモウモウと立ち込める白い煙が晴れてくる。そこには無傷とまでは言わないが四本足でしっかりと立っているビックキヤットの姿があった。優斗がその生命力に呆れていると先生はビックキヤットが優斗ではなくこちらを睨みつけていることに気がついた。

「っ……！　優斗！！　相手がこっちを狙ってきてるわ！　接近して気を惹き付けなさい！！」

「くっ……！！　無茶苦茶だ……！！」

その言葉を理解した優斗は舌打ちをしたい気分には陥ったが今はそんなことをしている暇はない。

もし由宇達に接近を許してしまえば、あれだけの力を持っているの

だ、大惨事は免れないだろう。  
持っていたミサイルランチャーを投げ捨てて、全速力で接近を試みる。

「ロングレンジからクロスレンジモードに移行……！」

胸の宝石が光りだす。今度は接近戦ということで優斗の両の手の甲の部分に三本の鉤爪が装備されていた。

凄まじい速度で接近してくる優斗に気がついた猫はいい加減鬱陶しく思ってきたのか、まるで暴れるかのように激しい攻撃を仕掛けていく。

「くっ……さすがにこれは……！！！」

ただ怒りにまかせて、なりふり構わずに次々と繰り出されていく猫からの攻撃は先生の指示通り、おとりとしての役割を果たしていることを示しているのだが、まるで嵐のような攻めの前に優斗は攻撃をするどころか回避をするのに精一杯であった。

何とか紙一重に攻撃をかわしているように見えるそれは、まるでどつかの出来の悪いB級映画のワンシーンのような光景であったが、実際に演じている優斗にとってはそんなことを考える余裕は少しもなかった。

それでも優斗は必死に避け続ける。いつかチャンスが巡ってくると信じて……

「……………！！！」

そのチャンスは意外とすぐにやってきた。先ほどから休まずに全力

で攻撃し続けたせいかわ斗は猫の動きが少し鈍っているように感じ始めていた。

最初は思いますが、しばらく避け続けて時間がたつにつれ疑惑は確信へと変わっていった。

- いける -

「はあ!!」

動きの鈍い前足の振り降ろし攻撃と同時にジャンプ、振り降ろされた猫の前足はむなしく空を切り、その隙に優斗は猫の顔を目の前にまで到達していた。

「でいやああああっ!!」

気合いと共に振り降ろされた計六本もの鉤爪は猫のおでこにあたる部分にクリーンヒット。強烈な一撃見舞った優斗であったがそれだけでは終わらず、さらに追撃と同じところを踏みつけるように蹴りを放った。

さすがのビクキヤットもこれには耐えきれず体勢を大きく崩してしまう。対して優斗は蹴りの反動を利用して華麗に宙返りをしながら猫と少し離れた位置の地面に着地、猫との距離を離すことにも成功した。

「はあ……はあ……」

ここで一度乱れた息を整える。正直言ってかなりきつい。向こうは向こうでかなり動き回っていたが、こちらもちらでかなりの体力を消耗していた。しかし、こちらはまだ疲れているだけに対して、向こうの方はすでに足がおぼつかない感じで今にも倒れそうな感じ

がしている。

- このままいけばイケる! -

そんなことが優斗の脳裏に浮かんだ。

「……………!? 優斗!! 左!!」

「え……………? しまっ……………!?!」

油断をしていた。

先生のその叫び声に気づいた時には全てが遅く、左から襲いかかるうとしていた猫の腕はすでに視界にはそれしか映らないほどに巨大になっていた。

- 間に合わない -

とつさに左腕でそれを防ごうとしたが、そのあまりにも違いすぎる体格差の前では意味を為さず、優斗はまるで思いつき蹴り飛ばされたサッカーボールのように何度も地面に叩きつけられながら吹っ飛ばされてしまう。

「ぐう……………ああ……………!」

「優斗君!?!」

「優斗!! ちい!!」

由宇達は急いで吹っ飛ばされて倒れている優斗のそばに駆け寄る。優斗は苦しそうな顔をしているものの、幸いに防御性能についても一級品である魔法スーツのおかげで大きな怪我はしていなかった。しかし、先生は一目見て肉体的痛みには慣れていない優斗にはこれ以上の戦闘は危険だと判断、すぐに変身を解除した。



「世話をかけたわね」

真っかな夕暮れ時、優斗と由宇達は全員外にいた。

その中で由宇は顔を真っ赤にしながらうつむいており、優斗にいたっては全身の色素を失い、真っ白になっており、口からは魂のような何かが漏れ出していた。

1時間ほど前に由宇の尊い犠牲……もとい、活躍により何とかビツクキャットの沈静化に成功、全員無事(?)に家に帰ることができたのである。そのビツクキャットは先生によって元に大きさにまで戻り、持ってきたオリの中で静かに眠っていた。

「魔法少女！ リリカルユウちゃん！ 爆誕」

……今のはちょっとした放送事故である。

……とまあ、そんなこんなで色々あったものの、今、先生たちは帰ろうとしているところだった。

「い、いえ……まあ……貴重な体験をさせてもらいました……し」

苦笑いを浮かべながら何とかそれに応える神威。

貴重というよりも奇妙という方がしっくりくる気がしたが、そこは心の中に留めておいた。

「あ、そう。……そうそう、これ渡しておくわ」

そう言って先生が渡してきたものは、先ほどまでいろんな意味で大活躍していた魔法少女ステッキであった。

「あのこれっていったい……?」

「え? これ? これは変身するのに必要でしょ? 優斗の分はもう一個作るから大丈夫よ」

「いえ、あの、ですから……」

「あつと、悪いわねそろそろ行かなくちゃ。んじゃ、他の子もまた縁があつたら会いましょ」

「じゃあね〜」

そう言つて先生は赤いスポーツカーに華麗に乗り込むと風のように去つていつてしまった。

「すごい人達だったね」

「あそこまでぶっ飛んだやつは私も見たことがないわよ……」

「ホントに何者なんだ、あいつらは……?」

そんなの神威たちの咳きに応えられる者は誰もおらず、ただ夕暮れにカラスの鳴き声が空しく響いていくだけだった……。

第特別話 その4 やっぱり浪漫は大事ですよね 後編（後書き）

クロ「どーも、気がついたらテキスト量が予想していたより2倍近く増えていたのでござるのクロです」

優斗（男）「それにしてもやっと終わったのか……」

クロ「あれだけのテキスト量でなんと2カ月……これはひどい」

優斗（男）「自分で言うなっつーの。いいからもっと自分を何とかしろ」

クロ「ごめんなさい。初の本格的戦闘シーンということもありまして色々書いてみたんですけど……無駄に長い上はかなりg d g d、おまけにわかりにくいという」

優斗（男）「この作品はギャグものなんだから別にいいんじゃないか？ それよりもこういうのは速さが大事だろうに」

クロ「確かに……でも、これからさらに忙しくなっていく………そういうわけでさらに更新ペースは遅くなりそうです………すみません」

優斗（男）「こんな奴にクロス申し込んでくれた白夜さん本当にありがとございました。そしてだったら長々と時間を大量にかけて申し訳ありませんでした」

クロ「ともかくこれで終了です。また機会があれば嬉しく思います。次回に続く」



## 第55話 祭りと書いて戦争と読む その1

抜けるような青空と強い日差し、そして30度を超える気温とまさに夏真っ盛りというようなある日の昼下がりに。

そんな暑さの中、優斗は自分の周囲が歪んで見える程の湯気に包まれている部屋のキッチンに立っていた。

「……………」

そんなものを前にしてその幼い身体からは当然のように次々と汗が滝のように流れ出てきているが、優斗はその汗でぐちよぐちよに濡れる不快感を全て無視して目の前の事に集中している。

その表情は真剣そのものでこの作業を始めてからというもの無駄口一つ叩いていない。……というよりただそんなことをしても何の意味もないからやっていないだけなのだが。

とにかくその場で暑さと戦いながら作業を続ける優斗であったが、突然ピタリと動かし続けていた腕を止めて大きく息を吐いた。

それと同時に今までため込んでいた苦労を吐き出すように疲れた表情を浮かべ始めるが、やがてその顔は年相応のかわいらしい笑顔に変わっていた。

ようやくだ、ようやくやるべきことが終わった。このくそ暑い中よくやったものだと思いを褒めてやってもいい。だが、まだ全てが終わったわけではない。特に自分の身の回りなど何が起きるかわかったものではないのだ。油断は禁物、気の緩みなどもつてのほか、最後の最後まで全力で取り組まなくてはいけない。

「……………」

ここでもう一度緩みきった顔に気合いを入れ直し、最後の作業に取り掛かっていった。

……とまあ、たかだか昼飯のそうめんを作るだけのことにそんな学校の試験の時のような集中力を発揮するという使いどころ間違えた無駄すぎる労力を使いつつも、それが幸をそうしたのかどうかはわからないが、その後も何者にも邪魔されることなく無事にそうめんを作り終えた優斗は嬉しそうにそれをテーブルまで運んでいた。

「今日はいい日だなー……」

全てを終えて、足を伸ばしながら楽な姿勢で座っていると思わずそんな言葉を漏らしてしまった。そんな言葉が漏れてしまうくらい、今日は良い日だった。

夏休みということでも後のことも考えずいつもより少しゆっくりと起きた朝から始まり、眠い頭をそのままにゆったりと朝食を食べて、ゆったりと洗濯と掃除をして、そして今、部屋の中でゆったりと昼食を食べようとしている。

ああ、これはまさしく自分の理想としていた1日、ほとんどそのまま。そんな高揚感とともにいざ、完成したそうめんを箸でつかみ口の中に放り込もうとした時

チャイムも鳴ることなく玄関の扉が派手な音とともに突然開け放たれた。オレの理想タイム、終了。

こんなことをするのは一人しか心当たりがない。

「優斗。いたわね」

「やっぱ先生ですか……ってその格好いいたいどうしたんですか？」

さつきまでとは打って代わってなんとも面倒くさそうな顔をしながら玄關の方に見ると開け放たれた扉の先に立っていたのは予想した通り先生ではあった……のだが、その服装が何時もの白衣ではなく、紫を基調とした浴衣に身を包んでいた。

「ああ、これ？ これは今日あとで祭りに行くから着替えただけよ」

「へー、お祭りに行くんですか」

ずるずるとそうめんをすすりながら、そう言えば今日は近くでそんなことをやっていたな、と思いだす。

「へー、じゃないわよ。あんたも準備しときなさい」

「……は？ オレも行くんですか？」

「当たり前でしょ。それともなに？ 文句でもあるわけ？」

「いや別に。特にこの後、用事があるわけでもないですし、それなら文句はありませんよ」

いい加減この展開にも慣れてきたのか、ずるずるとそうめんすすりながら、やや投げやりに質問に答える。

だが、自分で言ったように昼食を食べ終えてしまえば、その後はいつぞやの日のように暇を持って余してしまうのだ。そう考えるとこの誘いに乗るのも別段悪くもない。……というか今の先生からは有無を言わさぬ恐ろしいまでの威圧感が放たれており、仮に断ったとしても強制的に連れて行かれる（ボコボコにされるといっておまけ付きで）だろつという確信もあるため、結局、優斗はいつものごとくずるずると引きずられながら誘いに乗ることにした。

「わかりましたよ。行けばいいんでしょ、行けば」

「なんかむかつく言い方だけど……まあいいわ。とにかく現地の入り口に集合ってことで、場所はわかってるでしょ？」

「ええまあ……って先生もう行っちゃうんですか？」

突然立ち上がり玄関に足を運ぶ先生を見た優斗は思わず呼び止めてしまう。

てっきりこのまましばらく居座るものだと思っていた優斗は少し呆気にとられていた。

それを見た先生は優斗に言った。

「今日はこれからちょっと用事があったね。祭りが始める前には終わらせるつもりだけど少し急がなくちゃいけないのよ」

「はあ、そうなんですか。すいません、そんな時にわざわざ呼び止めてしまって。お氣をつけて」

どの程度かはわからないが、忙しい時に呼び止めたことを謝罪しつつ、先生を見送る優斗。

靴を履いて、いざ部屋から出ようとした時

「あつ、そうそう。祭りってことだから浴衣で来ること、わかったわね？ それじゃ」

「え？ いや、ちょっと待って……！ ってもういないし……」

それを言うと同時にぱたん、と扉が閉じられ、優斗は慌ててすぐに扉を開け直すが、そこには既に先生は影も形もなくなっていた。

その神出鬼没っぷりには毎度毎度いったいどのような手口を使っているのだろうか、と気になってしょうがないところなのだが、今考えるべきはそこではない。

「しかし、浴衣なんて……」

そう言っつて優斗は苦笑いをしながら、服の首元をつまむ。

そして目に入る控え目な胸のふくらみ……じゃなくて、恐ろしいまでに小さくなった服……自分。

こんな自分に合う浴衣を今から買いに行くなんて面倒な上、それを買うお金も今すぐ用意できるか怪しいところだ。だが、ここで浴衣を着て来なかったら、これはこれで、また面倒なことになってしまふ。そこに行かないなんてもっての外だ。

「うーん……しょうがない、ここは舞にヘルプをかけるとするか」

どうにかしようにもこの状況では何もかもが足りない。あまり気乗りはしないが、この状況では贅沢も言っつてられないと判断した優斗は助けを求めるべく電話を手を取った。

時間は流れ、現在は周りが暗くなり始めた夕暮れ。電柱の蛍光灯もつき始める頃、優斗はお祭りの入り口前に立っていた。

「先生遅いな……」

「遅いわね〜」

「ゆ……優斗……！ お祭りを前にしてこれ以上の我慢は……！！」

「……（じいずじいず）」

「うーん……さすがにそろそろ僕も限界かな？」

「……もうちょっとだと思っつから、もうちょっとだけ待とっぜ？」

その優斗の言葉を聞いてそこにいた全員が嫌な顔をしながらも渋々従ってくれた。

かくいう優斗自身もいい加減いつまでも待たせる先生にはさすがにイライラを抑えるのがつらくなってきた。そこで、優斗はここまでの事を思い出して気を紛らわせることにした。

その後、舞に話を聞こうとしていた優斗は、そこで『偶然』この時間にこの近くを歩いていた土郎達に『偶然』出くわしてしまい、そして『偶然』先ほどの会話を聞いてしまった、などとなんとも白々しい事を言ってきた土郎達と仕方なく合流し舞の部屋を訪ねる。しかし舞は浴衣なんてないと言ってきたのである。さて、どうしたものか、とその場で考えていると

「あそこならあると思うわよ。ほら、この前優斗がカットモデルをしたあそこ」

と舞が提案をしてきたのである。もちろん色々ひどい目にあつた優斗は猛反対をしたが、それ以外にいい案があるの？ という舞の言葉にどうにも反論することが出来ず、いやいやながら、渋渋、本当に仕方なく行くことになった。

「あんらあゝ、いらっしやゝあい！」

入った瞬間に熱烈な歓迎である。全身が折れるのではないかという怪力で抱きしめられ、身動きの取れない青くなっている優斗の顔に追い打ちをかけるようにひげの生えた顎をじよりじよりとすり寄せてきた。

この間わずか数秒。その上、やっと離されたかと思つたら次の瞬間

には横から「ひあああ……！」という姫神の悲痛な叫びが聞こえる始末であった。

たったこれだけのことで優斗の体力は8割近くを失うはめになり、はたして自分は無事にお祭りに行くことが出来るのだろうか？と朦朧とする意識の中で割と真面目にどこか他人事のようにそんな考えを浮かべていた。

だが、どこかで運命がねじ曲がったのか、はたまたそこらにある小石よりも役に立たないと思われていた自分の運が役に立ったというのか、なんと今回、ちょうどお客がたくさんいて店が忙しいということ写真を数枚撮られただけで『優斗』は目的の物を手に入れることができたのだ。

そして現在、優斗は濃い紫を基調とした なぜか自分用に作ったのではないかと思われるほどにジャストフィットしている 浴衣を身につけ、頭の右側にはお面、そして左側には大きなリボンをつけることによつてなんとか耳をごまかしている状態で立っていたのである。

「ゆ……優斗さん」

その時、突然姫神が優斗に話しかけてきた。その姿は黒を基調とした浴衣を身に包み、いつも隠れている前髪がかき分けられその顔がよく見えるようになっていた。

これについては美容室のアレが「せつかくのお祭りなんだからそんな顔してちゃだめよお」と言つて無理やりやった結果である。

「ん？ どうした姫神。悪いけどもう少し待つてくれないか？」

「いえ……そうではなくて……」

なぜかそこで言い澱む姫神。だが、優斗も何を言おうとしているのかなんとなくわかっていった。

「その……舞ちゃんは……」

「ああ……舞、ね」

その言葉を聞いてちら、と視線を舞に向ける。

そこにいたのはまるで熟したトマトのように顔を真っ赤に染め上げてピンクを基調とした子供向けアニメの浴衣を身に包んだ舞であった。

その幼い顔と身体がなんとも違和感なくそれを着こなしている。

なぜこんなことになっているのか？ 理由はあそこにいたアレが舞のために用意した物だからだ。

さすがの舞もこれには嫌な顔をしていたが、せっかく用意してもらったことと「あなたなら絶対に似合うわ！」という猛烈な押しに耐えることが出来ず……今に至る。

だが、身長が小さいとはいえ、大の高校生なのだ。自分と違って元から女とはいえ、それでもこれを着るのは大分きつい。

「ん、まあ、祭りが始まれば機嫌も直るだろ……たぶん」

「……………」

だが、こればかりは自分ではどうすることもできないことだと優斗は割り切ってあきらめた。

自分の浴衣と交換すれば問題は解決するが、そんな自分にデメリツトしかないことを優斗がするわけがなかった。

「……………っと、ちょっと失礼」



その時、持ってきていた携帯が鳴り始めた。ディスプレイに表示された名前は『先生』

「はい、もしもし」

『あ、優斗？』

「ちょっと先生！ いい加減いつまで待たせるんですか！」

『悪かったわね。用事は予定通り終わったんだけど、バイク止めるところがなかなかなくてね』

「ああ、そうですねかバイクを……………ちょっと待ってください先生」  
『なによ』

「オレの記憶が正しければ先生って浴衣を着ていましたよね？」

『それがどうかしたの？』

「……………」

その瞬間、優斗の脳裏にはどこその近未来殺人マシンの乗るような大型バイクで大通りを浴衣姿で爆走している先生という光景が浮かび上がっていた。

『たぶんもうちょっとで着くと思うからあんて（ブツ！）』

「あれ？ 優斗まだ話声が聞こえていた気がしたんだけど？ 切っちゃって大丈夫だったの？」

「いや、気のせいだよ、気のせい！」

「優斗最近その笑顔を多様してないかい？」

優斗は輝くような笑みを浮かべて言っていた。

第55話 祭りと書いて戦争と読む その1（後書き）

クロ「どーも、ここ最近まじで時間がないクロです」

優斗（女）「こればかりはまじだったからなあ……これ以降も厳しいのがきついい」

クロ「次回もいつになるか……それに最近特に不調なのも重なってきついです」

優斗（女）「ともかく人物紹介だ。今回は……舞だったな」

名前 音無 舞 年齢 17歳 高校2年生 風由学園所属 帰宅部

身長 135cm 体重 30kg

髪の毛の色 栗色 髪型 ツインテール 一人称 私

とりあえず幼馴染でしょ！ という考えから生まれたキャラ。ただ最近では幼馴染というより暴力担当になりつつある舞さん。どうということなの……？

家族構成は自分の他に親二人と兄一人。設定はほとんど考えていないが母はいつもはおつとりで怒らせると笑いながらえぐい行動をとるタイプで兄は重度のシスコンで母からいつもお仕置きをされている……といった感じ。父？ 知らんがな。

ロリの理由。クロがロリ好きだから。

勉強は得意な方でなく中の下辺り。身体能力は高いが身長が災いしてそこまでというわけではない。ただし戦闘能力は高い。だが他の戦闘力は（血がにじんで読めない）

動かしやすくわかりやすいキャラなのでどうしても出番が多くなってしまうのが悩み。乙女にするかどうかも悩んでいる。

クロ「とまあこんなところか」

優斗(女)「これはひどい」

クロ「むしろもうちょっと書いてもよかったかも。次回は姫神です。続きます」

## 第56話 祭りを書いて戦争と読む その2

真夜中の神社。普段なら余程のもの好きでもない限り、近付きもしないであろうそこは現在色とりどりの明かりや音色に包まれていた。その中には『たこ焼き』や『焼きそば』といったさまざまな屋台が立ち並んでいて、それらを見れば誰もが思うだろう「祭りだ」と。

「やれやれ……やっと入れたか」

「この時を……この時をどれほど待ち望んだことか！」

「わかつたから叫ぶな。いちいち大げさすぎんぞお前は」

「いやいや、結構待たされたもんだからね。無理もないよ。それに僕もあと少し遅かったら……いや、やっぱいいや」

「……とりあえず一つの平和が守られたと思ってもいいんだよな？  
いいんだよな？」

「あの……優斗さん。二回聞いてますけど？」

そんな中を優斗達4人は歩いていく。

結局、あの後なぜか先生は来ることはなかった。そのため、由美子が『光は私が待っていてあげるからあなた達は行ってきなさい』という（珍しく）姉らしいことを言ってきたため現在、優斗達は由美子達とは別れて行動をしている。

しかし、その中で舞はやはり格好が恥ずかしかったのか『行きたくない』と言ったため今も姉と共に先生を待っている。

「しっかしすごい人だな」

「小さいとはいえ一応お祭りだからね。これぐらいいても不思議じゃないよ」

一郎の言葉を聞きながら優斗はその場で一度立ち止まり、ぐるりと

一回転しながら周りを見てみる。その際に近くを歩いていた男の何人かが優斗を見て振り返っていたが幸い(?) 優斗達は誰も気がついていなかった。

正直たかが神社のお祭りとし少しなめていたかもしれない。周りを見ればそこもかしこも人だらけ。今の自分の身長では少し先を見るのも苦労している。

「これだけいると案外知っている人も近くにいたり」

「なあにやっつてんのあんたはあああつ!!」

「……いたなあ」

「いたね」

優斗が今まさに冗談を言おうとした矢先に響きわたる怒声。そしてその声は優斗達にとって聞き覚えのある声であった。

「なによ! 別にただお金を借りただけじゃない!!」

「あんたのは借りたんじゃなくて盗ったんでしょうがああああつ!!」

「!!」

「そんなに怒らなくて良いじゃない。あんたの私の仲間だし」

「ふざけてんじやないわよおおおつ!!」

「……………」

この声と会話、間違いなくあの三人が近くにいるのだらう。しかしあの三人が近くにいるにしても必ずしも会いに行かなくてはいけない、というわけではないのだ。この状況で会いに行っても良いことなどないとわかっていている優斗はその場から離れようとする。

「お、おい!? 会長達に挨拶はしないのかよ?」

「あのなあ健人。なんでわざわざ自分からトラブルに突っ込まなくちゃならないんだよ。あれが聞こえないのか?」

「い、いや、けどよ……」

「別に良いんじゃないかな。たぶんまた会えるだろうし」

反論しようとする健人の言葉を遮ったのはなんとあの土郎であった。

「なんでそう言い切れるんだよ？」

思わぬ人物の言葉に驚きながらも優斗は問いただすとそれに対して土郎は

「だって優斗は勝手にトラブルを惹き寄せてくるからね。つまりはそういうことだよ」

実に楽しそうにそう言った。

「いや、どういうことだよ」

「なるほど、そういうことなら大丈夫だな」

「……………」

「納得すんなお前ら」

なぜか健人と姫神はその言葉を聞いてうんうんとうなずいていた。

「とにかく会長達には後で会えるだろうから今は あ、優斗後ろ」

その時、土郎は優斗の後方から集団が近付いてくるのに気が付き優斗に注意を促す。

「え？ うおっと……ぶべらっ！？」

優斗はその警告を聞いて慌ててその集団から離れるが、運悪く近く

を歩いていた別の集団と接触をしまい人の波に巻き込まれ飲まれてしまった。

「ゆ、優斗おおおおおっ!!」

健人の叫びもむなしく人の波に飲まれた優斗は土郎達の視界からあつというまに消えてしまった。

「しくった。まさかこの年になって迷子になるつとは……」

相変わらずの自分の間抜けっぷりにはいやになる。はあ、と大きな溜め息をつきながらトポトポと優斗は歩き続けている。

とにかく合流しなければ、と先ほどから流された方向をたどって歩いているのだが、今のところ収穫はゼロ。

それに今の自分では下手すれば大人から色々質問される恐れもある。幸い、今のところ祭りの熱気に包まれて誰も自分には気づかずにいるが状況がいつ変化するかわからないので出来るだけ早く合流をしたい。

「案外動かなかった方が合流も早かったり……ん？」

その時、優斗は祭りの光の届かない道の外れに何かがあるのを見つけ立ち止まる。

どうやら他の人は気づいていないようだが、今の自分の眼にははっきりとそれが見える。

それはしゃがみ込んでうずくまっている浴衣の女性であった。

「あのー……大丈夫ですか？」

それを見て優斗は近付いて心配そうに声をかける。何か理由があるにせよ放っておくわけにはいかない。

「……………」

しかし返事はない。

「あ、あの……………」

もう一度声をかけるとまたも無言であったが今度はこっちを向いてくれた。

しかしその顔は苦しげで何かあったのだと予感させた。

「大丈夫ですか!? 何か会ったんですか!?」

「……………」

蚊の鳴くような小さな声。優斗は急いで口元に耳を近づける。

「お?」

「お腹イタイ……………」

「……………」

「いやー、助かったヨー。もうどうなることかと思ったヨー。ありがとネー」

「いえ、別にオレは大したことはしてませんし」

先ほど助けた女性からの少し訛りのあるお礼に苦笑しながら応える



優斗。

背が高く金髪のポニーテールに蒼い色の瞳、彼女は外国人であった。さっきあそこでうずくまっていたのはお腹が痛くてトイレに行きたかったけど、浴衣のひもの結び方がわからなかったからとのこと。

そこで優斗はその人のひもを結ぶ手伝いをしたところ「お礼をした」「と言われてしまい一緒に行動をすることになってしまったのだ。

「こつという時ってなんていうんだっけ？ えーと……」

小首を傾げなにやら考え込むその姿はかわいらしいのだが、優斗にはそれがどこか見覚えのあるものに思えた。

しかし彼女とは初対面で彼女も自分とは初めてだ。なにが引つかかっているのか思い出そうとした時、それを遮るように彼女が声をあげた。

「あ！ そうそう思い出したヨ！ 『テキニシオヲオクル』 だよね！  
「違います」

どつやら土郎の言つとおり自分はトラブルを勝手に惹き寄せてしまつたと思つた。優斗であった。

## 第56話 祭りを書いて戦争と読む その2（後書き）

クロ「どーも、お久しぶりですクロです」

舞「なんかもう今更って感じね。すいませんって言うのももうしわけないわ」

クロ「なんとか帰ってこれました。これからは少しはフリーになるので更新もできるとは思います」

舞「でもあんた相変わらずよね……ホントに大丈夫なの？」

クロ「何とか終わらせるまでは書き続ける。これは最低条件なんで大丈夫……だと思っ」

舞「あんたね……」

クロ「とにかく人物紹介だ！ 今回は姫神！」

名前 姫神 麻衣 年齢 17歳 高校2年生 風由学園 帰宅部

身長 167cm 体重 53kg

髪の色 黒 髪型 ロング 一人称 私

大人しい性格で人見知りな性格。そのため話す時によく「……」が付く。苦手である体育を除けば学年トップクラスの成績。家事全般も普通以上にこなせる。

舞とは同じ部屋で暮らしており、その理由は「負担を二人で半分に出来るし一人だと不安だから」とのこと。

おそらくこの作品で最もまともな「常識人」貴重なツッコミオンリー役でもある。

実はクロの一番のお気に入りキャラであるのはここだけの話。だつてかわいいじゃないですか！！ 寡黙で振り回されて小動物的（ry

いつも髪に隠れて見えていないが実はかなりの美人で狙おうとすればかなり上のところまで狙えるべっぴんさんだが本人はそういうのはあまり好きではないらしい。

クロのイメージではメガネをかけているつもりであつたがいつの間にかやらそれもなくついていた。なぜだ。

クロ「こんなところか」

舞「あんたもつとマシなの書きなさいよ……」

クロ「書けたら書いてます。とにかく更新再開！ かなり勝手ですがまた応援してくださいればやはり嬉しいです。とにかく頑張らせていただきます。次回に続く」

## 第57話 祭りを書いて戦争と読む その3

姫神達とはぐれ謎の外国人少女と出会った優斗は現在、最初にはぐれた場所まで戻っていた。

「……………」

「やっぱりお兄さん達は見つからない？」

さまざまな人がぞろぞろと歩き続ける道の真ん中に立ち止まりキョロキョロと辺りを見渡して『兄達』を探す優斗。

さすがに今の自分では初対面の人に姫神達を友人と言っても信じてもらえないであろうから女性には『兄達とはぐれ迷子になった』と説明をしている。

「ええ。はぐれたのはこの辺りのはずなんですけど……………」

「そう……………あ、大丈夫！ きつと見つかるヨ。私も一緒に探してあげるから！！」

それを聞いたその少女はほんの少し残念そうな顔を見せたがすぐにパツと明るい表情で優斗を励ました。

「あはは、ありがとうございます。それじゃ今度はあつちを……………」

おそらく自分を探して他の場所にいったのだろうと考えた優斗はその場から移動しようとした時『ぐううう……………』と優斗のお腹が突然鳴りだしたのである。

「あ！ いえ、これはその……………」

「うふふ、まさしく『ハラノムシガオサマラナイ』ね。とにかく何

か食べてから探しましょう」

「いえ、その、それも違います……」

「え、そうなの？」

腹に手を当て顔を真っ赤にしながらもしつかりとツツコミを入れるあたり優斗は優斗であった。

「あはハ……ま、まあ間違いはだれにでもあるって事ナンだし何かを食べて落ち着きまシヨウ。おじさん焼きそば2つお願いします！」

「おう、2つで500円だ！」

「はい、どうぞ」

「ありがとさん。ところでおめえさん達二人とも外人さんみてえだ  
がずいぶんと日本語がうまいな？　もしかしてここの近くに住んで  
んのか？」

お金を受け取り、焼きそばを用意している傍ら突然、店のおじさん  
が優斗達に質問をしてきた。

そのことは優斗も気になっていた。多少の訛りはあるものの（ポケ  
は少しあったが）受け答えはしつかりとしており、十分に聞き取れ  
るほどしつかりと日本語を話しているところなどを見ると日本に住  
んでいてもおかしくはないだろう。そんなことを優斗が思っている  
と少女は答えた。

「いえ、ただ私の親戚にいる同い年の子がニホンに住んでいてよく  
遊びに来てたのでたぶんその影響だト思いマス」

「ほー、親戚に。それでそっちのお嬢ちゃんはどうなんだ？」

「え、オ、オレっスか？」

この時優斗は自分が外見だけならば外国人にしか見えないというこ  
とに気づいていなかったためまさか質問をされるとは思わず少し慌

てながら答えた。

「いや、オレは普通にこの近くに住んでんですけど」

「やっぱりそうか。お前さんはその子と違って訛りがまったくないからな。しかしお嬢ちゃんその『オレ』ってのはやめといた方が良  
いぜ。そりゃ男が使っ言葉だからな」

痛いところを突かれた。確かにおじさんの言ってることは十人中十  
人が正論だというものだ。自分でも同じ立場で見れば間違いなく同  
じことを言っているだろうもので反論のしようがない。

しかし、だからと言って女言葉を使うのはやはり抵抗がある。

「い、いえ、ですけどこれでも少しずつ直してはいるんですよ。た  
だまだ上手く使うことが出来なくて……」

「そんなのダメだヨー！」

とにかくあれやこれやと理由をつけてどうにかこの場を切り抜けよ  
うとするが、突然それを遮る叫び声が聞こえた。驚き、その方向に  
振り向くとそこには一緒にいた彼女がいた。

「ど、どうしたんですか？」

「そんなのダメだヨ！ 日本語ってとつてもウツクシイものなんだ  
ヨ！ でもそれは正しく使って八ジメテ日本語なんだからちゃんと  
使わなキャ！ ホラちゃんと『ワタシ』ってちゃんと言っテ！」

「い、いや、その……」

何が彼女を動かしているのか、肩をつかみながら有無を言わさぬ表  
情で優斗に迫ってきたのである。

何とか落ち着かせようと優斗は必死になって彼女を説得をするがそ  
の勢いは留まるどころかさらに増していった。

もはや、暴走を始めたと言っているほどに勢いづく彼女。しかし次の瞬間、そのとんでもない勢いすら止めるような大爆音が後ろから響き渡ったのである。

「な、なに!?!」

「な、何だ!?! ……まさか!?!」

その瞬間、優斗は限りなく確信に近い予感を感じた。

こんな場所でこんな爆発音が起きる理由は……否、こんな音を出せる人物はあの人達しかいない。

「お、この音は光ちゃん達だな。今来たのか」

「光ちゃんって……え? もしかして先生を知ってるんですか!?!」

まさかこんな所に先生を知っている人がいるとは。驚きのあまり優斗は大声を上げてしまった。

「そりやもちろん。光ちゃんはこの辺りでは有名だからな。そりやそつと嬢ちゃんその口ぶりだとお前さん光ちゃんと知り合いなのか?」

「え? ええ、まあ……」

はたしていったい何がそんなに有名なのか聞きたいところだったがその内容が恐ろしくて聞き出すことが出来なかった優斗であった。

「……あの何か爆発音が大きくなってるとような気がすんですけど止めなくていいんですか?」

「ん? ははは! あの程度、俺達にとっちゃあ毎度のことです騒ぐようなものでもないんだよ」

「すげえなおつちゃん!?! ……ってそんなこと言ってる場合じゃ

ない。やっぱり止めないと！ せんせー！ 姉さーん！！ やめろ  
バカやるー！！」

「え？ ちょ、ちょっとあなた焼きそば……！ 行っちゃっタ……」  
これ以上身内の恥をさらしたくなかった優斗は茫然としていた彼女の  
のことも忘れて走り去ってしまった。

その後も色々あったもののいつの間にもやら時間は過ぎ学校が再び始  
まった。

そんな中優斗達は教室内で各々好きなことをやっていた。

優斗は疲れても残っているのかだらしなく机の上で眠っており、舞  
はこの前の事を未だに引きずっているのか机に座って頭を抱えてい  
た。

士郎と健人は『謎の美人』と祭りに行っていたことをクラスメイト  
から根ほり葉ほり聞かれており

姫神は自分の机で読書をしていた。

そうこうしている内に教室のドアが開き担任である由美子が入って  
きて朝のホームルームが始まる。

「はいみなさーんお久しぶりです。いきなりですが今日から外国  
からの短期留学生がやってくるようになりましたー」

その言葉に静かになり始めていた教室が再びざわざわと騒ぎ始める。  
いったいどんな人物だろうか？ 誰もが教室内のテンションが高  
まっていくのを感じとれた。



「それじゃあ入ってきて〜」  
「ハイ」

みんなが注目する中、入り口のドアが開き、一人の少女がしっかりとした足取りで入ってきた。

その姿を見た優斗は思わずポカンと口を開けてしまった。

どうやら向こうも優斗の存在に気付いたようで驚いた表情をしている。

「ど、どうしてあなたがココにいるノ!？」

「そ、そんなのこっちのセリフですよ！ なんであなたが……!」

「あれ？ 優斗なんて彼女の事知ってるの？」

優斗が驚いて質問をするより先に優斗に質問をしてくる人物がいた。それは士郎であった。

「へ？ い、いやこの前ちょっと知り合って……ていうかお前らも知り合いなのか？」

「え？ そりゃ僕達……」

「私達……」

「「従兄妹同士なんだもの」」

「「「な、何だってー!!」「」「」」

その爆弾発言に教室内はさらに騒がしくなる。

「それはとにかく置いて……改めまして初めましてミント・ハスターです！」

お辞儀をしながら太陽のようにまぶしい笑顔で彼女……ミントはそういうのであった。

第57話 祭りを書いて戦争と読む その3（後書き）

クロ「どーも、チャリ参号がご臨終して電動チャリMk ? に乗り換えたクロです」

姫神「……あのいちいち名前を変えてる理由は何の意味が……」

クロ「気にすんな。それと電動楽すぎワロタ。坂なんかマジで楽しんで。10万は痛かったけどそれだけの価値はあった」

姫神「……楽しそうですね」

クロ「そりゃもう。なに乗りたいのか？」

姫神「いえ……その……私は……乗れなくて……」

クロ「マジすか……と、とにかく人物紹介だ。今回は士郎」

名前 中村 士郎 年齢 17歳 高校2年生 風由学園 新聞部

身長 176cm 体重 63kg

髪の色 金 髪型 整った長めの髪 一人称 僕

性格は愛想良く謙虚で温厚であるように見せているが実際のところ人のトラブルを見ることが大好きな困った性格を持っている。一応人に迷惑をかけない程度にはしているが優斗など親しい友人達には容赦がない。

優斗「悪い奴ではないが間違っても善人とは言えない」

成績については中の上程度であるが実際のところ本気を出していないだけらしく本気になればかなり上位にまでいける。優斗曰く「爪を出す気のない鷹」とのこと

実は父親が外国人でミントとは従兄妹の間柄である。

新聞部においてはその顔や友好関係を利用した部長のサポートが主な仕事であり記事自体はあまり書いたことがないとか。

このことについて土郎は「僕程度じゃ部長の書くものの足下にも及ばないからね」とのこと

一応レギュラー……なのだがどうもうまく動いてくれない。というか書けない。

ホントはもっと優斗達を掻きまわすトラブルメイカーの役割を担うはずだったのだが……先生とかさらにはっちゃんけたキャラを作ったからなのか？

これからはミントが出てくるので少しは出番が増えてくると思うが……やはりキャラを出しすぎただろうか

クロ「こんなところか」

姫神「……毎回言われていますけどもう少しまとめましょうよ……」

クロ「それが出来たら（ry）やっぱり毎回こうなのか!? 次回に続きます」



いきなり目の前まで来たミントはなぜか怖い顔をしており、優斗は恐る恐る質問をした。

「……私はまだあなたの事をよく知らないしこのクラスのこともよくわからないワ」

「は、はあ……」

「でもここは学校何だからあなたいくらなんでもそのアタマにあるオモチャハ外さないト！」

「え！？ ちよ、ちよつと待ってこれには訳が！」

「『ゴングドウダン』！ 聞く耳持ちません！」

「いや、それ違っ……！ ミギヤアアアアアッ……！」

ツッコんでいる際におもいきり頭の耳を引つ張られた優斗のその痛々しい叫び声と同時にホームルーム終了の鐘がなるのであった。

さまざま学生でにぎわう食堂。その一角で衝撃的な自己紹介と行動で新しく優斗達のクラスになったミントは従兄妹である土郎とその友人健人と共に昼食を取っていた。

「……と言うことなんだけどわかった」

「えつト……それじゃあの子……あぁつと、カレはシロウの友人で元々は男だったってト？」

「うん。そういうことだね。……と言ってもその顔じゃまだ信じてないよね」

「そりゃ……さすがにねえ」

土郎の問いに、ミントは困った表情をしながら答える。

それもそうだろう。

「あそこにいる少女は実は、実験でネコと合体して、あんな姿になつてしまった元男の子なのです！」

などと、いきなりそんな無茶苦茶なことを言われて、例えそれが本当だとしても、何の疑いもなく「そうなんですか？」と信じるのはさすがに無理である。

では、そうになると、なぜ優斗の学校ではそれがすぐに信じられたのか？

それは橘光。つまりは、加害者の存在にあった。

橘光は学校内でもかなりの奇人、変人として名が通っている上に、それ以上に天才として知れ渡っていた。

そのため、その話を聞いた人々は「ああ、あの先生ならそれくらいはやりかねんな」と思われてしまったのである。

だが、それは橘光を知っている人の場合である。それをまだ知らないミントにとってはそんなことは関係ないことであつた。

「でもあの反応を見ればわかるだろ？ それにミントあれから何度も優斗を調べたじゃないか。嫌がるくらいに」

「……………」

その言葉にミントは口を閉じる。

確かにあれから嫌がる優斗を無理やり押さえつけてでも耳やしつぽといったおかしなところをとにかく調べた。その結果は………土郎の説明の通りだつた。

しかしそれでもミントは納得のいかない表情のまま昼食のスパゲツティを口の中に放り込むのであった。

一方教室、学食で昼食をとる土郎達同様、弁当派である優斗達も教室で昼食をとっているところだった。

「ぐうおおっ……！ い、痛てえ……」

「あ……あの……大丈夫ですか……？」

「別にいつもの事じゃない。そんな気にする必要はないわよ姫ちゃん」

「て……てめえ……人ごとだと思って……」

あれからミントに色々調べられた優斗はそれほどまでに痛いのかまともに喋ることすらかなわず、後ろにあるしっぽも忙しく動かしながら頭にあるネコ耳を手で押さえていた。

そのとなりに一人おろおろと心配をする姫神といったものことと言つて気にせずだらだらと昼食をとる舞がいた。

「それにしても中村の従兄妹ね……あんた話によるとあの子と一緒にいたらしいじゃない。どういう感じの子だったのか教えてくれないかしら？」

優斗は痛みをこらえながら気を取り直して昼食を食べようとすると舞が突然そんな質問をしてきた。

「んー……一緒にいたつても少しの間だったしな……それにオレ主観の感じを聞いたところであまり意味はないと思うぞ？」

例えここでミントがどうだったと聞いてもそれはあくまで優斗主観での話だ。舞自身が感じるそれと同じとは限らない。

それに、一緒にいた、といってもほんの少しの間だけでミントがどういう人物であったか、というのは実際のところ優斗自身もよくわかっていないことなのである。

そんなことを考えながら優斗は舞に答える。

「そんな当たり前のことはわかってるわよ。ただちょっとした好奇心で聞いているだけよ。で、どうなの？」

「ふーん……とりあえずオレも一緒にいたと言っても少しの間だけだったしな。悪い人ではなかった、としか言いようがない。あとは自分で会って判断してくれ」

「何それ？ わかんないって言ってるようなもんじゃない」

「つまりはそういうことだよ」

「相変わらず肝心な時に役に立たない奴ね……」

「とりあえず弁当作れないからって他の人に作ってもらってる奴には言われたくないぞ」

「う、うるっさいわね！ あんたはなんでそう……！」

「おい、姫神。この際だし言いたいことを思いきって言っちゃったらどうだ？ 楽になれるぞ？」

「え！？ あ、あの……その……私は別に……」

「無視してんじゃないわよー！！」

そんななんでもない（？）他愛のない会話を楽しみながら弁当組の昼休みは過ぎていった。



昼休みも終わり、いつもならこれから再び授業に戻るのだが、今日は始業式のためか、後は短いホームルームをするだけで終わりとなっていた。

理由はどうあれ、夏休み気分が未だに抜けきっていない生徒達にとつてはありがたいことであった。

「はいそれじゃあホームルームを始めます」

そんな教師とは思えないような由美子の間の抜けた声が教室内に響き渡ると、ホームルームが始まる。

明日の予定、これからの事、といつもと変わりない話が進んでいき、何事もなくそのまま話が終わるかと思われていた時、由美子が言った。

「さて、最後になりますが、みなさん知ってる人もいるかと思いますが文化祭がすぐ近くまで来ています。そのため明日からその話し合いをしようと思うので、文化祭で何をやるのか考えてきてくださいね」

その言葉に「そう言えば」と、優斗は思いだす。

どうやら他の人もそうだったらしく周りがざわざわと騒ぎ始める。

「はい。みなさん考えるのはいいですけど、まずはあいさつを済ませてからにしましょうね〜！」

しかし、それを考える前に由美子のその大きな声に遮られ、その場はそれで解散となったのであった。

「やっぱ文化祭って言ったなら、何か自分達で料理を作るべきだと俺は思う。人が一生懸命作った料理ってのはうまいからな」

「いやいや、そういうのも悪くはないけど、僕としてはお化け屋敷をやりたいかな。食材費とか一切かからないし演出次第ではなかなかイケると思うよ?」

「なに言ってるの? 文化祭と言ったら喫茶店に決まってるじゃない。料理にしても出来ない人もいるし、それに何よりもおもてなしの心が一番よ! ねえ姫ちゃん」

「え……あ、はい……」

ホームルームが終わってから、優斗達は廊下を歩きながら、先ほど話にでた文化祭について話をしていた。

しかし、話し合いと言っても各々やりたいものはバラバラで、先ほどから今みたいな話を繰り返しているだけで、まったく進んでいる様子はない。

さらに言えば、決めるのは明日だし、他のクラスの意見もあるのだ。そのため優斗はその会話に入ることもなく、今月の生活、バイト、明日の対ストーカーのルート確認、e t c、e t c……などの事について考えていた。

そんな中、優斗にある人物が近付いてくる。

「あ、ネコ君達じゃない。君達ももう帰り?」

「あ、部長さんこんにちわ」

相変わらず、人懐こい笑みを浮かべながら近づいてきた新聞部部长の水橋詩織は一緒にいたミントに気がついた。

「ん、中村そつちの人は？ あ、もし彼女とかだったら今すぐ爆発しなさいね」

（んな無茶な……）

笑みだけではなく、その無茶ぶりっぷりも相変わらずのようだが、士郎はそんな無茶ぶりにもにこやかに対応する。

「いえいえ、僕にはそんな人はいませんよ。こっちにいるのは僕のクラスに来た従兄妹の……」

「ミントです」

士郎の紹介に合わせるようにミントが礼儀正しくお辞儀をする。

「へーそうなんだー……ふーん……ほーん……」

だが、詩織はそんなことをまったく気にすることもなく、右に左にと動き回ってミントを興味深そうにじろじろと見ていた。

「……うん。たぶん問題ないかな。それに中村の従兄妹だし」

「あの……一体ナニがですか？」

何やら周りを置いてけぼりにして、ミントを見て一人納得した詩織は次の瞬間、またもやひと波乱起こしそうな爆弾発言をするのであった。

「それじゃ主役やろっか！」

第58話 祭りを書いて戦争と読む その4（後書き）

クロ「どーも、他の人にとっては一でも自分にとっては十。時間の流れに乗れていないクロです」

士郎「まったくどうでもいい言い訳だね。この際だからはっきり言っとくけど、制作時間に2カ月も費やしてるよ？」

クロ「アーアーキコエナァイ。ソレデハコウレイジコショウウカイ。

健人編です……ところでこれについて何か声とか……」

名前 田中健人 年齢 17歳 高校2年生 帰宅部（ただし助っ人で様々な部活によくいる）

身長 174cm 体重 69kg

髪の色 黒 髪型 角刈り 一人称 俺

優斗の友人その2。優斗とは士郎と同様に一年からの付き合い。

性格は熱血馬鹿。勝手に突っ込んで勝手に自爆することも多く、そのことで士郎にはからかわれ、優斗には呆れらつつフォローを入れられている。

しかし、その性格のおかげで地域住民からは評判も良く、学校内でもそこそこの人気がある。

優斗のバイト先であるバーの常連であり、マスターとも仲がよい。しかし、その際の会話は優斗には理解できないもので優斗の頭痛の種の一つになっているのを健人は知らない。

勉強は全く出来ないが運動神経がかなり良く、部活の助っ人などに

呼ばれることも多い。

……こいつレギュラー本当になのか？ってくらい空気になってしま  
ってるかなにかわいそうな奴。まあ、全部私の力不足のせいなん  
ですが。

やはり自分は男、特にバカキャラを作るのが苦手らしく、正直言  
て今のところ健人を上手くかけたことは一度もない。あーもうホ  
ントにいやだ。

どうにかして出番増やそう。うんそれからだ。……これキャラ説明  
じゃないじゃんというツツコミはシャットダウンです。

クロ「こんなところか」

士郎「自分でそれを言ったらまずいんじゃないの？」

クロ「もうどうでもよくなった。でもそれは駄目だと自分にツツ  
コミ入れつつ、次回に続きます」

第59話 祭りと書いて戦争と読む その5

水橋詩織は悩んでいた。

多くの生徒から敬い、恐れられている副会長こと愁の説教のフルコースをつい先ほどまで喰らっていたにもかかわらず、まったく平然としていられる詩織であったが、今現在直面している問題はそんな詩織でも 或いは彼女だからこそ 解決できない問題であった。

説教の最中でもあれでもないこれでもないと色々解決案になりそうなものを浮かべては消してを繰り返していたが、結局何も思い浮かぶことなく、今は解放され、一人だけの静かな廊下を歩いていた。

「なんかないかなー……」

意識せず、思わずもれてしまったそんな言葉。

退屈をとにかく嫌う彼女は何か面白いものがないかと視線を走らせると、あるものが彼女の目に飛び込んできた。

「あ、ネコ君達じゃない。君達ももう帰り？」

「あ、部長さんこんにちわ」

そこにいたのは自分の部の唯一にして優秀な部員である中村と優斗達一行。

大小さまざまで、資格好もバリエーション豊富、その上顔まで割と美形揃いと、外見だけでもなかなかの目を惹く存在なのだが、それ以上に内面の方が凄まじく、とにかくひと癖もふた癖もある非常におもしろい集団で今、自分の中で一番興味のある存在。

だからこそ、その中に何やら見慣れない人影があるのを詩織は見逃さなかった。

「ん、中村そつちの人は？ あ、もし彼女とかだったら今すぐ爆発しなさいね」

「いえいえ、僕にはそんな人はいませんよ。こっちにいるのは僕のクラスに来た従兄妹の……」

「ミントです」

「へーそうなんだー……ふーん……ほーん……」

中村の従兄妹、という言葉に詩織のかけていたメガネがキラリと光る。

礼儀正しく頭を下げるミントを詩織はじつくりと観察すると、なるほど中村の従兄妹というだけあって似通った点が多々ある。

中村と同じ金髪はポニーテールでまとめあげており、ガラス玉を思わせる蒼い瞳は澄み渡っている。

顔の造りも非常に整っており、間違いなく美人に分類されるだろう。

……が、そんなことは詩織にとっては割とどうでもいい事で、まったく別のところを注目していた。

「……うん。たぶん問題ないかな。それに中村の従兄妹だし」

「あの……一体ナニがです力？」

「それじゃ主役やるっか！」

そんな会話になるはずのない会話。その後を訪れたのは沈黙であったのは言つまでもなかった。

「おい、士郎」

「何かな優斗？」

「お前んとこの部長もうちよつとまともになれんのか？」

「いやいや、あれで普段はまともな人だよ」

「常時まともにする」

どうしてこう、自分の周りにはまともな奴が少ないのだと、相変わらず重いのか軽いのかよくわからない悩みを抱えた優斗はあれから詩織に連れられ、歩いていった。

あの後、とにかく詩織に初めからちゃんとした日本語で、説明するよう求めると『こんなところで話すのもなんだし、もう少しゆっくり出来るところで話さない？』という詩織の提案があつたため現在、このようになっていた。

しかし、どこに向かって歩いているのかは詩織が『着いてからの楽しみ』という一点張りでまったく話してくれないのでわかっていない。

「あノー、一体どこに向かってイルんですか？」

「もうちよいもうちよい……っ到着いたよ」

そう言つて、詩織に連れて来られた場所は何の変哲もない教室の一つのように思われた。

しかし、その場所の周りによく見ると、大きな傷跡を何度も直したような跡が何か所もあり、その場所が普通の場所とは違うところとを示していた。

そうこの場所は……



「何処？」

「わかりません……」

「俺も知らんな。優斗は知ってるか？」

「いんや。オレも知らん」

「結局ドコなんです力？」

「一応我が新聞部の部室なんだけどな……誰も知らないなんてお姉さんちよつとショックよ」

誰一人として自分の部の部室を知っている人がいなかったことに若干のショックを受ける詩織であったが、すぐに気を取り直して、優斗達を部屋へと招く。

案内された部室には新聞部らしく、壁の至るところに新聞やメモが貼り付けてあったり、机の上に散らかっていたりしていた。

そんな中、この部屋の主である詩織は部屋の奥にあった、紙の山の中にパソコン埋もれているというありさまであった机から椅子を引っ張りだす。

紙の山はその影響でバサバサと大きな音を立てながら崩れさるが、詩織はまったく気にすることなく、引っ張りだした椅子に座る。

いつぞやの取材という名の強襲を受けた時も非常にだらしなかったことを考えると、おそらくこういったことはあまり気にしないタイプなのだろう。

「それじゃあまず何から話そうか？」

「エツと……それじゃあまずさっきの主演とはどういウ意味なんです力？」

「ああ、それはね今度の文化祭で我が新聞部は演劇をすることにしたよ。それでちょうどあなたみたいな外国人風な子を探してたっ

てわけ」

「へえ演劇を……はあ！？ 演劇！！」

その予想もしてなかった言葉に優斗は思わず声を上げてしまう。

叫んだ優斗程ではないにせよ周りにいる舞達もそれには呆れや啞然とした表情を浮かべていた。

演劇と新聞部。一体どんな考えが浮かべばつながりが生まれるのだろうか？ 優斗達が驚くのも無理ないだろう。

だが、詩織はその反応を予想してたのか、いきなり声を上げられても特に驚いた様子はなかった。

「ちよ、ちよつと待ってください！ なんだって新聞部が演劇なんかすんですか！？」

「んー……質問を質問で返すようで悪いんだけどさ。ネコ君達は普通の新聞部の出し物なんて見に来てくれる？」

「へ？ それはどういう……」

「だってさー新聞部の出し物なんて他の部活の出し物と比べればどうしても地味で目立たないものになっちゃうじゃない？ だからこそここは一発大きなものでもやろうかなー、って」

「ぶ、部長のあなたがそれを言っちゃうんですか？」

「部長だから、だよ。無茶苦茶だろうがなんだろうが、部の為なら私はなんだって利用するわよ」

ニヤリと笑いながら冗談っぽく言っているが、おそらく本気で言っているのだろう。

チラリと土郎を見ても小さな笑みを浮かべながら首を横に振っている。こいつもたぶんまったく反対しなかったのだろうと容易に想像できた。

こうなってしまうえばもはや自分達では止めることはできないだろう。まあ、どうせ最悪、副会長辺りが止めに入るだろうと考え優斗は視線を詩織に戻す。

「それじゃあ返事の方はどうなのかな？ いいならいい、悪いなら悪いってハッキリと言ってちょうだい。もちろん時間が欲しいってんなら待ってあげるけど？」

「えっト……」

まるでほしいものを目の前にした子供のように目を輝かせる詩織に少し圧倒されるミントだが、すぐに気を取り直して考えるようなそぶりをする。

やがて、答えを決めたのか、深呼吸をして口を開こうとした時だった。

突然、部室の扉が開いたのは。

一体何事かと誰もが後ろを振り向くとそこには副会長、藤原愁が立っていた。しかし何があったのか、その表情は何か信じられないようなものでも見たような驚愕で固まっており、次の瞬間には周りにいる優斗達には目もくれず詩織に詰め寄っていた。

「ちょ、ちょっとあなたなんでここにいるのよ！」

「え？ そりゃここあたしの部室だし……」

「そういうことじゃなくて！ あなたさっき生徒会に鍵無くしたって申請しに来てたわよね。それなのになんであなたはこんなところにいるのよ！」

副会長のその言葉に優斗達は驚いてしまう。なるほどされなら先ほ

どのあの反応にも納得がいく。  
だが、それに対する詩織の返答は優斗達をさらに驚かせるものであった。

「ああ、そう言うこと。それね鍵のところをこつ、ガチャガチャ……とやったたら開いたというか……まあ出来ちゃったものは出来ちゃったんだし、しょうがない……」

「ツツツツともう！ あんたは！！ 何考えてんのよ！！！！」

あはははー、と脳天気には笑っていた笑っていた詩織に対してプルプルと震えていた愁は遂に爆発する。

「何をどうやったらそういう発想に行き着くのよ！ 脳みそカビてんじゃないのあんたは！」

「むっ。それはさすがに失礼じゃないかな？ カビつてのは悪いように思われてるけど実際は……」

「んなことはどうでもいいわよ！ いいから来なさい！ ああもうこのくそ忙しい時になんであんたは問題を次から次に引き起こしてくれるのよー！」

「あー……そういうことだからさっきのこと考えておいてくれる？ さすがにこれ無視するわけにもいかないしねー」  
「何言ってるのよあんたはいいから来なさい！」

激昂している愁に襟首を掴まれズルズルと引きずられながら連れて行かれる詩織は何事もないようにいつもの調子のまま優斗達の視界から消え去っていった。

「ええと……じゃあ帰ろう……か？」

「は、ハイ……」

残された優斗達はなんとも言えない空気に包まれながら部屋を出ていった。

第59話 祭りと書いて戦争と読む その5（後書き）

クロ「どーも、死んでいた男クロです」

健人「なんとというか……久しぶりだな」

クロ「ああ、久しぶりすぎて実は一部のキャラの名前を素で間違えたのはここだけの話だ」

健人「いくらなんでもさすがにそれは……」

クロ「うん。自分でもこれはないわと思ったわ」

健人「……まあいい。ところで遅いのはもはやいつものことだが今回は何かあったのか？ ずいぶん遅かったが」

クロ「いんや特にこれと言って何もなかった。なんとというか、現在進行形で納得できる奴が出来なかったり、全部最初から書きなおそうかとしたりを何回も繰り返して勝手に自爆してただけ。正直すぐに投稿できる人がうらやましいです」

健人「そういうことだったのか」

クロ「ああ、それでは（自分の中では）恒例の人物紹介。今回は先生です」

名前 橘光 年齢 不明（推定20代後半） 風由学園教師 生物・物理担当

身長 推定 180〜190cm 体重 不明（著者の命の危険があるため）

髪の色 紫 髪型 ショート 一人称 私

優斗達の学園の先生で優斗の姉である由美子と大学時代からの親友。そのため優斗とは学園以前からの付き合いでもある。

性格はとにかく破天荒に尽き、裏で学園を操っていると、実は優斗は光が作った実験用ホムンクルスで学園の地下に大量に眠っているとかもつばらの噂だがこれについて関係者である優斗はノーコメントを貫いていた。

本人曰く「政府の裏組織から狙われている」らしいがどこまでが本当かは本人しか知らない。

だが、そんな冗談みたいな噂もでてしまうほどの天才っぷりであるのもまた事実で、多くの生徒はあの人ならあり得ると割と本気で考えてるとか何とか。

先生としては意外なことに真面目なことが多く、多少強引な所は変わらないが仕事とプライベートは分けるタイプのものである。

現在、優斗を戻すために奮闘しているためか寝不足が続き非常に不機嫌な顔をしているのを多くの生徒に見られているのを知りさらに不機嫌になったとか。

クロ「こんなところか」

健人「なんか俺の時と違って色々書かれてるような気がするの、気のせいかな？」

クロ「お前の失敗から学びとったということ……この人も最近空気がするけどそれもどうにかせんと……。まあそれはさておいて次回に続きます」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7349i/>

---

un?happy life

2011年11月6日15時08分発行